
仮面ライダーディケイドとたらいの魔法使い

竜鬚虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドとたらいの魔法使い

【Nコード】

N9975J

【作者名】

竜鬚虎

【あらすじ】

一人の青年が、ある日突然喋るぬいぐるみに世界を救えと言われて、ディケイドライバーとカードを押し付けられて、異世界に送り飛ばされる。謎の生物がうろついている世界で、何をどうすればいいのか分からない中、青年は一人の魔法使いの少女と出会うことになる。

ディケイドとよくわかる現代魔法が主体の異世界召喚物です。世界を巡るのではなく、一つの世界に、様々な異世界の住人が入り込んでいます。

序章：始まりと終わり

20XX年、雲ひとつなく、星々と月が綺麗に世界を照らす、あの夜の出来事。

人里近い山林の中に、少しばかり土地が平面になっている場所があった。その地形から、そこは近々、新たな住宅地として開拓する予定が建てられている。

それ以外はこれといって何も無い、ただの林である。

そこに突然、世に言うところの超常現象というものが起こった。空から土砂や木・葉などの通常ではありえない飛来物が大量に降ってきたのだ。土砂で林の葉が汚れ、石などが当たって枝が折れる。その時、上空に飛行機などは飛んでおらず、この謎の飛来物を空から撒き散らしたのは何なのか、全く見当も付かない。

付近の住民は「空にブラックホールのような穴があった」とSF映画のような現象を証言していた。

地元警察が現場に駆けつけた時、土砂の雨はすでに収まっていた。そしてその土が降り積もった林の中に、一人の少女が負傷した青年を背負って駆け寄ってきた。

少年はすぐに病院に運ばれる。少年の身体は、全身の骨が損傷しており、内出血もひどい。生きているのが信じられない容態だった。そしてさらに信じられないことが起きる。その少年が収容された病室で、病院の者が少し目を放した間に、彼は煙のように姿を消したのだ。

あの状態で逃げられるはずがない。しかも窓やドアは閉められたままだった。一緒に病院に入った少女も、忽然と姿を消していた。この二人の身元は未だに不明である。

林の中には、他にもおかしなものがあつた。パックに「現代カレー」という表記が書かれたレトルトカレーである。このカレーを販売している業者はどこにもなく、人々を困惑させた。

それつきり、この場所では何かが起こることは無かつたが、時折「やたらと口の大きい蝙蝠の化け物」の目撃証言が多数寄せられた。一部の人々の間では、これらの現象を「宇宙人の実験」であるという噂がささやかれた。

これが、全ての終わりと始まりの出来事だつた。

第一話：喋るぬいぐるみと変なカード（前書き）

この小説では、ディケイドの武器・能力の設定において、一部作者好みの変更がされています。

ディケイドウェポン：変身と共にディケイドの後ろ腰に差される可変武器。刀型と拳銃型に変形可能。原作でのライドブッカーソード・ガンに相当するディケイドの装備。また他のライダーに変身すると、各ライダーの主要武器に変身する。ブレイド＝ブレイラウザー カブト＝カブトクナイガン

ディケイドコンプリートフォーム：原作では各ライダーの最強フォームをディケイドの分身として召喚していたが、この小説ではディケイド自身が各最強フォームに直接変身します。

第一話：喋るぬいぐるみと変なカード

どの世界の物語においても、非日常というものは、前触れ無しに突然やってくることが多い。その時あなたならばどうするだろうか？

それはこの日本という国の何処かにある、都会と田舎の間ぐらいの規模の市内にある、ごく平凡の家の息子の部屋で起こった。

「おめでとうございます！ あなたは今日から世界を救う戦いのエリート、仮面ライダーに選ばれました！」

自室の勉強机で、一人黙々とナンバープレイスに集中していた青年は、自分以外誰もいないはずの部屋の中で、いきなりこんな言葉をかけられた。

「はい？」

当然のごとく青年は頭を上げ、目を僅かに細めて困惑の顔を浮かべる。

今のは誰の声か？ ややしわがれた女性の声だった。なんだかえらく記憶に残る特徴的な声質である。

（・・・幻聴か？）

青年はそんな一般的な結論を考えたが、しかし自分は今までナンバーに描かれた各々の数字の誤差を見極めるのに頭をいっぱいにしていたのだ。そんな思考を一気に覚ましてしまうほどの幻聴とはいかなるものだろうか？

部屋を見渡す。本棚にはラブコメ系中心のライトノベルが大部分

を占めており、他にはタンス、ストーブ、買い替えのときに親からもらった旧式のテレビが置いてある。

エロ本・エロ雑誌が隠されていないことを除けば、これといって特徴のない普通の若い男の部屋である。

何か変わったものがあるとすれば、本棚の上に置いてある何歳の頃に買ったかなどすっかり忘れてしまった壊れた怪獣の人形と、その隣にある虎のぬいぐるみだけだ。

（いやがった・・・）

青年はそこに謎の声の発生源を見極め、しかめていた顔をさらにきつくしめる。

視線の先には例の虎のぬいぐるみがある。覚えのないものが突然部屋に置いてあったら当然困惑するだろうが、このぬいぐるみに関してはそういうわけではなかった。

これは青年自身が一昨日、妹の誕生日プレゼントにと買ったぬいぐるみだ。

片目に眼帯のような黒い物がかけられ、頭が大きいデフォルメされた虎のぬいぐるみで、特徴的なのは腹から内臓が飛び出ているところだ。

何故内蔵が？ 大いに疑問がわくデザインであるが、その理由は青年自身も知らない。プレゼントを何にすべきか、色々と悩みながら贈り物店の中を見渡していたら、たまたま目に入ったのがそれなのだ。可愛さとグロさを掛け合わせたこのギャップが意外と受けるかも、と考え商品名も見ずに即座に手に取り、会計を済ませた。

後でレシートを見ると、これは“ハラキリトラ”という名前であることを知った。開発したメーカーがどこなのかは分からない。

そして昨日、家にやってきて初めての誕生日を迎えた我が義妹に

これを渡したら、「ごめんなさい……。いらない」と返されてしまった。面白がってもらえなかったのは実に残念だ。

さてそんな経緯を経て、青年の部屋の片足が取れた怪獣の隣に居場所を得たハラキリトラであるが、先ほども説明したとおり、それがそこにあることに何の不思議もない。

不思議なのは、作り物の動物であるはずのそれが、本物の生き物のように動いていることであつた。

「こつちですよ。こつち」

その口から血を流した顔の虎は、短くて指のない右手をこちらに向けて振って自己アピールしている。

それはクイクイと子供が親を呼んでいるような動作であるが、見た目が腸をぶら下げた虎なので可愛いと思うかどうかは人によって評価が分かれるだろう。

（どこのファンタジーだよ、いたい……）

青年は虎に向けて、いやに冷めた視線を向けていた。別に驚いていないわけではない。ただどんな反応を返せばいいのか悩んでいるのだ。

アニメや漫画などで見る不思議な体験が出来たりしないかなあ、と夢のようなことを思ったりはしていた。だがそれが下準備無しのまま、マジで起こられると対応に困る。

「それはディケイドライバーとライドブッカー。“仮面ライダーディケイド”の力の証。あなたは選ばれた以上、絶対に戦うことになります」

楽しげな口調で勝手に説明を始める、ぬいぐるみ型未確認生命体。そして“それ”とはいったい何処にあると思ったすぐ後に、自分の手元に何かが置かれていることに気づいた。

「何だ！？　これ！？」

青年は今になってようやく驚きの声を上げた。自分が座っている机の上、開いたナンプレの本の上にほんの十数秒前までは無かった物体が二つ、いつの間にか置かれていたからだ。

「何って今お話したじゃないですか。ディケイドライバーとライドブッカーですよ。ちなみに私はあなたを旅に導く役目を受けたメッセンジャー、いわば天使のような存在です」

「いや……。俺が驚いたのはいつのまにここに置かれたってことで……。ていうかそんな説明で分かるか！　もっと詳しく話せ！」

驚きの次は怒りの声を上げる青年は、再度手元の物体を見つめる。それは奇妙な物体だった。一つ目の物は両手で掴むほどの大きさで、何かの機械にも見えなくもないが、その形状は携帯電話ともラジオとも違う。これに近いものがあるとしたら“カメラ”であろうか？　もちろんそれは若干外見が似ているというだけで、カメラとは全く別物である。

厚い板状の物体で、白い丸みを帯びた四角形の真ん中に、赤くて丸い大きなレンズのようなものがついている。そのレンズ？を中心を円を描くように九つの小さな紋章が刻まれていた。それは映画などによく見る古代文字のようなものや、龍の顔のようなもの、トランプのスペードのマーク、三つ巴など、あまり一定性が無い。

その四角形の両横には、ちょうどカメラというならば撮影のときに手でつかむ、サイド部分のようなものが装着されている。その部位には緑・赤・青の薄く透き通ったガラス玉のようなものが両側に

三つずつ、計六つが横一列にはめ込まれていた。またそこは別の上部の金属部分には小さな文字で“DECAD E”という文字が彫られている。

もう一つの物体はわりと単純な形で、本のような薄目の長方形をしており、全体的に薄い鼠色で淵の部分は白、全体の斜め一直線に太くて黒いラインが引かれている。

少年は最初に本のような物体を手にとった。何かの手帳だろうか？と考えてそれを本と同じ要領で開こうとする。それは意外とパツクリと開いた、が本ではないようだった。

それは小型のケースのようなものだったようで、中には何枚にも重ねられたカードが収納されていた。

「何だよこれ？ メンコか？」

「ライダーカードですよ。さすがにメンコはないでしょう、メンコは。まあ何枚か手に取ってみて下さいよ」

優しく笑うハラキリトラを見ながら、青年は、自分は意外と非日常体験に耐性があるかもしれない、と心の中で僅かに自画自賛した。

（何だかよく分かんけど……。俺は凄い大物を手にしたのかも！）

漫画の主人公のような運命的な巡り合わせを期待した少年は、言われるがままにホルダーからカードを一枚引き抜いてみせる。

「これは・・・“ディケイド”と呼ぶのか？」
「そうです。ディケイドですよお」

そのカードはメンコでもトランプでもなかった。カードの表には

大きな仮面をつけた人物の顔写真が写っている。

一枚目にはピンクを基調にした顔全体に何列もの黒い線がバーコードのように引かれている、大きな緑色の目をした仮面だった。下部には“KAMEN RIDE DECADE”という英文字が書かれており、“DECADE”の部分だけが大きく書かれている。

（まだいっぱいあるな）

青年は二枚目を取った。こちらの仮面は目の部分が赤く、目上には大きく二股に分かれた角が生えている。その角は、大昔の武士の兜につけられた鍬形のような形だ。下部に書かれている文字は“KAMEN RIDE KUGA”であった。

「それでこれがなん・・・、ぐあっ！」

カードを手にしげしげと眺めた後、ハラキリトラに質問をしようとした矢先、唐突に強烈な頭痛に見舞われ、その場でうずくまった。その際にナンプレ本の上に置かれたデイクイドライバーにゴチン！と頭をぶつけることになる。だがその痛みを気にする余裕は無かった。

（何だこれ？ 風邪？ ちがう・・・これは・・・）

青年は自分の意識の中に、自分以外の何かが入り込んでいるような感覚を覚えた。

ただし、それは悪霊が乗り移ったとかそういうものではなく、何か別の人の記憶や感情を強制的に読み取らされている感覚だった。

（あれ？）

目を開くと自分はさっきまでとは全く違うところにいた。それと同時に自身もまた、自分の知らない“他の人物”に成り代わったように感じた。

青年は何故か雪山の中にいた。大雪でかなり曇った視界の向こうで、誰かが立っている。

「誰だ？」と思った途端、その人物は瞬時に白い怪人に変異した。

（あいつは！ そうだあいつに勝たないと！）

何故かそんな想いに駆られて、ゆつくりとその怪人に歩み寄る。そして激突した。

戦いは実に単調、避けも守りもしない一方的な殴り合い。一発喰らうごとに、すぐにでも気を失ってしまいそんな強烈な痛みが脳に走る。

だがそれでも戦いはやめない。やめるわけにはいかない。自分も相手も。そんな中、何故か心の底から絶え間ない悲しみが湧き上がってきているように思えた。

やがて相手の姿は、怪人から人間の姿に戻る。間近で見るその男の素顔には、狂ったような笑顔が満面に表れていた。

「はあつ、はいいい！？」

そこまで見た瞬間、青年は現実に取り戻された。

今までと変わらない部屋と、変な喋るぬいぐるみ、ディケイドライバー・ライドブッカーと呼ばれた謎の物体。そして手には“KUGA”のカードが握られていたままだった。

青年は顔を引きつらせて、カードを机において立ち上がり、ハラキリトラに詰め寄る。

「今のは何だ！？ 今のは！ お前の言うとおりカードを持ったら変な幻覚が見えたぞ！ しかも死ぬほど痛い目にあつたぞ、こんなにやる！」

「落ち着いてください速人さん。ああ！それ私の内臓です！」

青年「速人はハラキリトラの腸を摘み上げ、逆さまにして持ち上げる。」

いきなり殴られる痛みを味合わされたことに、大層ご立腹である。

「そもそもお前は何者だ？ こんなものを持たせて俺に何をさせようってんだ」

「世界を救ってもらいます。こことは別の世界ですけどね」

「あの変なカードの力でか？」

机に目をやる。そこにはまだデイケイドライバーとライドブックが無造作に置かれていた。

「はいそうです。実はですね。そのカードには異世界の歴戦の戦士たちの記憶と能力が写し取られているんですよ。先ほどの多分、あのカードの元の方の記憶を少し見てしまったんでしょうねえ」

「ほう。それで誰が俺にこいつを持たせると？」

「さあ、それは私も知らないんですよえ」

速人のこめかみが一瞬震えた気がした。

「誰かも分からない奴のために働けってか？ それで何故俺だ？」

「さあ、それも・・・」

「じゃあ断る」

惚けた返答に、速人はそう即答した。そしてハラキリトラを摘み

上げたまま、部屋の大窓を開け放つ。

時間は午後一時。晴れていたらポカポカと明るい太陽が天辺近くに昇っているところであるが、あいにく今日の日よりは今にも雨足が通りそうな曇り空。だがそんなことは関係ない。

「そりゃあああああ！」

掛け声とともに速人は砲丸投げの選手のように、思いっきり振りかぶってハラキリトラをぶん投げた。

「ひどいですよおお！ 投げるならせめてゴミ箱にいいいい！」

遙か彼方に飛んでいくと思ったら、その辺の道路に落下していくハラキリトラ。

速人は一息ついてすっきりした面持ちだ。本当はもっと聞くべきことがあった気がしたが、速人は気にせず早々に忘れることにした。

これ以上あんなのと関わっていたら、どんな恐ろしいことに巻き込まれるかわかったものじゃない。

ましてやあんな痛い目に会うなど真つ平だ。あの記憶の主とやら、何処の誰だか知らんが、よくあんな無茶苦茶な戦いができたものだ。やはり救世と冒険とかいうのは、紙面や画面の上だから楽しいと思えるのだ。

少しでもあの状況に期待をした自分を恥じながら、窓を閉めようとしたとき、妙なことに気がついた。

窓から見える正面の風景、いつもなら家々が立ち並び、はるか遠くには小高い山々が見えるのだが、今は山が見えない。家々もない。

「なんじゃありゃ？」

そこにあつたのは巨大な光の壁だった。一息ついて目をつぶったほんの一瞬前までは、そこに見慣れた風景が広がっていたのである。だが今はオーロラのような輝きを放つそれが窓一面を覆っていた。

（今度は何だよ……。あのぬいぐるみの仕業か？）

ひとまず窓から離れようと一歩下がろうとした瞬間、背中に何かが激突した。

「へえ？」

思わず間抜けな声を上げる。その衝撃はさほど強くなかったものの、身体のバランスを崩すには十分だった。前方に倒れこみ、窓の外に怪しい壁に頭からダイブする。

壁に激突する！と思われたがそうはならなかった。なんと速人の頭は、光の壁の中へと、洗面器の水に浸かる様に潜り込んでいた。

一度身体の一部が壁の中に入ってしまうと、それと同時に全身が掃除機にでも吸い寄せられたかのように壁の中に潜り込んでいく。やがて速人は完全に壁の向こうへ通り抜けてしまうと、今度はそこにディケイドライバーとライドブッカーが投げ込まれる。誰かが投げ入れたそれが、速人と同様に壁の向こうへと消えると、光の壁は急速に消えていった。

開けっ放しのままの窓の向こうには、速人が見慣れたいつもの風景が、ただ何事も無かったかのように、そこに存在していた。

そして部屋の中には速人を突き倒した人物が、窓の向こうを無言で見つめている。

ぽつぽつと小雨が降ってきたようだ。

第二話：無人の街と空飛ぶエイ

ある市街地の路上に、速人の部屋の窓に出現したものと全く同じ光の壁が出現していた。

縦横四メートル程のその奇妙な存在は、もしここにいつも通りに大勢の歩行者がいたならば、かなり注目を浴びていただろう。

「うわあああああ！」

突如その壁から、跳ねた蛙のように人が飛び出してきた。言うまでもなく速人である。

相当慌てていたようで、空中でバランスをとる余裕もなく、そのまま身体をコンクリートの地面に叩き付けた。

「ひぎゃあ！」とおおげさな悲鳴を上げたものの、そう高く飛んだわけではなかったので大事には至っていないようだ。

「いつてえゝ。いったい誰だ！ 俺を押しやがったのは！？」

今しがた自分が出てきた光の壁に目をやると、それと同時にまた何かが飛び出してきた。

人ではない。何かが小さなものが二つ、ボールのように速人目掛けて飛んでくる。

「うわ！」

反射的にそれをキャッチする。あまり運動神経が良いわけではないが、正面から飛んできたので二つとも難なく受け止めることができた。

(こいつか・・・)

自室に置いてきたディケイドライバー・ライドブッカーである。二度あることは三度ある。光の壁からまた何かが飛んできた。

「あゝれゝゝ」

その黄色い塊の姿を視認した瞬間。速人の手が素早く動く。

「はぁ！」

速人はそれを反射的に拳で跳ね返した。

黄色い塊「ハラキリトラは反対側に飛んでいき、光の壁に激突（何故か今回は通り抜けなかった）して、地面に転がっていく。

速人は、やりすぎたかな？と一瞬後悔したものの、「まあどうせこんな目にあつたのも、あいつのせいだろうし、別にいいか」とすぐに頭を切り替えた。

「いやあ、やってきましたね、異世界」

結構頑丈だったハラキリトラはすぐに起き上がって、速人に話しかける。その無事な様子に、速人はチツ！と舌打ちした。

「ああそうらしいな」

速人はやってきて早々に、実にあっさりとその事実を受け入れた。今速人がいるのは、それなりに大きな建物が立ち並ぶ市街地である。多くの標識や看板には日本語で店名や宣伝文字が描かれており、普通に考えればとても異世界などとは思えなかった。

ただ今現在、何故かその街には人氣が全くなかった。

道路や建築物はあちこちが破壊されており、遠くを見ると見事に倒壊している建物が見える。ただ廢墟と呼ぶには建物の壁も、道路の舗装もまだ真新しい。

上空を見ると、天氣は快晴。先ほどまでは厚い曇り空だったのに、一気に天候が変動している。だが問題はそこではなかった。

「ああいうのは、さすがに俺の地元にはいなかったな・・・」

天を見上げながら呟く。

元いた世界とは最も違う特徴的な所は、上空に巨大なエイが数匹ほど飛んでいたことだ。

“エイ”とはもちろん海洋生物のエイのことである。それが鳥のように羽ばたいて、街の上空を、ゴミ置き場の様子を伺うカラスのように、縦横無尽に飛びまわっているのだ。

遠目からなのではつきりとした大きさは分らないが、周囲の建築物と見比べれば少なくとも人間よりは遥かに大きいことが分かる。形も普通のエイとは違い、ヒレの先に鳥の羽毛のようなものが生えている。下半身のヒレと尾の間には、鋭い爪が生えた鳥類の足が二本生えていた。

速人にとっては、我が人生二度目の未確認生物との遭遇である。ただ目の前のハラキリトラと違って、あのエイからはとてつもなく危険な予感がした。

「見つかるやっぱりまずいかな・・・？」

「そうですねえ。私も速人さんもあつというまに食べられちゃうかもしれないねえ」

速人の決断は一瞬で決まった。ハラキリトラを掴みあげると即座

に近くの建物の中に逃げ込む。

ビルの中、内部はどうやら電化製品店のようだ。

エスカレーターは動いておらず。とりあえず階段で上の階に昇ってみる。予想はしていたが中には誰もいない。ドアは開いていたが、今日は休みだったのだろうか？ まあ外の様子を見ていれば、それ以外に人がいない理由などいくらでも考えられるが……。

「さっぱり訳が分からんわ。ナンプレやってたら、いつのまにか異世界で化け物から逃げ回ってる。しかも全ての元凶は何も知らないと言いやがる。お前！ さつきはよくもやってくれたな！」

「何のお話か知りませんが。私じゃありませんよ。私も投げられたらいつの間にかここにいたんですから」

「そうなのか？」

普通に考えれば確かにそうだ。

自分の背中を押した何者かは、ハラキリトラを投げ捨てた方向の反対側から現れたのだから。

「じゃあ俺を押したのは誰だ？」

「さあ？」

相変わらず惚けた口調。ぬいぐるみなので表情は判らないし、真実を言っているのかどうかも判らない。まあ仮に何かを知っていたとしても、まず口は割らないだろうが……。

速人は右脇に抱えていたディケイドライバー・ライドブッカーをハラキリトラに突き出す。

「そんでこれを使って俺に何をしろってんだ？ というか、これどうやって使うんだ」

「呑み込みが早いんですね。まあ、朝起きたら女の子になってて、

いきなり拳銃を持った人に追われるよりはショックは少ないでしょうけれど・・・」

「訳判らんこと言っでないで、さっさと教えるよ・・・」

冷たく怒気を含んだ口調。それでも速人の性格からすれば、かなり冷静な態度であろう。

ハラキリトラからいくつかのことを聞いた後、速人はデイクイドライバーを手に取り、自らの下腹部の腰に当てる。

するとデイクイドライバーの左側から、瞬時にベルトの帯が伸びだした。それは蛇がとぐろを巻くように、速人の腰に巻きつき、デイクイドライバー本体をバックルとした完全なベルトと化す。その際、いつの間にライドブッカーも左腰の辺りに装着されていた。

「速人さん。こういうのを初めて使うのは、敵が現れたときに颯爽とやるものでは？」

速人はハラキリトラの言葉を見無視。次にバックルのサイド部分を外側に引く。するとそれは両側に開き、同時にバックル部分が九十度回転した。

速人は左腰のライドブッカーを開き、一枚のカードを取り出した。

「はい。そこでカードを前に突き出して、かつこよく『変身！』と叫びましょう。きつときまりますよ」

速人はハラキリトラの言葉を再度無視。バックル上部にある挿入口に普通にカードを挿し込む。中央のレンズ部分にはカードの裏面に描かれていた、表面の写真の仮面を簡略化したような紋章が横向きになって現れていた。

サイド部分を押し、バックルを元の状態に戻す。バックルが再回転して元の位置に収まった同時に機械的な男の聲が高らかに鳴った。

『カメンライド デイケイド!』

バックルに、カードの裏面にある仮面の紋章が浮かび上がった。

その音声とともに、突然九つの人型の残像が、時計の文字盤のように速人の周りを円形にグルリと囲んで現れた。

その残像は腰の部分に、バックルに描かれているものと同じ、九つの紋章をつけていた。それは表れると一瞬で、円の中心、速人のいる位置に集まる。

速人と残像達、九つの姿が一つとなる。するとそこには緑色の目と、黒色と紅紫色の中に白のカラーリングが施された鎧を纏った人物が現れた。

事はそれだけで終わらず、鎧の人物は速人の目上に幾つもの板状の物体が現れ、プロペラのように回転しながら速人の顔に差し込まれていった。“差し込まれた”といっても顔を斬り付けたというわけではなく。その板と仮面が一体化したような感じで仮面に次々と並列に装着されていく。

その仮面は速人が最初に見て、そしてたった今バックルに差し込んだカードに書かれていた顔と同じだった。

また一方で、速人の背中の腰のベルトにも何かが取り付けられていた。

それはパツ見た感じ、グリップと銃身を折りたたまれた銃のように見える。折り畳み式の銃などというものがあるのかは不明だが、大きさは結構あり、グリップは両手でギリギリ握れる長さ。それに隣接している銃身のような部分は、何故か銃口が無く、代わりに厚めの剣の刃のようなものが装着されていた。

「これで終わりか？」

「はい。終わりですよ」

速人は自分の手や身体を見ながら、惚けた様子だ。あまりに一瞬の出来事で自分の身に起こっていることをすぐに実感することができなかった。

ハラキリトラの説明ではこれで自分は超人的な力を得たらしい。だが今は、何か変なものを着込んだ感じ、ということ以外では、身体の調子に何の変化も感じ取れない。

とりあえず変身した自分の姿をはっきり確認しようと思い、近くに鏡が置いていないか辺りを見回してみる。

あいにく鏡は無かったため、店の商品であろう大きな薄型プラズマテレビの画面を覗き込んでみた。画面に薄っすらと反射された自分の顔を見て、自分がカードに描かれていた人物と同じ姿になったことを速人は確認した。

「うりゃ！」

自分が除いていたテレビ画面を軽めに殴ってみる。コツンとたたいたことのない音がして、画面に僅かな傷ができる。

速人は、力を抜きすぎたかな？と思い、今度は少し強めに殴ってみる。

今度はズボツ！と誰かが落とし穴に落ちたかのような滑稽な音が聞こえた。

見るとテレビ画面がもろい紙切れのようにあっさりと破れ、テレビの反対側に、変身した速人の拳が巻き笛の紙筒のようにニユツと生えてきた。

（マジかよ……）

速人は驚嘆した。元々テレビはそんな頑丈なものではないが、人の手でこんなゼリーのように軟く潰せるようなものではないはずだ。

腕をテレビから引き抜く、その動作が元でテレビの穴がさらに一回り広がった。

ここで初めて速人は、自分の身体にいつもと違う感覚が付加されていることに気がついた。

全身が僅かな肌も見せず、完全に鎧に覆われているのに、その上から物に触れた感触がある。どうやらこの不思議な鎧の装甲は、装着者と触覚も共有しているようだ。

「これは・・・なんだっけ？」

次に背中の腰に差された妙な銃（？）を抜く。

普通の銃と同じ形状になるよう、たたまれた銃身を百二十度曲げると、装着されていた刃のような部分が、筒状の物体に変異し、如意棒のようにニュツと伸び、引き金のようなものも同じくして現れる。“銃のようなもの”はあつというまに未来的なデザインの完全な大型拳銃に変化してしまった。

「それはディケイドウェポンですね。銃身を真っ直ぐにすれば剣になりますよ。後他のライダーの姿になるとき、そのライダーに対応した武器に変身してくれるんです」
「ほう・・・」

“他のライダーの姿”の意味は判らなかったが、とりあえず撃つてみることにする。

標的は店内にあった巨大冷蔵庫。狙いを定め、ゆっくりと引き金を引く。

ギョーン！と地味な音が鳴り、銃口から光る何かが、川に突進する川蝉のように冷蔵庫目掛け、とてつもない速さで一直線に飛ぶ。発射の僅かな反動を、人生初射撃の速人は右腕に確かに感じ取った。

間髪要れずに冷蔵庫の一部が爆発した。瞬き一つする間もない一瞬のうちに、冷蔵庫の真ん中の大扉に、フライパンほどの大きさの大穴が開いていた。

穴は裏側にも開いており、そこから目を通すと、後ろの棚にあった炊飯器が粉々に砕け、さらにその先には、この建物の外の風景が見えていた。速人の発射した光の弾丸は、冷蔵庫よりさらに向こうの、この建物の壁に穴を開けていたのだ。

拳銃なのに対戦車ライフル並みの破壊力である。弾丸は全く確認できない所まで飛んでいったので、それ以上の威力かもしれない。

速人は今の自分のパワーに再度感心していると、また妙なことが起きた。

ライドブツカーが全く手をかけていないのに、バネでもつけていたかのように突然開いたのだ。

そして輪ゴムで飛ばされたかのように、数枚のカードがホルダーから自動的に射出されてきたのだ。

「うわ!？」

速人はそれを反射的に掴みにかかる。飛び出したカードを見事まともにキャッチすることに成功した。

「おい！ 今度は何だよ!？」

「ええとね……。多分カードを使えというサインじゃないですかね?」

「使えって……?」

手に取ったカードは6枚。どのカードにも顔写真が写されており、下部の文字列の先頭には、今まで手に取ってきたものと同じ“KA

MEN RIDE”と書かれている。

だが顔写真にあるのは、文字と違って何故か仮面の人物ではなかった。

カードの絵柄はどれも、若い女性の素顔が無表情で写っている。いずれも容姿や髪の色が異なり、名前の欄を見るとそれぞれに“KOYOMI”“MISAO”“NATULU”“RUISE”“ILYA”“YUNO”と記されていた。

（何だってんだ・・・？）

メッセンジャーを名乗る者ですら判らない代物を使うことに、僅かに躊躇した。だが・・・。

（もうこんな変なもので変身までしてるんだ。今更戸惑うのもあれだな・・・）

迷わずバックルを開き、変身したときと同じ動作で一枚のカードを挿し込む。

挿したカードは“KOYOMI”。適当に目に入ったカードを指定しただけで、これを選んだ理由は特に無い。

サイドハンドルを押し、カード装填を完了する。

『カメンライド コヨミ！』

バックルの中心のレンズ部分に、細長い四角錐の宝石のような紋章が浮かぶ。直後にそこから真珠のような光の玉が、ピッチャーが投げた野球ボールのように勢いよく飛び出した。

それは速人の数メートル先で弾けたと思ったら、その地点からいくつもの人の残像のようなものが出現し、あちこちを飛び回った。

だがそれはすぐに元の位置に戻り、全ての残像は一つに重なる。

「はい？」

「おやまあ」

もう奇怪なものが現れるのには慣れたつもりの速人だったが、予想を超えすぎた現象に啞然とした。仮面の裏側の顔は、目を点にしているだろう。

「あれ？ あれれ？」

先ほどまで速人達しかいなかった店内に、おどけた様子の、可愛い野中藍のような声が響く。

残像が重なった場所に現れたのは、なんと人間だった。

速人のいる位置からは後姿になっていて顔は見えないが、おそらく少女であろう。

髪は水色のショートボブ。身長は百五十センチには届かないだろう小柄で、赤いミニスカートに赤いラインの白いセーラー服を着ている。背中には亀のぬいぐるみバックを背負っていた。

少女は自分の身に起こっていることが判らないのか、少し脅えたような感じで店内を見渡している。

やがて少女はこちらに振り向いた。人間が出てきた時点で予想できたが、その顔はカードに描かれていた少女の顔だった。

年齢は小学校高学年辺りに見えるが、学生用であろうセーラー服を着ていることから、実際は中学生ぐらいかもしれない。最も制服のある小学校があるという話もあるので、断定はできない。まあそれ以前に相手が本当に人間だという保障も無いが。

（どうしよう……。カードを挿したらベルトの中から女の子が出てきたよ……。ていうか何か見覚えがある子だな……。誰だっけ？）

少女は恐る恐る、デイケイドに変身状態の速人に尋ねる。

「ええと……。こ、ここはどこでしょうか？」

「知らん」

あっさりきつぱり答える。子供相手に冷たい言い草だが、実際何も判らないんだからどうしもない。

家でナンプレをしていたら、突然ぬいぐるみから世界を救えといわれて、いつのまにか化け物が飛んでる壊れた街の中にいたなどと説明して話になるだろうか？

少女は速人の答えに少しの間固まり、次に何を聞くべきか判らず悩んでいる様子だ。

（あゝあ。本当にどうしょ、これ……。）

速人は妹以外で、女子とまともな会話した経験はかなり少ない。ラブコメに出てくるような幼馴染も当然いない。ゆえにこういう状況に適切な対処をするのは実に難しい。ましてやそれが自分の腰のベルトから沸いてきた女子となると尚更だ。

これなら化け物が召喚されてきたほうが気は楽であっただろう。

だがよく考えると目の前にいる、このどこからやってきたか判らないこの少女も、自分と同じぶっ飛んだ境遇を持っている可能性もある。すると速人の少女に対する興味は、見る見る増大していった。

「俺の名前は十文字^{じゅうもんじ}速人だ。ついさつき“仮面ライダーディケイド”とかいう意味不明な職業をもらった不憫な男だ。お前は？」

とりあえず平静を装って、何とか声をかけて見る。相手の少女は少し落ち着いたようでそれに答えようとする。

「えー？ あ、はい。あたしは森下こよみです。ええと、職業はま・
・・」

少女は最後まで自己紹介することができなかった。

店の壁が突然爆発したからだ。正確には何か大きな衝撃で店の壁が盛大に破壊されたのだ。

それにより無数の破片が散弾銃のように飛び散り、余波で店内にあった大きくて重たいテレビ・電子レンジ・冷蔵庫らが、まるで紙袋のようにポンポンと宙に浮かんでいく。

壊された壁のほうには動く謎の巨大な影が姿を現していた。

（危ない！）

何が起こったのか理解するよりも速く、速人は動いた。少女「森下こよみ」の前に出て、身を覆い、自らを盾にする。

いくつもの細かい破片が、豆まきのように速人の背中にぶつかっていく。あいにく大物がこちらに命中することは無かった。

「ゲッ、ゲッ、ゲッ！」

明らかに人のものとは違う、奇怪な鳴き声が聞こえてきた。

「なっ、なに！？」

速人はこよみを守るためにそちらからは背を向けており、こよみは眼前の速人の身体に視界を塞がれているため、破壊された壁側にいる者の姿が見えない。

だが速人はそれが何なのかを確認せず、こよみの小さな身体を抱き寄せて一気にその場から逃げ出した。

第三話：河童と金盞

止まっているエスカレーターを駆け下り、店のドアを蹴破って外に出る。

この時の走行速度は、人間の身体能力の常識をはるかに超えるものであったが、さきほどと違って速人はそれにいちいち感嘆している余裕は無かった。

「何！？ 今の何！？ ビックリショー？」

「いや多分そんなじゃない。あれは・・・」

その時、たった今脱出してきた店の、二階の壁が内側から破壊された。

一度目の破壊と同じレベルで壁石やガラスの破片が飛び散る。道路の真ん中に立っていた速人は、再びこよみを前方に回し、背中でこよみを破片から守る。

（そっぴや女を抱くのは、これが生まれて初めての経験だな・・・）

破片の雨が収まるのを待ちながら、手と胸から感じる柔らかな感触に、そんなことを考えた。

速人はこよみを降ろす。今の自分の身体能力は信じられないほど上がっている。そのため抱きしめたとき、力の加減を誤ってこよみを傷つけていないかと不安になっていたが、どうやら無事のようにだ。ただ力が強くなっただけでなく、力の入れ具合をうまく操る繊細性も持っているようだ。実に高性能なことである。

早速後方を見ると、破壊された電気店の二階から顔を見せているのは、やはり怪物だった。

たださっきの空中エイとは違う種のようなのである。怪物の出現にやや慣れた速人だったが、こよみはこういうのは初めてだったのか、目を丸くしている。

「何あれ・・・？ 大きいデーモン？」

「デーモン？」

こよみが口にした謎の単語に質疑を口にする前に、怪物が動いた。怪物は身体の後ろ半分を店内にある状態のまま飛び上がった。それによって店の上の階の壁も一部破壊される。

怪物の巨体が道路のアスファルトに重たく着地した。

地震のような地響きが一振り鳴り、道路の一部が陥没する。

「ゲツ、ゲエエエ！」

その怪物の姿は巨大な虫だった。大きさは象ほどもある巨体だ。全身白く、外見上で最も近いものは蟻であろう。だがその巨大蟻は足が八本もあった。普通は蟻を含めて、昆虫類は全て六本足のはずであるが・・・。

（さっきぶつ放した銃声にさそわれたか？ この流れだと、やっぱり戦うしかないのかね・・・）

巨大蟻は速人の決断を待つてはくれなかった。両顎を開いた途端、口から緑色の液体を水鉄砲のように吹き出した。

速人は即座にこよみの腕を掴んで、右側に大きく跳躍した。標的が消えたアスファルトの地面一帯に液体が振り掛けられる。

するとその液体が付着した地面は、ジュウ！とステーキを焼くような音を立てて、常識ではありえない速度で溶解し、見る見る大きな穴を開ける。

その位置から十メートル以上先に着地した速人は、再びこよみを離した。

「こいつは俺が何とかする！ お前はどこかに隠れてろ！」

「はっ、はい！」

こよみは駆け出した。そして転んだ。ドテ！とわざとかと疑うくらい盛大に、かつ華麗にすっ転んだ。

「いてて・・・」と足を痛めながらも、こよみは即座に立ち上がり、再度駆け出した。

そしてまた転んだ。何も無い地面で・・・。

「おい・・・何やってんだ？」

うつかり突っ込んでしまう速人。そうしているうちに巨大蟻が二発目の溶解液を発射した。速人はそれを間一髪で回避する。

（くそ！ こうなったら・・・）

相手の戦法を伺う余裕は無い。下手をしたらこよみが巻き添えを受けて死んでしまう。

速人は策も何も考えず、正面から真っ直ぐに巨大蟻に突進した。猛牛にも負けない、とてつもない速さで、巨大蟻に接近していく。そして巨大蟻が三発目を撃つ前に、見事敵の位置に到着した。

「うおりゃあああ！」

速人は豪快な右回し蹴りを巨大蟻の顔に炸裂させる。

超越した速度で放たれたその蹴りは、速人の数十倍もの体重はあるであろう相手に見事な痛手を与えたようだ。

右側から蹴りを受けた巨大蟻の首は左側に曲がり、吐き出し損ねた溶解液を誰もいない左側に、でたらめに吐き出しあたりに散らばった。その際、蹴りの直撃を受けた部位、巨大蟻に生えていた牙のような右の大顎は、跡形も無く砕け散っていた。

速人はさらに巨大蟻の顔面に右ストレートを繰り出す。

高速で放たれた、鋼よりも硬い拳は、巨大蟻の両目の間の僅かに下の部位に見事命中した。その部位の表皮は、アルミ板のように簡単にへこんだ。

だがこのぐらいで速人は攻撃の手を止めない。

「うりゃああああ！ アリアリアリアリッ！」

巨大蟻の顔面に、怒涛の殴打を機関銃のように次々と繰り出す。

この攻撃に敵の巨大顔にはいくつもの陥没ができていき、白い血が吹き出る。この痛みから巨大蟻は反撃ができぬまま、その巨体が僅かに後退していった。

不思議な話だが、実は速人には格闘技の経験は全く無い。

運動系でいえば、中学生のころにバスケット部に入っていたことがあるが、あまり上達せず一度もレギュラーにはなれなかった。もちろん戦い方など、パンチの打ち方すら知らない完全な素人である。だが何故か今の速人は、腰をしっかりと回転させ、肩に上手く力を入れ、真っ直ぐに拳を前に突き出し、プロボクサー並みの見事なフットワークで敵に次々とパンチを繰り出している。

誰かに教わったわけではない。速人は無意識のうちにこの動作をとっていた。

最後に溜めを入れた渾身の一撃を繰り出すと、速人は後方十メートル以上先に、後ろ向きの姿勢のまま飛び跳ねた。

そしてライドブツカーから一枚のカードを抜き取り、ベルトに装填する。

『ファイナルアタックライド！ デイデイデイケイド！』

スクラッチのような電子音声が鳴り、バックル部にデイケイドの顔を模した紋章が浮かび上がる。

すると速人と、白血をダラダラと滝のように垂れ流して昏倒している巨大蟻との間に、何処からともなく九枚の光の壁が、合わせ鏡のように綺麗に並べられて現れた。

それらの壁の大きさは、立った人間が丸ごと覆えそうなほどの長方形で、それら全てにデイケイドの紋章が描かれおり、上部にバーコードのようなものがついている。

それらはライドブツカーに収納されていたカードに非常に似ていた。

「はあ！」

速人はその場で垂直に飛び上がった。それに呼応したかのように、九枚の光の壁も浮かび上がる。

巨大蟻との中間位置であることは変えず、あくまで角度だけが変わるようにそれぞれに浮かび上がる高さが調整されていた。

速人の跳躍は、地上十五メートルの高さで止み、そこから左足を曲げ、右足だけを巨大蟻の方向に突き出し、滑り降りるように巨大蟻に突進していった。

中間にあつた光の壁を次々と潜り抜ける。潜られた壁は手品のように掻き消え、変わりに巨大蟻に向けられた速人の右足の裏に、強い光が宿っていった。

全ての壁を潜り終わり、速人の跳躍傾斜蹴りは、巨大蟻の傷だら

けの顔面に見事に着弾した。

グシャアア！と生ゴミを割り散らかしたかのような音が鳴り、巨大蟻の身体は粉々に砕け散った。

一帯の地面や建物の壁に、巨大蟻の肉片が雨のように降り注ぐ。巨大蟻が存在していた場所の地面には、速人が何事もなかったかのように座り込んでおり、ゆっくりと立ち上がった。

肉片の飛び散った周辺は血の海かと思われた。だが巨大蟻の血や肉片は急激に風化していくかのように変異し、あっというまに土くれのようなカラカラとした物質に成り果ててしまった。

「キイ、キイ、キイー！」

安心したのもつかの間、巨大蟻とは別の、複数の奇妙な鳴き声が別の場所から聞こえてきた。

声の発生先を見ると、四番目の未確認生物（三番目は巨大蟻）の姿を視認した。

その未確認生物は、人間のように垂直に二本足で立っていた。全身が緑一色で、目は黒目が無く卵黄のように黄色い。胴体は亀のような甲羅で、そこから生えている手足は、両生類のような滑らかな皮で覆われている。首は長くて太く、顔つきは鳥のように直角口は嘴状になっている。

大きさは標準的な人間の成人男性よりも一回り大きいくらい。さっきの巨大蟻の印象が強いせいか、随分小物に見える。

それらが全部で四匹、涎を垂らしながら、こちらに近寄ってくる。どう見てもこちらに友好的には見えない。

「河童！ 河童がいるよ！ どっ、どうしょ、あたしキュウリなんて持ってないよ！」

「お前はあれが河童に見えるのか？ 頭に何も無いぞ？」

速人は腰のディケイドウェポンを抜く。そして銃身をさつきとは違い、垂直百八十度に曲げた。すると先端の剣状の部分が鈍く光ったと思うと、太く長く伸びた。

先ほどは拳銃型に変身していたディケイドウェポンは、今度は刃渡り七十センチほどの日本刀型の剣に変身した。

「キキイーーー！」

河童たちが蛙のように飛び跳ねながら、一斉に速人にかかってきた。

速人も素早く踏み込み、生まれて初めて持った刀を振るった。

河童の動きも素早い。速人の動きはそれよりも上回っていた。剣を振るたびに、河童の甲羅に覆われた胴体が深く斬りつけられ、白い血しぶきが、ヒビが入った水道管のように大量に噴出される。

四匹の河童は、この斬撃に大いに怯む。その隙に速人は、また新たなカードをバツクルに装填した。

『アタックライド！ スラッシュ！』

すると速人の刀の刀身が、白く発光した。速人は再び河童たちに攻撃を加えた。

斬撃が残像のような影をいくつも映しながら、高速で次々と放たれる。これには最初のように深い切り傷ではすまなかった。

河童達の身体は、まるで藁人形のようにバツサリと切断され、あつけなく全滅した。

それでもまだ災難は終わらなかった。

今度は空中から何かが近づいてくる気配を感じた。最初に見た飛

行巨大エイだ。それが一匹、空中からこちらに向かって突進してくる。

急降下して速人に体当たりを加えようとしたが、速人は余裕でそれを避ける。

「うわわっ！」

近くの電柱の影に隠れていたこよみは、巨大エイの攻撃が元で発生した強風に飛ばされないように、電柱に掴まって一生懸命踏ん張っていた。

その際にスカートがめくれ、パンツがチラリと見えたような気がしたが、速人はそれに気を回すのは後にしようと迅速に思考を切り換える。

「何あれ！ 今度は鳥さん！？ なんか平べったいよ！？」

「全く次から次へと・・・」

立て続けに現れる未確認生物に驚天動地のこよみを無視して、速人はまた新しいカードを装填する。

『アタックライド！ ブラスト！』

ディケイドウェポンが自動で拳銃型に変身した。

巨大エイが二度目の突進をしてくる。今度は一匹ではなく、二匹が前後ろに二重攻撃して来る。

速人がその前方の一匹に、銃口を向けて引き金を引いた。途端に銃身が残像となっていくつにも分身し、無数の弾丸を散弾銃のように一斉に発射する。

的が大きければ弾丸の命中率も上がる。光の弾丸は一匹の巨大エ

イに全弾命中した。

巨大エイは全身にいくつもの穴が開き、羽毛が飛び散り、足の指が何本か吹っ飛んで、紙飛行機のように墜落した。

墜落した地面のアスファルトが大きくえぐれ、標識やガードレールがいくつ也大破した。

だが後方にまだもう一匹がいる。速人は続けて発砲するが、通常射撃が一、二発当たった程度では敵を撃墜するまでには至らない。

回避はもう間に合わない。止む得ず一撃くらうのを覚悟して身構える。

「ええーい！」

途端、すぐ側にこよみの声が聞こえた。

「はあ！？」

速人がその声の主に顔を向ける前に、またもおかしなことが起こった。

迫ってきた巨大エイの姿が消えたのだ。

それはもう一瞬のうちに、蠟燭の火に息を吹きかけたかのように、完全に掻き消えてしまったのだ。ただしそこに何もいなくなっただけではない。

ガラ、ガラン！と今まで死闘を繰り広げていた場所には似つかわしくない、間抜けな金属音が響いた。巨大エイが消えた代わりに、その場所に巨大なたらいが出現していたのだ。

“たらい”とはもちろん洗濯や行水などに古来から使われていた、あの平たい容器のことである。

空中に出現したそのたらいは、そのまま地球の重力のままに落下

し、数回アスファルトの上をバウンドして大地に降りる。

見たところかなり大きい。直径二メートル近くはあり、これなら大人一人分も行水可能だろう。色は彩度の低い緑色で、恐らく青銅製と思われる。落下の衝撃で、一部分が凹んでしまっていた。

こよみを見ると、彼女は呆けた表情で、巨大エイがいた空間の方向に、何かをかざすように両手の掌を真っ直ぐ突き出していた。

「今は・・・、お前が何かやったのか？」

「はい・・・」

「何したんだ？」

「魔法です・・・」

「なるほど、魔法か」

短い返答だが、速人はそれだけで十分納得できた。

怪物がウロウロする異世界で、いきなりベルトのカードから出現したのだから只者ではないだろうと思っていたが、魔法使いだったのか。もう何でもありだ。

（しかし生き物を無機物にするって、えらく児童的な魔法だな・・・。こうなると石像を生き物に変えたり、どこからともなくお菓子を出したりもできるのかな？）

「あの・・・、大丈夫ですか？」

「ああ、全然平気だ。お前見た目によらず強かったんだな。ありがとうな」

速人の礼に、こよみは少し照れる素振りを見せる。

「お互い色々聞きたいことがあるだろうが、とりあえずここから離れるぞ。次はどんな化け物が出てくるか判ったもんじゃない」

「そ、そうだね！ 傘のお化けとか、空飛ぶ生首とか出てきたら怖いもんね！」

（何故そんな発想が出てくる？ こいつ、あれが妖怪にでも見えたのか？）

とりあえずどこに行けばいいかと考え、辺りを見ると、たらいが落ちてある所から少し離れた場所に、さっきまでは無かった物体があった。

怪物ではない、それはバイクだった。外見は速人の常識にある市販のバイクとは明らかに違う。基本色は黒・白・紅紫色で、ハンドルの中心部のスクリーンの部分には、ディケイドの顔のものに似たバーコードの板が差し込まれていた。

（これに乗っていけってか？）

いつのまに現れたのかは不明な怪しい物体であるが、今更何処から何が現れても、大して驚かない。

速人は早速にこれに跨り、こよみに手招きする。こよみは素直に従い、速人の腹に手を回して、後部座席に着席した。

「あの、どこにいくんですか？」

「知らん。とりあえず、もう変なのがないような場所を、勘で探してみる。後俺は無免許だから、うっかり転倒したりしても、死なない程度に済むようにしっかり掴まってる」

「ええええ！」

こよみの悲鳴も何のその。バイクは順調に起動し、そして発進した。

（ん？ 何か忘れてるような・・・？ まあいいか）

第四話：死骸の山と学校の幽霊

無人の街の中を、二人はバイクで行くあてもなく適当に走り回った。

最初は不安だった運転技術も全く大丈夫だった。二輪の教習など受けたことがない速人だったが、バイクに跨った途端、操作法を即座に理解した。

正確には頭の中に、どこからかバイクの扱い方に関する記憶が流し込まれているようなのだ。

（これもこのディケイドの力のせいかな？ 何かに憑かれてるみたいで気味悪いな・・・）

速人が自身の様子に不安を感じている最中、後部座席で今まで黙っていたこよみが、唐突に口を開いた。

「ええと、速人さん、運転上手いね」

「そうらしいが、それが何か？」

初対面の人への話しかけ方に、こよみなりに散々迷った末に出した褒め言葉だったのだろう。だが速人の無感情で冷たい口調の答えに、こよみは言い方を間違えて気を悪くしたかと慌て始める。

「あああ、あの、さっきはありがとうございました！」

「どういたしまして・・・」

「速人さん強いよね。なんだかヒーローみたいでかつこよかったよ！ あたし、どうしてか何も無い所で転んだりして、何しても失敗ばかりだったような気がして、すごく羨ましいです」

“気がして”という疑問的な表現に若干引つかかったものの、会って間もない内からいきなり尊敬の念を受けたことに、速人は僅かに罪悪感を感じた。

正直言つと、何しても失敗ばかりなのは、速人も同じである。勉強も運動も平均以下で、ちよつとした怪我ですぐ喚き散らす気の弱い男だ。さっきだつて自分の不安と苛立ちから、ついこよみに当たるように冷たい口調を放ってしまった。

「お前も十分強いじゃんか。さっきの魔法凄かったぞ。あの化け物を、俺よりも簡単に倒しちまったしな」

謙遜のつもりはないが、なるべく優しい口調でこよみを褒めてみる。一応嘘のつもりはなく、思ったことを口にしたつもりだ。

だが今度はこよみが、その褒め言葉に何故か気まずい表情をしている。

「あれ・・・多分やつつけたわけじゃないと思う」

「どういうことだ？」

「本当はね・・・。あたしの魔法は・・・」

何か悩みながら話そうしているこよみの言葉を、速人は途中で遮った。

「いや、いい。今は運転中だ。長くなりそうな話なら、少し落ち着いてからにしよう」

「・・・うん」

街の惨状は場所によってかなりの落差があった。

すぐにでも何処からか、人の群れが歩いてきてもおかしくないような完全無傷なところもある。だが一方でビルは粉々になり、道路には無数の瓦礫やガラスの欠片が散らばっており、放置又は破壊・転倒した自動車がいくつも転がっていてバイクを走らせるのがとても面倒な、何もかもが見る影も無く破壊されている所もある。

また所々に自動車と一緒に破壊された戦車・装甲車が転がっており、そこには弾痕などの明らかな戦闘の形跡がある場所もあった。まるで戦場の後のようだ。

いや実際にここは戦場になっていたのだろう。血痕らしきものもいくつかあったが、不思議と死体は一つもなかった。

「なあ、本当にここはどこなんだ？」

「えっ！？ あたしに聞くの？」

「ああ、やっぱりお前も知らないんだな。しっかし、どうせ飛ばされるんならファンタジックな王宮の中とかが良かったな。そんで召喚した矢先に、異世界の美少女から色々とせがまれたりキスとかされたりさあ……」

マニアな願望を口にする速人。それに何故かこよみが顔を赤らめた。

「キキキ、キスって！？ そんなこと急に言われても！」

「何考えてんだよお前……」

なお先ほど立て続けに襲い掛かってきた怪物達は、発進してから一度も姿を現さなかった。

この街の様子なら、もっと多くいそうなものだが、どこかに移動したのだろうか？ それとも軍隊（？）との戦闘で、ほぼ全滅した

のだろうか？　だとしたらほんの数匹ばかりが野放しになっているのは妙な話だが……。

ふと空を見やると、ある方角に大量のカラスが群れて飛んでいる所があるのが見えた。

その数は朝方にゴミ置場に集まる群れの比ではない。少し気になった速人は、その方向に車輪を回した。

そこは神社だった。階段を上った先にある、鳥居の向こうの広い境内に何かが捨てられていた。

「あれ……、さっきのお化けだよね？」

「ああ、しかしグロいな……」

それは大小数十匹に及ぶ怪物の死骸だった。

先程速人が倒した巨大エイ・巨大アリ・河童のほかに、嘴がついた猿のような巨人・尾が二股に分かれた人間ほどの大きさがある白猫・巨大な蟹などが、生ゴミのようにいくつも積み重ねられ放置されている。

境内は流れ出した血で、真っ白に染まり、カラス達が怪物の死骸をハゲタカのように突っついていて。意外なことに、臭いはそれほどきつくなかった。

すぐ近くに、何だかよく分からない白い欠片のようなものが積まれた、もう一つのゴミの山があった。それは速人が巨大アリを粉々にした時に、変化した巨大アリの肉片によく似ていた。

怪物の死骸をよく見ると、所々に斬られたり、何かで殴られたような跡が見える。少なくとも死因は病死などではなさそうだ。

「こよみ、行くぞ」

「うん・・・」

何があつたか謎であるが、いつまでも見ていて気持ちのよいものでない。速人達は逃げるようにそこから立ち去った。

再びバイクに進めた速人達だが、ある時、小学校の校門の前を通りかかったときに、いきなり急ブレーキを引いた。

「うわわっ!？」

けっこう飛ばしていた状態での急停車だったので、こよみはあやうく転び落ちそうになる。

「ああ、すまん」

「どど、どうしたんですか急に？」

「今あそこの窓に、人影が見えた気がしてな」

視線の先には、校門の向こうの小学校の校庭と校舎がある。

大きすぎるわけでも小さすぎるわけでもなく、近くに体育館とグラウンドのフェンスがちらりと見える。速人のいる世界と全く変わらない、ごく普通の小学校である。

「入るぞ」

「え？ でもまたお化けとかがいたら・・・」

「その時はまた振り返ちにしてやるさ。お前はここに・・・待た

せておいたほうが危険だな。一緒に来い」

速人は正体不明の存在が内部にいる学校へと、こよみを後ろに守りながら、全く恐れることなく進んだ。

速人は元々、そんなに肝の据わった男では無かった。子供の頃、初めて入ったお化け屋敷で、最初のからくり泣き叫んで、すぐに入り口の方へと逃げ帰った経験もある。

だが現在、ディケイドに変身してからはどんな怪物が現れても、何故か全く脅えの感情は沸いてこなかった。いや、正確にはディケイドドライバーを手にした辺りからだろうか？ あの巨大エイの姿を見て、普段からすれば随分冷静でいられたと思う。

ディケイドの力に酔いしれているのとはどうも違う。どこかの誰かから、心の中に勇気を分け与えてもらっているような、妙な感覚だった。

バイクを引っ張って校内に入る。

バイクはしっかり駐車場に置いておき、二人は玄関前に立った。

「さて中にいるのは果たして人間か否か。妖怪の次は幽霊か？」

「ゆゆゆ、幽霊！？ もしそうだったらどうしよう！？」

「どうしようって・・・、あの変な生き物をお化けとか言っといて、何幽霊に反応してんだよ。ていうかお前会ってからビビッてばつかしだな」

「え？ じゃあ速人さんは幽霊とか殴れるの？」

「さあな。殴れないようなら無視して行くさ。実体の無い奴なんて普通の人間よりもよっぽど安全だ」

過去のお化け屋敷の経験など何のその、速人は本気でそう考えていた

「そうなの？」

「そうだろう？ 実体がないなら、向こうもこっちを攻撃できないはずだ」

「ええと、そうなのかな？」

「まあ、もしやばいようだったらお前に任せるさ。頼りにしてるぞ、お前の魔法」

「はっ、はい！ がんばります！」

こよみは背筋を伸ばして、敬礼の真似事をした。本当に子供ような奴だと、速人は思った。

玄関のガラス扉に鍵はかかっていない。扉を開け、速人は校内全体に響くように、大きな声で呼びかける。

「おおおおおい！ 誰がいるかああああ！？ いたら返事してくれええええ！」

気のせいかな、叫んだ瞬間、目の前の空間が一瞬、塵気楼のように歪んだような気がした。しばしの静寂、今度はこよみが声を上げた。

「すいませえええん！ 誰かいてくださあい！ 返事してくれたら……ええと。速人さん、幽霊って何を欲しがるのかな？」

「さあ？ その辺の店から線香でも探してみるか？」

「うつさい！ でかい声上げるな！ やつ等が来たらどうする気だ！」

校内から、速人達より大きい声でそんな返答がやってきた。若い女の声だ。

「少なくとも幽霊では無さそうだな」

「速人さん。少し静かに行こう」

「ああ、そうだな・・・」

二人は校内に入った。

内部は下駄箱に始まり、長い廊下に。年。組と書かれたプレートがある教室がズラリと並んでいる。壁の塗装も雰囲気も、速人の記憶にある現代日本の小学校とほとんど同じだった。

「これ見ると、異世界に来たっていう実感がほとんどないな。まるつきり普通だぞ」

「本当だねえ。ていうか速人さんて、異世界の人なの？」

「そうだ。そういうお前は何処から来たんだ？ この世界の住人か？」

「え？ あたしは・・・ええと・・・」

こよみは何故だか返答に戸惑っている。

「何か言えないような事でもあるのか？」

「そそそ、そうじゃないんです。そうじゃなくて、あたしは・・・」

戸惑っているというより、何やら悩んでいる様子だ。速人が黙って返事を待っていると・・・。

「あゝ、悪い悪い、さっきは怒鳴っちゃって。でもここのところマジでやばいから気をつけ・・・、何だよ、あんた!？」

会話に割り込んできたのは、先ほどの声の主であろう女性だった。年齢は二十歳前後、黒いＴシャツにジーンズ姿、ショーヘアの男っぽい雰囲気的女性で、速人を凝視している。

それは怖がっているわけではなく、何故か奇異の視線である。

（あっ！　　そういや俺、変身してそのままだった）

速人はベルトのサイドハンドルを引き、バックルを開いた後、カードを装填せず、すぐに閉じる。

すると速人の身体を覆っていた鎧が、一瞬で元の九つの虚像に戻り、速人の身体から一定距離、離れると消滅した。

後にはベルト「デイクイドライバー」を装備した状態のままの、元の姿の速人がいた。

「この通り、俺は人間だ。怪しいもんじゃないぞ」

「いやぁ・・・、怪しくないって言ってもなぁ・・・。何だよ、今の？　コスプレした変質者のほうがまだ安心できるぞ」

女性だけでなく、こよみも初めて見る速人の素顔に、目を点にして固まっている。さっきまでの姿が、速人の本当の姿だとも思っていたのだろうか？

「速人さんって、ロボットじゃなかったんだ・・・」

「は？」

「全然お面を外さないから、てつきり」

何だかおかしいことを言ってるこよみに、速人は頭に軽くチョップを入れた。

第五話：姉妹と超常現象

「しかし世の中面白い奴らもいるもんだなあ。そのベルト、あたしにも使えるのか？」

「それは知らないが、使ってみたいなら貸すぞ」

「んー、いやいい。何か変な副作用があつたら嫌だし」

女性に案内され、一階の理科室のドアを開ける。そこには一人の小学生くらいの少女がいた。

身長はこよみと同じくらい、髪は短めで玉型の髪留めで右側の髪を結んでいる。少女は、女性と一緒に入ってきた見慣れない来客に、少しばかり動揺しているようだ。

「お姉ちゃん。その人達がさっきの声の人？」

「ああ、異世界から来た正義のヒーローと魔法使いだそうだ」

「はあ？」

「どうも。十文字速人だ」

「森下こよみです。よろしく」

ますます戸惑う少女に、二人は軽く頭を下げて自己紹介した。

最初はもつと警戒されるかと思われたが、女性いとつるぶえ「伊藤伸恵はすんなりと速人達を受け入れてくれた。」

こよみは、口の悪い生天目仁美なばためひとみのような声の伸恵に、不思議な親しみを感じ取っていた。

異世界から来た云々は、この部屋に来るまでに大雑把に説明していた。ただし伸恵は、一応聞いていてくれてはいるが、ちゃんと信じてもらえているか否かは、その不真面目そうな表情からは判別しにくい。

そこで伸恵の妹^{いとこ}伊藤千佳も一緒にいるこの場で、改めて自分たちの力を見せることにした。

『カメンライド デイケイド！』

九つの残像が重なり、速人は仮面ライダーデイケイドに二度目の変身をする。

「うわあ！ 本当に変身した！」
「おお。すげえすげえ」

千佳は仰天し、伸恵は大道芸でも見ているかのような口調で、パチパチと軽く拍手する。

速人は更にバツクルにカードを装填する。

『アタックライド ブラスト！』

右手に抱えたデイケイドウェポンが瞬時に拳銃型になり、理科室の外側の壁に向けて無数の光弾を発射した。

理科室の壁は発泡スチロールのようにたやすく粉々になり、直線状向こう側にある校庭の壁を破壊し、更にその先にある一軒の家屋が砲弾でも打ち込まれたかのように爆発・大破し、積み木の家のようにガラガラと崩れ落ちていった。

爆破テロでも起きたかのような派手な三重奏が街中に響いていく。

「ああー！ 駄目だよ！ 学校壊しちゃー！」

千佳が声を上げたのは、銃撃の威力ではなく、そっちのほうだった。

部屋に風を通してくる、不恰好な巨大な壁穴を見て苦々しい顔をする。

「ああ、悪かった。この街、どこを壊しても問題なような気がして、つい……。すまん！」

速人は手を叩いて、千佳に頭を下げる。

「あゝあ。もうこの理科室使えないよ……。料理もできるいい場所だったのに……」

「まあ、いい所なら他にもあるだろ。校長室とかさ」

先ほど大声を上げただけで怒声を返してきた伸恵は、何故かこの破壊行動には、あっけらかんとした対応だった。さっきは虫の居所でも悪かったのだろうか？

調子に乗りすぎたと少し後悔した速人は、こよみに声をかける。

「こよみ、今度はお前が何かやってみろ。魔法が使えるんだろ？」

「は、はい！」

言われたこよみは胸を張って教壇に立つ。「魔法」という単語に、姉妹二人のこよみへの興味が一気に高まった。

「行きます！ ええーい！」

両掌を天井にかざし、掛け声を上げた途端、何も無い空間に一個のたらいが、手品のように突然現れた。たらいは床に落ちガラランガランと鳴り揺れる。

「たらい？」

「これって……、すごいのかな……？」

期待と違ったのか、二人はかなり複雑な反応だ。

「まだまだ行きます！」

こよみは更に魔法を放つ。その魔法はいずれもたらいを召喚するものだった。

ただしバリエーションは一応あった。最初は銅製のたらいで、次に鉄製、銀製と進化し、最後には何故かチタン製の頑強なたらいが出現した。

現在、外からの見通しが実に良くなった理科室に、巨大な四つのたらいが転がっている。

皆が微妙な表情を見せる中、銀製のたらいを真剣な眼差しで見つめながら伸恵が問うた。

「純金のたらいとかは出せないのか？」

「無理みたいです……」

伸江は心底残念そうだ。純金が出たらどうするつもりだったのだろう？

次に速人が問うた。

「たらい以外に何か出せないのか？ 武器とか召喚獣とか」

「ごめんなさい……。あたし、たらいを召喚する魔法しか使えないんです」

「そうか……」

今度は速人が、心底残念そうにため息をついた。これにこよみが決まり悪い顔をする。

「あ、あの、御免なさい！」

「え？ ああ、すまない。こっちこそ気を悪くしたな」

「でもでも、あたしそれ以外に、他の人の魔法をたらいに変えたりできるんです。あのおっきなエイを消したみたいに」

速人は驚く、というより大きな疑問を感じた。

「あの化け物は魔法だったのか？」

「さあ・・・それは・・・、あたしも我武者羅でやったから・・・、よくわからないです」

「そうか・・・。じゃあしょうがないわな」

煮え切らない回答だが、とりあえず速人はこの話を打ち切って、伸江達に向き直った。

「まあこつちの話は判ってもらえたと思うから、今度はこつちが聞くぞ。この世界で何が起こってるんだ？ 到着して早々、化け物に出くわしたけれど、こつちの世界ではあれが日常なのか？」

「まさか。あたしらだって訳分かんないよ」

伸江はこの世界の説明を始めた。

話を聞く限りでは、この世界は速人のいた世界とほとんど同じ、科学の発達した二十一世紀の平成の日本のようだ。ただし年数は異なり、この世界の年数は、速人のいた世界よりも、四年ほど未来になっていた。

半年ほど前から、この国の各地で不思議な現象が起こるようにな

った。

奇怪な殺人事件や新種の未確認生物の目撃情報、空から岩石や樹木が降ってきたり、一つの街の人間が一斉に数日分の記憶を失う等、様々だ。

それらの怪現象の一部なのか不明だが、何の前触れも無く突然この街に、多種多様な未確認生物が出現したのだ。

強大な力を持ち、人間を捕食する怪物に街はパニックになった。やがて自衛隊が応戦してきたが、敵は銃弾も砲弾も一切効かず、全く相手にならなかった。大型の種には、重戦車の砲弾の直撃を受けても全く倒れなかったらしい。

事件のことよりも、戦車砲の話に速人は一番驚いた。現代戦車の砲弾は、加工がなされた頑強な装甲板1メートル程を貫く威力があることを、速人は知っていた。

（それよりも頑丈な奴を、殴ったり蹴ったりで倒せたディケイドっていったい……。化け物かよ？）

常人なら、一センチの鉄板を殴っただけでも手を痛める。だがディケイドのパンチは戦車砲のレベルを超えていたのだ。

自分が手にした力だけに、速人は身震いした。こんな物騒なものを自分に渡した人物はいたい何者なのか？ メッセンジャーを名乗ったぬいぐるみを置き去りにしたことに、速人は少しだけ後悔した。

速人がそう思考している間に、こよみが伸恵に質問してきた。

「じゃあ、伸恵さん達は、この街から逃げ遅れちゃったんですか？」

「最初はそうだったんだけどさ……。今は様子見だな」

「様子見？」

「聞いた話なんだけど。避難先にいた奴らや、途中でこの街から出

ようとした奴が、次々と消えているらしい」

何やら妙な話の流れだ。

「消える？」

「ああ、神隠しみたいに突然いなくなるんだとさ……。何故だかテレビもラジオも電波が届かないし、それで用心して私ら、ここに立て籠もっているわけ。私たち以外にもかなりの人数が隠れてっぞ。その辺の家を当たっていけば、十軒の一つには誰かいるんじゃないのか？ さっきあいつが壊した家に、誰もいなけりゃいいけど」

「マジか！？」

速人は青ざめた。そうだとしたらもう手遅れかもしれない。

「マジだ。ここどころ何故か化け物の数が減ってな、食べ物探しに外に出る奴らをチラホラ見かけるぞ」

「そ、それじゃああたしたちもこの街から出られないんですか！？」

「噂が本当なら……。そうだろうな」

こよみは心配を隠せず、速人に顔を合わせる。今だに変身状態の速人は、かなりうんざりした様子だ。

「やっぱりこうなるわけか……。誰かが俺に、これを何とかしろと言ってるわけね……。」

「お兄ちゃんたちが何とかしてくれるの？」

「出来るかは判らんけど、そういう筋書きらしい」

速人は変身を解き、年寄りのようにゆっくりと腰を降ろす。あの

「俺はこれからさっき壊した家を調べた後、少し頭の中を整理して

からまた出発する。そこでこよみ、お前は どうする？　ここで伸恵達と一緒に残るか？」

「え？　あつ、はい！　あたしも一緒に行きます！」

「かなり危ないところに行くかもしれないぞ？」

「大丈夫です！　あたしの魔法もきつと役に立つよ！　さつきもあのお化けをパツと消しちゃえたし！」

こよみは拳を握り締めて、力一杯答える。巨大エイを消したとき、速人に褒められたのが余程嬉しかったようだ。それと魔法に関して期待を裏切った引け目もあるのかもしれない。

「そうか・・・、分かった。一緒に行こう。だがその前に、だ。

さつきの話の続きをしよう」

「さつきの話？」

「こよみは俺と会うまでは何処にいたんだ？　何の説明もしないままにここまで一緒に来てたが」

そう、速人はこよみの素性を全くといっていいほど知らないのだ。さつきこのことに関する質問をしていたが、伸恵の出現が元で中断になっていた。

こよみは恥ずかしそうに俯いて答える。

「ごめんなさい・・・。何も分からないんです・・・。」

「分からない、という記憶喪失か？」

「はい。気がついたらあのお店の中にいて・・・、今までずっとどこかで眠っていたような気がするんだけど、本当になんにも思い出せなくて。魔法のこととか、そういうのは何となく分かるんですけど・・・。」

「そうか、まあよくある話だな」

記憶喪失の人間など、現実には中々いるものじゃない。だが速人は何故か何の疑問も持たず、実に自然な流れで完全に納得してしまった。

「え？ 記憶喪失ってよくあるの？」

「ああ、よくあるものだぞ。もったいぶった部分だけは、えらく詳しく覚えていて、肝心な部分は覚えておらず、何故か絶妙なタイミングで唐突に全てを思い出す。それが世間一般的な記憶喪失って奴だ。だからお前もそう落ち込むこともない。むしろ秘密の主人公のフラグだ。」

「いやいや違うだろ……………」

二人の会話に伸恵が思わず、漫才師のような手振りで突っ込みを入れた。

すると速人はライドブッカーを開き、1枚のカードを取り出した。

「お前に話さなきゃいけないことがある。このカードなんだけどな……………、はい！？」

カードの表を見て、速人は仰天した。

取り出したのは、こよみの出現の引き金となったあの謎のカード、
“K A M E N R I D E K O Y O M I”である。

だがどういうことか、最初見たときに、表面に描かれていたこよみの顔が掻き消え、切り絵のようなシルエットのみが映し出されていたのだ。

試しに装填しなかった、残り5枚のカードも取り出して見る。するとまだ一度も使っていないにも関わらず、それらはK O Y O M Iと同様にシルエットのみの白紙になっていた。

第六話：空舞う車輪と笑う大岩（前書き）

マシンデイクイダーの飛行能力はオリジナル設定ではありません。
公式サイトの紹介にも記載されている設定です。

第六話：空舞う車輪と笑う大岩

「何だ？ 何かの外れくじか？」

「速人さん、これって？」

「ああ、これはな……」

速人はこよみが現れた経緯を説明した。その上でもう一度変身して、それらのカードを装填してみる。

『カメンライド エラー……』

結果、何も起こらなかった。

「どうなってんだよ。他のカードは使った後も、ちゃんと残ってるのに……」

こよみ、伸恵、千佳は白紙となったら5枚のカードをまじまじと見つめる。

「あたし……、これから出てきたんだ……」

「六者択一だったってことか？ 一回使ったらこれっきりで」

「どんな人だったんだろ？ 顔もこのシルエツトじゃ判らないよ」

速人は自らの記憶を掘り返し、彼女らの言葉に猛烈に後悔した。状況から考えて、最初に他のカードを差し込んでいれば、カードに描かれていたこよみとは別の人物が現れていたのだろう。

（失敗した！ あの時もつと深く考えてから選べばよかった。どれを選ぶならNATUULUとかいう青髪の子が好みだったのに……）

速人はこよみの姿をまじまじと見つめる。自称十五歳とは思えない身長に、童顔・貧乳、そして変なところで転ぶドジっ子ぶり・・・。

「まあ、これはこれでありだな」

「ああ、他がどんなだったか知らんが、別に悪くないと思うぞ」

何のやり取りもしていなかったのに、何故だか開き直った速人と伸恵が意気投合している。こよみと千佳は意味が判らずきょとんとしていた。

心の中で何かが吹っ切れた速人は、カードを納め、力強く立ち上がった。

「俺はもうこれでいい。こよみ、後はお前がよければすぐにでも出發するぞ」

「あたしも大丈夫です。行きましょう！」

「よし、それじゃあ出發する前に・・・、さつき倒壊させちまった家を見に行こう。誰かいたりしたら本気でやばい」

「そうだね・・・」

二人は伸恵たちに礼を言い、ブラストで破壊した理科室の壁から外に出る。その時、ふと速人は今の自分自身に、不可思議な違和感を持った。

（何だろう？ 訳判らんままにこんなとこに連れ出されて、最初はどつやって逃げようかを考えていたのに・・・、いつのまにかやる気になっちまってるよ。俺ってこんなに正義感ある性格だったっけ？ そういや最初こよみが出たときに、女子相手にどう接しようか悩んだのに、これもいつのまにか、こよみにも伸恵にも普通に会

話できてるし……。何だか誰かに洗脳されてるような気がするな)

「ああ、ちょっと待て！」

速人が悩んでいる間に、伸恵が呼び止めてきた。

「何だ？」

「悪いがお前、煙草持ってないか？ さっき切らしちまってさ、わざわざ外に探しに行くのも怖いんで」

「無いな」

なお破壊された家は、幸いにも無人だった。

二人は再び街中をバイクで走り出した。速人はまだ変身した状態にある。

相変わらず街には人気がないと思ったら、伸恵の言っていたとおり、途中で通ったコンビニの中に、誰かが商品をあさっている姿を目撃した。速人達は、あえてその人物に接触しようとはしなかった。

「速人さん。これからどこに行くんですか？」

「とりあえず街の外に出ようと思う。噂の神隠しが、本当に起きているかどうか確認する」

「街から出る道が判るの？」

「判らん。ただしばらくこのバイクに乗ってみて、何となく感覚的に気づいたことがある」

「？」

「このバイク、飛べそうだ」

いきなり速人が腕を上げ、バイクの前輪を持ち上げた。突如角度が変わったことに驚いたこよみだが、周りを見ると更なる驚きが待っていた。

バイク上の自分たちの周囲の風景が、グングン下がっているのだ。いや、正確には自分たちが宙に浮いているのだ。

バイクのタイヤは地上と同じようにしっかりと回っている。まるで空中に透明な道路でもあるかのように、二人を乗せたバイクは、悠悠と空を走っていた。

その光景は、かの名作宇宙人映画にあった、主人公が自転車で空を飛ぶシーンに似ていた。

「ととと、飛んでる！ 速人さんすごい！ 飛んでるよ！ まるで箒みたい！」

「落ち着けて。ていうか、箒は飛べる物じゃないだろう」

地上から百メートル程の高さで停止し、街の景観を眺める。地上を走っているだけでは完全には実感できなかった街の様子がよくわかってくる。

まずどっちの方から出ようかと考える。西を見てみると小さな湖が見えた。

「とりあえずあっちに行ってみよう」
「はい」

バイクを回し、方向転換をしようとする。車体はその何も無い空間の上で、まるでそこに地面があるかのように自然と回転した。そして二人は、湖目掛けて一直線に走った。

飛行速度は、地上を走っていた時と同じくらいだった。湖が近づくにつれ、速人は市街地と湖の境界線におかしなものを見つけた。

「速人さん。あれ何だろ？」

「お前にも見えるのか？」

そこには街と湖を区分するような大きな“透明な壁”があった。

高さは三百メートル以上。薄く白いガラスのようなその壁は、まるで城壁のように横に長く伸びて、街の外への道を塞いでいる。

だが壁は遠くにいくほど薄くなり、見えなくなっていく。どうやら距離をとると二人にも視認できないようだ。この様子だと、この壁はこの街全体を囲っているのかもしれない。

「あれはバリアのように見えるが、どうやら次元の門みたいだな」

「速人さん、判るんですか？」

「まあな」

ディケイドの緑色の大きな目。ディメンションヴィジョンは、視野25度40km先の動く物体を捉える視力と、世界の狭間を見通す能力があった。

速人はその壁の向こうに、いくつかの人型の物体が、プカプカと風船のように浮いているのが見えた。

「あの壁を通つたら、俺達も次元の狭間に閉じ込められるかもしれない。とりあえず一部分壊すぞ」

「壊すって……。こんな大きいのに、あたしの魔法でできるかな？」

「いや、お前は何もしなくていい」

速人は、その大きすぎる規模の次元の門に向け、バイクに付属しているライトの光を一斉に照射した。

「うわあ！」

あまりの光量に、こよみが思わず目を瞑る。センター、ローから放たれたヘッドライトの光は、レーザー兵器のように強烈で、眩しく、太く、消防車の放水のように、壁に勢いよく放たれた。

速人は数秒と立たず、そのヘッドライトを消灯する。

そして再び次元の門の壁に目をやると、光が当てられた部位だけ、門による空間の歪みが消えていた。

その正常化した空間は、直系三メートル程で、巨大な次元の門にのぞき穴のようにぽっかりと開いていた。その穴の向こうに、白く濁っていない普通の青空が見える。

こよみには、速人が今何をしたのか、全く判らず呆気に取られていた。

「ビームで穴が空いちゃった。バイクにこんなすごいものがあるなんて、あたし全然知らなかったよ……。」

「俺も知らなかったよ。ていうか、もはやバイクじゃないよな、これ」

速人はバイクを走らせる。速人達はバイクショーの輪くぐりのように、穴を通り抜け、壁の向こう側に飛び出した。

足元に目をやると、壁によって市街地から区画された、濁った湖

が広がっているのが見えた。さらに湖の周辺に目を配らせる

（あれは！ 人か！？）

湖の向こう岸に目をやった速人は、その常人を超えた視覚能力で、歩いている三人の人間の姿を発見した。

「人がいる。いくぞ！」

先ほどより勢いをつけてアクセルを踏み、その方向に突き進む。目的地に近づくにつれて、速人は前輪を下げ、坂道を下るように車体を下降させていった。

「なっ、何者だ！ 貴様ら！」

見た感じ三十歳前後と思える三人の男たちは、空を走るバイクに乗って現れた速人達に、驚愕し警戒する。それは当然の反応には違いないが、一方の速人も、男達と同じ台詞を口にした気分だった。

三人の身なりは、どう見ても一般人とは違っていた。

彼らは皆、ファンタジーの魔法使いのような黒いローブを着用していた。手には、明らかに身体を支える目的でない、長くて先端に宝石のような球が取り付けられた魔法使いのような杖を持っている。

何かのコスプレだろうか？ もしくはこの世界では、こういう服を着る風習があったのか？

共に彼らの姿を見たこよみが、速人に呼びかける。

「あの人達、本当の魔法使いだよ、きっと。コードみたいな、なんだか魔力みたいなを感じる」

「ほう・・・」

速人はバイクから降りた。こよみも同じく降りようとするが、足を滑らせて、また地面にすっ転ぶ。

「俺達は異世界の者だ。今はこの街を襲った怪現象を調べてるんだが、もしかしてあれはお前らの仕業か？」

「だったらどうする？」

「それならお前らは俺達の敵だな。力ずくでも話を聞かせてもらっ

速人は大胆不敵に挑発的な答えを返す。長時間デイクイドに変身しているのが影響しているのか、今の速人の気分は絶好調で、今はどんな相手にも負ける気がしなかった。

一人の男が魔法の杖を、速人達に振りかざした。

「力ずくでも話をさせてもらっつのはお前のほうだ！ 出でよ！ 爆弾岩！」

杖の先端の球が、電球のように光り出す。するとその先の空間が、球状に歪み始めた。

その歪みは風船のようにグングンの大きくなり、やがて発光し、粒子となって花火のように弾け飛んだ。その瞬間、そこに何か巨大な物が、どこからともなく姿を現していた。

「岩？」

それは巨大な岩石だった。直径三メートルを超えるだろう、円形のゴツゴツした大岩である。

そして速人達がいる側の表面には、なんと人間のような顔があった。青黒い岩肌の中に、二つの眼と口がついており、その顔が速人達を見ながら不敵な笑みを見せている。

「我々の世界が誇る、全ての世界において最強の魔法、召喚術だ！行け、爆弾岩！ こいつを踏み潰せ！」

「上等だ。粉々にしてやるよ」

速人がディケイドウェポン拳銃型を取り出し、その岩石に爆弾岩に銃口を向ける。

すると、さっきまで地べたで寝ていたこよみが足を踏み込んだ。

「あたしがやる！ ええい！」

こよみが爆弾岩に向けて両掌を掲げ、魔法を唱える。すると爆弾岩は、あの巨大エイの時と同様、一瞬にして掻き消え、代わりにそこに大きな金だらいが降ってきた。

「はっ、はあ！？」

あまりに一瞬で起こった意味不明の出来事に、男達の思考が一瞬止まる。

盛大なインパクトを持って現れた巨岩の怪物は、こんな形でひどいぐらい呆気なく退場となった。

「間抜けに見えて、結構すごい魔法だよな、これ。しかしあの人面岩、一体どんな力があつたんだろうな？」

速人はこよみの力に素直に感心した。

今回のたらいは鉄製だった。何故か中に、妙な液体が入っている。見たところ水ではないようだ。

こよみが引き起こしたこれらの現象に、男達は、最初に空からやってきた速人達を見た時の比にならないほど仰天していた。

「何だ！？ 何が起こったんだ！？ 召喚を失敗したのか！？」

「違う！ そんなはずはない。ああああっ！ 何てことだ！ 誓約が取り消されている！」

爆弾岩という怪物を召喚した男が、どこからか取り出した青い宝石のようなものを見て、大げさすぎるくらい慌てふためいていた。

「馬鹿な！？ ならば送還したというのか！？ ありえない！ こんなことありえていいはずがない！」

「小娘！ 貴様はいつたい何なんだ！」

男達はまるで化け物を見るかのように、こよみを睨み付ける。その剣幕に、こよみは思わず後ずさりした。

「あたし・・・、何かすごいことしちゃったのかな？」

「どうやらそうらしいな」

男達は、今度は三人同時に杖を振るった。

「おのれ！ まだ終わらんぞ！ 出でよ、ベビーサタン！」

「出でよ、ぶちスライム！」

「出でよ、はぐれメタル！」

三人の杖の宝石が一斉に光りだす。だが何かが出現する前に、こ

よみが先に魔法を唱えた。三本の魔法の杖の光が、電源を切られた電灯のように一瞬で消える。

そして三つのたらいが、男達の頭上に現れた。

「がっ!？」「はげっ!」「うによっ!」

たらいは全て、男達の脳天目掛けて、何かのコントのごとく落下し、命中した。

ガアアアン!と気持ちの良い音が、三重に響き渡り、たらいが地面に落ちる。それらの底面には、男達の頭と同じぐらいの大きさの、見事な窪みが出来上がっていた。

たらいの衝撃に男達は昏倒し、ふらふらと踊るように身体を揺らしながら、人形のようにパタリと倒れる。どうやら気絶してしまっただようのだ。

「よわ……」

その有様にすっかり気が抜けた速人は、そうぼそりと呟いた。

第七話：魔王と虫怪人

気絶した三人をとりあえず拘束しようとしたものの、ちょうどいい縄がなかったため、彼らの持ち物を全て剥ぎ取っておく程度に留まった。

彼らの持ち物は、明らかに日本製ではない外国語で書かれた本と貨幣、小ぶりなナイフ、魔法の杖、そしていくつかの青い宝石だった。

とりあえずこれらの物品は、袋にまとめてこよみの所に預けた。速人は、並べて寝かされた男達に銃口を突きつけ、それぞれの股間を一発ずつ容赦なく踏みつける。

「ふおっ！」「はあっ！」「ぎいっ！」

三人はたらいが落ちてきたときと同様、面白い悲鳴を上げて目覚めた。だが目の前の銃口を見てすぐに押し黙る。

「さて質問だ。お前らは何者で、この国で何が起こっているのか、きつちり説明してもらおうか」

「は、はい……」

三人は近くの木に背中をかけて、銃に脅えながら自らのことを話し始めた。

「俺達はこの世界の住人じゃない。リンバウムという世界から来た召喚師だ」

速人はさして驚かない。むしろ当然だろうという感じた。

「やっぱり異世界人か。でも俺と同じ世界ではなさそうだな。そんなで召喚師ってのは？」

「召喚術という魔法を使う人間だよ。異世界の者を“誓約”という魔法の力で支配し、自分のいる世界に召喚して己の僕として使役する力だ。我々の世界は、大昔からこの召喚術の力で繁栄していった世界なんだ」

「さっき出した人面岩がそうなのか？ さっき青い石を取り出して何か言っていたが」

先程のこの三人の滑稽な慌てぶりを思い出す。

あの時は、会話の意味がさっぱり判らなかったが、どうやらあの宝石が、召喚術という力の根源だろうと速人は推測した。

「ああそうだ。あの石はサモナイト石といって、召喚獣を呼び出すのに必要なものだったんだが……」

召喚師は何かを言おうとして、それをためらっている。速人は召喚術という力そのものには興味が無かったので、今度は少し離れた所で召喚師の荷物を見張っているこよみに話しかけた。

「こよみ、“リンバウム”という言葉に覚えはあるか？」

「え？ ううん、全然聞き覚えがないや。“召喚”って言葉なら聞いたことがある気がするけど……」

「そうか、じゃあそこはこよみの世界では無い可能性が高いな。もちろん俺の世界でもない」

速人は召喚師に次の質問をした。

「それでそのリンバウムの魔法使いがどうしてこの世界にいる？」

「ある時、我々の世界に、異世界の住人が入り込んできた。リインバウムは世界そのものに結界が張られていて、召喚術以外での世界の出入りが出来ないはずなんだが・・・、何とそいつらはその結界を軽々飛び越えてしまったんだ！正直今でも信じられないよ。しかもあいつは我々の知らない異世界のとてもない技術をいくつも持っていてな、その力につられて大勢の召喚師がその異世界人についていった」

召喚師は昔話を語るように、淡々と話す。

「お前らもそうなのか？」

「ああ、まあ、そんなところだな・・・」

召喚師達のくぐもった返答に、速人は疑念を浮かべた。今度は興味があつたので追求してみた。

「何だ？何かあるのか？」

「いやあ・・・、実は俺達、その異世界人のこと、あまりよく判らないんだよ。顔も知らないしな。ただ俺達の上司がそいつにすっかり平伏して、それで俺達も少し強引についていくことになっちまったんだ」

召喚師達は、少し恥ずかしそうな表情だ。

「さっきのあの青いサモナイト石も、その異世界人が作ったものだそうだ。青色のサモナイト石なんて、元々リインバウムには無かったんだがな。我らの上司が言うには“リインバウムを取り巻く四つの世界にはいない、とてつもない召喚獣を呼び出せるもの”だそうだ。実際に使ってみたのは今日が初めてだったんだが・・・。一度もその力を見れずに駄目になっちまった」

「何ほど、よく判った。それでこの国で起きてる怪奇現象も、そのよく判らん奴の仕業なのか？」

「そうだ。実験……だそうだ」

「実験？」

「ああ、他の所はよく知らないけど、ここでは“魔化魍”とかいう化け物を召喚するのと、新種の結界を張る実験をしていた」

「結界って、あれか？」

湖の向こうにある街を、未だに覆い隠している巨大な白い壁を見た。
やった。

「そうなんだが……、あんたはあれが見えるのか？」

「ああよく見える。噂の人が消える事件もそのせいかな？」

「そうだ。あの結界は、物理的な力では簡単に壊せず、人だろうが砲弾だろうが、触れたもの全てを次元の狭間に閉じ込める力がある。その結界の町全体を覆うレベルを、どのぐらいの期間維持できるかを調べているそうだ」

この話に速人は一応合点がいった。確かにあの結界は特殊すぎて、単純にパワーで破壊できるものではない。あのバイクの能力が無ければ、一生あの街から出られなかったかもしれないのだ。ある意味では究極の結界と言えるかもしれない。

「街の神社に、その魔化魍とかいう生き物の死骸がたくさん捨てられていたが、あれは何なんだ。」

「ああ、あれは不良品置場だ」

「不良品？」

“不良品”とはおかしい表現だ。魔化魍とは一体何なのかは判らないが、すくなくとも無機物ではない、れっきとした生き物のはず

だ。

「召喚された魔化魍の中に、制御できずに好き勝手に動く奴が結構いてな。それでさっき話してた異世界人、つまり俺達の主がまとめて始末したそうだな」

「随分ひどいことするんだな。勝手に呼び出しておいて、言うこと聞かなければただのゴミってか？」

「それは仕方が無いだろ。召喚獣の分際で、召喚主に従わないのが悪い。異世界なんて、召喚術に役立ったためだけにあるようなものだしな」

生き物の生活権を勝手に荒らした上でのその言い草に、全く悪びれる様子のない召喚師達に、速人の内に僅かな不快感が生まれた。

「……まあいい。本題はここからだ。あの次元結界を取り除いて、消えた人間を戻すにはどうすればいい？」

「知らねえ。本当だぞ。俺達はただの下っ端だ。そういうのは俺達の上司に聞いてくれ」

「そいつはどこに……、聞く必要も無いかもしれないな」

速人はディケイドの10km四方の音を聞き分ける超聴力で、こちらに向かっている飛行物体の音に気がついていてた。

街の方角を見ると、そこから大きな鳥のような影が近づいているのが、生身の人間のこよみにも見えた。かなりの速度で近づいており、やがてそれは鳥ではなく大きな西洋風の竜であることが判明する。よく見ると背中に何人か人が乗っているのが見える。

召喚師達が叫んだ。

「グレイトドラゴンだ！ ルーク様が来たんだ！」

それが歓喜の声か、恐怖の声なのか理解する前に、その竜「グレイトドラゴン」がこちらに向けて大きな口を開け、そこから大砲のように巨大な火球が発射された。予告も警告もなしの一方的な攻撃である。

「早速かよ！」

隕石のように高速でこちらに突進してくる火球に向けて、速人はデイクイドウェポンを発砲した。

衝突までの時間は一瞬。弾は見事命中。銃撃を正面から受けた火球は、空中で大爆発を起こし相殺された。地上に爆風が嵐のように吹き荒れ、無数の火の粉が雨のように撒き散らされる。

先程召喚師と戦闘（？）を行った場所には、爆弾岩を消したときに出現したたらいが今だ放置されたままになっていた。そのたらいの中を満たしていた液体に、米粒ほどの小さな火の粉が一つだけ落ちる。

その瞬間、たらいが敵の攻撃とは異なる二度目の大爆発を起こした。強烈な閃光と爆音が鳴り、大量のたらいの破片が四散される。

「こよみ！」

速人は反射的にこよみの元に走り、巨大蟻の時とほとんど同じ体制で爆風に背を向けてこよみを守る。爆風も熱も破片も、全て速人は、こよみの盾となって受け止めた。

爆風が収まり、二人は周囲を眺めた。こよみも、爆発の直撃を受けた速人も全くの無傷であった。だが木に寄りかかっていた召喚師達は、全身が焼け焦げ、血を果汁のようにダラダラと流し、全員ほぼ即死していた。彼らが横たわっている樹木も黒く焼け焦げ、所々に火がついていた。

こよみが召喚したたらいに入っていた液体は、なんとニトログリセリンだったのだ。

「面白い力・・・、と思っていたら、結構怖いんだな。お前の魔法、まさかたらいと一緒にあんな物騒な物が出てくるとは・・・」
「あううう・・・ごうごう、ごめんなさい！」

グレイトドラゴンが降下してきた。爆発によって生じた煙が、羽ばたく翼に煽られ、掻き消されていく。

グレイトドラゴンは名前の通り、かなりの大きさである。立ち上がった時の身長は十メートル近くあり、全身の色は黄色、首は長く、頭にはとさかのような長い角が一本生えている。

そしてその背には、先程爆死した男達と同じ、リンバウムの召喚師と思しき身なりの男女が四人乗っていた。

彼らは魔法のような力で浮き上がり、グレイトドラゴンの背から、速人達の目の前に着地した。召喚師達の一人、四人の中で一番若いと思われる二十歳前後の女性召喚師が、一歩前に出た。

彼女の手には大きな青い宝石が抱えられている。形状は最初の召喚師が持っていた立方体ではなく、丸い宝玉になっており、大きさはサッカーボールほどもあった。

その宝玉のおかげで、四人の中で一際目立つその女性は、どうやらリーダー格のようで、魔女のような冷たい眼差しで速人達に問いかけた。

「貴様か。先程我々の召喚獣を勝手に殺したあげく、次元結界に穴を開けてくれたのは」

「そうだが、何か問題でも？」

「あるに決まっている。だが今は、それは置いておこう。それより貴様が纏っている鎧にベルトは、ディケイドシステムのようなだが、

そいつをどこで手に入れた？」

速人は驚いた。自分たちはまだ彼らにディケイドという名前をまだ一度も口にしていない。

「ディケイドを知っているのか？ 実は俺もよく知らないんだよな。何かよくわからんうちに渡されちまってな。色々説明してくれると助かるんだが・・・、その前にお前らに言っただけで置かなきゃならないことがあったな」

「何だ？」

「この街を開放しろ。結界も解いて、消えた住人も全員元に戻せ。出ないと引っぱたく」

女性は呆れたようで、深いため息をついた。

「それはようするに、黙って我々についてくる気はないと解釈していいのかな？」

「結論から言えばそうなるな。ディケイドの話は、さっきの奴らみたい、後で力づくでも聞きだしてやる」

相手とまともに対話しようとし、えらく喧嘩腰の態度だ。もちろん先に攻撃を仕掛けたのは向こうであるが、以前の速人ならば、まずあえりえない発言だろう。

「良いだろう」

女性は手に持っていた宝玉を持ち上げ、速人達に見せ付けた。

「この宝玉は特殊な加工が施されたサモナイト石の結晶だ。あの結界の力を制御し、操るのに必要なもので、唯一これを扱える私になら全てを戻せる。だが私か、我らが主以外のものが下手に宝玉の

力を使ったり、破壊したりしたら、どんな暴発が起こるか判らんぞ。事は街の人間を助けられない程度では済まない」

「説明ありがとう。単刀直入に言えば、あんたを参らせて命令させればいいんだな」

「ああそうだ。しかし自信過剰な男だ。そうそう簡単にできる話だと思っていないだろうな？」

女性は周りにいる三人の仲間に目配せする。すると三人は一斉に杖を振り上げ、召喚術を発動させた。

先程の爆弾岩と同じような形で、その場に三体の巨大な怪物が現れた。

一体は四本の腕を持ち、髑髏のネックレスを首に下げた、竜と人を組み合わせたような姿をした魔人。

一体は大きな一つ目のついた冠を被った、魔道師風の衣類を着ている青肌の大男。

最後の一体は、頭がとても大きく、腹部にもう一つの顔がついている、緑色の三つ目の巨人。

いずれも爆弾岩などとは、大きさも威圧感も桁外れに違う。

「シドー！　ゾーマ！　デスピサロ！　かれ！」

女性の命令と共に、三つの巨体は一斉に襲い掛かってきた。

「こよみ、頼む！」

「うん！　まかせて！」

こよみが速人の前に出て、再びたらいの魔法を唱えた。

今まで通り、地獄の王のような巨大な怪物たちは、風に吹かれた霧のごとくあっけなく消滅した。これもまた今まで通りだが、後に

は三つの大きなたらいが残される。

たらいの色は銀色に近かったが、微妙に銀とは違う。速人達に判るはずもないが、それはオルハリコンという異世界の金属で造られたたらいだった。よく見ると、召喚師達が乗ってきたグレイトドラゴンも消滅している。

こよみは勝ち誇った顔で、召喚師達に向けて叫んだ。

「何度やっても駄目だよ！ みなさんの魔法は、あたしがぜええんぶ消しちゃうから！」

「どうやらそのような。中々面白い能力を持っている」

最初の召喚師達とは違い、この四人は自分たちの力を無効化されても全く動じず、かなり余裕の表情だった。

「見ての通り、お前らの力はいいつの前には無力だ。だがその様子だと、まだ切り札があるようだな」

「切り札というかな……。人間の軟弱な魔法など、最初から当てになどしていないのだよ、私らは」

その言葉と共に召喚師達の身体に変化が起こった。魔法を使ったのとはどうも違う。彼らの全身が薄く光ったかと思うと、全体の形がどんどん捻じ曲がっていき、あつというまに人間とは別の生き物に変身したのだ。

それらは、体型は人間と同じ直立歩行の生物だったが、グロテスクな表皮を持った、人間と昆虫類を組み合わせたような姿をした怪人だった。それぞれ全く異なる姿をしていて、何とも表現しがたいが、リーダー格の女性だった怪人は、全身に赤くてでかいムカデを身体に巻きつけたような外観であった。

「えええ、えええ！？ 何あれ！？」

さつきは勝気だったこよみも、この突然の変貌に腰が抜けそうになる。

「お前ら、召喚師じゃなかったのか？」

『ああそうだ。我らはワーム。貴様らが言うところの、地球外生命体と言うものだ。人間の姿と記憶を写し取るこの能力で、リンバウムの召喚師共の力を丸ごと盗んでやったのさ』

女性が変身した怪人「ワーム」は、マイクごしに話しているような音響の声で、得意げに喋る。

「ええい！」

こよみが召喚獣達にやったのと同じように、魔法を放った。

こよみの目の前の空間に、いつものように一個の銅製のたらいが出現し、いつものようにガランと落ちる。だがワーム達はいつもと違って消えることはなく、同じ場所で全く変わらずに立っていた。

「ななななっ、何で!？」

『残念だったな、小娘。我らはあのモンスター共と違って、召喚術によってこの世界に呼び出された者ではない。ゆえに打ち消されるような魔力など最初から無い。どんな解呪^{デイスベル}を使っても、我々が元の世界に送り返されることなど、あるわけがないのだよ』

ワーム達は高らかに笑う。速人達は、そもそも召喚獣がこよみの魔法で消される原理が判らないので何とも言えなかったが、とりあえずワームにたらい魔法が効かないことだけは理解した。

「こよみ！　ここから離れてろ！　ここは俺がやらなきゃいかんよ

うだ」

こよみが走り出し、速人がワーム達に銃口を向ける。だがそこには誰もいなかった。

「何！？　ぐあっ！？」

何が起こったのか理解する間もなく、速人は何者かの攻撃を受けた。

銃弾ではない。突然どこからともなく顔に殴られたような痛みが走った。それは一撃では終わらず、謎の攻撃は次々と無数に速人に命中した。透明人間にたこ殴りにされているかのごとく、身体があちこちの方向に叩きつけられていく。

（高速移動能力か！？）

速人はディメンションヴィジョンで、敵の動きを読み取っていた。四体のワームは速人の回りをカモメのようにグルグル旋回し、一体ずつあらゆる角度から、次々と速人に突進パンチを与えていたのだ。そのスピードは凄まじく、速人は視覚で追うことは出来ても、身体がそれに追いつけるほど素早く反応できない。

殴られた衝撃で速人の視線がある方向に向く。そこにはワーム達がいるすぐ側で、こよみが地べたに座り込んでいた。どうやらまた転んだらしく、今起き上がろうと足を上げているところだった。

（あの馬鹿！　ぐあっ！）

こよみに気をとられた隙に、ワーム達が一斉に攻撃した。複数体の突進を受けて、速人の身体が宙に高く跳ね飛ばされる。勢いよく

地面に落下した速人の身体は、数度バウンドして転がり落ちて、近くの湖に着水した。

「速人さん！」

こよみが声を上げた瞬間、こよみの眼前に、いつのまにかあのリーダー格のムカデ型ワームが立っていた。

第七話：魔王と虫怪人（後書き）

今回登場したシドー、ゾーマ、デスピサロは『ドラゴンクエストモンスターズ』の世界出身です。本家ドラクエでラスボスを務めた魔王達とは別個体であります

第八話：世界の理と古代の戦士

「あわわわわ・・・、どどど、どうしょ！」

『安心しろ。殺しはしない。大事な研究対象だからな』

「けっ、研究？」

気がつくとは他三体のワームも、こよみを囲うようにそこに立っていた。

『ああ、貴様の能力は中々興味深い。先程我々の召喚獣を、たらいの召喚と共に送還したが、あれがどれほどのことか判っているか？』

「ししし、知らないよ。だって何か魔法を使ってみたら、ああなっちゃったんだから・・・」

『そうかい、ならば教えてやろう。ラインバウムの常識ではな、召喚獣を元の世界に返せるのは召喚した本人以外に有り得ないのだよ。誓約という呪いによって異世界に連れ出された召喚獣達は、元の世界に帰るには己の召喚者に従う以外に無い。だから召喚獣は召喚者に絶対服従する。この仕組みが成り立ってこそ、ラインバウムは召喚術を絶対的な力とし、召喚師は強大な権力を握る。過去の数千年の記録に、この方程式が破られた事例はない。だがお前はそれを、いともたやすく破って見せたのだよ。貴様はあの魔法を何処で学んだのだ？』

己の知識を得意げに饒舌に話し始めるワームに、こよみは幾分か落ち着きを取り戻す。

「そんなこと言われてもわかんないよ。あたし、速人さんと会う前のことは、なんにも覚えてないんだから。魔法だってなんとなく覚えてることをやってみただけだもん」

『ほう？ 覚えていない？ だとしたら更に研究意欲がそえられるな。お前がなんとなく使った魔法がどれほどのものかも理解できていないようだな。お前の力のせいで、サモナイト石に宿っていた誓約の力も無効化されてしまい、あの召喚獣は二度と召喚できなくなってしまった。素晴らしい発見だよ！ リンバウムの住人がお前の存在を知ったら卒倒するだろうな。主も我らを褒めてくださるだろう！』

ムカデ型ワームは、なおもペラペラと楽しそうに喋り続ける。その下卑た声には、人の姿をしていた時の怜悯冷徹な雰囲気は微塵も残っていない。

次第にこよみの表情から恐怖の色が薄れていき、その眼差しに彼女らしくない怒りの色が宿ってきた。

「その研究とか、そういうので、あの人達もいじめてきたの・・・？」

『ほう、いい面をするようになったな。“あの人達”とはさっき我々が召喚した魔王達のことか？』

こよみは低く頷く。まだ脅えの色が残っているながらも、こよみなりの精一杯の気迫でワームに声を上げた。

「あの人達に魔法をかけたとき、すごい悲しい声が聞こえたんだよ！ 痛いよ、苦しいよって、あの人達に何をさせてきたの！？」

『ああ色々やってきたな。本当に色々な仕事をしてもらっていたよ。しかし送還した者の感情も読み取れるとは、さらに驚きだ！ まずは興味がわいてきたぞ！』

こよみの勇気を振り絞って上げた怒声にも、ワームは全く臆することがない。ワームはその醜い顔を、こよみにグンと近づける。ま

た恐怖が吹き返したが、すぐに負けじと睨み返す。

「何がそんなに楽しいの！ ああ街の人たちにもあんなに酷いことして！ 伸恵さんも、皆怖くてお家に帰れないでいるんだよ！」

『言っておくが小娘。お前の言うそのひどいことは、ラインバウムという世界では当たり前のように行われてきたのだよ。奴らは自分たちの繁栄の為に、平然と異界の者たちを己の奴隷としてきた。素直に従っても故郷に帰れるとは限らない。家畜のように酷使され続け、使えなくなればただのゴミとして処分される。その世界の誰も、その行為に微塵も罪悪感を持っていない。』

「そんなことあるわけ……」

『あるんだよ。実際にその世界を直接見てきたからな。理不尽な命令に逆らったり、元の世界に帰れなくなった哀れな者は、はぐれと呼ばれて、その世界の最下層身分として迫害される。最もそれはラインバウムに限った話ではないがな。ラインバウム以外の世界にも召喚術と同系統の魔法がある世界は幾らでもある。もちろんそれらも非道の術と見なされることは全く無い。どうやら人間共の掟では他所の世界をどう虐げようが、略奪しようが、本人のいる世界では一切犯罪にはならないようだ。我らもその人間の理に従って動いているだけだ。その何が悪い』

ワーム達はゲラゲラと笑い出す。

だがその声は突然の銃声に遮られた。

四つの光の弾丸が、真っ直ぐこよみの周りにいるワーム達の顔面に飛んでいく。爆笑中のワーム達に、それを見切る余裕などあるはずもなく、全て命中し、ワーム達はこよみから数メートル先へと吹き飛んだ。

『ガアッ！？ 貴様！？』

ワーム達が顔を向けたとき、視界に移ったのは、バイクに乗って真っ直ぐこちらに突っ込んでくるディケイドの姿だった。

速人は左手でこよみを掴み上げ、見事な手際で瞬時に後部座席に乗せる。そしてそのまま直進し、先にいるワーム達をボウリングのピンのように跳ね飛ばした。

「こよみ、悪いがここから先はお前一人で乗ってくれ」

「え？ うわぁ！？」

速人はこよみの身体を人形のように持ち上げて、自分の前、前部座席に座らせた。そしてこよみがハンドルを掴んだのを確認すると同時に、勢いよくバイクから飛び降りる。

「ええええっ！？ ははは、速人さん！？ うわぁあああ！？」

ハンドルに鉄棒のようにしがみつきながら、こよみが絶叫する。

バイクは進路を上45度に曲がって、空へと走り出した。

こよみが操縦している訳ではない。どうやらこのバイクには自動操縦機能がついていたようだ。

不意打ちを受けて起き上がったワーム達は、速人に怒りの声を上げた。

『きさまぁ！ もう起き上がってきたのか！』

「まあな。痛みに慣れてないせいで、つい音を上げちまったが、ディケイドに変身している俺ならあの程度の攻撃で倒れたりしないな。それとお前、御託長すぎ。敵を放っておいて、一体どんだけ喋るんだか・・・」

速人は両手を横に上げて、呆れの声を上げる。そしてライドブッカードから一枚のカードを取り出した。カードを突き出しながら、速

人は更に言葉を続ける。

「何だか好き勝手なこと言ってたな。俺はリンバウムなんて世界行ったことないし、お前の偏見入りまくってるばい話だけで、その世界の全てを否定する気はない。だが今ここにいるお前らのことは、全面的に否定できるぞ。他所の世界を虐げても罪にならないのが人間の理？ ふざけんな。お前からこそ、召喚獣と同じ目に合わされてそれを素直に肯定できるのか？」

『貴様こそ好き勝手なことを言っているぞ。無数にある世界のこと、そこに住んでる人間共のくだらなさも何も知らん分際で』

「ああそうだな。俺もお前と同じように好き勝手やらせてもらっさ。もし本当にそういう理が出来てるんなら、俺自身の意思と力で、勝手に世界の悪事を裁いてやる。俺は正義の戦士・仮面ライダー・ディケイドだ！」

速人は、最初にディケイドドライバーを手にした頃の性格から、まずありえない熱血的な発言を口にする。

この時速人は、自分は何か目に見えない力で、自身の人格を改変されてきている事に、はつきりと気がついた。だが悪い気分はしていない。それによって得られた意思の強さのおかげで、こうしてすぐに立ち上がって、こよみを守ることができたのだから。

速人は手に持ったカードを、すっかり慣れた動きで装填した。

『カメンライド クウガ！』

ベルトからは、古代文字のような光の紋章が浮かび上がる。

速人が身に纏う鎧の上に、更に二重目の鎧が、どこからか紙を貼り付けるようにして重なっていく。一瞬にして速人の姿は、ディケイドとは異なる姿をした鎧の戦士に変貌した。

色は、腕や脚は基本黒く、胴の部分の赤色がよく目立つ。目も赤く大きく、頭には兜の鍬形のような金色の二本の角が立っている。手首・足首・首周りにも金色の装飾がなされており、首周りの部分には古代文字のような刻印が並べられていた。身体は全体的にディケイドより太めで、力強い印象を受ける。グロンギと戦うために生まれた古代リントの戦士：仮面ライダークウガの姿だ。

『どんな姿になろうと、我らのクロックアップに敵うものか！』

一体のワームが先陣を切り、高速移動Ⅱクロックアップで速人に突進する。だが……。

「うりゃあ！」

速人が右足を持ち上げ、何も無い空中を蹴りつけた。と思ったら、ほんの一瞬前まで、速人の視線十メートル以上先にいた一体のワームが、すぐ目の前で腹部に速人の蹴りを見事にくらっていた。

靴投げ遊びのようにワームの身体が宙に浮き、ゴロゴロ転がって、残り三体のワームのところに戻っていく。

さつきはクロックアップに手も足も出なかった速人が、今はその動きを完全に見切り、高速状態のワームに攻撃を当てたのだ。これには他のワーム達も動揺する。

「お前らの攻撃パターンは大体覚えた。今度はこっちが反撃する番だ。超変身！」

速人が中国拳法のような構えを取り、気合を入れるとまた姿が変わった。

それは基本形態のクウガの姿とさほど変わらないが、鎧の赤かった部分が、海のような青に変化している。胴がやや細くなり、力強

さより素早さを感じさせる外観になっていた。

『小癩な！』

四体のワームが一斉にクロックアップを仕掛けてきた。先程と同じように速人の周りを旋回し、常人には視覚不可能なスピードで、次々と攻撃を仕掛けてくる。

速人はそれらを全てかわして見せた。

踊るように身体をくねらせ、回転させ、ある時は横に飛び跳ねる。流れる水のようなその華麗な動きで、攻撃を全く当てられないワーム達を速人は翻弄する。

その動きを持続させながら、後ろ腰のディケイドウェポンを抜いた。するとそれは今までの剣型や銃型とは異なる、金の装飾が施された青い棒状の物体に変異した。

両端の先端には、金の輪に囲まれた青い宝石が埋め込まれている。その先端部分の柄が急に伸びた。どうやら収納式の棍棒だったらしい。

ただでさえ速人の俊敏さに焦っていたワーム達は、その新たな武器の出現に更に動揺する。速人はその一瞬の隙をついた。

速人はその棒を巧みに回転させながら、ワーム達を次々と叩きつける。その攻撃に、ワームは蠅のように次々とクロックアップの世界から叩き落され、転倒していく。

「今度はこいつで行くぜ。超変身！」

速人のクウガの姿がまた変わった。

今度は紫を基調とした色で、鎧が重厚になり、無駄に大きな肩当てが装着されている。手にあった棒は、紫色の刃の大剣に変身してい

た。樋は金色で古代文字の羅列が刻まれている。

ワームは再びクロックアップし、速人に向かっていったが、またすぐに弾き飛ばされる。

『があっ！？ か、硬い！』

今回は、速人は何も手を出していない。ワーム達は、手を出した己の拳や足を痛めていた。厚く頑丈な紫のクウガの鎧を殴りつけたワーム達は、逆に自分たちが痛手を受けることになってしまったのだ。

速人は一体のワームの頭部に、餅つきの杵のように大きく剣を振った。

グシャ！と卵が潰れるような嫌な音が聞こえる。斬る、というように叩き潰すような感じで、厚い剣身がワームの頭にめり込んだ。血の噴水が飛び上がり、ワームは絶命して倒れる。

速人は更にもう一体に攻撃を加えた。今度は刺突だ。剣の先端が、ワームの甲虫のような外骨格を突き破り、肉に深く喰い込んでいく。刺されたワームが痛みで悶絶する。

速人が柄を通して傷口に、何らかの力を送り込む。すると刺突位置に。赤く光るクウガの紋章が浮かび上がった。するとその周辺の皮膚も、融解する金属のように赤く光り、広がっていく。

『グガアアアアアッ！』

もはや人間の声質が完全に消え去った断末魔と共に、ワームの身体が爆発した。

ワームの肉片が炎と共に飛び散り、跡にはワームの姿は無くなり、

無傷の速人が立っている。

『ギギイ！』

一体のワームが背中から羽を広げて、宙に浮き上がった。飛行能力を持つタイプだったようだ。

羽を団扇のようにブンブン振ると一気に上昇し、そのまま湖の先の、街の方向へと飛び立っていく。

「逃がすか！」

クウガの鎧が三段目の姿に変わる。今度は緑色の鎧で、ディケイドウエポンは大きな拳銃になっていた。

その銃は銃身がくびれていて、先端部分には緑色の宝玉が埋め込まれており、上下両端に弓のように曲がった金色の突起が生えていた。

飛び立ってどんどん小さくなっていくワームに、速人は銃口を向けた。後ろのトリガーのような部分を引っ張ると、突起が後ろに折れ曲がった。そしてパツと手を広げ、トリガーを離すと、トリガーと突起が一気に元の位置に戻り、銃口から矢のような細長い光の弾丸が飛んだ。

銃というより、弓矢を撃つような発砲方法である。

光の弾丸は、すでに街の上空に侵入したワームに、寸分の狂いもなく命中した。

背中を貫かれたワームは、猟銃に撃ち落された鳥のように、クルクルと回転しながら地面に落下していく。だが地面に到達する前に、空中で大爆発して絶命した。

「おし！」

速人は右手の拳を握り締め、親指だけを立てたガッツポーズを取る。何故かは判らないが、どうしてもこのポーズを取りたい気分になったのだ。

なんとなく装填したクウガのカードから、そうするように言われたような気がした。

第八話：世界の理と古代の戦士（後書き）

原作カブト&ディケイドにおいて、クロックアップ攻撃の描写は、通常空間と高速空間とではかなりの違いがあります。

通常空間では、敵の周囲を縦横無尽に高速で動き回りながら、体当たりで攻撃を与えています。これだけを見ると、クロックアップはかなり小回りの効かない能力に見えます。

ですが高速空間では、スローモーション化した世界で、特に走り回ったりはせず、同じクロックアップ状態の敵と普通に殴り合っています。

この違いを小説でどう表現するかが少し問題です。

なお仮面ライダーブレイド32話では、時間の止まっている世界で動いている人物が、止まっている状態の人物を殴ったところダメージを与えられず、逆に自分の拳を痛めてしまった描写があります。これを参考に、『クロックアップ状態にある者は、通常空間にある存在への干渉力が制限される。ゆえにかなり勢いをつけてぶつからないと、十分なダメージを与えられない』という風に解釈して描くことにしました。

第九話：魔物の軍団とファイヤーフォックス

速人の全身がモザイクのような光に覆われ、クウガから元のディケイドの姿に戻る。そして最後に残った、一体のムカデ型ワームに向き直った。

するとムカデ型ワームも、最初の女性召喚師の姿に戻る。手には、今までどこに消えていたのか、あの宝玉が抱えられていた。

「もう観念しろ。さつき行っただ通り、この街を元に戻せ」
「そうですね・・・」

女性召喚師は宝玉を両手で掴み、何かを念じ始めた。
要求に従うのかと思ったら、そうではなかった。

いきなり宝玉が太陽のような爆発的な光を放つ。迸る魔力の波動が、衝撃波となって木々を揺らし、落ち葉や小石が飛び散る。

「お前！ 何をしている！？」

速人の言葉に、女性召喚師が邪悪な笑みを浮かべた。そして宝玉を、砲丸投げのように勢いをつけて、湖の方向に投げ飛ばした。

「なあ！？」

超人的なパワーで投げられた宝玉は、湖の真ん中近くまで飛び、唐突に砕け散った。青く光る無数の破片が、流星群のように湖面に流れ落ちていく。

「はははははっ！ 宝玉をわざと暴走させてやった！ これであの街は戻らない。いや、それだけはないぞ！ 見るがいい、あの次元

結界を！」

速人は向こう岸に聳え立っている、巨大な次元結界を見やる。結界のあちこちに、黒ゴマのような黒点が沸々と出没していた。

デイメンションヴィジョンで見通すと、結界内の空間に、人間とは異なる生物が無数におり、それが結界から外に出ようともがいているのが見えた。

「あの結界は、それ自体が巨大な異世界の門だ。宝玉の力で、異界の魔物を無秩序に召喚するようにしてやった。もうこれは誰にも止められない。例え我が主でもな！ 街が魔物に喰い尽されるのを見届けるがいい！」

女性召喚師は再びワームの姿となる。そしてその場に、一瞬で掻き消えた。クロックアップの超高速度で逃走したのだ。

この顛末に、速人は少しばかり焦った。結果内の何千という魔物の大群は、今にもこの現実空間に飛び出そうとしている。

（お、落ち着け、落ち着けよ……。召喚されるとなると、誓約とかいう魔法に縛られてるはずだよな。だとすると……。）

こよみの魔法に頼る方法を思いつくが、あれだけの数だ。あまりの危険性に実行に躊躇する。

その時、左腰のライドブッカーが突然勝手に開き、二枚のカードが飛び出してきた。

「うわ！？」

こよみのカードが出たときと、全く同じ現象である。速人はそれ

を反射的に素早く掴む。

「何だよ。これを使えってか？」

一枚目のカードの絵柄は、ランプの人物の絵札のように、上下が斜めに区切られていた。上部にはこよみの顔写真が、下部には狐のような生き物の写真が貼られている。その下には“KOYOMI FOX”と書かれている。

もう一枚には、四角錐の青い宝石のような紋章が描かれており、下には“FAINAL ATTACK RIDE KOYOMI”と書かれていた。

「こよみい！」

速人が甲高い声で、こよみの名を叫んだ。先程空中へと走り去っていったバイクが、物凄いスピードで、速人の元へと戻って来た。

「はうふうふう。ただいまあゝ」

どこをどう飛んできたのか、到着したこよみは、酔っ払いのようにふらふらと目に螺旋を描いており、今にもバイクから転落しそうだ。いや、今まで転落しなかったのが奇跡だったのかもしれない。速人は先程飛び出してきた謎のカードの一枚、“KOYOMI FOX”を、ディケイドライバーに装填した。

『ファイナルフォームライド コココヨミ！』

もう一枚のカードに描かれていた紋章と同じ、細長い四角錐の紋章と共に、何故かこよみの名前がスクラッチ調で発声された。

「え？　今あたしを呼んだ？」

速人はこよみの後ろに回り、背負っている亀バッグを取り外した。

「速人さん？」

「少しかゆいぞ」

速人は突然こよみの背中に、両手の指先を一拳に差し込んだ。

「はううつ！？」

いきなりの感触に、こよみは背を引き伸ばして硬直した。

速人は差し込んだ両手を、ゆつくりと横に開いていく。するとこよみの背中に、とても小さな次元の門が出現した。

「え？　え、え、ええええ！？」

その次元の門から、何かが飛び出した。それは大きくて広い、動物の毛皮のようなものだった。それは風呂敷のように広がっていき、こよみの全身を包み込んでいく。

毛皮にスッポリ覆い被せられたこよみは、速人の手から離れ、宙に浮き上がった。そしてグルリと体操競技のように空中回転すると、こよみはカードに描かれていた写真の生物に変身していた。

その生物は、全体的にオレンジ色をしていて、外見は狐そっくりだが、幽霊のように後ろ脚がない。代わりに太くて長い、青白い尻尾が伸びており、そこから光の粒子が撒き散らされていた。大きさは……、少なくとも元の姿のこよみよりは大きいだろう。

その狐は、反響したような声質のこよみの声で喋りだした。

『なにになに！？ 速人さん！ これって何ですか！？』
「知らん。でも何だか切り札っぽい」

そんなやり取りをしている間に、ついに結界から魔物達が抜け出てきた。

牛のような頭に、イボイボのついた皮膚、ピッチフォークのような武器を持った大柄な悪魔。

鶏のような姿をした肥満体型の半鳥人。

長い舌に、いくつもの宝石を浮き上がらせた人面袋。

太く短めだが、蛇に似た胴体を持つ、脚の無い鳥。

蝙蝠のような羽の生えた猫。

脚に人間の髑髏を掴んだ大ガラス。

無数の蛇が髪の毛のように生えている、大きな一つ目を持った球体。

三角帽子をかぶったお化け。

小さな目と口が付いた青い身体に、黄色い触手を生やした、クラゲのような浮遊生物。

この他にも、実に多種多様な姿をした空飛ぶ魔物達が、結界から次々と姿を現してきた。

その数は数千、いや一万を越えているかもしれない。それらがイナゴの大群のように、一挙にこちらに接近してくる。

自分の身体の変化に驚き戸惑っていたこよみは、これを見て威勢よく声を上げた。

『速人さん！ あたし行くよ！』

「行かつて・・・大丈夫なのか？」

『うん！ 何だかよくわかんないけど、身体からすごい力が沸いてくるんだ！』

こよみは飛び上がり、嵐のごとく近づいてくる魔物達に、真正面から突っ込んでいた。

その直後、湖にたらいの雨が降った。

「おおっ！　　すげえな！」

速人も思わず感嘆の声を上げる。

効果範囲は半径十数メートルぐらいだろうか？　こよみに近づいた魔物達は、シャボン玉のように瞬く間に送還されて消えていき、後には銅のたらいが出現して、下の湖に次々と落下していった。

こよみは群れの中を、航空ショーの飛行機のようにグルグルと旋回して飛び回り、魔物達を軽々と消していく。

狐の姿のこよみに、攻撃しようとする魔物は一体もいなかった。それどころか元の世界に帰れると理解した魔物達は、自ら進んでこよみに近づこうとする。その度に湖に、ボチャンボチャンと、大きな金属容器が水面に落ちる音が聞こえてくる。

魔物の大群は、空気を抜いた風船のようにどんどん小さくなっていき、やがて全てが消え去った。空を覆いつくさんばかりにいた魔物達は、信じられないくらい簡単に、この世界から一匹残らずいなくなった。

それを確認した速人は、バイクに乗って空を走り、空中のこよみの元にやってきた。そして残っていたもう一枚のカードを取り出し、こよみに見せる。

「後はあの馬鹿でかい結界をどうにかするだけだな。こよみ、もう少し頑張ってもらっぞ」

『それ、使い方判るんですか？』

「装填してみれば大体わかる」

バイクに乗ったまま、カードを装填した。

『ファイナルアタックライド ココココヨミ!』

再びスクラッチ調の電子音声が鳴る。するとこよみと速人の身体が、大量の光の粒子に包まれた。速人の方は本人だけでなく、バイクにも光の粒子が広がっていく。

「一気に行くぞ!」

『はい!』

こよみと速人は、隣り合って並び、同時に猛スピードで空を駆け抜けた。行き先は街の方角、つまり結界のある場所である。そこへ全く速度を緩めず、暴走特急のように直進していく。

二人は特攻隊の戦闘機のように、結界に激突した。そして結界を破って裏側へと突き抜けた。

二人が通り抜けた部位の結界には、ビニール袋を指先で破ったような粗末な穴が出来上がっていた。裏側に出た二人には、全身を覆っていた光の粒子がいつまにか完全に消え去っている。

突如二人が破り通った穴から、結界表面を伝って、巨大で薄い金色の光が、波紋のように現れ広がっていた。最上部と最下部にはあっさりと到達し、後は横へ横へと、光は結界の表面上を広がっていく。やがて光は、万里の長城のように長く広く、街全体を覆っていた結界全てを覆い尽くした。

途端、結界は光と共に、一瞬で砕け散った。針を刺した風船のように、結界は粉々に弾け、欠片が雪のように空に散らばり、消えていく。

速人達が通過した穴があった地点からは、恐ろしく巨大なたらいが出現した。直径数十メートル、どここの巨人が使うんだ？と言いたくなる程の大きさのたらいは、落下して地震の様な轟音を上げる。たらいの横半分は湖に沈み、もう半分は岸边側にあった建築物をいくつか踏み潰した。

「つくづく思うんだが、あのたらいはどこから出てきてるんだ？あんなでかいたらいを使う奴が異世界のどこかにいるのか？」
『ど、どうなんだろう？ あたしにも全然判んないよ』

街を外部から閉じ込めていた結界は、ディケイドの力によって強化されたこよみのたらい魔法によって、全て解呪され、完全に消滅した。

だが事が全て収まった訳では無かった。

『速人さん！ あれって！』

「！？」

湖の上空の空間が歪み始めたのだ。その歪みは徐々に広がっていき、湖の上空一帯は蜃気楼が生まれたかのような状態となった。

途端、歪みから湖面に向かって何かが落ちた。

「人だな」

『うん、人だね・・・』

それは人間だった。しかも一人ではない。一人目が落ちると、すぐ二人目が落ち。次に三人目、四度目は三人同時に落ちてきた。そんなこんなで落ちてくる人間はどんどん増えていき、ついには網から下ろされた小魚のように、無数にボトボトと次から次へと落

ちてくる。先程たらいの雨に打たれた湖面は、今度は生きた人間の雨に打たれていた。

「うわああああっ！ 助けてくれ！」

「あれ？ 俺今まで何してたんだっけ？ 何だか身体が軽いな」

「空が歪んで？ あああああっ！ 落ちる落ちる！」

「おおおおっ！ あたしは今、空を飛んでいるう！」

「違うよ、みうちちゃん！ 落ちてるんだよおお！」

「一体、なんなんですよおおおおっ！？」

人が落ちるたびに、多種多様な悲鳴が、いくつも重なって聞こえてくる。状況から見て、彼らは知らずにあの結界を通って、異次元に閉じ込められた街の住人達なのだろう。

湖に着水した人々は皆無事なようで、多くは泳いで岸に上がろうとしている。

泳げない者は他の人の手を借りるか、水面に浮かんでいるたらいにビート板のようにしがみついていた。

その光景をこよみと速人は呆然と眺めていた。少し時間がかかって、ようやくこよみが口を開いた。

『あたしたち、どうすればいいんだろう・・・？』

「とりあえずここから離れよう」

『えっ！？ 行っちゃうの！？ あの人たちはどうなるの！？』

「あの様子だと、みんな大丈夫だろう。多分だけだな・・・。後で出てきても、説明を求められても困るだろう？」

『えっと、ええと・・・。うん、そうだね』

色々と考えた後、こよみは何となく頷いた。

「よし、じゃあ出発だ！ 記念すべき異世界への第二歩だ！」
『はい！ しゅっぱーっ！』

何故か遠足気分のノリだ。

そうして上空にいる空飛ぶ狐と空飛ぶバイクに乗った男は、特に行く当てもないまま、何処へともなく飛び去っていった。

第九話：魔物の軍団とファイヤーフォックス（後書き）

主人公に選ばれなかった、各ヒロインカードの紋章とFFRを紹介。

MISAO：歯車の形のマーク ミサオクロガネ

NATULU：“♂”の記号 ナツルハラキリトラ（腸をぶら下げた、リアルな外見の猛虎）

RUISE：ガンダールヴのルーン ルイズスタッフ（巨大な魔法の杖。ディケイドが持って虚無の魔法を使いこなす）

ILYA：円盤型マーク イリヤブラックマンタ

YUNO：×マーク ユノキャタピラー（巨大芋虫。キャストオフ可能）

第十話：義妹と猫地蔵

カードの力で変身していたこよみは、すぐに元の姿に戻り、速人のバイクの後部座席に跨った。変身の解除は、こよみの意思で簡単にできた。

適当な方角に進んだ速人達は、現在どこその山脈の上空を走っている。しばらく下の緑色の景観を眺めていたが、ふと速人が口を開いた。

「今更に気づいたんだが、お前ノーヘルだったな」

「あつ、そうだったね。バイクなんて初めて乗ったから全然気がつかなかった。・・・でも速人さんもヘルメット被ってないよ？」

「この仮面はヘルメットにはならないか？」

「うゝん。何か違う気がする」

「・・・！？ いや・・・、ここは肯定してくれないと色々まずいというか、歴代のライダー全てが否定されてしまうというか・・・」

こよみの回答に、何故か速人は慌てて言い返す。それにこよみは不思議そうに首を傾げた。

「速人さん？ ごめんなさい、言ってることがよくわかんないよ」

「ああ、こつちこそ悪かった。俺も自分で何言ってるのか、さっぱり判らんわ。忘れてくれ」

少し気まづくなった速人は、即座に話題を切り替えることにした。

「お前、記憶のほうはどうなった？ 何か思い出したか？」

「え？ あつ！ うゝん」

こよみは何かを思い出そうと必死で思考する。こよみの記憶の話題は、あの白紙化したカードが原因で、途中で有耶無耶になったままだった。やがてこよみは申し訳なさそうな顔で答える。

「ごめんなさい……。まだなんにも思い出せません」

「自分の名前とか、年齢とははつきり思い出せるのにか？　十五歳とはとても信じられんが……。十歳ぐらいに記憶違いしてないか？」

「そんなことないよ！　わたしはこれでも高校生だよ！」

怒りながらも、さりげなく“高校生”という現代日本の単語を口にしている。とりあえず、以前は学生だったのは間違いないようだ。

「そうか。じゃあ漠然とでも思い浮かぶ知識とかは無いのか？　例えば魔法のこととか」

「うう、どうだろ？」

「前に自分はたらい以外の魔法は使えない、と言ったよな。じゃあ“たらいを出す以外の魔法”となると、どんなのがあるんだ？　あいつらが使っていた、召喚術とか言うのとは違うんだろ？」

こよみは少し考え込んだが、突然何かにひらめいたように顔を上げた。

「ええとね。剣を飛ばしたり、携帯電話とかパソコンとかを、ポチポチ打ってた気がする」

「なんじゃそりゃ？」

速人の脳天に思い切り？マークが浮かぶ。“剣を飛ばす”は、まあ想像できなくもないが、携帯やパソコンを使う魔法とは一体何で

あろう？

「まあ……、仲恵達の話聞く限りじゃ、この世界には、魔法とかいうのは無いようだったな。多分お前は、俺と同じく異世界から来たんだろう」

「速人さんの世界に魔法はあったんですか？」

「無いな。多分俺の世界とも違うだろうな」

こよみは悩ましげな顔を始めた。これまで色々なことが怒涛に起こったため、こよみは自分自身の現状を、まるで他人事のように考えていた。

だが改めて問いただされて、記憶がないこと、そして自分が何者でどこから来たのか、何一つ判らないという事実、初めて恐怖を感じ始めたようだ。

恐る恐るといった感じで速人に聞いた。

「速人さんは、この世界のお仕事が終わったら、元の世界に戻るんだよね？」

「そのつもりだな。どうすれば帰れるのかさっぱり判らんし、そもそも何を持ってすれば俺の役目が終わるのかも謎だな」

「あのあの、もしその時まで、あたしの記憶が戻らなかったら……」

「ああ、どうすっかな。俺の家に来るか？」

速人の軽い口調の返答に、こよみがパツと明るい笑顔を見せる。

「本当！？ いいの！？」

「ああ、いいぞ。でも母さん達に何と説明すればいいのかが、悩みどころだけだな。そもそも戸籍とかどうしょ？ デイケイドの不思議パワーで何とかならないかな？」

「ありがとう、速人さん！」

こよみが速人に抱きついた、と言っても元々バイクから落ちないよう抱きつく体制にいたのだが、回していた手を更に強く締める。そして速人に、はしやぎながら更に質問をしてきた。

「あのあの、速人さんがいた世界は、どんなところだったの？」

「どうって言ってもなあ。それなりに科学が発達していて、あんな怪物とか魔法とかはいなかったな。ていうか他の世界とかあんまり見てないから、特徴を説明するのも難しいな……」

「じゃ、じゃあ、速人さんのお家の人は、どんな人たちがいるの？」

質問の仕方が悪いと思ったのか、こよみはすぐ質問を変える。

「ああ、俺の家か。玩具会社で働いている父さんと母さん、妹が一人いるな……。うん？」

速人は何か妙なことに気がついた。それが何なのかは判らないが、何かがおかしいのだ。実に漠然とした意味不明な感覚だったが、一度変だと思つとそれに対する思考をやめられない。

「どど、どうしたの？」

急に何かを悩み始めた速人に、こよみは心配して声をかけるが、速人の意識には届かない。

速人は奇異感を持った原因を、一から考え直してみる。切っ掛けはこよみに家族のことを聞かれた辺りからだ。色々と細かく思い出していく。自分の家族の顔を、頭に思い浮かべる。父と母、そして妹……。

そして気がついた。

（な、何でだ！？ 何でだよ！？ どうして思い出せないんだ！？）

奇異感の正体にたどり着いた速人は、思わず絶叫しかけた。

速人には血の繋がりのない一人の妹がいた。母親が亡くなった知人の子を預かったという話だが、詳しい経緯は聞いていない。

まだ家に来て1年足らずしか経っていなかったが、速人にとってはとても大切な家族である。大学受験に落ち、就職も全く出来ずに落ち込んでいる自分を優しく励ましてくれた、とても可愛い妹である。

だがその大切な妹の顔と名前が、全く思い出せないのだ。

集合写真の中に写っている人間の顔を、一人だけ塗り潰したように、妹の存在に関する情報だけが、不自然にスッポリ抜け落ちているのだ。

速人は訳が判らず、大いに混乱した。そのせいで操縦していたバイクのバランスに影響が出始めた。

（何で？ 何でだよ！？ 世界を超えた影響か！？ それともこのディケイドの力のせいかな？ どうしてこんなことに！？）

「速人さぁん！ あわわわわっ、うわぁ！」

こよみの悲鳴に、ようやく速人は我に返った。興奮して身体を振るわせたのか、車体が泥酔運転のように大きく揺れて、こよみが今にも振り落とされそうな状態だ。

「す、すまん！」

速人はすぐに車体のバランスを直した。ふと前方に目をやると、多くの家屋が立ち並ぶそれなりの規模の街が見えた。

「と、とりあえず、あそこに降りるぞ」

「う、うん……。ほんとに大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。多分な……」

二人を乗せたバイクは街に向けて、ゆっくりと下降していった。

具体的な時刻は不明だが、街に着陸した時、太陽は東に沈まんとしていた。所々に下校途中の学生の姿が見える。

そんな街の中の公道を、速人達は空にいたときと同じように、二人乗りで走っていた。だが……。

「ねえねえ、何だかあたしたち、いっぱい見られてるような気がするんですけど……」

「ああ、確かに見られてるな。何でだ？」

何故か行きかう人々皆が、速人達に対し、珍獣でも見かけたかのような奇異の視線を向けているのだ。中には携帯電話で写真を撮る者もいる。二人の身なりは、この世界でもそれほど目立つものではないはずなのだが……。

ディケイドへの変身状態は、着陸と同時にとくに解いている。空中からバイクで降りて来たところと、変身を解く所は、無理に隠れてやるのも面倒だったため、近くに人がいるのも構わず堂々とやった。もちろん見られた人達からは驚かれた。

（その時の噂がもう流れちゃったのか？ それにしても話を通るの

が早過ぎるな・・・」

速人達が疑問に思ったが、どのみちあまり注目されるのは避けなければならぬ。

「とりあえず、なるべく人通りの無い場所に行くぞ」
「う、うん」

二人はなるべく人気の無い場所を求めて、街中を走り回った。途中で小道に入り、バイクから降りて車体を引っ張って前へと進む。人のいない所に行つて、その先どうするかなど、細かいことは何も考えてはいなかった。

こよみがバイクを後ろから押して手伝おうとしたが、押すどころか逆に速人が引っ張る車体に、その小さな身体が引き摺られそうになったので、すぐにやめさせた。

「あれ？」

二人がある寺院の近くの道路に歩いているとき、ふとこよみが足を止めた。何かを探しているように、あたりを見回している。

「こよみ、どうかしたのか？」

「うん。今誰かの声が聞こえたの」
「声？」

「あ！ また聞こえた！」

こよみが駆け出した。途中で一回転倒し、速人に起こしてもらつてから、一緒にその声が聞こえた方向に歩き出す。

寺の石段のすぐ左横には、町会の掲示板であろつ大きな木の看板と、缶入れ用の金網ゴミ箱、そして小さな木製の地蔵堂があつた。石段の上には、三毛と黒の二匹の猫が仲良く一緒に丸くなって、昼寝をしている。

こよみが目指していたのは地蔵堂の方だつたようで、二人はその中の地蔵の姿と一緒に覗きこんだ。

「何だこれ？ 招き猫か？」

速人は、内部の地蔵菩薩像の姿を見て、小馬鹿にしたような声を上げた。

お堂の中にあつたのは地蔵ではなく、前足を上げて座り込んだ姿勢の猫の石像だつた。頭部は随分大きく横長で、首には赤い涎掛けが巻かれている。どこかの郷土キヤラクターのような、実にひょうきんな外見である。

「駄目だよ、速人さん！ この人、自分は大昔からいるれつきとした地蔵様だつて言つて怒つてるよ！」

少し怒つた口調で否定するこよみに、速人は不思議そうに首を傾けた。

「お前これ・・・、いや、この地蔵様と話せるのか！？」

「うん。この人、猫地蔵つて言うんだつて。すごいね、猫さんでもお地蔵様になれるんだ」

確かにお堂のすぐ隣には、“猫地蔵”という文字が刻まれた置石がある。

速人はこよみの力に改めて感心した。魔法使いという者が、神仏とも会話できるというのが実に意外だつた。

「それでさっきお前が聞いた声の主はこいつなのか？」

「そうなんだけど、何だかよくわかんない事言ってるの」

「わかんないこと？ 一体なんだ？」

「すぐ人里から離れろ、つて。何だか“このよはすべてまにおかされた”とか何とか・・・」

「確かに意味不明だな」

人里から離れるとは一体どういうことが、二人は理解できなかった。確かにおかしな注目を受けはしたが、前にいた街と違ってこの街は、特に怪物など危険な物の姿はまるでなく、平和そのものにか思えない。

「それから、その乗り物は目立つからすぐ違うのに替えろ、って言ってるよ」

「あっ！」

これに関しては、速人はすぐ理解することが出来た。同時にさきほど街中を歩いたときの、妙な視線の原因も判明した。

今速人が引つ張っているバイクは、明らかに市販のバイクではない。その性能はもちろんのこと、見た目も一般のバイクとはかけ離れていて、どう見ても改造車にしか見えない外見である。今まで警察に検挙されなかったのは実に幸運だったのだ。

「こよみ、とりあえずこのバイク、どこかに隠すぞ」

「え？ どうして？」

「どうしてつて、お前……。ああそうか、異世界人だからこの世界の常識も判らないのか。これはあまり人前では乗り回せない代物だったんだ。とにかく早く行くぞ！」

こよみは今ひとつ腑に落ちない様子だったが、とりあえず頷いた。そして猫地蔵に別れの挨拶を告げて、速人共に急ぎ足でそこから離れていった。

二人は団地の近くの公園に入った。現在子供の姿は一人も見当たらない。バイクはこの公園の樹木の影に隠すことにした。粗末な隠し方だが、その変の道路の脇に放置するよりはマシだろう。

公園のベンチに座り込み、空に下っていく美しい夕日を、速人は呆然とした表情で、こよみは宝石を見ているような感動的な表情で眺めていた。

ふとこよみは何かを思い出したように、背負っていたバッグを降ろし、中身を漁り始める。

その行為に特に気に留めず、速人が独り言のように、こよみに聞いてきた。

「さてこれからどうするか。目的地も行動指針も、何も判らないままここまで着ちまったが……。こよみは何か名案はあるか？」
「そそ、そんなこと急に言われても困るよ。速人さんは何か知ってここにきたんじゃないの？」

「いんや全然。とりあえず腹が減ったな。しかし所持金はゼロ。まずこの問題をどうするか……」

「それなら大丈夫。お金ならあったよ」

こよみは速人の目の前に、皮製の二つ折り財布を掲げた。中には福沢諭吉の顔が描かれた紙幣が、二十枚以上納められていた。

「はあっ！？ 何でお前そんなに金持ってたんの！？」

あまりに意外な展開に、速人は思わず声を荒げた。この反応によみは違う意味で驚く。

「ええ・・・えとえと、そう言えばこのバックには何が入ってるんだろぅなあゝって思ってたね、今中を見たらこれがあったんだけど・・・」

「そうか・・・」

速人は決戦に赴くかのような真剣な表情で、ベンチから立ち上がった。

「よし！ 一応の行動指針はできた！ 今日は一気に色々なことがありすぎて、何か食べずにはいられない！」

「うん、そうだね！ いっぱい食べちゃおう！」

二人は意気揚々と公園から出て行った。辺りは次第に暗くなり始めていた。

第十一話：ラーメンとフェイスハガー（前書き）

今回ちょっとグロい描写があります。

第十一話：ラーメンとフェイスハガー

速人たちがいる街よりも離れた場所。それが何処にあるのかは謎であるが、ある高層ビルの屋上に、三人の人物が何かを交わしていた。

一人はほんの数時間前に速人と交戦し、逃走したあの女性召喚師であつた。彼女は対峙している二人の人物に、訴えるような声をかけている。

「信じられませんねえ。ディケイドが現れて、わたくし達の実験を破壊したなどと……」

二人の人物の内の一人が、呆れているのか感心しているのか怒っているのか、今一つ判らない奇妙な声質で女性召喚師に返答を返す。

「私だって信じられないさ！　だが確かに見たんだ！　あの姿に、他のライダーへの多重変身能力！　間違いなくあれは完成品のディケイドだった！」

「いえいえ、別にあなたが嘘を言っていると思っっているわけではありません。暴走した次元結界がいつのまに消され、湖に大量のたらいと転移された人間が落ちてきた訳ですからね。何か、わたくし達の想像を超えた力が動いたことは間違いないでしょう」

「どうするんだ？　こんなこと主に報告して大丈夫なの？」

その人物は、「おや？」と不思議そうな声を上げて、女性召喚師に向けて哀れむような口調で話し始めた。

「報告ならもう終わってますよ。今のわたくし達の会話は、主は全て千里鏡で見聞きしておられます。もちろんあなたの失態も一緒に

ね」

この言葉に女性召喚師は、この世の終わりのような絶望的な表情を浮かべた。

「大丈夫ですよ。今、主から通信が届きました。ある実験に協力してくれたら、許してくださるそうです」

「実験？」

「ええ、すぐ終わるものですから、安心してください。ですがその前にもう一つだけ、あなたに聞き直しておきたいことがあります」

左手の人差し指を立てて、念押しするように質問を投げてくる。

「あなたが話した魔道師の少女の話、あれは確かなのですね？　リインバウム式召喚魔法の魔法方程式を、金属容器を召喚する魔法に書き換えて無効化させてしまう。そのようなタイプの魔法を使う者は、我らのデータには一切ありません。あの次元結界を破壊したのも彼女ならば、これはなかなか興味深い発見になりますねえ」

「本当よ。貴様だって見ただろ！　あの化け物みたいに巨大なたらいを！」

人物は何かをなぞるように「ふむ・・・」と口ずさむ。

するとそのすぐ隣に、オーロラの光を放つ、小さな次元の壁が出現した。人物はそこにおもむろに手を突っ込み、四次元ポケットように手を引き抜いて何かを取り出してきた。

「なっ、何を！？」

それは金庫のような大きな金属の箱だった。大人一人が両手で抱えるほどの大きさのそれを、人物は片手で軽々と持ち上げていた。

彼はそれを女性召喚師の前に突き出し、ニコリと優しく微笑んだ。

「これを開けて御覧なさい」

手渡されたそれを、女性召喚師は特に深く考えずに蓋に手をつける。鍵はすでに開錠されているようで、蓋はあっさりと開いた。

「これは？」

内部は透明な液体で満たされていた。その中に何か動くものが見える。

そこまで認識できた辺りで、突然内部の液体が弾けた。そして箱の中から、女性召喚師の顔目掛けて何かが飛び出してきた。

「!？」

女性召喚師は声を上げることができなかった。それは彼女の口を塞ぐように、顔全体にびっしり張り付いたからだ。

それは八本脚の、蜘蛛のような生き物だった。全身白色で、胴体は平べったく、大きさは人間の顔面程もある。何故か顔に当たる部分がなく、尻部からは蛇のように長い尾が生えている。尾の付け根には人間の耳のような謎の器官が両側に二つ生えていた。

その生き物は腹を吸盤のように顔に貼り付けて、両足を後頭部まで回してガッチリ掴み、尾を捕縄のようにきつく巻きつき締め付ける。

「それはフェイスハガーと言います。とある寄生型宇宙生物の子供ですよ。同じ宇宙生物である、あなたたちワームに寄生したら、一体どうなるんでしょうかねえ」

女性召喚師はその生物「フェイスハガー」を取り外そうと懸命にも

がくが、全く外すことが出来ない。彼女は仰向けに倒れ、徐々に弱
つていき、やがて死んだように動かなくなった。

倒れた女性召喚師を、人物はニコニコと微笑みながら見下ろす。

「その二体目のディケイドと少女の居場所は大体判りました。先程
マシンディケイダーに乗った男女の目撃情報が多数寄せられまして
ね。あなたには彼らの牽制・観察のためにもう少し働いてもらいま
すよ」

速人とかよみは、適当に入った近くのラーメン店で食事を取って
いた。飯時の時間帯なのに、客は割りと少ない。注文を取った後、
メニューが来るまでの待ち時間の間に、こよみのバッグの中身をデ
ィブルに並べてみた。

「あるのはこんだけか・・・」

「何だか色々あるね」

「色々っていうか。財布意外はほぼ意味不明だな」

バッグにあったのは財布の他に、未契約の携帯電話が一つに、現
代カレールーという名前の業務用カレールーが四箱、そして妙な小型機
械だった。

カレールーも意味不明だが、この機械のようなものはもっと判ら
ない。

外見は大きめのタッチパネル式携帯電話のように見える。脇の部
分は紅紫色で、ディケイドの顔のバーコードに似た黒い板状のライ
ンが張られている。横長長方形のパネルには、九つのアイコンが三
×四の対比でびっしりと張られている。左側九つのアイコンは、デ

イケイドライバーに描かれている紋章と全く同じものだった。その右隣三つのアイコンは、上は英大文字のFのようなもの、真ん中はデイクイドの紋章、下は英文字のCだった。

「何だろこれ？ ゲームかな？」

「ゲーム機か。確かにそう見えなくも無いが……」

ほぼデイクイド関連のアイテムで間違いないだろう。それが何故カードから出てきたこよみのバックにあるのか、ますます意味不明である。

すこしいじってみようかと思ったが、詳しい詳細が判らない物に手をつけるのは危険と考え、他の物品とまとめてバックの中に戻した。

「こよみ、お前はデイクイドってのは、一体何なんだと思う？」

「え？」

速人は小型機械を見て、改めて思ったことを、こよみに問うてみる。唐突な質問にこよみは大いに戸惑った。

「あのワームとかいう奴ら、デイクイドのこと知ってたみたいだったが、結局逃げられてしまったからな。依然俺は正体不明の代物に頼ってるわけだ……。しかも世界の悪事を裁く！偉そうな口を叩いちまったし」

「そ、そんなのあたしにはわかんないよ……。お空の神様が速人さんに渡してくれたとか？」

「そんな明快な話だったら気は楽なんだけどな……。ていうかこれはお前にも大いに関係ある話なんだぞ。お前はこいつに収納されてたカードを装填したら、いきなり出てきたんだ」

「そんなこと言われても……。あたし、気がついたら何だかお

店の中にいて、それで速人さんがいて、いきなりお店が壊れてお化けが出てきて、もう本当に訳が判らないよ……」

涙目になってきたこよみに、速人は苛めてしまったように思えて後悔した。そうこう言っている間に、カウンターから注文が届く。テーブルに置かれた塩ラーメンに箸をつけながら、今度はこよみが問うてきた。

「そういえば速人さん、さっきはどうしたの？」

「さっき？」

「空を飛んでたとき、速人さん急に運転が変になったよね？ 今でも時々、顔が暗くなつた感じがするし……。もしかしてあたし、悪いこと聞いちゃった？」

「ああ、それが……」

速人は特に隠すようなことでもないと思い、こよみに妹のことを話した。

「そんな……。何でそんなことに？」

「さあな……。お前に家族のことを聞かれたときに、初めて気がついた。何が原因で、いつごろ記憶を失ったかも全く判らん」

こよみは箸を握ったまま、心配げに速人の顔を覗く。速人は少し気まずい雰囲気を感じて、僅かに顔をそらした。

「やっぱりあたしが変なことを聞いたせいで……」

「おいおい、さすがにそれは違っただろうが。お前が居なかったら、自分の記憶のおかしさにまず気付けなかっただろうから、逆に感謝

したいぐらいだ」

最も、それ以外での自身の人格の異変には、自力で気がついていった。だが余計な心配をかけるのも嫌なので、あえて黙っておいた。

「うう、でも何とか記憶を戻せないかな。やっぱりここは何かで頭をパン！て」

「それは危ないからよしておく。ていうか一番記憶が問題になっているのはお前のほうだろうが。どうやら俺は誰かの手の内で動いているようだからな、これもその一環なのかもしれん。どうすればいいのか判らんが、別に意識が変になったわけじゃないからあまり心配するな、この話はこれで終わりだ。いいな？」

「う、うん」

こよみはしばらく黙ったが、すぐにまた口を開いた。

「あたしじゃ妹さんにはなれないかな？」

「はあ？」

あまりに突然の意図不明の発言に、速人は真剣な表情を一気に崩してしまった。

「お前何言ってるの？ 新種のプロポーズか？」

「ぶ、ぷろ・・・、ちちち、違います！ そんなからかわないですよ！」

速人は、からかっているのはどっちだ、と問いたい気分だった。本気で告白してきたかと一瞬思ったぐらいなのだ。

「あたしじゃその妹さんの代わりになれないかもしれないけど、き

つと速人さんのこと元気付けられるよ。あたし一杯頑張るから！」
「いやいやいやいや、別に俺はあいつがいないと何も出来ない訳じゃないぞ。もう子供じゃないんだから。お前も変なこと考えてないで、自分のことを最優先に考える。今一番おかしい立場にいるのは、俺じゃなくてお前のほうなんだからな。判ったな！」

そうやって速人は話を切り、テーブルの上に置かれたチャーシューメンを黙々と食べ始める。

「うつうつうつ……」

お気に召さない返答だったようで、こよみは低く項垂れていた。

二人はそれ以降言葉を交わず、食事を続けた。

速人はさっきの会話で、改めてこよみとの出会いと関わり合いを思い返してみる。

こよみがこの世界に現れた時の様子は、速人が世界を渡ったときや、召喚師が召喚獣を呼び出したときなどは、あまりに違いすぎる。速人はあの“K A M E N R I D E”というカードに関して説明されていたことを思い出した。

（確かあれば、異世界の戦士の“記憶”と能力が写し取られているんだっただな。それでそのカードを使ったら、そいつの力を俺は“コピー”できた。となるとあの“K O Y O M I”のカードにも、まあ……戦士ではないにしろ誰かの存在に関する情報がインプットされていたわけだ。となると今ここにいるこよみは……）

その考えの中、速人はある推論に辿り着いた。だがそれを、今ここにいるこよみの前で口にするのは躊躇われた。それにその推論では、ディケイドアイテムらしきものが一緒に出てきたことに説明が

つかない。

（あいつ、まだあそこにいるかな？　今からでも迎えに行くべきか・・・）

最初の街で置き去りしてしまい、一度思い出したがまたすぐに忘れてしまったメッセンジャーの消息を、今初めて気にかけて始めた。

速人ときよみは食事を終えて外に出た。ラーメンの味は、客足の少なさに納得できるような、いまいちな味だった。

「速人さん。これからどこにいくの？」

「どこか泊まれる所を探そう。そして明日になったら、最初にいた街に戻ってみようと思う。一つ忘れ物があつてな。とりあえず暫く休息だ。また立て続けにトラブルが起これたらかなわんし・・・、あれは？」

残念なことにそのトラブルはすぐにやってきた。商店街のすぐその道路で、二人は意外な人物と再開した。

「あつ、あの人って！」

「お前は！・・・名前何だっけ？」

「何だっけ？」

二人は揃って首を曲げて、頭に？マークを浮かべる。

その人物はあの女性召喚師だった。彼女は道路の交差点のど真ん中で、ひどく息を荒げながら、血走った眼で二人を睨み付けながら、

立ち尽くしている。

「しょ、召喚師さん危ないよ！ そんなところにいたら車に轢かれちゃうよ！」

「こよみ、突っ込む部分はそこじゃないだろ……。お前、一体何のようだ！？ さっきの仕返しにでもきたか！？」

女性召喚師は何も答えない。突然息を止めたかと思うと、背を海老のように仰け反らし、多量の血を口から吹き出した。

「何だ！？ どうしたんだ！？」

敵に対して、思わず本気で心配の声を上げたが、その先に起こったことには全く口を動かさなかった。

幾度も激しい痙攣をしながら、女性召喚師の腹の肉が、突然内側から破れたのだ。

弾かれた血と肉片が道路に飛び散る。腹からはモグラが地面から顔を出したかのように、不気味な生物が顔を出し、赤子のように不気味に鳴いた。

「キシヤアアアアアッ！」

第十二話：ワームリアンと電王

怪物はギンギンとした声を鳴らし、速人に向かって威嚇する。
速人は一枚のカードをバツクルに装填した。

『カメンライド デンオウ！』

バツクルから、円形の輪に中心から九十度の角切りがされた紋章が、ラッパ音のような音響と共に浮かび上がる。

するとベルトから。水色のガラスの欠片のようなものが大量に出現し、ディケイドの鎧に纏わりついていく。鎧は、列車の線路のようないなラインが顔と胴体に刻まれた、簡単なデザインの白黒の鎧に変化した。そして空中に鎧の胴当てになる赤いパーツと、真ん中に筋が入った果物の桃のような形の赤い装甲板が、何処からともなく出現し、速人の周りで円を作りながら、車輪のように回転する。

胴当てはすぐに鎧の前後に装着され、桃型の装甲板は前頭部に張り付き、顔のラインを伝って動き、眼前に装着されて止まる。同時に装甲板は、桃太郎の桃のように中心からパツクリ割れて、顔の左右両側についた大きな目のようなデザインになった。

その姿は時の運行を守る戦士：仮面ライダー電王の姿であった。

変身を完了させると、速人は右手を握り、人差し指を立てて地面を指差した後、急に両手足を両側に広げた。

「俺、参上！」

何だか判らないのだが、速人は無性にこのポーズと台詞を取りたい気分になったのだ。クウガの時のガッツポーズと同じような感じである。

「行くぜえ！ この虫トカゲ野郎！」

これもカードの影響なのか、速人はえらく柄の悪い口調で叫ぶ。速人はディケイドウェポンを抜き、怪物目掛けて突進した。ディケイドウェポンは鎧と同じ色合いの、赤い剣身を持った剣に変身していた。電王の専用武器・デンガツシャーソードである。

怪物は尾を鞭のように振り上げ、先端の突起を速人に突き出してきた。

速人はその攻撃を剣で弾く。怪物はすぐに二度目の攻撃として、太い腕で速人に拳を飛ばす。だが巨体ゆえか、動きはディケイドに変身した速人よりも鈍く、あっさり身を屈めてかわされた。

「おりゃあ！」

速人は剣を大きく振るって、怪物の腹を斬り付けた。攻撃はそれでは終わらず、怒涛の斬撃を次々と繰り返した。

「おりゃ、おりゃ、おりゃ、うりゃあああっ！」

「ギシャッ！ ギャッ！ ギャッアアアッ！」

これに怪物は痛みで悲鳴を上げ続ける。だが見た目通り、怪物の身体はかなり頑丈で、なかなか倒れない。

やがて息切れが来たのか、怒涛の攻撃は一瞬緩む。怪物はその隙を逃さず、強烈な張り手を速人にお見舞いした。

「のわっ！」

速人の身体はロケットのように派手に吹き飛び、近くの家と塀を突き破って、屋内に転がり落ちる。

突然家に破壊して入りこんできた人物に、住人は目を丸くしている。

「おっと、わりいわりい」

彼らに軽く謝罪をしながら、速人はすぐ家から出て行った。

壊れた塀から飛び出そうとした所、あの怪物は家のすぐ近くに接近していて、上方から尾先を突き出してくる。

「おおっと！」

それをバックステップでかわす。速人がいた位置の庭の土は、尾先の直撃を受けて深く抉れていた。

速人は前方に大きく飛び上がり、塀を飛び越えて道路の真ん中に着地した。そして改めて怪物の姿を見て、やや動揺した。

（何だあいつ？）

最初の速人の攻撃がまだ効いているのか、怪物は自分の放った攻撃の反動でバランスを崩し、よろけている。家の中からは怪物の姿を見た家人の悲鳴が聞こえてきた。

その怪物の身体の各部から、黄緑色の血が流れ落ちていた。それだけならいいが、その血液が落ちた地面が、肉を焼いたような音と白煙を上げながら、見る見る溶解していくのだ。どうやらこの怪物の血は、強い酸性だったようだ。

（おいおい。やばすぎるだろ、ありや……）

速人は自らの武器に目を向ける。一応酸にも耐性はあったようで、刃に目立った腐食部分は無かった。だが一気に大量の返り血を浴びたりしたら、剣も鎧もどうなるのかは見当もつかない。

同時にこれで、ますます戦う場所に気をつけなければいけなくなつた。ここは街中、それだけでも危険であるが、そこで敵の血が多量に飛び散ったりしたら、場所によっては人や街に多大な被害を与える。もちろん敵の身体を粉々に砕くような技は禁物だ。

武器の腐食をさけるため、銃による戦法に切り替えようとも思つたが、そうなると思ひ散つた血が近くの住民に付着する恐れがある。

怪物はバランスを直して、速人の方に向き直る。

速人が怪物を睨みながら、対策を思案している間に、突如怪物の姿が掻き消えた。そして同時に速人の身体が、見えない何かに殴られたように急に吹き飛んだ。

（クロックアップか！）

怪物はワームと同じ、あの高速移動で攻撃してきたのだ。上手く体制を整えて着地した速人は、怪物の二度目の攻撃をギリギリでかわす。

その後も、怪物は攻撃の手を緩めない。以前会つたワーム達と違って、今度の相手は一体。当然その時と違って、回避は幾分か簡単だった。速人は突進してくる怪物を、すれ違いざまに斬り裂いてやろうと剣を構える。

怪物は一旦距離を置いてから、再び速人に向かってくる。これをチャンスに速人は足を踏み込んだ。

だが怪物は攻撃を繰り出す直前、すなわち速人のいる目の前で、急にクロックアップを解き、急停止した。

（なっ！？）

虚をつかれた隙に、怪物は攻撃を繰り出した。長い尾の前部をピンと張り、槍のように力強く一直線に、速人の胸を尾先で刺突する。その強力な刺突は、電王の装甲を貫くには至らなかったが、強い衝撃が内部の速人の身体に重く響く。速人は長めの道路を数十メートル飛んで転がっていった。

（くそ！　ならこれでどうだ！）

転がっている間に速人は、一枚のカードを引き抜いていた。起き上がると同時に、素早くそれを装填する。

『フォームライド　デンオウ　ロッド！』

電王の鎧が、さっきと同じ形で変化していく。

変化したその姿は全体的に青く、側頭部には刀のような長い角が生えている。目は大きくオレンジ色で、形は亀の甲羅のような丸めの六角形だった。ディケイドウェポンは、刃の部分が柄よりも細い、棒状の槍に変化していた。

「お前、僕に釣られ・・・げふっ！」

怪物はクロックアップで瞬時に接近し、決め台詞を口に出している最中の速人を叩き飛ばした。

この騒ぎで、近所の家々から不審を感じた住人たちが、外に出てきた。

「一体何なんだよ？　暴走族か？　て、なな、何だあ！　ありゃあ

！？」

「恐竜だ！ 街中に恐竜が出たぞ！」

彼らは皆、怪物の姿を見て仰天し、逃げ惑う。付近一帯はかなりの騒ぎになり始めていた。

怪物はそんな現状など一切気にせず、再びクロックアップして速人を殴り飛ばす。速人は攻撃が当たる瞬間に、後ろに飛び跳ねてそれを受け流した。

（うりゃあつ！）

飛び跳ねたと同時に、槍を大きく振るった。その間に怪物はいないのだが、なんと槍の先端から釣竿のような糸が発射されて、怪物の身体を巻きつけ、見事捕縛した。

「ギシャツ！？ シャアアアアアッ！」

糸は強く巻きつき、怪物はカウボーイの投げ縄に捕らわれた獣のように、縛り付けられて動きを止める。

「どうだいトカゲ君？ この状態でクロックアップしたらどうなるのかな？」

少しそれを試しなくなったが、巻きついた糸の一部が怪物の血に付着して、白い煙を立て始めているのに気がついた。速人はすぐに次の手を打った。

「そうれ！」

速人は槍を振り上げ、怪物の身体を宙に持ち上げた。速人より遙

かに体重があるはずの怪物は、電王の超人的なパワーによって、軽々と空中へと持ち上げられる。

「飛ばすよ!」

速人は怪物をヨーヨーのようにブンブン振り回し、思い切り投げ飛ばした。怪物は野球ボールのように遙か彼方へと飛んでいく。

振り回した時に、怪物の血が家屋に撒き散らされた可能性があったが、もう皆逃げただろうから大丈夫だろうと気にしないことにした。

速人は超人的な脚力で飛び上がり、家々の屋根を次々飛び移りながら、飛び去っていく怪物を追う。

（いたいた。何か面白いことになってるね。そろそろ釣り上げ時かな?）

怪物の墜落した地点は、土手の下の川原の河川敷だった。その地面に頭から突っ込んで埋まり、間抜けにも逆さまの体制になっている。

「ブギヤアア!」

怪物が上半身を地中から引き抜いた。土埃が舞い、土まみれになった怪物の顔に、どこか怒りの感情を感じ取れるように見えた。その時、どこからともなく電子音声が鳴った。

『ファイナルアタックライド デデデデンオウ!』

怪物が音の先に振り向いた途端、速人の持っていた槍が矢のよう

に飛んできて、怪物の胸に突き刺さった。

「ギヤア!？」

突き刺さったと同時に、槍から亀の甲羅のような外観の光る網が、怪物の身体を絡め取った。怪物はそれに完全に動きを封じられる。

怪物の視界には、光る右足の先をこちらに向けながら、空中に飛び上がった速人の姿が映った。

「デンライダーキック!」

速人は怪物目掛けて急降下し、強烈な飛び降り蹴りを、怪物に突き刺さったまま固定された槍の柄の先に与えた。

命中と同時に、槍は更に深く突き刺さる。

「グギヤアアアアアアッ!」

醜い声質の断末魔の叫びが街中に木霊する。すると怪物の身体は、光の網と共に爆散した。

無数の破片や血が飛び散り、河川敷一帯の地面や草木、石壁などが、熱した氷のようにドロドロと溶けていく。幸い土手の上の民家には、一切被害が無かった。

この攻撃で起きた音で、その辺りの住人達の騒ぎ声の家々から聞こえてきた。

「これで一丁上がりだね。それでは退散としましょうか」

速人は面倒事を避けるため、即座にその場から逃げ去った。

こよみを探しに、速人は元いた場所へと走っていく。途中あの怪物と戦闘をした道路を通りかかった。その時速人は、その場所でおかしな点に気がついた。

（何でこんなに静かなんだ？）

暗い夜道に人通りはほとんど無く、街灯と家々の光が、暗闇を静かに照らしていた。

夜間なのだから当たり前といえばそうなるが、速人はほんの数秒前まで、ここであの怪物と激闘をしていたのだ。

多くの家や道路が破損し、それに気がついた人々によって、かなりの騒ぎが起こっていた。今なら警察沙汰になってもおかしくないはずだ。

「何でだ？」

だが今はその痕跡がまるでない。もちろん壊れた塀や、溶解した地面はそのまま残っている。だがそれを気にかける者は一人もおらず、家々からはテレビの音声や、夕食時の会話をする家族の声が楽しげに聞こえてくる。

電王ロッドフォームの超聴覚機能“ストレイダー”でそれらの会話を細かく拾ってみる。だがその内容はどれもドラマの感想や、子供の学校での話題など他愛も無いものばかりで、さっきの怪物騒動に関する話は全く無い。

（どうなってるんだい、これは？）

とても気になる事柄ではあったが、今はこよみの安否を確かめる

のが先と考え、やむなくその場を通り過ぎていった。

「あつ！ 速人さん……ですか？」

こよみは商店街の看板の陰に隠れていた。別れる前とは違う姿で現れた速人に、疑問系で出迎える。速人はすぐ変身を解いた。

「こよみ、今日は旅館に泊まるのはやめだ。さっきの公園に戻ろう」「え？ どうして？ お金が足りなかったの？」

「そうじゃない。さっきの怪物を見たら。俺達の居場所は敵に完全に知られてるみたいだ。また襲われた場合、なるべく巻き添えになる奴が少ないところに留まっていよう。それと……」

速人は次の言葉を出す前に、一息ついた。

「？」

「さっきお前が猫地蔵から聞いた話が、今更になって気になってきた。明日、向こうの街に戻る前に、今のこの街の現状を少し調べようと思う」

「は、はあ……」

こよみは速人の意図が読めず、呆けた口調で頷いた。

この日、速人とこよみは公園のベンチで寝泊りすることになった。

途中の雑貨店で購入した布団を、ベンチの上に二人でくるまる。資金をなるべく節約しようと一枚しか買わなかったのだが、ラブラブカップルのようなその体制に、こよみはいつのまにかその気になっているように見える。

「えへへ、速人さんの身体あつたかいよ」

「そうか・・・」

速人も全く意識しなかったわけではないが、あまり興奮する気にはなれなかった。

「とりあえずお前は早く眠れ。俺もその後で寝る」

「はい。おやすみ」

返事をして速攻でこよみは眠った。驚くほど寝つきがいい。

速人は周囲の気配を細かく探り、敵がいなかを見定めた。デイケイドに変身してからは、生身での身体能力・感覚能力も、飛躍的に上昇しているのが己でも判った。

（俺はどうすればいいんだろうな・・・）

デイケイドになつてから、肉体的にも精神的にもどんどん変わっていく自分に、速人は深い恐怖を感じていた。もちろんその変化は、人間としてならかなり良い方向に向かっているといえる。ワームに向かつて怒号を吐いた時には、これはこれでいいとも考えていた。だが妹の記憶を失った辺りから、それに言い知れぬ強い不安が湧き上がってきた。

すぐ隣で眠っている異性に、あまり性的な感情が湧かないのも、この謎の精神改造が原因かもしれない。布団を一枚しか買わなかつ

たのは、これを試してみようという考えもあった。

（俺、このまま行くとどうなっちまうんだろうな……。こよみにはあんな約束しちまったが……。本当に元の世界に帰れるのかも、ますます不安になってきたよ……。ちくしょう、これも全てディケイドのせいだ！）

速人の思考は、そんな八つ当たり気味な部分に少し向いていた。

現在周りには誰もいなかった。いるのはやけにたくさん公園に居座っている、野良猫達だけだった。

「むにゅむにゅ、うゝん、速人さん、そんなの駄目！ 恥ずかしいよ」

なにやらこよみが乙女な夢を見ているような気がしたが、あえて突っ込まないことにした。

第十二話：ワームリアンと電王（後書き）

パソコン不調のため、しばらく更新できないかもしれません。

第十三話：平和な街とサタン虫

早朝、人の近づく気配に速人は目を覚ます。こよみと違って、速人は深い眠りについていない。いつでも敵の襲撃に気づけるよう、浅眠りで夜を明かしたのだ。これもディケイドの力の影響か、速人はこんな暗殺者のような特技をいつのまにか身につけていた。

「あつ、おはようございます」

公園に入ってきたのは、一人の制服を着た少年だった。ボサボサな髪型で、体格からして高校生と思われる。

彼はホームレスさながらにベンチの上で寝ている男女に、全く不審を抱いた様子はなく、爽やかな笑顔で挨拶した。

彼は手に何かが詰まった袋を掴んでおり、公園にいた猫たちに優しく声をかける。

「猫たち、ご飯の時間だぞ」

その声に公園の猫たちが目覚め、次々と少年の元に集まってくる。少年は相変わらず爽やかな笑顔で、袋の中にある餌を猫たちに与えていた。

「ほらほら、お前もしっかり食べないと、きちんと大きくなれないぞ。それとお前、もう少し食べる量は少なめにしないと、太りすぎて病気になるっちゃうぞ」

その様子に速人の視線は、やけに冷ややかだった。

（失礼だろうが、何かきもい光景だな。餌をやるのが美少女なら絵

になっただろうが・・・）

少年の背後に、一匹だけ餌を食べない猫がいた。首には赤いスカーフを巻いており、腹から首の部分が白い、実に特徴的な外見の太った黒猫である。

その猫はどことなく、速人と同様、少年に冷ややかな視線を送っているように見える。

速人とこよみは公園を出て、コンビニで新聞とジュースを購入し、近くのファミリーストランで食事を取った後、猫地蔵のある寺に向かって足を進めていた。

ここに来るまでの街の様子を見て、自身の知識内にある一般的な街の光景とは、大きな違いあることに二人は気がついた。昨日はバイクが元で妙な注目を浴びたせいで気がつかなかったことだ。

「素敵な街だね」

「不気味な街だな」

速人とこよみは全く正反対の感想を口にした。

「ええ、すごく綺麗だよ？ 皆笑顔で楽しそうだし」

「楽しそうにも程があるだろ……。スキップして登校する奴なんて、俺は初めて見たぞ」

この時間帯は登校中の学生の姿が多い。彼らも含めた街の住人全

てが、爽やか笑顔を見せていた。機嫌を悪くしている者や、無表情でいる者など一人もない。彼らは全員、一人でいるときも、友達と会話しているときもニコニコと全く笑顔を絶やさない。先程のファミレスの客たちも同じ感じだった。

自転車に乗った一人の女性郵便配達員が、何故かだんご三兄弟を歌いながら街中を走っている。道行く人々がその歌を聞いて、感激して涙を流していた。あの歌のどこに泣ける要素があるのだろうか？皆、覚醒剤の幻覚でも見てるんじゃないかと疑いたくなるくらいの明るさであった。

「ちょっと待って。少し聞きたいことがあるんだが」

速人は通りすがった二人の学生に声をかけた。振り返ったその人物は、金髪ツインテールの双子の女学生だった。彼女達は双方同じ顔で、背景にひまわりが咲きそうな可愛らしい笑顔を向ける。

「はい、何でしょう？」

「昨日この近くで、変な騒ぎが起こったとかいう話が流れてないか？ 怪物が出てきたとか、妙な鎧を着た変質者が暴れているとか、腹を裂かれた死体が発見されたとか」

双子の少女はようやく笑顔を解き、困った顔でお互いの顔を見合わせる。

「琴音ちゃん、何か聞いてる？」

「いえ何も……。すいません、そのような話は何も聞いてません」

「そうか、悪かったな。じゃあな」

双子は再び笑顔を見せ、可愛らしい仕草で手を振りながら速人達と別れた。

速人は疑念を更に強めた。

「どうなつてんだ？ あれだけの騒ぎだったのに……」

「そうだね。あんなおおきい音がしたのに。皆眠くてすぐ寝ちゃったのかな？」

疑問はもう一つあった。さっきのファミレスで、速人は購入した新聞を早速見ていた。普段新聞などは、テレビ番組表しか見ない速人だったが、今回は隅から隅まで細かく読んで見せた。

この世界で最初に速人が入った街、あの魔化魍に襲われて次元結界に閉じ込められていたあの街の情報が、その新聞には一切記載されていなかった。紙面にあるのは最近のスポーツや政治・芸能に関する話題ばかりだった。そしてそれらのどの文面にも“世界平和”“差別撤廃”という単語が、あちらこちらで強引にしつこいくらいに大量に記入されている。

自衛隊が出動するほどの怪物騒ぎの後に、不思議な力で誰も近づくことができなくなった街が、突然解放されたのだ。しかも湖の上に、失踪した人間が空から大量に降ってきたのだ。これは全国を騒がす大事件のはずである。

それが不可思議にも全く報道されていない。どこかの誰かが圧力をかけたとを考えても、とても隠蔽できるレベルではないはずだ。

（どうなつてんだよ？ この街だけでなく、国全体がおかしくなってるんじゃないよな？）

街を調べてみても、謎は解けるどころか、ますます大きくなっていった。

やがて速人とこよみは、昨日の猫地蔵の置かれている寺の前に到着した。だがそこには先客がいた。

「何やってんだ、あいつ？」

「お坊さん……だよね？」

猫地蔵のお堂の前にいたのは、僧衣を着た寺の僧侶と思われる坊主頭の中年男性だった。彼は猫地蔵に手を合わせながら、涙を流しながら何かを唱えている。

「どうしたんですか？」

それにこよみが、不用意に近づいて声をかける。男性はこちらを見ずに、震えた声で淡々と答えた。

「私は数日前まで、神に仕える身でありながら、毎日のように汚らしい風俗に入り浸っておったのです！ それを悔い改めるため、毎朝神様の一人一人にこうしてお詫びの祈りを捧げておるのですよ。ああ、神よ！ 我をお許してください！ アーメン！」

「いや……悔い改めるのはいいけどさ。お前仏僧だろ？ 何が“アーメン”だよ……」

男性はそれ以上何も答えなかった。猫地蔵の前から、何か間違ったポーズで祈りを捧げている。速人はどうしたものかと困り、頭をかく。

「やっぱり待つてなきや駄目だよな？」

「確かに。時間がかかるようなら、どこかその辺で時間を潰して・・・うん？」

不意に男性の祈りの声が止まった。パントマイムのように止まる直後の体制のまま、全く動かない。

「お坊さん・・・？ どうしたん・・・、うわ！」

こよみが心配して話しかけたら、唐突に立ち上がった。その顔は人形のように表情がなく、こよみの脇を通って石段の上の堂内に入っていた。

「どうしたんだろ？ お祈り終わったのかな？」

「さあな、明らかに不自然な様子だったが・・・。こよみ、とりあえず猫地蔵・・・様に何か話してみてくれ」

言われてこよみは、さつきまで男性が座っていた猫地蔵の前に座り込む。

「はい。ええと、猫地蔵様。昨日のお話なのですが・・・え？ 何？」

「どうかしたのか？」

「うんとね・・・。今すぐここから逃げろって。なんか悪魔が近くにいたりとかなんとか・・・。」

「あいつらのことか？」

速人は地蔵の向こう側、真っ直ぐな道路の先を見つめた。猫地蔵から数十メートル程先に、二人の不審な人物がこちらを見ていた。

一人は黒いスーツ姿で、四十〜五十代ぐらいの眼鏡をかけた男性だった。彼は速人たちを見ながら薄い笑みを迎えている。その笑みはどこか怪しさを感じさせ、先程の街人達とは違い、本当の意味で不気味な笑顔だった。

もう一人は、年齢は三十歳前後で、革ジャンを着たスキンヘッドのヤンキー風の男性だった。左頬には、羽の生えた蛇のような生き物が、己の尾先を噛んで丸く円になったような、黒い紋章の刺青が彫られている。一般的にこういったマークは“ウロボロス”と呼ばれ、様々な地方の古代において、何らかの象徴として描かれているものであるが、速人たちにその辺の知識は無かった。また額には、多重の四角形のマークに、いくつもの電線のような線が伸びている妙な紋章がついていた。

「なんだろあの人たち？」

「状況と見た目の第一印象からいって敵だろうな。お前はここで待ってる」

速人は自らその怪しい二人に近づいていった。そしてお互いすぐ近くに向かい合う。スキンヘッドの男は何やら死人のような冷たい眼差しで、眼鏡の男性相変わらず薄い笑みを浮かべている。

最初に口を開いたのは眼鏡の男性だった。

「どうでしたか？ この街をご覧になって。素晴らしいでしょう、皆何の悩みも憎しみもなく、実に幸せに生きている。大昔から人々が夢見ていた理想郷そのものだと思いますか？」

速人はそのナルシスト気味な言葉を無視し、二人に問いただした。

「お前たちは俺達の敵か？」

「ええ、そうですね」

眼鏡の男性が怪しくも紳士的な口調で、滑らかに敵と宣言してみた。

「ならば質問したいことがたくさんある。戦ってみて途中で逃げられたりしたら叶わんからな。まず最初に、ワーム達が言っていた“主”とはお前たちのことか？」

「いいえ。わたくしは永沢豊ながさわゆたかと申します。我が主の名は本条健史ほんじょうたけしといましてね、わたくしはとある世界で、本条様に拾われ仕えることになったオルフェノクであります」

敵の首魁の名が、実にあっさりと軽い口調で明かされてしまった。明らかに日本人の名前であるが、やはり日本という国は別世界にも普通にあるものなのだろうか？

とりあえず速人は、最後に出た聞き慣れない単語を、二度目の質問にした。

「オルフェノク？ それは何だ？」

「死から立ち返った人間の変異種ですよ。最もあなたたち人間から見れば、ただの化け物でしょうけどねえ。それで次の質問は？」

眼鏡の男性「永沢豊は、あたかもツアーガイドのように速人の質問に気軽な口調で答えていく。その上、次の質問を聞き返したりもしてきた。随分な余裕である。

「お前たち、この街に何かしただろ？」

「ええ、しましたよ」

またしても即答だった。

「何をした？」

永沢は人差し指を速人に突きつけた。速人は最初その行動の意味が判らなかった。だがすぐに、その指先に何かがいることに気がつく。

（蜘蛛か？）

それは白くてとても小さい蜘蛛のような怪虫だった。デイケイドの影響で強化された速人の視覚が、その姿を顕微鏡で覗いたかのようにはっきりと視認する。

「これはサタン虫と言いましてねえ。動物の耳から体内に侵入し、その動物の意識を操る力を持った小型のモンスターであります。もちろん人間の中に入れますよ。こう、カサカサッ！とね」

「そいつらがこの街の人間を侵し尽くしたってことか？」

「ええ、この街だけではありません。何千万匹もの数のサタン虫が、この日本という国、全土に広がっていますよ。あなたが救ったあの街も、今頃このサタン虫に占領されてしまっているでしょうねえ」

速人は猫地蔵が言っていた“このよはまにおかされた”の意味を理解した。伸恵達があの手で、結界に閉じ込められている間に、外の世界は異世界の侵略者の手に落ちてしまっていたのだ。

速人はこの事実、大して驚かず冷静にいられる自分に、また一寸の恐怖を感じた。そして敵の想像以上の手際の良さに頭が痛くなってきた。

（事態は俺が想像以上に悪くなっていたんだな……。伸恵達、大丈夫か？）

速人は疲れたように大きく吐息をした。

第十三話：平和な街とサタン虫（後書き）

パソコンの不調は続いています。いつ更新が停まってしまうか判りませんが、ご容赦ください。

第十四話：平和の理論とオルフェノク

「そいつを全部駆除するにはどうしたらいい？」

「サタン虫達の司令塔であるブラックサタン大首領を倒すことです。そうすればサタン虫は勝手に死に絶えて、人々は正気に戻りますよ。実に簡単でしょう」

「そいつはどこにいる？」

「さあ、少なくともここにはいませんねえ。恐らく主のお側にいると思いますが。しかしですね、速人さん。彼らをサタン虫から開放することが、本当に正しいことだと思いますか？」

永沢の不気味な笑みがさらに際立った。

「どういう意味だ？」

「さっきも話したでしょう。今のこの街は理想郷だと。わたくしは元の世界で実に酷い目に会いましたね。別に何も悪いことをしていないのに、オルフェノクになった途端、皆がわたくしを蔑み敵視してきました。オルフェノクは悪魔に身も心も売り渡した人類の敵だそうで。ひどい解釈ですよ。わたくしも好きでオルフェノクになつたわけではないのにね……」

永沢の顔から一瞬笑顔が消え、悲壮感漂う表情を見せる。だがそれはすぐに掻き消え、元の笑顔に戻った。その様子は自分のつらい過去を、今は良い経験だったと言っているようだった。

「それは災難だったな」

「ええ。ですがわたくしのような境遇の者は、他にも幾らでもいたのですよ。主に付き添って多くの異世界を見てきましたが、どの世界にも差別による虐待が、様々な理由・形で行われていました。種

族・民族の違いはもちろんのこと、血筋や国力など政治的な理由もあります。魔法の発達した世界では、生まれながらの魔力の強さだけで、人間の価値が見定められていました。実に嘆かわしい。人間も含め全ての知的生物は、身分や強さに関係なく平等に幸せになる義務があるというのに……」

「それでこの国をサタン虫で侵したのか？」

速人の言葉に永沢の不気味な微笑みが、更に増したような気がした。

「全ての世界から差別をなくすための第一歩というところですよ。さすがのブラックサタン大首領も、一億人もの人間を一度に操ることはできません。ですが人々の感情を偏らせることなら、人数無制限で行うことができます」

「感情を偏らせる、とはあのいきすぎるぐらいの笑顔のことか？」

「そうですね。サタン虫に送った命令は慈愛の増強。人々の心から怒りや憎しみといったマイナスの感情が急低下し、愛や勇気といったプラスの感情が増強されるのです。今のこの国では、身分・階級・性別など、つまらない理由で虐げられる人間は一人もいない。深刻化していた子供のいじめ問題も全て解決しました。これぞ真の理想郷ですよ！」

速人はすでに呆れを通り越して、哀れみの目で永沢を見ていた。

「お前の愚痴と理想論は十分判った。お前はとち狂った夢想家だよ。この前の召喚師といい、異世界を渡った奴は、皆そういう極論に達しちまうものなのか？」

「はつきりと否定してくれますね」

「当たり前だ。確かに差別の撤廃は、人類全体の大切な目標指針だ。それが難しいのは判る。だがこんなコンピュータの不具合みたいに、

頭の中を弄って実現しようなんて、発想がぶっ飛んでるにも程があるだろうが。お前が異世界でどんなものを見てきたのかは知らんが、どの世界でも人は機械じゃないんだぞ。人間が人間自身の精神性を変えなきゃ、平和になっても何の意味もありはしない」

速人の答えに、永沢は大きく息を吐いて首を振る。

「綺麗ごとですね。あなたの言ってることのほうが夢想じゃないのですか？」
「そうだろうな」

速人は嘲るようにして、あっさりと肯定した。

「俺は人に説教できるほど、人間というものを知り尽くしているわけじゃない。まだ生まれて十九年しか経ってないしな。だがお前の独善よりは、ずっとまともで有用性があるぜ。……。さて、もうこんな無駄にスケールのでかい話はやめようぜ。お前は俺をどうしたいんだ？」

「サタン虫がこよみさんにも効いていれば、あなたも少しは考えてくれましたかね？」

永沢は速人の質問を無視するように、そうぼやく。だがその聞き捨てなら無い内容に、速人は過敏に反応した。

「どういう意味だ？」

「いえいえ、実は昨日あなたが眠っている間に、あなたのパートナーにサタン虫を入れさせてもらったんですよ。こっそりとね。さすがにあなたでも、子蜘蛛のように小さい生き物の気配には気づけなかったみたいですねえ。ですがサタン虫の洗脳能力は、こよみさんには全く効きませんでした。どうやら彼女の中に宿っていた、

ディケイドのパワーが外部からの進入を阻んだようです。神のご加護ならぬ、ディケイドのご加護ですねえ」

永沢は相変わらず軽い笑みを向けながら、淡々と答える。

「貴様！」

速人の中で、何かが爆発した。この男は既にこよみに手をかけていたのだ。そしてそれを自分は全く気づくことが出来なかった。

自身へのやるせなさや怒りは、活火山のマグマのように腹の底から見る見る湧き上がっていく。そしてそれは目の前の男達に対する獣のような猛烈な殺意に変わっていった。件の不思議な精神改造がなければ、完全に平静さを失って暴れ狂っていたかもしれない。

昨日会ったばかりの人間のことで、何故これほどまでの激情を持てるのかは、速人自身にも判らなかった。だが長年の家族以上の深い感情を、こよみに対して本能的に抱いているような気がした。

そんな速人の様子に、永沢は全く顔色を変えない。むしろせせら笑っているように見える。

「さて先程の質問の答えと行きましょう。あなたの持つてるディケイドライバーを、こちらに渡してもらいます。そして我々と同行していただきたい」

「却下だ」

「そうでしょうねえ」

速人は即座にベルトを装着し、カードを抜き取る。

「お前は殺す。後で命乞いしても無駄だ。俺がこの世から一欠けらも残さず消滅させてやる」

口調は静かだが、その言葉一つ一つに宿る怒号は誰の耳にも聞き取れた。

突如永沢の顔全体から、道化の仮装のように、動物の顔のような薄灰色の模様が浮かび上がる。

「仕方ありませんねえ。まああなたは死んでしまっても別に構わないと主は言っていますし、手加減抜きで相手させていただきますしよ。言っておきますが、わたくしは主からの生体改造のおかげで、上級オルフェノク以上の力を持っておりますよ。それとも一つ、民間の被害は心配しなくても結構ですよ。先程のご住職のように、近くにいた人間は全て払っておきましたから」

永沢の全身が鈍く光り、急速にその形が拡大・変形する。永沢は一瞬の内に人間とは異なる生き物、オルフェノクに変身した。

その姿は元の姿よりも遥かに大柄で、身長二メートルを超えるボデビルダーのような屈強な体格である。全身灰色一色で、鎧のような装甲で身を固めている。顔は人と象を組み合わせた造形で、口元まで伸びるぐらいの長さの鼻と、蝙蝠のような短い牙が生えている。

側頭部には象の顔のような大きな突出部がオブジェのように生えていた。その象の顔の鼻は、正面の顔よりも遥かに太くて長く、首を回るようにして固定された大きな角になっていた。それは正面から見ると、口元から生えた象の牙のように見える。

『はあっ！』

永沢は即座に動き、カードを装填した直後の変身前の速人に、その太い腕で強烈なパンチを繰り出した。

速人は強化された身体能力で、そのパンチを舞踊のようにひらりと交わし、バツクルのサイドハンドルを閉じる。

『カメンライド デイケイド!』

急に現れた九つの残像が、すぐ目の前までに接近していた永沢を弾き飛ばした。それらはすぐに速人の元に集まり、変身を完了させた。

「そんな鈍い攻撃が俺に当たるか!」

永沢はすぐに体制を立て直し、二度目のパンチを繰り出す。速人はそれを避けようともせず、永沢の拳目掛けて真っ直ぐに拳を飛ばした。

空中で二人の拳が正面衝突し、砲声のような音が鳴り響く。

勝ったのは速人のほうだった。速人の細い手首から放たれたパンチは、永沢の極太の腕を押し返し、永沢の巨体全身を跳ね飛ばした。永沢は小石の水面跳びのように、道路を何度もバウンドし、転がっていく。

(この力は・・・?)

速人は自身の拳を不思議に思いながら見つめた。そして気がついた。

デイケイドに変身したときのパワーが、以前よりもずっと上がっていることに。何度も戦いを繰り返した速人の肉体は、デイケイドのエネルギーに完全に適応し、その本来の力を百パーセント引き出せるようになっていたのだ。

『その細腕でそのパワー。さすがはデイケイド、恐ろしい力ですね』

永沢は右手の拳を痛めながらも何とか起き上がった。そして何かを両手で抱えるような奇妙なポーズを取る。途端、手元の何も無い空間から、灰色の巨大な筒「大砲」が瞬時に姿を現した。永沢は砲口を速人に向ける。

速人はそれを避けようとしなかった。避けた先には、猫地蔵の前に立っているこよみがいる。

速人は右手の拳に意識を集中し、何らかの力を溜め始めた。すると拳と手首全体が淡く発光し始めた。

『吹き飛びなさい！』

轟音と共に永沢の大砲が発砲される。その反動で永沢の身体が、引き摺られるように一メートル程後退した。その距離の分だけ、永沢の踵が地面を抉る。

砲口から放たれた巨大な光弾が、とてつもない速さで真っ直ぐに速人のほうに飛んでくる。速人は光弾目掛けて、カード装填無しの必殺パンチを思いっきり繰り出した。

着弾と同時に速人のいる場所が大爆発を起こした。その爆風で近くのガードレールが吹き飛び、寺の木々が暴風にあっただかのように揺れていく。

「あわわわわっ！」

こよみは爆風で倒れそうになっている猫地蔵を必死で支えていた。石段の上で昼寝をしていた三毛猫と黒猫が、驚いて逃げ出した。

爆風はすぐに収まり、速人のいた場所には、煙突のようにもうもうと煙が立ち込めていた。やがてその煙も薄れていく。

そこには速人が拳を永沢の方に突き出した体制で、無傷で立っていた。

永沢の足元から伸びている影が、見る見る変異する。影は人間の永沢が全裸の姿で、青白く写っていた。

『やはり強いですねえ。この大砲は、戦車砲弾APFSDSの四倍の破壊力があるというのに……。わたくしなんかでは実力では到底敵いそうにありませんねえ』

そう言う永沢の口調や表情は、何故か余裕綽々で楽しげである。そのまま大砲を放り捨てた。

「そうかい。だがさっき言った通り、お前を生かす気はない。降参は無意味だぞ」

『こよみさんのことで相当腹を立ててしまったようですね。いやはや、愛の力とは怖いものです』

その言葉が速人の怒りに油を注ぐ。永沢に向かって猛牛のように突進する。そして直撃の瞬間に腰を回し、拳で渾身の一撃を放った。助走の勢いがついたその強力な攻撃を、永沢は避けようとも受け止めようともしなかった。速人の拳は寸分の狂いもなく、永沢の胸の中央・心臓部分に炸裂した。だが……。

（何だ！？）

速人はすぐに異変に気がついた。敵を殴りつけた時の、拳の感触があまりにおかしい。

見ると速人の拳は、永沢の胸の中に埋まっていた。永沢の灰色の装甲を突き破ったのとは明らかに違う。何と永沢の身体の殴りつけた部分、胸の中央が緑色に変色し、スライムのような粘液状の物質

に変化していたのだ。

速人の拳と手首は、泥沼に手を突っ込んだかのように、その粘液に深く呑み込まれていた。

（どうなっただ、一体！？）

速人は慌てて手首を引き抜こうとする。だがどんなに力を入れても抜くことができなかった。粘液は速人の手首を飲み込んだ瞬間に、粘土のように一気に固形化し、速人の腕を完全に捕縛していたのだ。

『一つだけ言い忘れていましたが、わたくしが主から頂いた力は、生体改造によるパワーアップだけではないんですよ』

うつたえる速人の顔に、永沢の拳が飛んだ。重く硬い拳が、速人の顔面に暴走車のように激しく打ちつけられる。

その衝撃で、永沢の体内に埋まっていた速人の手首が、草の根のようにズボリと抜けた。

今度は速人の身体が、小石の水面跳びのように撥ね跳んでいく。だが永沢と違い、途中で体操選手のように華麗にバク転し、体制を整えて立ち上がった。

永沢を見ると、先程緑色に液化していた部分は、元の灰色の装甲に戻っていた。だがすぐに別の部分に変化が現れた。永沢の右腕の前腕が液化したのだ。

液化した前腕はまるでアメーバのように伸縮・変形を行う。やがて前腕は、太く鋭い大きな緑色の棘の形に固形化した。

怒りで暴走しかけた上に、予想外の事態に大いに動揺した速人も、少しずつ冷静さを取り戻してきた。

「それもオルフェノクのか能力なのか？」

それはないだろうと思いつつも、速人は訝しげに質問する。

『いいえ。“悪魔の実”の力ですよ』

永沢は、速人の動揺を楽しんでいるようにして答えた。

第十四話：平和の理論とオルフェノク（後書き）

この作品のディケイドは、かなり基礎能力が高いです。冬の劇場版の、ディケイド激情態と同じぐらいのスペックがあると思ってください。だから普通に戦えば、上級オルフェノクも瞬殺できます。

第十五話：悪魔の実とガイアメモリ

永沢は答えた直後に、外見通り象のように勢いよく突進した。そして激突間近に腕の棘を、槍のように速人に突き出してきた。

速人はそれを難なくかわす。だが当然永沢の攻撃はそれでは止まらず、棘をフェンシングのように次々と繰り出してきた。

（くそ！）

速人は心の中で舌打ちする。

元々基礎身体能力は、速人が変身したディケイドの方が遥かに上で、永沢が変身したオルフェノクは重量級のパワーファイターである。その俊敏性の差は歴然で、永沢の攻撃は棒で蠅を追っているように、速人には全く命中しなかった。

だがたった今見せた永沢の奇怪な力のせいで、速人は一つ一つ隙を見つけながらも、警戒して反撃を出す気には全くなれなかった。

永沢がその高身長から、下向きに棘の刺突を撃ちだしてきた。速人はそれを一步後退して回避する。棘は速人の足元数センチ先の地面に深くくい込んだ。

その隙に速人は前向きに跳び上がる。そして永沢の後頭部を踏み台にして二段ジャンプをした。それに永沢はバランスを崩し、前に倒れ掛かる。

速人はジャンプ中にカードを引き抜き、永沢の背後二十メートル先に着地したと同時にカードを装填した。

『ファイナルアタックライド デイデイディケイド！』

速人と永沢の間に、九つの光の壁が現れる。

「ちまちました攻撃が駄目なら、一撃で粉碎してやる！」

そしてあの巨大蟻の時と同じようにして高く跳躍し、光の壁を潜り抜けながら永沢に飛び降り蹴りを与えた。

蹴りは、背後の速人に振り返ったばかりの永沢に、正面から命中した。蹴りを受けた永沢の上半身が、粉々に碎け散る。ただし緑色の粘液と化しながら……。

一帯に碎けた永沢の肉片である緑色の粘液が、豆まきのように飛び散る。そしてとろけたアイスのように地面にベチャリと付着する。永沢の身体を蹴りで通り抜けた速人の背後には、永沢の下半身が人形のように立ちすくんでいた。吹き飛ばされた上半身との傷口部分は、上からクリームを塗ったかのように粘液化していた。

「やったか……？ うわっ!？」

突如、辺りに飛び散った緑色の破片が動き始めた。それは蛞蝓のように地面を這い、驚くほどの速さで立ち上がった永沢の下半身に集まっていく。

粘液は永沢の足元に付着すると、あっというまに吸い寄せられて消えていく。下半身はどんどん粘液を取り込んでいくと、上半身に続く部分の傷口にある粘液が、ぐんぐん盛り上がっていく。

その体積はどんどん増え、先程の右腕のようにアメーバのように伸縮しながら、最初の象怪人の形を取っていく。そして瞬く間に色が変わり、後には傷一つ無い永沢変身体の姿が現れる。

『今の攻撃は中々効きましたよ。最もわたくしを倒すには至りませんでしたかね』

再生した永沢は、自分の身体を見せびらかすように、両腕を広げて語りかけてきた。

『驚いたでしょう。さきほども言いましたが、本来のオルフェノクにこんな力はありませんよ。これはわたくしが主から頂いた“アメアメの実”の能力です』

「ア……、アメアメ？」

速人は驚いたというより、戸惑うような口調でそう呟いた。

『とある海の世界には、“悪魔の実シリーズ”と言われる不思議な木の実がありましてね。それを食したものは、物理学の常識を無視した得意な体質・能力を手にするのですよ。実の種類によって能力は違います。わたくしが与えられたアメアメの実は、自分の身体を水飴状の物体に変化させる能力です。ゆえにわたくしには拳も剣も銃も一切通じませんよ。……さてわたくしの手の内は披露しました。そろそろあなたも何か彼に見せて上げなさい』

語る永沢の視線は速人の方に向いていなかった。声をかけているのは、永沢と一緒に立ち並んで速人の前に現れたもう一人の人物、ウロボロスの印をつけたスキンヘッドの男だった。

彼は永沢が喋っている最中にも、まるで置物のように黙り込んでおり、速人もすっかり彼の存在を忘れていた。

「そうかい……。めんどくさいがしょうがないな」

スキンヘッドの男が初めて言葉を発する。かなりだらけた人格を窺わせる口調だ。そして懷から何かを取り出した。

それは長さ十センチ程のUSBメモリのような赤い物体だった。

全体的に動物の肋骨のような筋がいくつも引かれており、表面上には妙な丸い変わったマークが描かれている。その文字はかろうじて英大文字のBのようにも見える。

「何だそれは？」

男は答えず、先端部分のスイッチのような部分を親指で押した。

『バード！』

物体からそんな電子音声が鳴ると、男はそれを自分の額にあつた多重四角形のマークに、物体の先端部分を押し当てた。

するとその物体が、そのマークから引つ張り込まれるようにして男の額の中に呑み込まれていく。あつというまに物体は男の体内に消えた。

すると男の身体が炎のような赤い光に包まれ、彼もまた怪人に変身した。

「象の次は鳥人間か」

それは全身が緑色の羽毛に包まれた鳥型の怪人だった。

頭部はかなり大きく、人間の顔に当たる部分に目は無く、オウムのような大きくて太い嘴が顔全体を占めている。その嘴には肉食動物の歯のようなギザギザがついていた。頭の上には顔以上に大きい鳥の頭の形をした灰色の冠がついている。腹は黄色く、多重の円形の模様が刻まれており、それを覆うように大きな爪型の突起物が、左右に三本ずつ生えている。両腕にはとても大きな灰色の鉤爪が取り付けられている。翼は身体の大きさと比べると割と小さく、縁には翼竜のように爪の生えた手が生えていた。

『バード・ドーパント・ホムンクルスである俺の力を見せてやろう』

鳥怪人は竜巻のような風を吹き上げながら、跳び上がる様にして浮き上がった。速人は素早くディケイドウェポンを拳銃型にして取り出す。

『はあっ！』

鳥怪人は地上三十メートルの高さまで浮き上がり、空中で停止した。そして黄色い腹から太陽のような真つ赤な火球が、地上にいる速人目掛けて吐き出された。

それと同時に速人も、鳥怪人目掛けてディケイドウェポンを発砲する。それは鳥怪人の火球よりも、弾速も連射の速さも遙かに上だった。鳥怪人が一発の火球を放っている間に、速人は三発の銃弾を次々と撃ち放つ。

まず一発目が鳥怪人の火球に命中。火球は打ち上げ花火のように空中爆発して相殺される。そして残りの二発が、火球の向こうにいる鳥怪人にクリーンヒットした。

『ぐあああっ！』

右足と右肩に弾丸が命中した鳥怪人は、悲鳴を上げて左側に仰け反る。速人は続けて拳銃を五回発砲する。

弾は五発中四発命中。空中に幾枚もの羽毛と赤い血が撒き散らされ、鳥怪人は飛び降り自殺のように頭から墜落していく。

地面に衝突した鳥怪人は、頭の冠が地面にめり込んで、面白いように完全な逆立ち状態になっていた。

「他愛も無い。とどめだ！」

曲芸師のように身体を大の字にして逆立ちになっている鳥怪人に、速人は銃口を向けながらカードを装填した。

『ファイナルアタックライド デイデイデイケイド！』

先程のキックと同じように、速人と鳥怪人との間に九つの光の壁が現れる。だが今回は攻撃方法が違っていた。

速人は光の壁に向かって拳銃の引き金を引いたのだ。放たれた光の弾丸が、幾枚もの壁を貫き潜り抜けていく。その度に弾丸は巨大化し、強化されていく。全ての壁を通り抜けた弾丸は、当然その先の鳥怪人に着弾した。

『ぐあああああつ！』

弾丸が鳥怪人の黄色い胸を大きく貫く。その時の衝撃で脳天の冠が、地面からスッポンのようにポンと抜けて、全身が真っ直ぐ後方に飛んでいった。

鳥怪人の背後には民家のブロック塀があり、そこに鳥怪人を貫いた弾丸がさらに通り抜けて、ポツカリと満月のように丸い大穴が開いていた。その穴に覆いかぶさるようにして鳥怪人の身体が激突し、塀を派手にぶち壊して、更にその先の民家の壁にめり込んだ。

壁の中で、またもや逆立ちの体型で固まっている鳥怪人の腹には、先程のブロック塀と同じように大きな風穴が開いていた。

「さて、お前はこれでどうする？」

速人はこれで勝ったとは思わなかった。こうも簡単に倒せてしま

うと、逆に裏があるんじゃないかと疑ってしまふ。

案の定、死んだと思われた鳥怪人に変化が現れ始めた。

腹部全体の六割を占める程の大きさの風穴が、突如青い電光のよ
うなものを発しながら、見る見る縮小していった。いや、破損した
鳥怪人の肉体が急速に再生しているのだ。

非常識な速度で傷は塞がっていき、後には元通りの黄色い腹が出
来上がっていた。穴を掘り返していく映像を、テープで巻き戻しを
して見ているような光景である。

鳥怪人の身体から強烈な疾風が放たれ、家はその風に煽られて全
壊していく。よく見ると、最初に速人に撃たれた部分の傷も綺麗さ
っぱりと消えている。

同時に鳥怪人は空中に飛び立ち、五体満足で速人を見下ろした。

『さすがに強いな。おかげで一回死んじまったぜ』

『不死身か？ お前は？』

先程の永沢の能力を見たせいか、速人にはそれほど驚きの感情は
湧かなかった。

『その通り。心臓指されようが、脳味噌砕かれようが、俺は絶対に
死なないぜ。何度でも蘇る。赤い石の数だけな。さて……』

不意に鳥怪人は速人とは違う方向に顔を向けた。

（なっ！？）

速人は狼狽した。鳥怪人の視線（と言っても眼は無いが）の先には、
未だに猫地蔵の所にいるこよみの姿があったのだ。なにやらお

堂の裏に隠れながら、脇から顔を出して速人達の様子を伺っている。あれで隠れているつもりなのだろうか？

すぐそこで様子見をしていた永沢が、鳥怪人に向けて口を開く。

『君はそこで彼女を確保しておきなさい。わたくしは引き続き、この人の相手をしていきますので……』

永沢が全てを言い終える前に、速人は即決でこよみのカードを装填する。

『ファイナルフォームライド ココココヨミ！』

「うわあっ!？」

突然の身体の変化にこよみがうろたえる。以前は速人がこよみの背中に手を差し込む作業を経て、ココミフォックスへの変身を発動させた。

だが今回はカードを装填した直後に変身が発動したのだ。こよみの背中に次元の門が自動で開き、一瞬のうちにこよみはあの狐型のモンスターの姿となる。

「こよみ！ 早くどこかに……、があ！」

叫ぶ速人に永沢の鉄拳が飛ぶ。こよみは慌てて空中に飛び上がって行き、それを鳥怪人が追尾していった。

それを見上げながら永沢が感心したように、起き上がる速人に語り掛ける。

『やはり彼女はライド・イミテーションだったんですね。こよみさんにサタン虫が通じなかった理由が、これではつきりと判りましたよ。しかし意識を調整されている様子がありません。あなたは我が

主と違って、意外と女性の扱いが上手いようですね」

「そうかい、そりやどうも。どうやらお前らはこよみも捕まえようとしているみたいだが……何故だ？ あいつの出すたらいがそんなに重大なのか？」

永沢は手を振って、否定の意思を表す。

『いえいえ、別にこよみさんに限った話ではありませんよ。わたくしの主は、異世界の珍しい力なら何だって欲しがるのですよ。全ての世界の最強の力を、一つ残らず我が物にするのが、あの方の望みですからね』

「欲張りなんだな、健史って奴は。それでこよみの力には、どういった価値があるんだ？ あいつの魔法は未だによく判らないんだがな」

その問いに永沢は、鼻で笑って見せた。

『他者が構築した魔法の効果を、別の魔法に書き換えてしまう、^{ディ}解呪の一種ですよ。召喚獣は“誓約”という呪いの力によって拘束されることで、元いた世界とは別の空間に、強制的に存在させられています。その誓約が無くなってしまうと、当然召喚獣は呪いから解放されて、自動的に本来いるべき次元に送り返されてしまいます。^{ディ}解呪には様々な系統がありますが、召喚術を無効化させてしまうものは、この世界で初めて見ましたよ。これは実に興味深い。オリジナルの方にも、ぜひお会いしたいものですよ』

「オリジナル？ どういう意味だ？」

『言葉通りの意味ですよ。あなたも薄々は気付いているのではないのですか？』

この問いに、速人は一時黙り込んだ。

「……まあいい、こよみは絶対に渡さん。お前をぶっ殺した後で、あの鳥男も二度と生き返れないぐらいに八つ裂きにしてやるまでだ!」

「やれるものなら、やってごらんなさい!」

速人と永沢は、お互い気合を高めた後、再び激突した。

第十五話：悪魔の実とガイアメモリ（後書き）

“ONE PIECE”の悪魔の実の能力者への、仮面ライダーの対処法を色々と考えてみた。

スナスナとメラメラにはキバ・バツシャー、ヒエヒエには龍騎の昇竜突破が良いと思う。ゴロゴロには・・・Wのルナジョーカーは果たして効くだろうか？

でも最終的にはカブトが一番だと思う。カブト系ライダーの必殺技は、敵の肉体を原子レベルまで崩壊・消滅させてしまう設定なので。

第十六話：破壊者の雄叫びとファイズ

永沢は両腕を上げて、速人に掴みかかろうとした。速人は迫ってくる大きな二つの掌を、同じく自分の掌で受け止める。両者の顔がすぐ目の前まで近づいて睨みあい、豪腕同士の力比べが始まる・・・、と思われたがそうはならなかった。

組み合った瞬間、永沢の両腕が瞬時に水飴化し、それが蛇のようにとぐろを巻きながら速人の両腕に絡み付いていく。あつというまに速人は両腕を縛られて、永沢に捕縛されてしまった。あつさりと畏にかかった速人を、永沢が嘲笑った。

『残念でしたねえ。これであなたはわたくしに一切手が出せませんねえ』

「確かに手は出せんが、口なら出せるぞ」

永沢が『なにを？』と言っている最中に、速人が大きく息を吸い込んだ。そして・・・。

「はああああああああああああああつ！」

速人が眼前の永沢に向けて、応援団長も顔負けの盛大な雄叫びを上げた。その強烈な大声は、耳に痛みを貫く程度では済まなかった。雄叫びと共に、速人の口元が急速に歪み始める。そしてその歪んだ空間が一つの形を持っているがごとく、弾丸のように飛び、至近距離の永沢の顔面に直撃したのだ。

『ぎゃああああああつ！』

直後に永沢は、あまりの激痛に苦悶の叫び声を上げた。見ると顔を中心とした永沢の上半身が、炉に入れた焼け石のように赤くなり、雲のような黒い煙を上げている。

速人を拘束していた永沢の両腕が、あっさりと解き放たれる。永沢は全身を蝕むあまりの熱さに、赤子のように地面にのた打ち回った。

速人が永沢に与えた攻撃は“ブームボイス”という。己の雄叫びを高周波の弾丸として発射し、あらゆる物体を灼熱化させて、十メートルの巨岩をも粉碎するディケイドの必殺技である。

それをほぼゼロに近い距離で喰らい、未だに苦しんでいる永沢を見下ろしながら、速人はカードを引き抜いた。

「確かに面白い能力だったが、結局俺の相手にはならなかったな。能力が理解できてしまえばもう怖くない」

大声を上げすぎたせいか、少し疲れた口調でそう語り、カードを装填する。

『カメンライド ファイズ！』

バックルにギリシャ文字のφのような紋章が浮かぶ。

するとバックルから四本の赤い光のラインが現れた。それは胴体目掛けて上側に二本、両足目掛けて下側に二本、計四本が速人の身体表面を、蛇のように這い伸びていく。それは途中で分岐しながら首元・背中・指先まで廻っていく。全身を縛るように廻り終えた後、急にラインの光が強くなり、瞬時にその姿が変わる。

その姿は赤いラインに黒色を基調とした姿で、胸当ての部分だけが銀色で、そこに石垣のような切れ込みが入っている。目は黄色く、

顔全体を覆い尽くすほど大きい円形だった。その大きな目の真ん中を、真つ二つに分断するような切れ込みが入っている。その切れ込みは脳天に行くと、二本の短い角となつて突き出ていた。その顔の造詣は、バツクルに浮き出てきたφの文字に酷似していた。

対オルフェノク用特殊強化スーツを纏った戦士・仮面ライダー5アイズ
55の姿である。

ディケイドウェポンを手取る。それは鼠色の厚板状のメリケンサックのような武器となつて、ファイズの手の甲に装着された。ファイズのパンチ力強化武器：ファイズショットである。

そしてファイズ用のアタックライドカードをバツクルに差し込んだ。だが展開したバツクルを元に戻さずに、次の行動に出た。ヨロヨロと立ち上がった永沢の腹に、ファイズショットを持った渾身の拳の一撃を加える。

『グウツ!?!』

拳のが永沢の身体にめり込んだ。先程と同じように衝撃を受けた肉体は水飴化し、速人の拳から右手首が体内に呑み込まれる。永沢の一瞬呻いたが、徐々に冷静さを取り戻す。

『馬鹿め! 私能力はもう判つてる筈だ!』

永沢の大きな手が、速人の右腕を掴んだ。だが速人は慌てることなく、カードを差し込んだまま展開しているバツクルを、左手で元に戻す。

『アタックライド グランインパクト!』

バツクルから伸びる赤いラインの一本に、強力なエネルギーが流

れ伝い、速人の右拳に注入されていった。
その瞬間、グランインパクトから何らかの強大なパワーが解放された。

「む？　ぐぎゃあああああああつ！？」

体内から発生した、強い攻撃性のエネルギーに、永沢が再び絶叫を上げた。掴んでいた速人の腕を解放するが、今度は逆に速人が左手で永沢の腕を掴み逃がさない。

永沢がしばらく絶叫を上げ続けた後、速人は一気に右腕を引き抜いた。ズボリ！と泥から抜き取ったような感触と共に、速人の右腕が外の空間に開放される。

永沢は腹部を水飴化したまま、再度地面にのた打ち回った。

速人は手早く三枚目のカードを装填する。

「ファイナルアタックライド　ファファファファイズ！」

どこからともなくトーチライトのような機械が現れ、速人の右足の付け根に装着された。

速人はそのトーチライトを永沢に向ける形で、右足を持ち上げる。するとトーチライトの照明部から、細長い真っ赤な光の棘が、永沢目掛けて矢のように発射された。

その光の矢は、永沢を直接攻撃するわけではなかった。

焼き芋のようにブスブスと煙を上げながらろうじて起き上がった永沢の目の前で、その光の矢は急停止した。永沢の胸から十センチも離れていない距離である。停止の瞬間、その矢は傘を開くように後方が拡大し、矢印のように永沢を指した、円錐状に変形した。

速人は跳びあがり、その光の円錐に向かって跳び蹴りを与えようとする。

『ひいつ！』

危機を感じた永沢は、速人に背を向けて走り出した。だが光の円錐からは逃げられない。円錐はサーチライトのように、逃げる永沢にどこまでもついていく。

速人も地球の重力を無視して、追尾弾のように円錐目掛けて空中を飛んでいく。

やがて速人の蹴りが、円錐の底面に直撃。すると円錐がドリルのように回転し、速人の身体もろとも永沢の体内にめり込んでいく。

『ぎゃあああああつ！』

永沢が更なる悲鳴を上げ、速人の身体が永沢の背中から体内に消えた。そして腹から飛び出てきた。幽霊の壁抜けのように、背中から腹へとすり抜けたのだ。赤い円錐は消滅しており、速人は永沢の目の前で着地する。

『がああああああつ！』

永沢の身体に、大きなφの文字の赤い紋章が浮かび上がる。それと同時に永沢の身体の各部から、青い火柱が立ち上り始めた。ファイズの持つ強力な毒性エネルギー“フォトンブラッド”が、永沢の身体を体内から蝕んでいるのだ。さすがにこの攻撃には、アメアメの実際の液化化能力でも防げない。

やがて永沢は意識を失ったのか、青い炎に包まれながらガツクリと膝を突き、倒れこんだ。

それを見届けた速人は、ファイズからディケイドへと瞬時に戻る空を見上げると、そこにはこよみと鳥怪人が熾烈な追いかけっこをしているのが見えた。

『うわっ、うわわわわわあっ！ 待ってよ鳥さん！ あ、危ないよお！』

『だったら逃げんじゃねえ！ 狐娘！』

こよみは空中を何度も旋回しながら、カラスに追われるスズメのように鳥怪人から逃げ惑う。鳥怪人は確保という命令を重視していないのか、遠慮なくこよみに火球を発射してくる。

こよみは速人に言われたとおりに、遠くへ逃げようとはしなかった。速人が永沢をどうにかするまでの間に、自分がこの鳥怪人をやっつけようと試みていたのだ。

だがすぐに、それはとても難しいことであることを思い知らされる。

鳥怪人が放つ火炎弾は、最初魔法の一種かと思われたが、どうも違うようだった。あの火球のエネルギー源と発射方法は、魔力やコード（呪文）によるものとは異なる仕組みだったようで、こよみの魔法でたらいに変えることができないのだ。

最初それに気がつかず、自信満々で鳥怪人に突っ込んだところ、正面から火球をもろに受けてしまった。

常人ならばそれで骨も残らず消し飛んだであろう。だがディケイドからもらったパワーで変じたコヨミフォックスの肉体は、見かけによらず頑丈だった。もちろん相応のダメージを受けることにはなかったが……。

（どどどどど、どうしょ！ ええと、鳥さんだから何か餌を上げてみるとか？ でも鳥さんの好きな食べ物って何だっけ？）

こよみは火球をただ必死に避けていく。そんな最中にもこの鳥怪人への対処法を、こよみなりの頭脳で精一杯考えていた。そこに速人を置いて逃げるという考えは、最初から微塵も無い。

鳥怪人は火球を連射しながらも、少しずつ空中を動いていき、徐々にこよみに近づいていく。そして急に火球の発射をやめた。

（あれ？ ああっ！）

こよみが不思議に思った瞬間、鳥怪人が急激な速度で飛び、こよみの間合いを一気につめる。そして翼を振り上げて、空中回し蹴りをこよみに繰り出した。

『きゃあっ！』

こよみは空中を独楽のように回りながら吹き飛んでいく。鳥怪人はそれを上回る速度でこよみに向かって飛び、こよみの眼前に接近した。

鳥怪人は両腕の巨大な鉤爪を差し出し、こよみの身体を魚のように驚掴みにする。掴まれた時の圧迫感により、こよみはさらに小さく悲鳴を上げた。

『くはははっ！ 小娘が、もう逃げられんぞ！』
「お前もな」

低レベルな勝利感に酔いしれる鳥怪人の耳元に、突如何者かの声が囁かれた。何事かと思った鳥怪人だが、後ろに首を向ける時間は

無かった。

『があっ!?!』

声が聞こえた瞬間に、背後から鳥怪人の腕を、何かが縛りつけた。

『速人さん!』

こよみが歓声を上げた。同時にこよみの身体を掴んでいた力が抜け、こよみは即座に鉤爪から脱出する。

鳥怪人の後ろにいたのは、先程永沢を倒したばかりの速人だったのだ。速人は何故か空中に浮いており、鳥怪人を背後から驚掴みにしている。

「全く、どこかへ逃げろといっただろうが!」

鳥怪人を捕まえながらも、速人は怒りと呆れが入り混じった口調でこよみを叱る。

デイクイドの両手足の首には、“特斯拉バンド”というバンドが巻かれている。これは強力なマイクロ波を放ち、共振を利用してデイクイドの身体を浮遊させる機能を持っていた。

速人は、空中でこよみが鳥怪人に追われているのを見たが、動き回っているこよみに誤射してしまう恐れがあったので、拳銃を撃つわけにはいかなかった。

そこでこの特斯拉バンドで空を飛び、鳥怪人を捕らえにかかったのだ。こよみへの攻撃にばかり意識を集中させていた鳥怪人は、ゆっくりと背後に迫る速人に全く気がついていなかった。

『いつのっ! 離せ、くら!』

鳥怪人は足をバタつかせながら、速人から逃れようとするが、力では全く適わない。

『ようし！ こよみ、行きます！』

頼まれてもいないのに、こよみは何かに答えるようにして鳥怪人に突っ込んだ。そして口を大きく開き、鳥怪人の脇腹にカプリと噛み付いた。

噛み付いたといっても、コヨミフォックスには狼のような鋭い歯も強靱な顎もない。この攻撃は、こよみにとっては最強の攻撃だったかも知れないが、傍から見ると子狐が甘噛みしているようにしか見えない。

残念ながらコヨミフォックスには、敵に直接ダメージを与える技は無いのだ。

「馬鹿！ どこか行ってる！ 俺はこいつを連れて地面に突っ込……あれ？」

速人が気の抜けた声を上げる。渾身の力で捕らえていた鳥怪人が急に消えたのだ。

逃げられたわけではない。鳥怪人の姿が突然、空気と化したかのように消滅したのだ。掴んでいた手は、捕獲物を失って空回りし、両腕が交差されて意図しないブイの字を作る。

鳥怪人が消えたと同時に、速人の頭上に銅製のたらいが現れた。たらいは速人の頭にガオオオン！と気持ちの良い音を立てて当たり、そのまま地上へと落下していった。

速人とこよみは、今の事態を理解するのに少しばかり時間がかか

った。

こよみがばやく。

『あの人……、召喚獣だったのかな？』

「いや、なんか違う感じだな。あいつ自身が魔法の塊だったとか？」
『うん。そんな感じじゃなかったよ。だってコードを何にも感じなかったもん。あの火の玉もたらいにできなかったし……』

二人はゆつくりと、たらいが落下した地点の地面に降下していく。降りた場所の道路には、高度から落ちて固いアスファルトに叩きつけられたたらいが、半分潰れた状態で転がっていた。ひしゃげていて完全には見えなかったが、底面にはデフォルメされた鳥の絵が描かれていた。

速人が感じたとおり、あの鳥怪人は召喚獣などではない。だが魔法の塊でもない。彼はとある錬金術の発達した世界にいた人ホムンクルス造人間であつた。魔法という力とは、ほとんど無縁の存在である。

この現象を一から説明するとなると、まず最初に、こよみが鳥怪人に噛み付いた時に、こよみの金たらい召喚の魔法の力が、直接彼の体内に注ぎ込まれた。すると彼の“存在”に関する情報が、魔力によって急激に書き換えられ、“たらい”という金属物質に変換されてしまったのだ。

簡単に言ってしまうえば、鳥怪人は召喚獣のように元の世界に還されたわけではない。鳥怪人自身が、銅のたらいという無機物に強制的に変身させられたのだ。

すなわち二人の目の前にあるたらいは、先程までこよみと戦闘を行っていた鳥怪人本人である。元の姿に戻るには、魔法をかけた本人であるこよみが、新しく魔法コードを組み直さなければならない。最も、こよみにそれを行っただけの、魔法の知識と技術があるかどうかどう

かは別問題であるが……。

「ふむ……」

速人はそのたらいを拾い上げた。

そして紙を破るように、無言でそれを両側に引き裂いた。

『えっ！？ 速人さん？』

突然の速人の行動に、こよみは訳が判らずうろたえる。

そうしている間にも、速人はたらいをバリバリと引きちぎっていく。やがてたらいは、元の形が何だったのか判らないぐらいバラバラになり、道路にばら撒かれる。だが途中で、ここに車が通ったら大変迷惑だろうと思い、細かな破片を纏め上げて、歩道橋の上に捨てておいた。

『速人さん……。何してるんですか？』

「いやあ。何となくなあ……」

こよみは瞬時に元の人間の姿に戻った。空中でマントを脱ぐようにして、毛皮が背中 of 次元の門に吸い込まれる。戻ってから地面に着地するが、すぐにバランスを崩して倒れそうになる。これを予測していた速人に即座に抱きかかえられ、無事に立ち上がった。

こよみは足元のスクラップの山を見下ろし、混乱して首を傾げた。

第十六話：破壊者の雄叫びとファイズ（後書き）

ブームボイス：設定のみで原作では一度も使われなかった技。そのため技を放つ時に、カード装填が必要かどうかは不明。この小説ではカード不要の能力にしておきました。

テスラバンド：原作では、第一話の夏海の夢の中で、デイクイドがこのテスラバンドと思われる能力で浮遊している描写があります。ただしそれがどの程度の飛行能力を有するのか不明のため、細かい描写は避けました。

第十七話：永沢と猫の呪い

「あつ、そうだ！」

ふと何かを思い出したようにこよみは駆け出した。珍しくも今回は転倒しなかった。

「どうしたんだ？」

こよみが向かった先は、すぐ近くにあった猫地蔵のお堂だった。どうやらいつの間にか寺の上空付近で戦っていたようだ。

こよみは内部の猫地蔵を見て、その無事な姿を見て安堵の息を吐く。

「良かった。さっきの喧嘩で壊れちゃったらどうしようと思ってた」

あんなものを“喧嘩”と呼べるものか？と心の中で突っ込みを入れながら、速人は遠目でその光景をほのぼのと見守っていた。

「あれ？」

「あつ！？」

こよみは不意に、背中にベチャリ！と何かが張り付く感触を感じた。速人が声を上げようとした瞬間、こよみの身体がバネのように飛んだ。

「わわわっ！ なにい！？」

こよみに張り付いたのは、ヌメヌメした感触を持つ緑色の一本の

長い触手だった。どこからともなく現れたそれは、こよみの背中に先端をガムのように張り付け、バンジージャンプのようにこよみの身体を引っ張り上げたのだ。

速人は走りだすものの、元々の距離があつたせいで当然追いつけない。こよみは触手の発生源で止まり、捕らえられた。

「永沢！」

そこにいたのは先程速人の必殺技で倒れた永沢だった。水飴の触手と化していた右腕を元の姿に戻し、こよみの口を塞いで取り押さえている。

永沢は目立つた外傷は無いものの、未だに残る苦痛に顔を歪ませており、青白い顔色からどことなく痩せたように見える。

ファイズの必殺技“クリムゾンスマッシュ”は、永沢に激烈なダメージを与えていた。だがアメアメの実の体質のおかげか、致命には達していなかったのだ。

「甘いですねえ。わたくしの最期をきちんと確認しなかったのは失敗でしたよ」

喋る永沢の息は荒く、今にも倒れそうな状態であつた。

「デイクイドライバーをこちらに渡しなさい！ そうしなければわたくしがこのお嬢さんをどうするか、考えなくても判るでしょう？」

永沢は速人に向けて勝利の笑みを浮かべる。

こよみを人質に要求を突きつけられた速人に、慌てた様子は微塵もなかった。余裕があるのとは違う。何故か永沢の顔を見ながら啞然とした顔で、無言で突っ立ったままだった。永沢はそんな速人の

様子を訝しむ。

「何ですか？ 何か言いなさい！」

「猫耳？」

「はあ？」

速人がようやく発した意味不明の単語に永沢は当惑した。速人は正確には永沢の顔ではなく、永沢の頭上の部分を見つめていた。見るとこよみも取り押さえながらも、そちらを凝視している。

永沢の頭には……、猫耳が生えていた。

それはもう立派な猫耳だった。耳付きのカチューシャを被っているのではない。本物のネコ目ネコ科ネコ属に類する動物の聴覚器官が、人間の姿をした永沢の即頭部にニョキりと生えている。

永沢はそれを無意識にピクピクと動かしていた。もし生えた人物が美少女だったなら、特定の趣味の人間には大いに受けたであろう。

「な、何を言っているのですか？」

気づいていない永沢が二人の様子に困惑している間に、更なる変化が起きた。

永沢の口の周りに、白く細長いネコのヒゲが大量に生えてきたのだ。生物学的には洞毛と呼ばれる、哺乳類の感覚神経の媒体の一つであるそのヒゲが、糸を引くようにニョキニョキと生えてくる。口元の感触に、さすがに永沢も自分の身体の異変に気がついた。

「なっ、何だこれは！？ うわっ！ うわああああ！？」

永沢が左手で自分の洞毛を摘んだ瞬間、今度は永沢の身体全体が

縮み始めた。急激な身体の変化とそれによる混乱で、永沢はこよみを捕まえていられなくなり、無意識に手を離れた。

「速人さぁん！」

開放されたこよみが速人に駆け寄り、抱きつこうとする。その際、こよみの額が速人の硬い鎧に覆われた腹に激突。痛みあまり地面に膝を付いて悶えた。

「・・・・・・・・！？・・・・・・！？」

永沢はもう人間の声を発することが出来なくなっていた。服はとつくにブカブカになっており、永沢は赤子のように四つん這いになって立っている。

やがて全身から獣のような黒い毛が生え始め、尻から長い尻尾が生える。次第に顔の輪郭や体型も変化していく。ようやく変化が収まった時、そこには地面に放られた衣服にからまっている、一匹の黒猫がいた。

二人はその有様を、呆然と眺めて固まっていた。

「ね・・・・・・・・、猫になっちゃった？」

「ああ、猫だな・・・・・・・・」

速人もこよみも一体何が起こっているのか、さっぱり理解できなかった。ただ永沢という怪人の脅威が、完全に去ったのは確かである。

それをいち早く理解した速人は、デイケイドウェポンを抜き、それを拳銃型に変えた。突然の行動にこよみはぎよつとする。

「さっき宣言した通りだ永沢・・・・・・・・。死ね！」

かつて永沢だったその黒猫に、速人は銃口を向けた。そして引き金に回した指に力を込める……。

「だめえええええっ！」

こよみは速人を止めようと、抱きかかるように速人の胸元に突進した。

だがさつきと全く同じようにして、こよみは速人の鎧に顔面を激突させる。ゴチン！と鈍い音が聞こえた気がした。

この行動に動揺した速人は、思わず引き金を引くのを止めた。

「ニャアアアアッ！」

その隙に黒猫は衣類を振り上げて、悲鳴と思われる鳴き声を上げて逃げ出した。家の壁を乗り越えて、あっというまに姿が見えなくなった。

「こよみ……？」

こよみは鼻血を垂らした腫れた顔で、必死に速人に訴えかけた。

「駄目だよ、速人さん！ あの人はずネコさんだよ！ ほんとうに悪い人だったみたいだけど、あんなことしちゃ駄目だよ！」

ほとんど子供の我がままだったが、速人の怒りの感情を和らげるには、それで十分だった。速人は一度空を見上げた後、軽く一息ついた。

「分かったよ……。俺も少し勢いにのりすぎた。もう気は済ん

だし、お前の言うとおりにするよ……」

こよみは安心した表情で胸をなでおろした。

本当は永沢に対する殺意はまだ完全に消えていないのだが、こよみのことを思い、速人は何とか我慢することにした。

「あつ、そうだ！」

こよみは再び猫地蔵のお堂へ駆け出した。途中で転ばないよう、速人も一緒になってすぐ隣側に走り出す。

「また猫地蔵か？ あれはもう大丈夫だろう。さっき見たじゃないか？」

「違うよ。今度はお礼を言いに行くの。助けてもらったし」
「何？」

こよみは猫地蔵の前に座り、礼の言葉を述べて合掌した。速人もなんとなく、一緒に猫地蔵に向かって手を合わせた。

状況から見て永沢を猫にしたのは、この猫地蔵ということのようだ。弱っていたといえ、あの強大な怪人を、あんな小動物に変えてしまうとは、地蔵菩薩の力、恐るべしである。

速人は手を合わせ、目を瞑ったが。特に猫地蔵にお祈りするわけではなく。今日の出来事を少し思い返していた。するとふとあることを不思議に思った。

（俺、何であんなに怒ったんだろう？）

永沢がこよみに対して行ったことを聞いた時、とてつもない憎悪と殺意が、速人の心を瞬く間に埋め尽くした。それはもう、いつ自

我が壊れてしまつて獣に成り果ててもおかしくないぐらいにである。確かに腹ただしいことではあつたが、自分でもあの反応は過剰すぎると思う。いや異常と言うべきか……。

しかも今でもその時の殺意は、完全に収まつてはいない。最初は、デイケイドの影響と思われる精神改造が原因と思つたが、どうも違う気がしてきた。

まだ会つて数日しか経っていないはずだが、この“こよみ”という少女のことを、自分は以前から知っている気がするのだ。それは最初にあの電化店で会つた頃から、薄々と感じていたことである。そしてそれは自分にとって、絶対に守らねばならない特別な存在だつたように思える。

（何なんだろうな。この感覚は……？）

“気がする”とか“思う”とか全く確証がない漠然とした思考である。だがそのせいで速人の心のモヤモヤは全く晴れない。これが俗に言う“恋”というものであるうか？

気がつく、こよみが自分に向かって不思議そうな視線を送つていた。速人が悩んでいる間に、あちらは礼を言い終えたようだ。

「悪い、待たせたな」

「ううん、すごい熱心にお祈りしてたから、ちよつと驚いちゃった」

気がつく、ゴーストタウンのように静かだつた町内各地から、慌しい声が聞こえてきた。

デイケイドの優れた聴覚で聞き取つてみると、それは壊れた家や道路に対する驚きと戸惑いの声だつた。どうやら永沢の張つた、人払いの指令が解けたようだ。

とりあえず騒ぎに巻き込まれないよう、二人は猫地蔵の寺を後にした。

こよみは最後に、猫地蔵に向かって手を振って別れの挨拶をしていた。

二人はバイクを置いておいた公園に戻ってきた。

幸いバイクは無事で、誰かに手を加えられた様子はなかった。周囲の安全を確認し、速人はディケイドの変身を解除する。そしてバイクの調子を確認した。

また以前のように、空を走ってあの街に戻ろうと考える。だがあの飛行走行は、ディケイドになっていないとできないことを思い出し、再びディケイドライバーを腰に巻いた。

不意にこよみは速人に尋ねてきた。

「速人さん。あたしって少しは役に立ったかな？」

「何がだ？」

「さっき速人さんに逃げるように言われたのに、ちょっと出しゃばっちゃって……、やつぱり迷惑だった？」

どうやら速人のさっきの注意が気にかかっていたようだ。速人は特に怒る素振りはなく、優しい口調で答える。

「確かに肝が冷えはしたが、結果的に助かった。礼を言っぞ」

一応嘘は言っていない。別にあのたらい魔法が無くとも、鳥怪人

を倒せたような気はする。だがそのためには、敵の生命力が完全に尽きるまで、何度でも奴の身体を破壊しなければならなかっただろう。

そうなるに相当な血を見ることになり、かなり気持ち悪い思いをすることになったのは間違いない。

右手を差し伸べて、猫のようにこよみの頭を撫でてみる。

「えへへ」

こよみは明るい表情で喜んでいる。前に子供扱いして怒られたことがあったが、こういうのはいいらしい。

速人のいる街とは遠く離れたある場所で、その男はいた。そこはかなり古い、小さな旅館の中だった。元々客が少ないようで、かなりボロけた部屋の中で、男はテレビのような物体を眺めていた。

ようなとは、それは何かを映してはいるが、どう見てもこの世界のテレビとは違っていたからだ。

それは空中に浮いており、立体映像のようにして、男の見たがっている映像を映している。明らかにこの世界の技術レベルを超えている。廃屋のようなこの旅館に、このハイテク機器はどう見ても不釣り合いである。

「やられちゃったか、可愛そうに……。さて次は俺が行くかな？」

その時、彼以外には誰もいない部屋で、彼以外の者の声が発せられた。

『何ですと！？ 主が自らいかれると！？ そんないきなり！』

明らかにこの旅館の従業員ではない。その声に男はかない面倒くさそうな返答をする。

「何だよ、駄目だったのか？ そのほうが手っ取りだろうが・・・。
あつ、そうだ！」

男は何かを思いついたようで、ポンと右掌を左手の拳で叩く。

「先にあのデカブツを差し向けてみよう。ちょうど処分に悩んでいたところだし」

『あの野獣をですか？ とても奴に敵うとは思えませんが？』

「ああ、まず勝てないだろうな。まあ、でもこよみの解呪があのデカブツにも効くかどうか試したいしな。正直召喚獣を自分の手で殺すのも、うんざりなんだよな」

男は頭を掻くと、再び何かを思いついたようだ。

「もう一つ思いついた。あいつの所のこよみと、俺の所の舞・HiME^{ヒメ}をぶつけてみよう。模造品同士^{イミテーション}でどんな勝負をするか、楽しみだ」

『我が主よ。その前に我に任せてもらえませんか？』

自身の発想に、楽しそうに笑う男に向けて、再びあの謎の声が届く。

「何だ？ お前がディケイドに勝てるってのか？」

『はい。我も奴らへの対抗策を色々と思いつきましたゆえ』

「そうか。それは面白そうだ。でも判ってるのか？ お前がくたばったら、せっかく制圧したこの国を手放すことになるんだぞ？」

『問題ございません。自信はあります』

「そうかい。じゃあ行つてこい」

男はあっさりと許可を出す。その直後、大地が揺れた。

旅館の置物がコトコトと振るえ、突然の地震に従業員達が驚き騒ぎ出す。だがその地震はすぐに収まった。そしてあの謎の声も、二度と放たれることはなくなった。

「さあて、あいつがどんなやられ方をするか、実に楽しみだ。ぶっちゃけこんな国いらな^いいな」

男はそう呟いて、持っていたスナック菓子を頬張った。しばらく間を置いて、また一言呟いた。

「しかしディケイドとはな……。やっぱりリンバウム以外の世界で、召喚術を使いまくったせいだろうか？ まあ面白くなつたからいいけど」

第十八話：再訪の街と探検隊

速人達はバイクに跨り、真っ直ぐに伸恵達と出会ったあの街に向かつて空を飛んでいた。

今回は地図を買ってある程度の地理を学んでおり、また時々街に降りて現在地を確認していたりしたので、特に迷うようなことはなかった。

「伸恵さんと千佳ちゃん元気かな。まだ一日しか経ってないけど、何だかすごく久しぶりに会う気がするね」

こよみは明るい表情で伸恵達との再会を楽しみにしている。彼女たちとは、ほんの少しの間会話をしただけの関係であるが、記憶が無いこよみにとっては数少ない知人である。

何故か伸恵の声に惹かれていたこともあってか、長年の友人と同じような感覚を彼女たちに持っていた。

「ああ、色々あったせいかな。確かに日が経つのが随分遅く感じるな。これからもこんな日々が続くかもしれないぞ」

こよみと違って速人は少し暗い口調だ。

「え？ どうして？」

「話しただろ。この国はもう敵の手の内に落ちてるんだ。この国の人間全部が敵だと考えていい。街についた瞬間、敵の軍勢に囲まれるかもしれないな。あの街もまだ無事かどうか」

「そそそ、そんな！ 伸恵さん達もどうかされちゃったの！？」

「それを確かめる意味でも、今そっちに向かってるんだ。まあ慌てずに行こう」

実際は永沢の口から、あの街がすでにサタン虫に占領されているのを聞いていたのだが、ここはあえて黙っておいた。

ともかく速人は、自分たちがどこに向かおうと何らかの手荒い歓迎をされるだろうと確信していた。まあ、そもそも自分達が、最終的にどこへ向かえばいいのかも判らないのだが……。

（あのぬいぐるみを早々に見つけ出して、しっかり道案内をしてもらわないとな。こんな次々と化け物が襲ってくる世界、もう御免だよ）

しばらく進んでいくと、目的地の街が見えてきた。東側に小さな湖が隣接しているその光景は、昨日見たばかりだというのに、こよみの言う様に何故か久しぶりに来たように感じてくる。

速人たちは試しに湖の上空から地上を眺めてみる。かつてはここでたらいと人間の雨が降り注ぎ、大騒ぎになったものだ。

「当然といえば当然だが、もう誰もいないな」

「うん。あたしが出したたらいも全部無くなってるね」

「随分撤去が早いことだ。敵方が何か手を回したのかもしれないな」

速人たちはバイクを回し、街の中へと入っていった。

「なんだいありゃあ？」

「この前のお化け……とは何か違うよね？」

そこで速人たちが最初に見たものは、街の上空を飛びまわる謎の生物たちだった。大群というほど数が多いわけでもなく、いくつかの形の異なる種類の生物があちこちで疎らに飛んでいる。

「何か変なの。鳥さんはわかるけど、何だかロボットみたいなのも飛んでるよ」

それらの生物の姿はどれも以前この街で見た、魔化魍というものとは大きく異なっていた。

短い人間の子供のような足がついた巨大蝶。

首が無く、嘴が尋常でないほど巨大な、ペリカンのような鳥。

触覚のように細く真っ直ぐな足が二本生えた、青紫色の蝙蝠。

金属のようなボールのような身体に丸い目が一つ、頭頂と足に当たる部分にネジが生え、U字型磁石が腕のパーツして取り付けられているロボットのような生物。

これら以外にも多種多様な生物の姿が各地で見受けられた。それらの姿は異形ではあるが、魔化魍のような恐ろしげな雰囲気はほとんど感じられない。

「気の毒に、この街は変な生き物に好かれるようだな……」

速人たちは最初、魔化魍の時のようにこちらに襲い掛かってくる可能性を考え、警戒していた。だが以前とは違って、彼らはこちら

に対して何かしようという行動を一切取らなかった。

彼らは速人たちに目を向けてはいるものの、ただそれだけである。なにより彼らからは外見以上に、魔化魍の時の様な禍々しい気配を一切感じないのだ。

「ええと、こういう場合はどうすればいいのかな？」

「とりあえず、こっちから近づいてみるかな」

速人は一番近い距離に居る、人型の蜂のような生き物の所に近づいていった。

するとその蜂は驚いて、脅えるようにどこかに逃げ去っていった。ために他の者に近づいてみるが、結果は同じだった。

「おいおい、みんな逃げちまうぞ。あれは敵の刺客じゃないのか？」

「多分違うと思う。だってあの人たち、全然怖い感じがしないもん」

「まあ、そうだな。とりあえずあの学校に行ってみるか」

速人達は以前伸恵達と出会った、あの学校の門前に着陸した。学校に入る前に辺りの街を見回してみる。

「何もかもあの時のままだな」

その光景は特に以前と変化は無かった。ディケイドの試し撃ちで全壊した家屋が、今なお無残な姿を晒したままだ。

そして街の中の、異様なまでの人気の無さも同じだった。上空から眺めたときも人らしき者は一切見つけられなかった。

「どうしたんだろう？ みんな隣の町に避難しちゃったのかな？」
「だといいがな……。とりあえず中に入ってみよう」

二人は門を通り抜け、校内に入っていた。

「伸恵さああああん！ 千佳ちゃああああん！ いるうううう！？
こよみだよ！」

校舎の中でこよみが大きく叫ぶ。だがそれに答える声はいない。
長く掃除がされていなく埃がたまった廊下の中を、その叫び
が空回りのように木霊する。

「ううん、やつぱりいないよね。みんな大丈夫だといんだけど」
「ああ、たしかに伸恵達はいないようだが、何か別の奴がいるみた
いだな」

速人はそう言ってこよみの横を通り、校内に入っていく。こよみ
も慌ててそれについていった。

「ちょ、ちよつと待ってよお。誰がいるの？」
「さあな。何だか子供みたいな声だったが……」

変身状態にある速人は、10km四方の音を探知できる超聴力：
デイメンションスカウトで、体育館の方から聞こえてくる話し声を
耳に入れていた。

その話し声はこんな感じだった。

『誰が入ってきたよ！ ど、どうしよう！』

『敵のチームかな？ ヒトカゲ、やっぱりここは撤退する？』

『馬鹿！ こんなことで脅えてどうするんだ！ 正面から堂々で行こう。もし意地悪するような奴らだったら返り討ちにしてやる！』

この会話だけで、相手の正体を見極めるのは不可能である。向こうもこちらに話をする気はあるようなので、こっちも遠慮なく会いに行くことにした。

「うわ！ 何だお前は！？ この遺跡の番人か！？」

相手は廊下の真ん中で、言葉通り正面から向かい合って接触した。猛ダッシュで廊下を走るその三名の人物は、速人達の姿を見た途端、驚きと怪しみの声を上げた。

最も常人ならば、速人の側の者も相手と同じ言葉を口にしただろう。

「うわあ！ 可愛い！」

それはこよみも遥かに小さい変わった生き物だった。恐らく街の中を飛び回っていた生物たちと同類だろう。

速人たちに叫んだ一人は二足歩行で動く、赤いトカゲのような生き物だ。身長は60cm程、頭が大きく、目は赤ん坊のようにつぶらである。尻尾の先には、小さな火が蠟燭のように灯されている。

一人はこれもまた二足歩行の亀のような生き物だった。身体は全

体的に水色。頭が丸く、甲羅の中に全部入っているのか首が見えない。尻尾は太くて長く、巻貝のように丸くなっている。

最後の一人は四足歩行の、緑色の妙な姿の生き物だった。どこもなくカエルのようにも見えるが、頭の両側に哺乳類のような耳たぶが生えている。また足がとても短い。背中には球根のような、謎の大きな物体が生えている。

どれもぬいぐるみのような、愛らしい外見をしている。こよみは頭を撫でようとも思ったのか、彼らに近づこうするが、すぐに速人に制止された。

「ちょっとヒトカゲ、落ち着こうよ」

「そうそう、それにこの人たち人間だよ。探検隊の人とは何か違う感じだし」

ヒトカゲと呼ばれたリーダーらしき人物に、他の二人がなだめている。

一応日本語が通じる相手のようなので、速人は遠慮なく彼らに話をしてみることにした。

「そっちも色々と事情もあるんだろうが、こっちにも事情が判らず困惑してるんだ。先に俺達から質問していいか？」

「うつつ、いいだろう。どんと言ってみろ」

冷静に話を切り出され、ヒトカゲは訝しげにもまともな応対をしようとする。

「まず、お前たちは一体何者なんだ？」

一瞬彼らの警戒の色が消えた。何故かその言葉に彼らは過敏に反応しているらしい。

「何者だつて？ ふふふ、いいだろう。フシギダネ、ゼニガメ、いくぜ！」

三人は得意げにそれぞれバッジのようなものを掲げて、速人たちに見せびらかした。

「私はゼニガメ！ そこにスリルな冒険があれば、天空だろうが地底だろうが、どこへでも足を踏み入れる、勇猛果敢で可憐な女探検家よ！」

「僕はフシギダネ！ 冒険も好きだけどお金も好きだ！ お宝探して土の中も水の中も怖くない！ でも火の中だけは勘弁してね」

「そして俺がリーダーのヒトカゲ！ この世のあらゆる謎を求めて世界を回る、世界一……になる予定の偉大な探検家だ！」

「……俺達は燃える魂を持つ、通りすがりの探検隊！ その名もスピリッツ！ 覚えておけ！」

三人は踊るような仕草で決めポーズを取り、合唱するようにして同時に名乗りを上げた。

「そうか……」

「そうなんだ……」

速人とこよみはただ啞然として、彼らに対して熱意のない小さな拍手をした。

「熱い魂ですか……。何だかよくわかんないけど凄そうだね・

・・」

「ふふふ、そうだろう」

こよみの言葉に、ヒトカゲはその短い腕を組んで不敵に笑う。

「じゃあこつちも名乗るか。俺は十文字速人だ」

「あたしは森下こよみです。ところでなんで探検隊の人たちが、こんなところにいるんですか？」

だがこの言葉にヒトカゲは、軽くずっこけた。

「おいおい、なんでって・・・そんなの冒険に決まってるだろ。

この遺跡のどこかにお宝がないか、現在探索中なんだ」

「「はあ!？」」

今度は速人とこよみが、二人揃って首を曲げて疑問の声を上げた。

「おいおい何だよ！ 探検隊が冒険しちやいけないってのか!？」

「いやいやそうじゃない。ただ何でここが遺跡なんだよ。ここはただの学校だぞ」

「え？ 学校？」

速人の返答に、ヒトカゲたちが目を丸くする。

「学校が判るか？ 子供に読み書きとか計算とかを教える場所だ」

「い、いやそれは知ってるよ。でもこの街、誰もいないよ。何かあちこちすごく荒らされてるし」

速人は軽く息を吐いた。

「何か勘違いしてるみたいだから言うがな、この学校も街もほんの少し前までは普通に人が住んでたんだ。ここらに化け物が沢山出てきてな、まあ俺も詳しく知ってるわけじゃないが、多分みんなどこかに逃げたんだろう」

「ええ！ 化け物！？ そんなのいるの！？ わわわわっ、どうしよう！？」

さつき勇猛果敢と口にしていたゼニガメが一番怖がっている。この反応を見る限り彼らには、人間にとって自分達が異形だという認識はないようだ。この三人「スピリッツの世界では、こういう変わった姿の生き物が一般的な住人なのかもしれない」。

「大丈夫だ。そいつらは皆退治されたか、元の世界に帰されたからもう心配ない」

「ほんとに？」

「ああ、本当だ」

その言葉に、三人は安堵の息を吐いた。口と違って結構臆病な性格なのかもしれない。

「それよりもお前たち、ここに来るまでは一体何処にいたんだ？ ずっと昔からこの街の近くに住んでるわけじゃないだろ？」

「うん。でもよくわからない」

「判らない？」

三人はお互いの顔を合わせている。人間とは違う形状の顔のため、想像で判断するしかないが、それは困った表情をしているように見える。

「本当に何もわからないんだ。僕たち少し前までトレジャータウン

で買い物をしてただけど……」

「いきなり回りの風景が、何ていうか、こう……ぐにやぐにやになって、気がついたらこの近くにいたのよ。てっきり変な夢でも見てるかと思ったわ」

速人はこよみに顔を合わせた。

「こよみ、これはやっぱり召喚術か？」

「うん、あたしも召喚術だと思う。この子達から、前に感じたのと同じコードが見えるもん」

「同じか。それじゃあ、元の世界に返せそうか？」

「できると思う。今やってみる？」

再び三人に話しかける。

「お前たち、元いた場所に帰れるぞ」

会話を聞いていたスピリッツ達も、意外な話題に当惑している。

「本当に？」

「ああ、実はこの世界は、お前たちがいた所とは別の世界なんだ。ろくでもない奴の魔法で無理矢理この世界に引っ張り出されたんだ。だがここにいるこよみも魔法使いだ。その力で簡単に帰せるぞ。今ここでやってやろうか？」

三人は再びお互いの顔を見合わせた。さっきとは違って困っているというより、色々と悩んでいる表情に見える。

「どうしよう？ 別の世界だって」

「だったらもう少し見てみたいよ。別の世界なんて、きっと滅多に

来れないよ」

「でもこの人たちが行っちゃったら……」

三人は速人たちに、チラリと何かを求めるような視線を向ける。

「悪いが俺達は、あまりあちこちには出歩けないぞ。俺はここで探し物、いや探し人というべきか……。とにかくそいつを探しに行かなきゃならん」

「探してる人ってどんな人？」

「喋って動く虎のぬいぐるみだ。名前はハラキリトラ。そいつがないと俺達がこれから何をすればいいのかさっぱり判らん。お前はそいつのこと何か知ってるか？」

三人は心当たりを探るが、特に何も思い浮かばないらしい。

「虎のぬいぐるみ……。うーん、それってポケモンじゃないよね？」

「ポケモン？ ああそうか。そいつはお前たちと同類じゃないぞ」

「ごめんなさい。僕ら全然知らないです」

「そうか、すまなかつたな」

するとゼニガメがすぐるように速人の足元についてきた。

「ねえねえ。今からその人を探しに行くんだよね？ 私たちも付いていっていいかしら？」

「そうか！ それなら気が向いたらいつでも帰れるな！」

「ゼニガメ、中々考えるじゃん」

何だか勝手に話が纏まってきている。とりあえずこよみの意見も聞いてみることにした。

「いいよ。一緒に行こう。あたしもこの子達と友達になりたいし」
「友達になれても、すぐにまた別れることになるぞ？」
「それでもいい。あたしに友達も、知ってる人もあんまりいないから・・・」
「そうか・・・」

この会話を聞いたスピリッツ達は、大喜びで舞い上がった。

第十九話：スピリッツと異世界の英雄

「ハラキリトラさん！ どこにいる！ お前の仲間が探してるぞ！」
「ハラキリトラさん！ とっておきのセカイイチを上げるから出ておいで！」

「ハラキリトラ！ハラキリトラ！ハラキリトラ！ いたらとつと返事しろ！」

スピリッツ達の呼び声が街中にうるさいぐらいに響き渡る。速人
とこよみとスピリッツは学校を出て、バイクに乗って街の中を駆け
ていた。

バイクに五人乗りなど、普通は無茶な事である。しかしスピリツ
ズ達の身体が幼児のように小さいうえ、しがみつく力がその体格か
らは似合わないほど強かったので、なんなく乗ることが出来た。

「うう、やっぱりいないのかな？」

「おいおい出発してからまだ数分しか経ってないぞ。お前たちも、
一応目的地まで少し黙っておいてくれないか？」

「目的地？ どこにいくの？」

「電化店だ。あいつとはぐれたのはその店のあたりだ」

知らない単語だったようで、スピリッツ達は興味津々に聞き返し
てくる。

「“でんかてん”で、どんなところなんですか？」

「テレビとかラジオとか、まあ色々な機械が売ってあるところだ。
だがあそこはもう滅茶苦茶にぶっ壊れて見るとこなんてあまりない
ぞ」

「ふうん。ていうかその人とはどうしてはぐれたんですか？」

「忘れてきたんだ」

「わ、忘れた……」

これにはスピリッツだけでなく、こよみも呆れ返っている。

「まあ、見捨てたという言い方をしても間違いじゃないな。何かあいつうざくて、どこかに消えても構わないとも思ってたし」

「うわっ、ひどっ!」

四人が揃って非難の声を浴びせてくる。

「ひどいのは向こうの方だよ。一般人の俺をこんなことに巻き込んで、肝心なことは何も言わない。化け物と戦わされるわ、カードから人が出てくるわで、こっちはどれだけ混乱してると思ってんだ」

「ほえ?」

この発言に、こよみは何だか罪悪感を持ったように語り掛けた。

「ええと……。あたしが出て来たのって、速人さんに迷惑でした……。?」

「え? ああっ、そういう意味じゃない! 何というかな、それは……」

速人は返答に困った。勿論今の境遇を満足に受け入れたわけではない。だがこよみの言葉を聞いた途端、完全に否定してしまうのは急に躊躇した。

「あゝあ、女の子泣かしちゃった。最低」

「全く、男の風上にもおけんな!」

「うるさい! ていうか別に泣いてないだろうが!」

ちやかしてくるスピリツズに、速人は慌てて声を上げる。仮面の裏の顔は赤くなったりしているだろうか？こよみはそんなことを気にかけていた。

「うわ！ 何だこの臭いは・・・」
「うつつ、鼻が痛いよお」

電化店の前に着いた時、一行を出迎えたのはとてつもない悪臭と、幾体ものポケモン達だった。

地上には紫色の粘液質の塊のような生き物が十匹ほど這いよっていた。足に当たる部分は無く、塊から頭と両腕らしき突起がひょっこりと出てきている。顔はカエルのように、歯の無い口と、垂れたやる気のなさそうな目がついている。

空中には濃い目の紫色の風船のような生き物が四匹、クラゲのように空中に漂っている。直径は60センチ程で、手足はなく、あちこちに火山の口のような突起物が生えている。上部ににやけた人間のような顔が付いており、顔の下の腹に当たる部分には、大きな髑髏マークがついていた。

彼らからは異様な臭いと、明らかに身体に悪そうな嫌な空気が、どこかの廃工場のように大量に放たれていた。地面には何匹もの鳥や昆虫の死体が、ゴミのように幾つも転がっている。

「おい、あれもお前らの仲間か？」

「仲間というか、確かに俺達と同じポケモンだよ。ベトベターとドガースだ」

「うっん、吐きそう・・・」

ディケイドの鎧には防毒効果もあるようで、速人は完全に平気だった。だがこよみとスピリッツは、鼻と口を押さえて苦しんでいる。

「気をつけるよ。ドガースは猛毒ガスを出すから」

「何！？」

言ってる最中に空中を浮いている風船状の生物「ドガース」の一匹が、身体の突起から間欠泉のように大量の黒いガスを吐き出した。

「まずい！」

速人自身は平気だが、ここには生身のこよみもいる。バイクを急回転させて、その場所から離れていく。

その時の揺れで、フシギダネがバイクから転落し、慌てて速人を追いかけていった。

「みんな待つてよおおおおおっ！」

しばらくして速人達は戻ってきた。ただしスピリッツのメンバーはおらず、変身状態の速人の隣に、こよみがコヨミフォックスとなつてふよふよと浮いている。

あれから大分ガスを吐いたようで、あたりの空気は霧がかかったように少し黒く曇っている。

「こよみ、身体は大丈夫か？」

『大丈夫だよ。なんだかこの姿になると、身体がすごく丈夫になるんだ。あれくらいなら全然平気』

二人は毒ポケモンたちに歩み寄る。毒ポケモン達は、興味あるのか否か全く判別できない、のったりとした視線で二人を見ている。

「俺は十文字速人、人間だ。お前たちに聞きたいことがある。この辺りにハラキリトラという虎のぬいぐるみのような変な生き物はいなかったか？」

今までだんまりだった毒ポケモン達は、困った口調でようやく喋りだした。

「トラ？　トラ型のポケモンなんていたっけ？」

「さあ、知らないな。でもぬいぐるみって言ってるぜ」

「うーん。ぬいぐるみなら玩具屋にでも行けばいいんじゃないの？」

どうやら知らないらしい。速人は次の質問に移った。

「お前たちはここで何をしてるんだ？　失礼だがこんなところでいつまでもいると、街が腐ってしまいそうなんだが……」

「酷いこと言うなあ。まあ確かにさっきから鳥がバタバタ落ちてるけど」

「俺達いきなりこんな変な所に来ちゃって、途方に暮れてんだ。考えるならみんなにいるほうがいいだろうって思ったんだけど、なあんにも思いつかねえ。しょうがねえから、ここで皆で仲良く黄昏てる

んだなあ」

毒ポケモン達は軽く笑って答える。とてもそんなに悩んでいるようには見えない。

「判った。じゃあ今すぐ帰してやる」

「帰す？ いや別にいいよ。ここでしばらく日向ぼっこしてる」

「こいつらはもうお帰りだそうだ。頼んだぞこよみ」

速人は毒ポケモン達の意見をさっくり無視。こよみは彼らに近づいて、空中で一回転した。

「ええゝ。俺そんなこと言ってな・・・」

喋る途中で、毒ポケモン達の姿は一瞬で掻き消えた。後には薄汚れた銅製のたらいが転がる。おなじみの光景である。

ただ落ちた時の音が少しおかしかったので、速人達はたらいの中を覗いてみる。

「何だこれ？」

『何だろ？　なんか気持ち悪いね』

電化店の前で数十と並ぶたらいの中には、何やら毒々しい液体が入っていた。それが何かは判るはずがないが、爆弾岩送還の時の二トログリセリンを考えると、とても身体によい物とは思えない。

『これ、どうしよう？』

「放っておこう。そのうち誰か片付けるだろ」

『誰かって、誰？』

「知らん」

そのままあからさまに危険な物体を放置して、二人は電化店に入っ
ていった。

二人はしばらく半壊状態の電化店の中を調べたが、ハラキリトラ
は見つけられなかった。また途中で気がついたことだが、以前倒し
た魔化魍の死体はどこにも無かった。

「あつ！ 帰って来たよ」

少し離れた所にあるコンビニの中を探検していたスピリッツは、
ガラス壁の向こうから速人達の姿を見つけて、外の駐車場に出てき
た。

「どう？ 見つかったの？」

「ううん、全然」

残念そうに首をふるこよみに、スピリッツは気の毒そうに見つめ
る。だがすぐに自分たちの関心事に話を振る。

「それにしてもこよみが狐だったなんてな。てっきり人間かと思っ
てたよ」

『え！？ ちちちち、違うよお！ あたしは人間だよ、多分だけど・
・・』

大きな勘違いをしているヒトカゲに、こよみが必死で否定するが、
何故か途中で自信なさげになっている。

「一応ポケモンというのは、皆言葉が通じるらしいな。だったら当てもなく探し回るより、この街にうろついている奴に聞き回ったほうが確実だな」

『でも、皆近づいたら逃げちゃったよ？』

「ああ、俺はな。でもお前なら大丈夫だろう？」

速人はこよみとスピリッツ達を指差した。

『え？ あたし？』

「俺達？」

「こんなおかしい機械に乗ってくるから、警戒して逃げ出されるんだ。でもお前なら大丈夫だろう？ 下からお前らのことを見てるから、ここらの奴らに聞いていつてくれないか？」

『そうなのかな？ でもあたしはポケモンさんじゃないよ？』

今度はゼニガメが宙を浮いているこよみに話しかけてきた。

「ねえねえ、こよみ。だったら私も一緒に行くからさ、背中に乗っていい？ 私一度空を飛んでみたいの。友達に空を飛べるポケモンが一人もいなくてさ」

『うん、いいよ』

こよみはあっさりとして承する。地面に近づき、背中をゼニガメに向ける。ゼニガメは大喜びでこよみの背に跨った。

「ああっ、ずるいぞ。俺にも乗せろよ！ リーダーは俺なんだぞ！」

これにヒトカゲが文句を言ってきた。フシギダネも乗りたそうな目を向けている。

『そんなこと言っても……。とても皆は乗れないよ』

「だったら交代にすればいいだろ。お前も勇敢な探検家ならちゃんと我慢しろ」

「そうそう、ここは大人らしく我慢だよリーダー」

速人の提案にヒトカゲは悔しそうに頷いた。

ハラキリトラ搜索は、こよみとスピリッツが引き継いで続行された。

速人は変身を解き、上空のこよみ達を見上げながらコンビニの中にあつた菓子を食べていた。

その時、初めて素顔を見たときのスピリッツの反応はすこし大げさすぎるくらいの驚きっぷりだった。こよみの時もそうだったが、初対面が素顔でないと人間とは思われなくなってしまうのだろうか？

「うわあ！ ちょっと待って！ 飛ばしすぎ！」

『え？ ごご、ごめんなさい！』

「いや、そんなに謝らなくていいよ」

空中で三番目の乗り手のフシギダネが、空から眺める人間の街の光景に見入っている。

同じ上空には、飛行ポケモン達が相変わらず飛びまわっており、ビルの屋上で一休みしているものも多々いる。さつきとは違い、彼らは近づいても逃げる素振りは見せない。変身したこよみを同じポケモンだと思っているのだろうか？

「ハラキリトラ？ そんなの知らないね。ただのポケモンなら、そこからへんにいっぱいいるけど」

『そうですか……。ありがとうございます』

こういう風に会話することも出来たが、肝心のハラキリトラの居所は掴めなかった。

そんなことは一切気にせず、ただ下の街を眺めてはしゃいでるフシギダネに、こよみは不思議そうに声をかけた。

『空を飛ぶのって初めてなの？ あんなに飛べる人がいるのに？』

「うん。飛べるポケモンはいっぱいいるけど、面と向かって空を飛ばせて、なんて中々言えなくてさ。人を乗せて飛べるほどの力が無い人も結構いるし」

『そうなんだ。こういう風に飛べるようになったのは最近だから、あたしもすごく気持ちいいよ』

二人はしばらく街中の光景について色々と話した。

『そういえばフシギダネ君たちは、“探検隊”って言ってるけど、皆のいた世界ではそういうのがいっぱいいるの？』

途中でこよみがスピリッツの事について質問した。

「うん。お宝を探したり、悪い奴を捕まえたりする人たちだよ。中には世界を救ったぐらい凄い人たちもいて、僕らのいた世界では皆が探検隊に憧れてるんだ」

『フシギダネ君はそういう人たちになれたんだ。すごいね』

フシギダネはすこし照れた風に答える。

「まあ、そうなんだけどね。実は僕たちまだ新米なんだ。皆知り合
つて一月も経ってないし、あまり凄い活躍もできてないし、さっき
はなんか凄い名乗りを上げちゃったけど、ごめんね」
『うつん。別に気にしてないよ』

こよみはそういつて小さく首を振る。

「そういえばこよみは速人と組んでどのくらい経つの？ あの人も
世界を救うとか、すごいことしてるみたいだけど」
『昨日会ったばかりだよ』

これにフシギダネは少し驚いた。

「昨日？ 何か意外だな。あんなに仲良かったのに」
『そうだね。あったばかりだけど、速人さんともいいだよ。あた
しを家に入れてくれるっていつてくれし』
「そっか。たしか記憶がないんだっけ。でもそれなら安心だね」
『うん。でもちよつと不安かな・・・』

こよみの声が急に心細い風になる。

「どうして？」

『あたし昔のこと全然覚えてないし、どこの世界の子かもわかん
ないもん。速人さんのご家族の人、あたしを受け入れてくれるかな・
・・・？ 妹さんのこともあるし』

未だにこよみの記憶が戻る兆候は全くない。速人は、こういうの
は都合の良い時になれば思い出せる、などと言っていたが、そうい
う場面には一度も出くわさない。

この世界で起きていることは、自分の過去とは全く接点がないことは、鈍感なこよみでも薄々理解していた。

だがこれにフシギダネは、「その程度のこと？」とも言いたそうに、その太い首を曲げている。

「別に大丈夫だと思うよ。記憶が無くても、別の世界からきても、皆で仲良くやってる人はいるし」

『そうなの？』

「そうだよ。僕たちの故郷にいる、世界一の探検隊のリーダーがそういう人なんだ。元は人間だけど、記憶がないんだって。でも普通にポケモンの世界で楽しくやってるし。僕も一度会ったことあるけど、みんな凄くいい人達だったよ」

『そうなんだ・・・』

その探検隊の話に、こよみは大いに驚嘆した。

「だからこよみもあんまり不安そうにしないでいいよ。そんなこと考えてたら、かえって速人に気を遣わせちゃうしね」

『そっか、そうだよね』

こよみは再び明るい口調を取り戻す。ふと気がつくと、速人のいるコンビニが見えなくなっていた。どうやら話してる間に大分遠くまで行ってしまったらしい。

『どどどど、どうしよう！ あんまり遠くに行くなって言われてたのに！』

「うわあ、本当にどうしよう。あのお店が何処にあったか、これじゃ判らないね。ていうかこの街広すぎ・・・」

こよみはどこに行けばいいか判らず混乱したが、その悩みはあっさりと解決した。

『あつ、速人さんだ！』

ディケイドの姿の速人が、ヒトカゲとゼニガメを乗せて空飛ぶバイクでこちらに向かっているのが見えたからだ。

こよみ達はすぐに速人の方に飛び寄る。

「あまり遠くに行くなっていったらどうが。敵に捕まったらどうするんだよ」

『うつつつ、ごごごめんなさい』

「ごめんなさい。僕たち変なこと話し込んでやって……」

こよみだけでなくフシギダネも一緒になって謝った。

「もう遊びはお終いだ。今から俺も一緒に行くぞ」

『はい！ でも今度はどこを探すんですか？ もうみんな逃げちゃいましたよ……』

周囲を眺めると、あれほど大勢飛んでいたポケモン達は、見慣れない不審者^{ディケイド}を警戒して遠ざかっていた。

「とりあえず、あいつらに聞いてみる。あいつらなら逃げないような気がする」

速人が指差した地上には、大きなプール施設があった。よく見るとそのプールの水に、明らかに人間ではない者がいくつも浮いていた。

第二十話：プールの釣り人と伝説のポケモン

速人達一行は、その市営プールに降り立った。いきなりプール内に入るのではなく、駐車場に着陸し、バイクをそこに置いてからしつかり入り口から中に入っていく。

「あれは何だ？」

「ヤドンだよ」

プールには“ヤドン”と呼ばれたポケモンが何匹も住み着いていた。

体格は大きな犬ぐらいで、全身がピンク色の短い毛で覆われている。胴体は豚のように太く、手足も太くて短い。胴体と違って頭の大きさはそれほどでもなく、頭にはカールされた髪のような耳がついている。口は大きく、薄卵色のでかい唇がついている。目は丸く、顔全体を見ると、とても惚けた表情をしているように見えた。

彼らはプール内の地べたで、ある者は水の中でプカプカと浮いており、ある者は陸から尻尾を伸ばして釣竿のように水面に垂らしている。

速人は陸から尾先を垂らしているヤドンに近づき話しかけた。

「少し聞きたいことがあるんだが、いいかな？」

ヤドンは何も答えない。ただボーとして水面についた尾先を眺めている。

「おい、聞こえてるか？」

速人は少し大きな声を上げるが、それでもヤドンは何の反応もしない。一瞬死体かと思ったが、ちゃんと呼吸はしているようだ。速人は、顔をヤドンの耳元に近づける。

「おい！ 何か言えよ、こら！」

耳元に向かって大きな怒鳴り声を上げた。これには後ろにいるスピリッツ達も驚いて、耳を塞ぎそうになる。だが相変わらずヤドンは何の反応も示さない。

「駄目だこいつ。うんともすんとも言わない……」

「少し待てばいいと思うよ」

「待つって、どのぐらい……うわっ！」

突然ヤドンが飛びあがった。今まで石像のように動かなかった人物の突然のアクションに、速人は大いに動揺する。

「うわああああああっ！ 耳が！ 耳があああああっ！」

ヤドンはその短い腕で、耳たぶを押さえて転げ回っている。

『どどど、どうしたの！ 大丈夫ですか！？』

「何事だ、一体？」

「速人さんの声に驚いたんだよ。こいつらすごく鈍感でさ、痛みを感じるのにも数秒かかるらしいよ」

あまりに度が過ぎた鈍感である。耳を押さえて蹲っているヤドンを見て、速人だけでなく、こよみも呆れかえっていた。

やがて落ち着いたのかヤドンは、押さえていた手を耳から離し、再びプールに尻尾を入れようとする。

「悪い、少し聞きたいことがあるんだが……聞こえてるか？」
「んん？ なあゝにゝ？」

さっきの痛みなどもう忘れてしまったのか、ヤドンは随分抜けた声で応対する。先程の毒ポケモン達もやる気なさそうな口調だったが、このヤドンは彼らの更に上をいつている。

「人を探してるんだ。ハラキリトラという小さいトラみたいな生き物を知らないか？」

「んん、んん、んんゝ、知らないなあゝ」

「そうか、ありがとう」

速人はあつさりと話を打ち切った。これ以上彼と会話をすると、無駄に疲れそうな気がしたのだ。

『ヤドンさんはここで何をしてるの？』

そんな速人の思いを無視して、こよみがヤドンに話を切り出してきた。

「釣りをしてるんだなゝ」

『釣り？ その尻尾で？』

「うん。こうして尻尾を垂らすと、時々魚がかみついてくれるんだなあゝ」

速人は更なる一息を吐いて、ヤドンに再び話しかける。

「残念だが、ここはプールという人口の水場だ。魚なんて一匹もいやしないぞ」

『ええ〜？ そうなの〜？ じゃあ魚が出てくるまで待つてるんだな〜』

「こよみ、こいつを元の世界に帰してやってくれ。他の奴らも皆だ」

相手の意思を聞かず、即行の判断だった。これにこよみが少し戸惑う。

『い、いいのかな？』

「こいつらをこのままにしたら、間違いなく餓死するぞ。全てこいつらのためだ」

『そうだね・・・』

こよみの身体から粒子状の光が噴出した。そしてプール内を小鳥のように飛びまわる。変化は一瞬、プールの中にいた十数匹のヤドンは、忍者のようにドロロンと消えてしまう。

ヤドン達がいた場所には、銅製のたらいが出現し、地面や水面に落ちていく。これにスピリッツ達は飛び上がるように驚いた。

「うわあっ！ ヤドンがたらいになっちゃった!？」

「違う違う、たらいになったのはこいつらにかけられた魔法の力だ。あいつらはもう元の世界に帰ったよ」

「そ、そうなんだ・・・。何か想像してたのと違う帰り方だね・・・」

今回出現したたらいの中には、普通の水が入っていた。そしてその水の中に多くの貝が入っている。相変わらず、どういう基準でたらいの種類が変わるのか謎である。

『なんだろあれ？ 温泉？』

「温泉じゃない！ 火事だ！」

「燃えろおおおっ！　燃えてしまええええええ！」

「お前！ 何をしている！」

「何だお前は！？」人間か！？」
「だつたら俺を元の住処に帰せ！」

せつかく火口で気持ちよく昼寝をしていたのに、いきなりこんなことに連れ出しやがって！ 大方お前ら人間の仕業だろう！ さつさと俺を帰さないと、もっとこの街を燃やしてやるぞ！」

スピリッツはそのポケモンの威圧感に、気絶しそうなほど動転していた。

「違う！ 俺は関係ない！ ていうか説得する必要はないな……。
こよみ、また頼む！」
『はい！』

こよみはポケモンの目上を飛びまわり、光の粒子を放ちながらグルリと一回転した。

「なんだあ！？ やる気……」

怒声は一瞬にして止んだ。ポケモンは激怒状態のまま、本人の望み通り元の世界へと送還されて消えていった。後には赤い材質不明のたらいが置かれている。今回のたらいには、グツグツと煮えたぎる溶岩が入っていた。

だが事態はこれで住んだわけではない。ポケモンが放った火は、未だに街を燃やし続けている。

『わわわわっ、どうしよう！ 消防の人は！？』

「そんなの今のこの街にいるわけないだろうが！」

デイクイドには破壊の力はあっても、災害を止める力はない。どうすればいいのか悩んでいる間に、ゼニガメが地獄のように燃え盛る炎に駆け寄った。

「私に任せて！ 水鉄砲！」

ゼニガメの口から大量の水が、その名の通り水鉄砲のごとく噴出された。

その水は、一般家庭で使われる蛇口のホースからの放水よりは、遥かに勢いはあった。だが消防車の放水等とは比べ物にならないくらい弱い。

当然そんなものでこの灼熱が収まるわけもなく、やがてゼニガメは力尽きて膝をついた。

「ごめんなさい。やっぱり駄目でした……」

火災は相変わらず続いており、その範囲は徐々に拡大してきている。

「くそ、こうなったら一か八かだ。ここはバツシャーで……」

速人は二枚のカードを取り出した。だがそれを装填する前に、更なる予想外の事態が起こった。街の火災が起こっている範囲全てに、凍てつく突風が吹いたのだ。

「今度は何なんだ！」

それは吹雪と呼ばれるものとは少し違っていた。とてつもない冷たい風が、大嵐となつ幾度も風向きを変えながら吹き荒れている。

その風に煽られた炎は大いに揺らめきながら、油が切れたランプのように見る見る勢いを弱めていった。

「“ごえるかぜ”よ！ でもこんなに強力なのは……。うわあっ！ 寒くてもう冬眠するどころじゃないわ！」

『わわわわわっ！ 飛ばされちゃうよおおお！』
「皆どこか建物の中に入るんだ！」

一行は近くにある、駐車施設と思われるコンクリート製の地下への入り口に避難する。材質ゆえかここは火の手が元々弱く、この突風で完全に消火されていた。

冷風は二分ほどで止んだ。風音が止んだことに気付いた一行は、地下駐車場から外に出てきた。

『うわあ！ 真っ白になっちゃった！』

「冬ってこんなに早く来るもの・・・じゃないよな？」

「うつつうつつ、寒いよお」

先程まで真っ赤に染まっていた街は、今は正反対に、化粧をしたかのように白く染まっていた。

雪などは積もっていないが、強烈な冷気が元で、建物も道路も車も、全てに氷が張り付き、辺りを本当に雪が降ったように白く変色させている。

天候は快晴。太陽の光がこの白化粧を眩しく当てているが、これらが溶けるにはもう少し時間がかかるだろう。

『ふはははははははっ！ 伝説のポケモン・ヒードランさえも送還してしまったか。奴にかけられた誓約の力は、限界までに強くかけられていたのだな。面白い！ やはりこうきなくてはな！』

拡声器で上げられたと思われる男の声が、街中に響き渡る。納谷悟朗のような濁った声である。

「誰だ！？ どこにいる！？ お前が本条健史か！？」

速人が空に向かって叫ぶ。するとその空から大きな鳥の影が三つ舞い降りてきた。その影はゆっくり下降してこちらに接近しており、その姿がはつきりとしてくる。

「ああっ！ あれは伝説の……！」

この姿を見たスピリッツは、啞然として彼らの姿を見上げていた。

「あいつらを知ってるのか？」

彼らは人ほどの大きさがある鳥型ポケモンだった。

一羽は青白い羽毛で覆われ、嘴は短く、頭には三つの鶏冠が並んで生えていた。

一羽は体色がオレンジ色で、頭には馬のような鬣が生えている。その鬣と翼、そして尾羽は炎となって赤く揺らめいている。

一羽は全身の羽毛が黄色く、全てが剣のように鋭く尖っている。嘴も非常に長く、槍のように鋭い。まさに全身ギザギザの巨大鳥だった。

「伝説のポケモン……、フリーザー、ファイヤー、サンダーだ！ はじめて見た！」

どうやらこの鳥たちもポケモンらしい。彼らを見上げるスピリッツ達は、感動で大いに震えていた。

「何だ？ お前らもこいつらの仲間か？ さっきの声はお前達じゃないよな？」

彼らの返事は攻撃だった。速人が問いかけた瞬間、青い鳥「フリーザー」が口から青白い光線をいきなり発射した。

「うわ！」

速人はそれを即座にかわす。速人の背後にあつたビルにその光線が直撃した。するとそのビルが一瞬にして氷河期の廃墟に変わった。大量の冷気を噴出し、白くなっていた壁がさらに白く、分厚い氷に覆われてしまう。

その氷の塊と化したビルが一瞬で砕け散った。もろい氷をハンマーで叩いたように、5階建ての巨大な物体がパラパラと細かく分解して崩れ落ちる。

「うわあつ！ な、何で！？」

伝説のポケモンの、あまりに礼のない行動にスピリッツ達は我が目を疑った。

「こよみ！」

『わかってます！』

こよみが三羽の鳥ポケモン達に向かって飛ぶ。そして彼らの前で光の粒子を撒き散らして、ひらりと一回転した。

いつもならこれで誓約という名の魔法に縛られた者は、即座に元の世界に帰され、後にはたらいだけが残される。だが今回はそうならなかった。

「え？　なな、何で！？」

彼らは送還されなかった。こよみの目の前に一個のたらいが、意味をなさずに落ちるだけである。

「そんなもの効かんわ！」

黄色い鳥「サンダーがその言葉を発し、翼を広げる。すると両翼の中央から、強烈な稲妻が魔法のように放たれた。彼らの真ん前にいたこよみは、それをまともに喰らってしまう。

『きゃああああああっ！』

「こよみ！」

青い稲光に包まれながら感電し、こよみは弾き飛ばされた。速人は即座にこよみを前に回り、鳥ポケモン達に立ちはだかる。

第二十一話：氷雷の鳥とアギト

『ふはははははははっ！ 実験は成功のようだな！ 貴様のその妙なディスプレイは、もはや通用しない！』

再びあの時の声が耳に響くように聞こえてくる。やはりこれは目の前の鳥ポケモンの声ではないようだ。一体どこから、どうやって声を届けているのか全く謎である。

「貴様は誰だ！ 出てこないなら、せめて名乗れ！」

こよみを傷つけられたことで、速人は激しい怒号と共にそう叫ぶ。返答はすぐにやってきた。

『我はブラックサタン大首領。あらゆる生物を支配できるサタン虫を統括する者だ』

聞き覚えのある名前だ。速人は少し考え込む。そして思い出した。

「ああ、あんたがサタン虫の操り手か。それでポケモンを使って俺達を始末しに来たか？」

『その通り！ この街の一連の行動は見学させてもらった。その狐娘が召喚獣を送還するたびに、その魔力の波動を記録させてもらったよ。そのデータを基に、こいつらの誓約の魔法方程式を、その魔力に耐性がつくように書き換えたのだ。そのせいで誓約の支配力が低下してしまったが、奇械人を内に入れることで難なく制御できた！』

「どうやら相手は速人たちを使って実験をしていたらしい。“奇械人”とは何なのか判らないが、大首領の声は実験成功の喜びに満ちていた。」

「そのためにあんなに沢山のポケモンを召喚したのか？ 面倒なことをする。そんなことをせずに、お前自ら出てきたらどうなんだ？」
『統率者がそうそう簡単に前線に出るわけがなからう。それに主が言っていた。技術の進歩は実戦の中で発見することもある、とな。さあ、お喋りはここまでのだ。かかれいっ！』

炎の鳥「ファイヤーが口から強烈な熱線を、サンダーが稲妻を同時に発射した。」

速人はこよみを抱え、それをジャンプしてかわす。二つの攻撃が着弾した地面は、赤い光と電光と共に、地雷を踏んだように大爆発した。

「『うわああああああっ！』」

事態が理解できず当惑していたスピリッツ達は、その爆風に吞まれ、葉のように吹き飛んでいった。

「こよみ、まだ飛べるか？」

『うん。まだあちこち痛くて熱いけど・・・多分大丈夫です』

こよみを抱えた状態で、敵に目を離さないまま二人は会話を始めた。

「そうか。じゃあすまないが、あのチビ共を助けに行ってくれ。こいつらは俺が片をつける」

『うん、任せて！』

鳥ポケモン達の二回目の同時攻撃がやってきた。速人はそれを、新体操のジャンプのような後方飛びで回避する。

再び地面が爆発した。空中にいる間に、こよみは速人の腕から抜け出て、スピリッツの飛んでいった方向に向かっていく。そして着地した速人の腕には二枚のカードが握られていた。

「くたばれえ！」

「当たるか！」

フリーザーが冷凍ビームを発射し、それを速人が身体を回しながら動いて回避する。その間に速人は一枚目のカードを装填した。

『カメンライド アギト！』

ディケイドのバツクルから、四本の竜の角のような紋章が浮かぶ。直後にバツクルから、フラッシュのように強烈な光が放たれた。その光に鳥ポケモン達は一瞬目を曇らせる。

光が収まると、例のごとく速人のディケイドの鎧は、別の姿へと変わっていた。その姿は以前変身したクウガに酷似していた。だが胸は金色で、肩当は黒くて上向きに尖っている。目の色は同じ赤色。角も似たような形だが、角先が内側に曲がっており、クウガとは微妙に違う。

光の力によって進化した超人類：仮面ライダーアギトの姿である。

「どんな姿になろうと、伝説のポケモンである我ら三人に適うものか！」

「それと同じような台詞を前にも聞いたよ」

速人は呆れ声を上げながら、二枚目のカードを使った。

『アタックライド マシントルネイダー！』

近くに置いてあったディケイドのバイクの前に、巨大なアギトの紋章が立体画像のように浮かび上がった。その紋章は後ろ向きに動き、ディケイドのバイクをすり抜けて行く。通り抜け終わると、そのバイクが別の姿に変わっていた。

その姿は、全体的にアギトの鎧と同じ金色で、一部分が赤。ライトは青く、前面の両側に二つあり、動物の目のようにデザインになっている。アギトの専用マシン：マシントルネイダーである。

マシントルネイダーは自動走行で速人の元へと走っていく。速人は続けて発射される鳥ポケモン達の攻撃を避けながら、素早く走行中のそれに乗り込んだ。

速人はアクセルを踏み、二体の鳥ポケモンから逃げていく。

ふと何を思ったのか、速人は車上で立ち上がり、スノーボートのように座席に乗りかかった。するとマシントルネイダーが機械的な変形を遂げ始めた。

前後のタイヤが90度回転して、車体が宙に浮いた。同時に車体のボディがスライド変形して伸びる。そして後部の排気口から、青いエネルギーがジェット噴射として排出される。

地上を走る乗り物であるはずのバイクが、一瞬にして飛行用の乗り物に変わってしまった。マシントルネイダーの飛行形態：スライダーモードである。

「うおおおおおっ！」

速人の乗るマシントルネイダーの速度が、大きく加速して道路の

上を飛び抜ける。その速度は鳥ポケモンの飛行速度を遙かに上回っていた。

鳥ポケモン達からある程度距離を取ると、車体を上に大きく曲げて上空に舞い上がった。そしてそのまま空中を曲がりながら、背後から迫る鳥ポケモン達に向かって突進した。

「なにいつ!？」

とてつもない速度で迫ってくる速人に、鳥ポケモン達は仰天した。反射的に速人の進行方向から外れる。そこを速人が、弾丸のようなどてつもない速度で通り抜けた。一秒でも反応が遅れていたら、間違いなく轢かれていただろう。

敵を捕らえ損ねた速人は、即座に速度を緩め、スケート選手のように空中を一回転した。

「喰らえっ!」

サンダーとフリーザーがその隙に、速人に次々と電気と冷気の攻撃を放った。だが攻撃は当たらない。

マシントルネイダーの機動力は凄まじく、それらの攻撃を全て擦れ擦れでかわし、彼らに向かって再び突進してくる。

「ならば風に吹かれてしまえ!」

フリーザーが翼を広げて大きく羽ばたいた。するとそこから強烈な冷風が竜巻のように放たれる。風を受けた辺り一面が、先程の嵐と同じように凍りつき、物が飛び、電柱が古木のようにたやすく倒れていく。

この風に煽られ速人の猛進も一瞬緩んだ。空中で少しバランスを崩し、慌ててそれを立て直す。烏ボケモン達はその隙をついた。

「電磁砲！」

フリーザーが唐突に風を止め、その直後にサンダーが、その名の通り砲弾のような巨大な雷撃球を放つ。

風の停止に一瞬困惑していた速人は、それをまともに受けてしまった。

「なあっ！？」

雷撃球の直撃と共に、速人の身体が大量の電光を放ちながら青い光に包まれる。その余波を受けた周囲の凍りついた建物が、電熱により一瞬で解凍され、火がつき、燃え上がり始めた。

「はははははっ！ これで貴様はしばらく動けまい！ この技は、当たると100パーセントの確立で、身体が麻痺してしまうのだよ！」

サンダーが高笑いを上げる。やがて電光が収まり、速人の姿が現れる。だが……。

「別に普通に動けるんだが？」

「はい？」

あっさりとした解答にサンダーは目を丸くする。そこにはマシントルネイダーに乗った、五体満足の速人がいた。

アギトの鎧には傷一つついておらず、プラプラと調子を試すように手を振っている。どうやら麻痺もしていないようだった。

「おのれえっ！　10万ボルト！」

サンダーは再び稲妻を放った。凄まじい電撃が、すぐ近くにまで迫っていた速人に直撃する。だがこの攻撃も先程と同じく全く通じておらず、攻撃が収まった後で無傷の速人が現れる。

「馬鹿な！？　何故効かない！？」

「そんなの俺にも判らねえよ。まあ、多少全身がビリツときたけどさ……」

どうやら速人が何か策をこつじた訳ではないようだ。当の本人もサンダーと同様、疑問の声を上げている。

「お前、まさか！　地面タイプなのか！？」

「何だよそりゃ？」

会話の間にパワーチャージしていたマシントルネイダーのエネルギーを、速人は一気に解放させた。空中で一時停止していたマシントルネイダーが、サンダー目掛けて急発進する。

「ぐがつ！」

突進する車体がサンダーの腹部に命中した。前方のタイヤがサンダーの腹を押し付け、そのままサンダーと共に前方へ飛んでいく。そして徐々に下方に車体を傾け、サンダーを地面のアスファルトに叩き付けた。

「がつ………！」

サンダーは悲鳴さえ上げられなかった。

工事現場で聞こえるようなうるさい音と共に、サンダーの身体がアスファルトを抉り、大地に大きな溝を掘っていく。やがてサンダーの口から大量の血が吐き出された。

「よつと！」

それと同時に、速人は出力を弱めて上方に飛び、サンダーを解放した。地面には城の大堀のような穴の最奥で、サンダーが目を白くして失神していた。

「おのれえ！」

背後からフリーザーが冷凍ビームを放つ。速人はそれを難なくかわす。

「そつちが氷なら、こつちは炎だ！」

速人が一声、気合を上げる。するとバックルから赤い光が放たれ、同時に速人を包む空間が、螺旋状に歪んだ。その現象は一瞬で終わり、後に現れたアギトの鎧が若干変化していた。

鎧の金色だった部分が赤く変色し、右腕の肩当てが以前よりずっと大きくなっている。炎の力を宿すアギトのパワー形態：フレイムフォームである。

速人がディケイドウェポンを抜くと、それは長刀に変異した。刀身は日本刀のようで、鍔はアギトの角を模った物になっており、その中央には青い宝石が埋め込まれている。炎の力をアギトの武器の一つ：フレイムセイバーである。

「おのれえっ！」

フリーザーが次々と冷凍ビームを発射する。それをかわしながら速人はアギトの必殺カードを繰り出した。

『ファイナルアタックライド アアアアギト！』

バックルに再びアギトの紋章が浮かぶ。直後にフレイムセイバーの鐔は、二本角から六本角へと、花を開くように展開した。すると刀身に強力な炎の力が宿り始める。

フリーザーがもう何度目かも判らない冷凍ビームを発射した。それを今度は避けて刀で受け止める。

ジュワ！と水が蒸発する音が、剣身から放たれた。フリーザーの氷の力は、フレイムセイバーの炎の力にあっさりと掻き消された。速人はそのままシントルネイダーで突進した。

「しまった！」

フリーザーによけるチャンスはもはやない。速人はすれ違いざま、フリーザーの身体を炎の剣で斬りつける。

「ぎゃああああああああっ！」

フリーザーが鳥らしくない甲高い悲鳴を上げる。傷口は焼け付き、そのまま力尽きて落下していく。一応死なないように手加減したつもりだったが、果たしてあれで生きていられるかは微妙である。

速人はそれを見下ろしながら、フレイムフォームから、大地の力を宿す金色のアギトの通常形態：グランドフォームの姿に戻る。そ

こである事に気がついた。

（ファイヤーがない！？）

あの炎の鳥の姿が、いつのまに消えていたのだ。

思い返してみれば、いなくなったのは、たった今ではない。逃げたのでなければ考えられることは一つ。敵が自分以外に狙うものなど他にいない。

「くそ！ こよみが・・・うん？」

こよみに向かおうとした時、倒れた鳥ポケモンの身体から蒸気のような白い煙が吹き出てきた。これに速人はつい動きを止める。

「何なんだ、一体？」

煙は鳥ポケモンの姿が完全に見えなくなるまで濃くなると、一瞬で掻き消えた。すると倒れた鳥ポケモンの側には、先程まではいなかった謎の人物達が立っていた。

第二十二話：奇械人と炎の鳥

「俺は奇械人ワニーダ！」

「奇械人ガンガルだ！」

二人はご丁寧に名乗りを上げてくれる。

彼らは金属的な外装を持つ、ロボットのような生物だった。体型は人間と動物を組み合わせたようで、子供の玩具のような奇抜なデザインをしている。

どうやらこれが例の奇械人のようだ。状況から見て、彼らがこの鳥ポケモン達の肉体に乗り移って、速人を攻撃していたらしい。

「シャア！」

ワニーダが空中の速人目掛けて飛びあがった。そしてその名の通り、鰐のような大きく強靱な顎で噛み付こうとする。

「よつと！」

速人はそれを簡単に受け止めた。迫ってくる鋭い歯が生え揃った両顎を、噛み付かれる直前に両腕で口先を掴む。

「うりゃあ！」

速人はその両顎を、思いつきり開かせた。バキ！と骨が折れるような音が聞こえて、ワニーダの顎の関節が破壊される。

さらにそれをハンドルのように回転させて、ワニーダの首を捻じ切ってしまった。ワニーダは機械の部品と赤い血を、折れた首筋から吹きながら息絶えた。

「ひいつ！」

それを見たガンガルが、敵わないと見て背を向けて逃げ出した。速人はそれを見逃さない。マシントルネイダーに乗ったまま、再びアギトの必殺カードを装填する。

『ファイナルアタックライド アアアアギト！』

さつきと全く同じ電子音声が鳴る。今回開いたのは刀の鐔ではなく、アギト自身の角だった。

「逃がすか！」

逃げるガンガルをマシントルネイダーで追う。両者の速度は歴然で、すぐに速人が追いつきそうになる。そのまま轢くのかと思ったら、直前になって急停止した。

「はあっ！」

停止の反動と共に、ガンガルのいる前方に向かって飛び上がる。そして空中で一回転して、マシンの助走を加えた高速の飛び蹴りを放った。

「イヤアアア！」

その蹴りを受けたガンガルは、情けない悲鳴と共に、僅かな原形も残さず粉微塵と化した。その攻撃の余波で大量の破片が飛び散る。後には、地面にできた巨大なクレーターの真ん中に立つ、速人の姿があった。

勝利の余韻につかる暇もなく、速人はすぐにマシンに乗り直し、こよみのほうへと向かっていった。

『うわあああああん！ こっち来ないでよお！』

速人の予想通り、こよみはファイヤーに追われていた。放たれる火炎放射が、必死に逃げるこよみを次々と襲う。

以前の鳥怪人のこともあって、敵の炎が魔法の力によるものでない可能性がある。だからといって、たらい魔法が効くかどうかを、無理に試すことはできない。下手をすれば、その隙にやられてしまう。

「……とりゃあああああつ！……」

突然聞き覚えのある三名の声が、どこからか同時に放たれた。その瞬間、ファイヤーの動きが止まる。

『みんな！？』

こよみが振り向くと、ファイヤーの身体に、スピリッツ達が張り付いていた。恐らく頭上の建物の屋上から飛び降りて、ファイヤーに掴みかかったのだろう。

「この野郎！ こよみに手を出すな！」

「伝説だからって、あたしらをなめないでよ！」

「うっ、熱いよお。やっぱり火は嫌だ」

スピリッツ達はファイヤーの首や翼を掴み、動きを封じようと頑張っている。だが……。

「はあっ！」

ファイヤーは翼を広げ、空中でプロペラのように身体を一回転させた。その勢いでスピリッツ達は虫のように簡単に払い落とされてしまう。やはり力では到底敵わない。

「ふん。下等ポケモンが馬鹿な真似を……なっ！」

ファイヤーがこよみに目を向けると、怒ったこよみが、たらい魔法の光の粒子を撒き散らしながら、ファイヤーに突進してきていた。

「ええええええええいつ！」

スピリッツ達に気を取られていたファイヤーは、その体当たりをまともに受ける。だがファイヤーがダメージを受けた様子はない。

「くだらん。そんなひ弱な力で……」

抗弁の途中で、ファイヤーの姿は瞬時に消滅した。

「え？」

後には熱湯の入った鋼のたらいが残されていた。

「やった……のかな？」

こよみが息を切らしながら、湯気を立てるたらいを見つめ、そう呟く。

やはり離れた距離から魔法をかけるのと、身体に接触して直接魔法をかけるのでは、効力が大きく違うらしい。さつきは通じなかったらしい魔法の力により、ファイヤーの誓約の魔法は書き換えられ、あっさりと元の世界へと送り返されてしまった。

「やったな、こよみ！」

「すごいわ！ 伝説のポケモンをやっつけちゃった！」

無事だったらしいスピリッツ達が、こよみの元へと駆け寄って賛嘆の言葉を投げかけた。

『ううん。別にやっつけたわけじゃないんだけど……。でも皆が無事でよかったよ』

ふと低いエンジン音が聞こえてきた。音の先を見ると、アギトの姿の速人がマシントルネイダーに乗ってこちらに近づいてくる。腰のベルトを見て、こよみは直ぐにその人物が速人だと理解した。

『良かった。速人さんも無事だったんだね』

速人はこよみ達の前に降り立つと、アギトからディケイドの姿へと戻る。するとマシントルネイダーも元の姿に戻った。

速人は最初の火災と、今までの戦闘が元でボロボロになった街を見渡し、大きく一声上げた。

「ブラックサタン大首領！ お前の部下は倒したぞ！ いい加減姿を見せる！」

ブームボイスの機能で拡張された声が、街中に響き渡る。それに対する返答は声ではなかった。

突然街全体が崩れそうなほどの巨大な地鳴りが発生したのだ。

「何だ！？」

「じ、地震だ！」

一行は建物の倒壊に巻き込まれないため、なるべく広いところに場所を移す。ゴゴゴゴッ！と常人なら立つてられない程の揺れが長く起こり続ける。

なおこよみは宙に浮いているため、地鳴りの影響は全く受けていない。

これが本当にただの地震のはずがない。やがて平地のある一点が、下から持ち上げられるように隆起し始めた。

『あれって！？』

「気をつける！ 地中に何かいるぞ！」

隆起は山のように大きくなっていき、土が湧き水のようにモリモリと盛り上がっていく。

やがて隆起が、地雷の爆発のように碎け散った。そして地中からモグラのように何かが這い出てくる。

『く、くもー！？』

「何あれ！？ ポケモン！？」

「あんなの図鑑でも一度も見たことがないわよ！」

「こよみ、スピリッツ、悪いがもう一回下がっていてくれ」

それは蜘蛛のような巨大な虫型生物だった。

体長は約7、8メートル、腹部と胴体は紫色で、八本の足は黒で疣のような毛が無数に生えている。そして頭部は、巨大な人間の白い髑髏の形をしていた。この髑髏が、頭の上に被せた骸骨マスクな

のか、それともこの生物の本当の顔なのかは、速人達には判別できなかった。ただしその髑髏の表面の質感は、本物の骨にかなり近いものだった。

その髑髏から、スピーカー越しに喋るように人の声が発せられた。

『おのれえ、やってくれる！ 仮面ライダーとは、どこの世界でも迷惑な存在なのだ！』

その声は間違いなく、ブラックサタン大首領のものだった。すると髑髏の口が、カスタネットのようにカパリと開き、口内から大量の紫色の液体が、速人に向かって放水された。

速人ときよみは、スピリッツ達の身体を掴み、驚異的なジャンプ力でそれを避ける。液体が付着した地面は、泥沼のように溶解していった。

「ようやくお出ましか。しかしサタン虫の操り手が、サタン虫そのものだったとは思わなかったな」

『ふん。いるのは我だけではないぞ』

速人は気配を感じ、素早く背後に振り返った。いつのまに現れたのか、そこには大首領とは別の怪物が立っていた。

「デイ、ディアルガ！？ 何であいつまで？」

ヒトカゲが驚愕の声を上げる。

その怪物は、四足歩行で、恐竜の竜脚下目のような首の長いトカゲ型の体型だった。身長は5m程。目は赤く、後頭部が以前会った酸の怪物に似て非常に長い。皮膚は青く、胸等を含めた身体の各部には銀色の甲殻が付いている。その胸の甲殻には宝石のような青い結晶が埋め込まれている。背中には葉団扇のような、銀色の背ビレ

が生えていた。

ヒトカゲの反応を見る限り、この生物もポケモンのようだ。

「いかにも、俺はディアルガ！ 時を司る究極のポケモンの一人だ。貴様が相手をしていた、あの鳥共とは格が違うぞ」

得意げに名乗るディアルガに、速人は馬鹿にしてせせら笑った。

「どうせ中には、奇械人が寄生してるんだろ？ すぐに俺が引つ張り出して目を覚まさせてやるよ」

その時ライドブッカーが、速人の言葉に答えたかのように自動的に開いた。そして中から一枚のカードが排出される。

この現象はこれで三度目なので、速人は動揺することなく、そのカードを左手で受け止めた。

「これは？」

そのカードの絵柄は、コヨミフォックスのカードと同じで、トラップのように上下斜めの線で区切られていた。

上部には黄色く丸っこいハムスターのような生き物の写真がある。下部には、そのハムスターの毛色をオレンジ色にして、耳と尻尾を長くした生き物の写真が貼られている。名前の欄には“EVOLUTION”と記載されていた。

『何ですか、そのカード？』

「使ってみれば判る」

速人は即効でカードをバツクルに差し込んだ。

『ファイナルアタックライド ポポポケモン!』

上下が一線で区切られ、線の中央に丸い点がつけられた紋章が、バツクルに浮かび上がった。

「少し痒いぞ」

速人は右手に抱えていたヒトカゲとゼニガメを下ろした。これに二人は不思議そうに速人を見上げる。

「え？」

「痒い？」

速人はヒトカゲとゼニガメ、そしてこよみの背に乗っていたフシギダネの背中を、右手ではたくように触れた。その瞬間、三人の身体が強い光に包まれる。

「おおっ!？」

「なになに、何なの!？」

「すごい! 身体から力が溢れてくる!」

光と共に身体の輪郭が歪み、スピリッツ達の身体が、見る見る大きくなっていく。フシギダネは慌ててこよみの背から降りた。

『速人さんこれって!?!』

「進化だな……」

光が収まると、スピリッツ達の姿は大いに変化していた。

ヒトカゲは、トカゲから赤いドラゴンの姿に変わっていた。身長

は170cm程で、体格は普通の人間よりも一回り大きいくらい。角が生えた肉食獣らしい鋭い顔で、背中に翼竜のような翼が生えている。尻尾の先には今までと変わらず灯火のような炎が灯されていた。

ゼニガメは、身体がかなり太めになり、頭には耳のような短い角が生えている。背中には二本の巨大な大砲が生えていた。身長はヒトカゲよりも少し低い、力士のようなどっしりした体型から、こちらのほうが大きく見える。

フシギバナは、背中の球根のような物体が大きく開き、そこからラフレシアを超える巨大な赤い花が咲いていた。その花の下には、大きな葉が全面から生えており、フシギダネの姿の半分を隠してしまっている。

いずれも以前の面影は残っているものの、最初の可愛いイメージは無くなっていた。そして彼らの腹部には、共通してディケイドの紋章が刺青のように描かれていた。

ディケイドのライダーカードのパワーで、一時進化したポケモンの強化形態：ライダーリザードン・ライダーカメックス・ライダーフシギバナである。

「うおおおおおおっ！」

「はあああああああっ！」

「ぎええええええいっ！」

カードの力で急激に進化したスピリッツ達は、漲る力を発散させるように遠吠えを放った。その剣幕に、ディアルガとブラックサタン大首領も僅かに怯む。

「スピリッツ！ お前らにディアルガを任せたいが、行けそうか？」

「OK！ ここは私たちに任せてよ！」

「今なら火のポケモンにだって勝てそうな気がします！」

「よっしゃあああつ！ 行っくぜええええつ！」

気合は十分。スピリッツは速人の後ろに回り、ディアルガに掛かっていた。

第二十三話：ブラックサタン大首領とブレイド（前書き）

前回書き忘れましたが、不調だったパソコンの代替えが出来ました。更新停止にならずに済んで良かったです。

第二十三話：ブラックサタン大首領とブレイド

それと共に、速人は新たなカードを使用した。

『カメンライド ブレイド！』

バックルに、ランプのスペードのマークが浮かぶ。するとバックルから、巨大な長方形の光の壁が召喚され、それは回転しながら速人の眼前に立つ。その光の壁には、上面から見た青いカブト虫の姿が描かれており、カブト虫の腹には赤いスペードの紋章が付いていた。

「はっ！」

速人は走り出して、その壁を通り抜けた。通り抜けた瞬間、お決まりのようにディケイドの鎧が別の物に変化している。

その鎧は手足と頭の部分は青く、胴や肩当ては鼠色だった。胴はかなり重厚になっており、胸の中央にスペードを模した模様が刻まれている。顔には細長い銀色の装甲が張られており、それは一本の鋭い角となって、頭の上まで伸びている。その装甲内部の左右両側には、丸く赤い目が付いている。古代生物アンデットを封印して力を得る、対アンデット用人間兵器：仮面ライダー^{ブレイド}剣の姿である。

ディケイドウェポンが、奇抜な形の片刃式の剣へと変身した。

刃先は鼠色で、刃の中央は金色、鍔元は青、そこにデジタル時計のような画面が付いている。そして柄の横には、何故かカードデッキのようなものが取り付けられていた。ブレイドの専用武器：醒剣ブレイラウザーである。

「はあっ！」

速人はブレイラウザーを構え、ブラックサタン大首領に掛かっていった。

「切り裂き！」

「突進！」

「瓦割り！」

スピリッツ達は、三人同時にディアルガに爪や体当たりで攻撃を仕掛けてきた。ディアルガは、四本の足で後ろ向きに飛び跳ねて、それらをかわす。

そして着地と同時に突進して、空振りで隙が出来たスピリッツ達に前足蹴りを与えた。

「うわあっ！」

「きゃあっ！」

重量級のゼニガメとフシギダネは、それを避けきれず弾き飛ばされる。だがヒトカゲはそれを素早く回避し、ディアルガにカウンタ―攻撃を加えた。

「もういっちょ、切り裂き！」

ヒトカゲのナイフのように鋭い爪が、ディアルガの長い右前足を

斬りつける。青い皮膚に深く細い溝が三本掘られ、ディアルガが痛みで一瞬怯む。

この隙に、ヒトカゲはその足を掴み上げ、自身の何倍もあるディアルガの巨体を背負い投げた。

「うりゃああああああっ！」

正面から身体を地面の瓦礫に叩きつけられ、ディアルガが昏倒する。それにヒトカゲが素早く間合いを取り、大きく息を吸って、至近距離から特大の熱線を放射した。

「大文字！」

極太の熱線がディアルガの身体を灼熱で包み、放射の勢いで前方に吹き飛ばし、近くの居酒屋に激突させる。

その居酒屋の建物は、強すぎる熱のせいで、火事にすらならなかった。攻撃の余波で、一瞬で炭となって消えてしまったのだ。直後に一瞬、赤い炎で描かれた『大』の文字が空中に現れ、そして消滅した。

ディアルガは身体に火傷を負いながらも、素早く立ち上がる。

「おのれえ！ 破壊光線！」

ディアルガの胸の水晶が一瞬光り、口から青色の強力な光線を放射される。

だがダメージのせいで発射のタイミングが遅れ、ヒトカゲに簡単にかわされてしまった。破壊光線が着弾した道路は、ミサイルが撃ち込まれたかのように盛大に砕け散り、一つのクレーターを形成させた。

「ハイドロポンプ！」

一連の戦闘の最中に、発射態勢を整えていたゼニガメが、ディアルガ目掛けて水の大技を放った。背中の二門の大砲から、大量の水が激流のように勢いよく噴射される。

「ぐああああっ！」

それを身体の左横の胴に受けたディアルガは、そのあまりの水圧に悶絶した。その威力は、先程火事を止めようと放った水鉄砲等とは、天と地ほどの差があった。

ディアルガは近くのホテルビルに叩きつけられ、その衝撃でビル全体が、砂の城のようにたやすく崩壊する。それによりディアルガの身体が瓦礫に埋まっていった。

攻撃を準備していたのはゼニガメだけではなく、フシギダネは背中から生える葉を広げ、太陽の光を受けてエネルギーをチャージしていた。そしてディアルガが水の大砲に吹き飛んだ直後に、その力で追撃を加える。

「ソーラービーム！」

背中の花の中央から、緑色の光線が放たれる。そしてディアルガが埋まった瓦礫の山に直撃した。瓦礫は紙のようにたやすく吹き飛び、ディアルガの姿が再び現れる。

「マズイ……。コノママデハ……」

三度目の吹き飛びを受けたディアルガの身体から、突如謎の白い

煙が噴出した。

家々を薙ぎ払い、近くの道路に叩きつけられても、その煙の噴出は止まない。

「何だよ、あれ!？」

飛んでいったディアルガを追って、スピリッツがその場に到着したと同時に、その煙は瞬時に掻き消えた。そこには気絶したディアルガの隣に、謎の怪人が立っていた。

「あれは・・・ポケモンなの？」

「違う! あいつは俺達とは全然違う。機械と動物が入り混じった変な臭いがする」

その怪人は銀色のボディに、クワガタの顎のような角と腕を持っていた。怪人はスピリッツの姿を見ると一目散に逃げ出した。

「そうか! お前が奇械人だな! 葉っぱカッター!」

フシギダネの身体から、幾枚の葉が飛び、それらが手裏剣のように回転しながら、怪人へと飛んでいく。

「ぐえっ!？」

建物を飛び超えようとジャンプした怪人の背中に、幾枚もの葉が鋭いナイフのように突き刺さった。

「大文字!」

それに追い討ちをかけるように、ヒトカゲの必殺熱線が怪人に命

中する。

怪人は空中で大爆発を起こして消滅し、後には巨大な『大』の字が、勝利のサインのごとく空中に映し出された。

『くたばれっ！ 仮面ライダーディケイド！』

ブラックサタン大首領の口から、あの溶解液が吐き出される。ブレイドの姿の速人は、地面を転がりながらそれを避ける。そして溶けるアスファルトのすぐ横で、カードを装填しながら立ち上がった。

『アタックライド タイム！』

バックルから、昆虫らしき生き物が描かれた、半透明の光の壁が召喚される。そしてそれはブレイドの鎧の胸部に吸収されて消滅する。

『くあああっ！』

再び溶解液が速人の元へと飛んでいく。今回、何故か速人は避けようとしなかった。そして大量の溶解液が、速人の身体に降りかかるんとした瞬間、突然速人の姿が雲のように掻き消えた。

『何いつ！？』

気がつくと速人は、大首領の巨大な腹の下、影の中にいた。

“タイムスカラベ”のカードは、時を止める力を持つ特殊カード。その力で速人は、止まった時間の世界を移動し、大首領の懐に入り込んだ所で時間を元に戻したのだ。

「はあっ！」

速人は大首領の蜘蛛の下腹に、渾身の力を込めて、ブレイラウザーを突き刺した。

これに大首領は僅かに痛みで悶える。だが大首領の表皮は硬い上に分厚く、刃先は十分に食い込まない。だがその最中に、速人は新たなカードを装填していた。

『アタックライド スラツシュ！』

今度はトカゲが描かれた光の壁が召喚される。それはさっきとは違い、ブレイラウザーの刃の中に吸収された。するとブレイラウザーの刃が、強いエネルギーを帯びて光り輝く。

速人はその剣を、強く上に押した。グシャア！と肉が潰れるような嫌な音が聞こえた。

『ぐああああああっ！ きさまああああああっ！』

攻撃力を強化されたブレイラウザーが、大首領の腹に深く喰い込み、大首領は悶絶して怒りの声を上げる。

速人は突き刺したブレイラウザーを素早く引き抜いた。すると腹の肉が更に抉れ、緑色の血液がシャワーのように大量に吐き出される。

鎧を緑色に汚しながら、速人は腹の下から逃れ、大首領の背後に

回った。

大首領は慌てて身体を回転させて、速人の方向に顔を向けようとする。その最中に、三枚目のブレイドのアタックライドカードが、バックルに挿入された。

『アタックライド ビート！』

ライオンが描かれた光の壁が、ブレイドの拳に吸い込まれる。そして大首領が向き直った直後に、速人は滑り込むようにして、大首領の髑髏の顔の、巨大な顎下に入り込む。

「歯あ喰いしばれえええっ！」

速人は一時身を屈め、力強く飛び跳ねて、上方の巨大髑髏の下顎に、光の拳を飛ばした。そのかえる飛びアップは、大首領の首を上に向けて、髑髏の下顎と歯に大きな亀裂を生んだ。

『ぐがあああつ……』

下側から脳に響く衝撃に、大首領は昏倒してフラフラと身体を捻らせる。

「お前の創った見せ掛けだけの平和な世界も、これで終わりだ！
ブラックサタン大首領！」

その言葉と共に、止めの必殺カードを装填した。

『ファイナルアタックライド ブブブレイド！』

バックルから二枚の光の壁が吐き出される。

それはトカゲとヘラジカが描かれたもので、ブレイラウザーに吸い込まれた。するとブレイラウザーの刃が、強力な光と電撃に包まれる。先程のスラッシュを遥かに凌ぐエネルギーが迸っていた。

「ライトニングスラッシュ！」

速人はブレイラウザーを、大首領の髑髏の下顎に先程ビートで殴りつけて脆くなった部位目掛けて、力いっぱい振り上げた。

『ぐぎゃああ！』

凄まじい斬撃に、その巨大髑髏はクルミの殻のように、下側からパッキリと割れた。切り口は電熱により、頭の断面が判らないくらいに焼け爛れ、ポタポタと緑色の血が滴り落ちる。

大首領は系の切れた人形のようにピタリと動かなくなり、腹這いに倒れ落ちた。巨体が倒れたことにより、ズシン！と低い音が聞こえる。

「ふう……。やっと終わったな」

疲れて息を吐き、速人は絶命した大首領に背を向けて、こよみとスピリッツの元へと向かっていった。

（それにしても……）

駆け足で移動する最中にあること思案していた。先ほどの戦闘で、タイムスカラベのカードを使った時に妙な違和感を感じたのだ。正確には時間の停止を解除した直後にある。

もちろん戦闘の最中に気にかかる訳もいかないし、その違和感の

実態も謎だ。別に何が起こったわけでもない。だが速人には、それがどうにも重大なことに思えてならないのだ。答えが出ないと判りきっている事柄に悩みながらも、速人はこよみ達の元へと向かっていった。

第二十四話：ディアルガとミュウ

戦いが終わった一時間後、この街に召喚された全てのポケモン達が、街の中にある神社の境内に集まっていた。

以前は魔化魍の死骸が積まれていたその場所は、今は綺麗に片付けられていた。そこに数百匹もの多種多様なポケモン達が、祭りでもあるかのように大勢いた。その中には、変身を解いた速人ともみもいる。

彼らは境内の中で大きな円を作っており、その中心に負傷したサnder・フリーザー・ディアルガが横たわっている。

彼らはかなりの重症であった。戦いの傷だけが原因ではない。体内に寄生していた奇械人達が、無理に彼らの身体を酷使していたため、肉体に相当の疲弊を与えていたのだ。

数名のポケモン達が、彼らをどうにか治療しようとするが、医学の知識に乏しいため、どう処置をすればいいのか判らない。回復アイテムのオレンの実を与えようとする者もいたが、気絶している彼らがそれを食べれるはずがない。

「こよみさん。傷を治す魔法とかは使えないの？」

「ごめんなさい……。あたし、たらいを出す魔法しか使えないの。皆は？」

速人とこよみは、他のポケモン達を見渡す。首長竜のような青い姿をしたポケモンが、それに答えた。

「残念ですけど。私たちポケモンに傷を癒す技は無いのです」

「それじゃあ、こいつらはもう助からないってのか？ それは少し

後味が悪いぞ……」

その時、ディアルガを診ていたポケモン達が、一斉に騒ぎ始めた。

「動いた！ ディアルガの足が動いたぞ！」

「おい！ 目を開けたぞ！」

言っている間に意識が戻ったらしいディアルガが、四本の足を地面に立てて、ゆっくりと起き上がった。これに速人が感心の声を上げた。

「もう生き返ったのか。物凄い生命力だな」

「うむ……。私はそう簡単には死なない。だが……。この二人はかなり危険だな。傷の酷さが私の比ではない」

ディアルガが、傍らで倒れているサンダー・フリーザーの姿に目を向けながら、そう答えた。その声は、奇械人達に取り憑かれていた時とは全く印象が違う、威厳溢れる重い声質だった。

「お前達のことは、おぼろげだが覚えている。奴らから解放してくれたこと、本当に感謝する。だが本当に申し訳ないが、今は礼をしてやれる余裕は無い。早くこの者達を、我らの世界の医者に見せなければならん」

「ああ、そうだな。俺の加減不足でこんなことになったからな。こっちこそ悪かった」

速人は気まずそうに頭を掻く。

「ここまで言えば分かると思うが、お前達に頼みたいことがある。この者たちを、我らと共に、早急に元の世界へと帰して欲しい」

ディアルガがその長い首を下げて、懇願の言葉をかけた。速人はこよみの顔を見ると、こよみは小さく頷いた。

「皆！ もう帰ってもらうことになっちゃったけど、いいよね！？」

こよみは周りにいるポケモン達にそう言葉を投げかける。

「ああ、いいぞ。どうせ大したお宝もなさそうだしな」

「こんな空気の悪いところ、もう嫌よ！ さつさと帰らせて！」

「ああ、別に俺はどっちでも……。まあ、帰れるならそれでもいいや」

「ソーナノ！」

「私、早くママの所に空色グミを届けなきゃいけないの！ お願い帰させて！」

「俺もだ！ ギルドの仕事の真っ最中だったんだ！ 早く戻らねえと依頼を破棄されちまう！」

その言葉にポケモン達は、次々と了承の返事をする。それを確認したこよみは、魔法を唱えようと両手に意識を集中する。するとディアルガが速人に話しかけてきた。

「速人よ。帰る前にお前に伝えておきたいことがある」

「何だ？」

帰還直前のいきなりの言葉に、速人とこよみは首を横に曲げた。

「今こうして解放されて、改めて気付いたことなのだが……。この世界の時間と空間のバランスが、異常なまでに歪んでいる」

「そうなのか？ 俺、この世界に来て初めてディケイドになったか

ら、これが普通なんだと思ってけど……」

ディケイドには次元の流れを探知する力がある。だが速人が見た世界の次元の流れは、現在の所この世界意外に存在しないため、ディアルガの言う世界の異常に気付けずにいた。

「うむ……。私も長い年月を生きているが、ここまで酷く世界が乱れる現象は、中々見ない。恐らく奴らが行っている実験……。召喚術が原因だろう」

「召喚術が？ あんなもので世界がおかしくなるのか？」

これまで敵の扱う召喚術は、こよみの魔法であっさりと破られてきた。そのため二人は、召喚術の力があまり大したものではないように思っていた。

「恐らくあの魔法は、そのリインバウムという世界以外では上手く使えない力なのだろう。だが奴らは未知の技術で、それを別の世界でも無理矢理使えるようにしたようだ。だが召喚術は世界と世界の狭間に穴を穿つ術。本来サモナイト石とは適合しない世界で、その力を乱用したため、このような事態を招いたのだろうな……」

「その乱れが酷くなつていくと、具体的に何が起こるんだ？」

「それは様々な可能性が考えられるが、大抵は災いだ。未来から過去において、ありえない歪んだ歴史が形作られることもある。最悪の場合、世界そのものが消滅する」

この発言に、こよみと速人だけでなく、聞いていた周りのポケモン達にも動揺が広がった。

「おいおい！ それはまずいだろ！」

「何とかなんのか！ そんなの酷すぎるぞ！」

「ソーナンス！」

「やっぱりそのタケシって人をやっつけないと駄目なのかな？」

「俺達を勝手に引っ張り出した上に、他所の世界にもそんな迷惑をかけるとはな……。全くけしからん奴だ！」

ポケモン達は心配と怒りの声を、口々に言い合っている。それを速人は意外そうに見詰めていた。

「お前達……。他所の世界のことでもやっぱり許せないと思うのか？」

特定の誰かに言ったわけではなく、呟くように速人はそう口にした。

「はあ？ 当たり前でしょ？ 何言ってるの？」

「お前はそいつをやっつけるために、ここにいるんだろ？ お前がそんなんでどうすんだよ！」

ポケモン達は心外と言わんばかりに反論してくる。速人は以前に聞いた、召喚師に擬態したムカデワームの世界論を思い出し、心の中で小さく笑った。

そんな中、スピリッツ達が速人達の前に出てきた。

「速人、こよみ。俺達もついていいか？ 俺達もお前らの力になりたいんだ」

「駄目だな」

速人はあっさりとその申し出を断る。

「お前達は俺達と違って、帰る世界も帰る方法もはっきりしている。これ以上この世界のことに首を突っ込まないほうがいい。早々に元

の世界に帰って、お前らの身内を安心させることだ。正直足手まと
いだしな」

「そんなことないよ！ さつき思いつきり戦えたじゃないか！」

「俺のカードがあつたおかげだろ。もしお前らの身に何かあつたら、
俺はどう責任を取ればいいんだよ」

この会話にディアルガも介入してきた。

「私も同意見だ。異界の者がこの世界で戦うだけで、時空に影響を
与えている。この世界のバランスが修復されるまで、異界の者は可
能な限り早く退散するべきだ。速人よ、お前も時間や空間に影響を
与えるような技は、極力使わない方が良い。さもないと何が起こる
か私にも判らん」

この言葉にスピリッツ達は深く落ち込んだ。するとこよみがヒト
カゲの頭を撫でて優しく微笑みかける。

「大丈夫だよ。速人さん、とっても強いから。なんだかよく判んな
いこと話してるけど、あたしたちは全然平気。だから心配しないで」
「本当に？」

「うん、本当。だから早く帰って、元の世界の人たちを安心させて」

こよみは立ち上がり、再び魔法の力を集中させる。あまり長く会
話している時間は無い。フリーザーとサンダーの命がかかっている
のだ。

フシギダネが語りかけた。

「こよみ・・・また会えるよね？」

「うん！ きつと会えるよ！ すぐには無理だけど、いつかきつと
！」

こよみは大分使い慣れてきたたらい魔法の力を、一斉に解放させた。

一瞬の光の後、地面に無数の金属音が奏でられる。騒がしかった神社の境内は、嘘のように静かになっていた。そこには何百という数のたらいが並べられていた。

「終わったな……」

「うん。終わっちゃった……」

友人との別れは、あまりにあっさりとしたものだった。さっきはあんな会話をしていたが、別の世界の住人である以上、再会できる保証はどこにもない。

速人はこよみの頭を、こよみがヒトカゲにやったように優しく撫でる。それにこよみは悲しみを吹っ切るかのように明るい表情を見せた。

その様子に速人は安堵の息を一つ吐くと、すぐに表情を固め、神社の鳥居の方に顔を向けた。

「こつちの話は終わった。いい加減出てこいよ！」

速人はそつちに向かって、挑発するような声を投げかける。

「えっと……何がですか？」

これにこよみは当惑した。直後に階段の下から舞い上がり、何者かが鳥居の真ん中に姿を現した。

『いちゃついている所悪かったか？ まあこつちも重大な話がある

からな勘弁してくれよ』

その者から、機械ごしに喋っているような硬い声が放たれた。

「なにになに!？」

そこには、またもや初見の未確認生物の姿を発見された。

「ネズミさん？」

「あれはイタチじゃないのか？」

それは薄い桃色の短い毛を持つ、ネズミともイタチともつかない小さな獣だった。足と尻尾がかなり長く、頭が大きめで、青いつぶらな瞳を持っている。そしてその獣は、風船のように空中に浮いていた。

小さな前足にはスピーカーのような小型機械が抱えられている。さっきの声はこのスピーカーから聞こえてきたようだ。

『初めまして、十文字速人に森下こよみ。俺の名は本条健史だ』

「何！ お前が！」

スピーカーから静かな口調で人の声が聞こえてくる。若い男性の声だ。だがその声の主が名乗った名に、速人は大いに驚愕した。

こよみは速人のオーバーな反応にぼかんとしている。

「ええと、ホンジョータケシってどちらさんですか？ 速人さんの友達？」

「違う。永沢が言っていた、俺達の敵の親玉の名だ！」

「ええっ！」

こよみは愕然として、そのイタチのような生物を凝視する。それは驚くだろう。敵のボスが向こうから堂々と名乗り出てきたのだから……。

「あの人がそうなの？　すごい、イタチさんだったんだ！」

違った。どうやらこよみはスピーカーの意味を理解していないようだった。しかしイタチであることのどこがすごいのだろうか？

イタチもどきの表情は何も変わらないが、スピーカーからはこよみに向かって声が放たれる。

『そんなわけあるかよ……。スピーカーが見えないぐらい視力が悪いのか、この小学生が。このミュウはただの伝達だ。そのぐらい見て分かれ』

静かな口調が一転、子供のようなおちよくる口調になった。その中の小学生という単語にこよみが怒る。

「わたしは小学生じゃないよ！　これでも高校生、15歳だよ！」

『はっ、15歳でその身長じゃ、将来絶望だな。知ってるか？　日本の女子15歳の平均身長は157cmだ。だがお前は11歳の小学生並みだぜ。やゝい、チビチビチビ！』

「ううゝ、そういう健史さんこそ、こっちに全然顔見せないけど、一体何センチなの！」

『俺は171cmだ。少なくともチビじゃあねえなあ』

「失礼。そろそろ話進めてくれないか？」

いきなり脱線して低レベルな喧嘩を始める両者に、速人は冷やかな声で会話の再会を求めてきた。速人の身体からは、緊張の糸は切れるどころか燃え尽きて完全消滅していた。

『ああ、そうだった。十文字速人、俺からお前に決闘を申し出る』

健史はあっさりと落ち着きを取り戻した様子だった。だが放たれたあまりに意外な言葉に、速人は仰天した。

「決闘！？　どういうことだ！？」

『言葉通りの意味だ。もう変な小細工は一切使わん。これから堂々と貴様と勝負をしたい。戦いはフェアに一对一だ。お前も早めに事を終わらせたいと思っっているはずだろう？　ならば断る理由なんてないだろう？』

予想外すぎる展開だ。確かに言うとおり、敵のボスが自ら出向いてくるといふのなら、これほどのチャンスはない。

ブラックサタン大首領も倒した今、討つべきは敵の首魁のみなのだ。そいつを倒しさえすれば、自分が強引に請け負わされたミッシヨンは全て終了する。

しかしこんなこと安易に引き受けて良いものかどうか、速人は判断に悩んだ。相手が約束通り一人で来るといふ保証も無い。

チラリとこよみの顔を見る。こよみは速人の視線に戸惑い、オロオロしている。まあ、こよみにこんなことを相談してもしようがないが……。

速人は決意を固めた。

「よし、引き受けた。場所はどこだ？」

決断は了承だった。ほとんど勘だが、相手は約束をきちんと守るような気がする。

『この世界の地名を教えても、お前らには分からんだろう？ このミユウに案内させる。お前は飛んでいくこいつを、マシンディケイダーで追っていけばいい』

「マシンディケイダー？」

『そこにあるお前のバイクのことだよ』

どうやらあのバイクは“マシンディケイダー”という名前だったようだ。今まで随分役に立ってきたが、今初めて名を聞いた。

思い返してみれば、このバイクは何だかよく分らないうちに、いつのまにか道路の真ん中に置いてあった代物である。ディケイドドライバーといい、テレポータルしきものでこちらに物を送ってくるのは一体何者だろうか？ そんなことを、改めて速人は疑念を抱いた。

『ちゃんと聞いてるか？ 判ったならさっさと変身して乗れよ』

「ああ、そうする。こよみは……」

再びこよみに視線を向ける。今回はこよみの顔に戸惑いの表情は無かった。

「もちろんあたしも一緒に行くよ！」

「そうか、判った」

速人は嘆息して、バックルにディケイドカードを装填した。瞬時にディケイドに変身する。そしてこよみと共に、マシンディケイダーに跨った。

「こよみ、もう一度聞くんが、覚悟はできてるな。敵地に自分から行く以上、死んでも文句は言えないぞ」

こよみは大きく首を縦に振った。それを確認すると、速人はマシン
ディケイダーのエンジンを起動させる

イタチもどき〃ミュウが上空目掛けて飛びあがった。それを追っ
て速人たちも空中へ走り出す。

「おし！ 最後の戦いに出陣だ！」

「おおー！ー！」

第二十四話：ディアルガとミュウ（後書き）

こよみと健史の会話を書いて思ったこと。森下こよみは原作の方から小柄なのが強調されたキャラクターだけれど、高一で身長146cmというのは、そこまで言うほど小さいんだろうか？

第二十五話：大怪獣と響鬼

超能力らしき力で、翼無しで空を飛ぶミュウは、真っ直ぐある方向に向かつて飛んでいく。それを追って速人達が、マシンディケイダーに乗って空中を走る。

現在の速度は時速40キロぐらいである。あまり速度を出すと後ろに乗っているこよみが吹き飛んでしまう。マシンディケイダーの馬力は、常人にはかなりきついものがあるのだ。

緑の山林を通ることもあれば、高層建築物が立ち並ぶ都市の上空を飛ぶこともある。

ときおり飛行する未確認生物と、空飛ぶバイクに驚く人々の喧騒が聞こえたこともあったが、あえて無視した。

やがてミュウは、ある地点で降下し始めた。

向かっていく先を見ると、山林の中に山を切り開いて造られたよな広い平地があった。住宅地の建設予定地か何かであろうか？ともかくここからは人里から離れているため、人身の被害は心配する必要は無さそうだ。

速人は速度を緩め、ゆっくりと平地へと降りていく。平地に立った直後に、あらかじめ抜いておいたカードを装填した。

こよみの名を連呼する電子音声が鳴り、こよみがコヨミフォックスに変身した。こよみが戦いに巻き込まれた場合に対する処置である。この姿の方が生身より遥かに頑丈だ。

『速人さん、いたよ！ あそこに人が！』

こよみは空中に浮き上がって、発見した二人の人物の存在を速人

に伝える。最も速人はマシンデイクイダーの上から、この平地を見下ろしていた時点で気付いていた。

速人はその二人の下へ、ゆっくり歩み寄る。

二人の内の一人は、疎らに草が生えた平地の真ん中で、こちらに背を向け、首を右手で支えながら横になって寝転がっていた。といつても地べたで寝ているわけではない。下には遠足用シートのような赤い敷物が敷かれていた。いや、本当に遠足シートなのかもしれない。見た感じ、かなりの安物に見える。手元には食べ終わったらしい、チョコ菓子の空袋が散らばっていた。

その人物の服装は浴衣だった。柄のない地味目な黄色い浴衣で、背中には何故か英大文字で“DCD”と大きく書かれている。彼の寝ているすぐ隣には、変わった形のバイクが置かれていた。

一人はその浴衣姿の人物のすぐ隣で正座していた。疎らに草が生える地面の上で、衣服や肌の汚れなど気にしないといった感じで座り込んでいる。

その人物は16、7歳位の若い女性だった。オレンジ色のショートヘアで、どこかの制服と思われる、オレンジ色の変った様式の服を着ていた。

彼女の目は、人形のように生気が感じられず、何も言わず無表情のまま、その浴衣姿の人物を見詰めている。

速人がどう声をかけようか考えている間に、浴衣姿の人物が先に言葉を放った。

「いよう。待ってたぜ」

その声は間違いなくスピーカー越しに話しかけた声と同じものだった。人物はゆっくりと起き上がり、こちらに顔を向ける。

その人物は16、7歳位の少年の姿をしていた。少なくとも速人

よりは年下に見える。髪の毛はあまり整えていないのか、ボサボサで寝癖のようなものがあつた。容姿は名前の通り日本人ぽく、やや垂れ目でどこことなくヘタレな印象を受ける。

速人が何か言う前に、その人物「本条健史は浴衣の懷から何かを取り出した。

それは野球ボールぐらいの大きさの球状の物体だつた。色は上下に分かれており、上半分が赤色で、下半分が白、境目の部分にスイツチのような物がついている。

健史はボールを掴んだ右腕を、速人達から少し離れたところで空中停止しているミュウに向けて差し出した。

「ミュウ、戻れ」

健史がそう言い放つた途端、ボールから電光のような赤い光線が放たれた。

その光線はミュウに直撃。するとミュウの全身が、光線と同じ赤い光の塊に変化する。それは伸縮し、紐で引つ張られるようにして、光線と共にボールへと吸い込まれていく。あっとうまにミュウはボールの中に消えた。

「えっ？ 何、今の？ 召喚獣？ コードを感じなかったけど・・・」

「“召喚”とは似て非なるもんだな。こいつはモンスターボールと言つてな、特定の生物を小さく収納できる異世界のアイテムだ。ちなみにこのミュウは、お前達が会つた奴らとは別の世界のポケモンでな、人の言葉は喋れねえ」

健史はそのモンスターボールというものを、シートの上に置いた。

速人は隣に置いてあるバイクに目を向けながら、健史に問いかける。

「お前に聞きたいことは山ほどあるが・・・、まず最初に、あのバイクはマシンディケイダーだよな？」

「そうだが、それがどうかしたか？」

おそらく健史の所有物であろうそのバイクは、速人の持っているマシンディケイダーと全く同じデザインだったのだ。ただしカラーリングに若干違いがあり、速人の物の紅紫色だった部分が青色になっている。

健史の肯定により、実質この平地には、二つのマシンディケイダーが置かれていることになった。

「まあ、質問の前にだな。速人、お前に頼みたいことがある」「何だ？」

健史がまた懷から何かを取り出した。今度は黄色い宝石だった。以前召喚師が使っていたサモナイト石とよく似ている。

「出だよ！ レッドキング！」

黄色い宝石が太陽のように光りだす。するとここから数百メートル先の山地付近に、巨大な半透明の壁が、カーテンを下ろすようにスウと現れた。

「次元結界！？」

ディケイドのディメンションヴィジョンが、その壁の正体を正確に分析した。

それは速人が最初にこの世界に訪れた街を、外界から閉じ込めていたあの次元結界の壁と全く同じものだった。縦長で高さは50メートル以上。かなりの大きさが、街を囲っていた物と比べるとずっと小さい。

『速人さん！ 中に何かいる！』

次元結界の表面に、巨大なシルエットが映し出される。それは生き物の影のようで、揺れるように微妙に動いていた。

そのシルエットは前方に向けて歩き出した。すると最初は黒かった影が、見る見る晴れてその姿が現れる。その生物は扉を潜り抜けるようにして、次元結界を通り抜け、この世界に姿を現した。

「ピギヤアアアアアッ！」

世界全てに轟くかと思うほどの、強烈な鳴き声が一帯に鳴り響く。通り抜けた次元結界は空気中に溶けるようにして消えた。

現れたのは、身長40メートルを超えようかという二足歩行の巨大生物だった。

体色は全体が黄色がかった白で、体型は力士のように太くずんぐりとしている。尻部からは蜥蜴のような尻尾が、太く短めに生えていた。全身の皮膚は蛇腹のように縦に流形で、でこぼこになっている。首もかなり太いが、瓶のように上に行くほど細くなっていき、頭部は身体全体から見ると大分小さめである。顔つきは非常に凶暴な外面の肉食獣の顔で、鬼のような牙が二本、下顎から突き出るように生えている。頭は山のように盛り上がっており、人間のスキンヘッドを連想させる。

レッドキングと呼ばれたその巨大生物は、ストレスが溜まってい

るのか、興奮して身体を震わせている。

非日常的な存在には、すっかり慣れたつもりの速人も、これには腰を抜かしかける。これまでおかしい生物は幾度も見てきたが、巨大さにおいてあれに勝るものはない。鯨でさえ丸ごと食べてしまいうさだ。

「あれは何だ！？ あれも召喚獣なのか！？」

「そうだ。レッドキングと言ってな、元いた世界ではドロクロ怪獣とも呼ばれていた凶暴な怪物だ。リインバウムの召喚術と次元結界の複合技術で召喚してみせたのよ。だがどうも制御が難しくてな。よく勝手に暴れまわる。そのせいで今まで何人もの召喚師があいつに踏み潰されちまった。お前にはあいつの処分を頼みたいんだな」

「そんなのお前がやればいいだろ？」

「本当ならそうするつもりだったんだがな……。でも自分で呼び出した奴を、自分で始末するというのは、何度やっても心が痛む。ならばいつそ敵に倒してもらったほうが救いがあるだろ？」

速人は「はあっ！？」と呆れと疑問と怒りが入り混じった声を上げた。

「どういう理屈だよ、そりゃ！」

「まあまあ、前哨戦だと思って引き受けてくれよ。うまく倒せたら、お前が聞きたいこと全部答えてやるよ。それとたらいで送還しようとは考えないほうがいいぞ。あいつは元の世界でも危険な生き物でな。もし人里に飛ばされたら、相当な数、人が死ぬぜ」

言ってる最中に、レッドキングは速人達の姿を発見した。唸り声を上げ、こちらを睨みつける。

『速人さん！ あの大きい人、こっち見てるよ』

「くそ！」

考えてる暇はない。速人は手早くカードを装填した。

『カメンライド ヒビキ！』

バックルに三つ巴の模様が浮かび上がる。その途端、速人の纏うデイクイドの鎧が紫色の炎に包まれた。何らかの攻撃で火達磨になったものかとこよみは驚いたが、風に吹き消されたかのように炎は一瞬で消える。

そこに現れた姿は通例通り、デイクイドの姿とは違っていた。

仮面を含めた全身が、光沢を放った濃い紫色で、胸周りに銀色の鎧が装着されている。表皮は鎧というより、生き物の生皮のような質感で、筋肉質な外観であった。両腕の掌と手首は赤色で、甲殻類の表皮のような外装である。

仮面には目や口に当たる部分は無く、歌舞伎の化粧のような赤い縁取りが張られている。頭には銀色の鬼のような角が二本生えており、角の合間には鬼の顔を模った金色の装飾品が飾り付けられている。

それは魔化魍を倒すため、鍛錬を積み重ねて変身能力を身につけた異形の音撃戦士：仮面ライダー響鬼^{ヒビキ}の姿であった。

「ギヤアアアアッ！」

レッドキングがこちらに向けて突進してきた。雷が落ちたかのような大きな足音が、ズンズンと大地に響く。

巨体ゆえに動きは鈍重だが、歩幅が大きいためかなりの速度である。このままではすぐに接近されて、踏み潰されてしまう。

速人はディケイドウェポンを抜いた。ディケイドウェポンは赤い炎に包まれ、突然二つに分裂して速人の両手に納まる。炎が消えると、それは柄の赤い太鼓の撥のようなものになっていた。

先端に、半透明の鬼の顔を模った球がついている。響鬼の音撃武器：音撃棒・烈火である。

速人は左手の一本を移して、右手で二本の撥を掴む。そして空いた左手で、ライドブツカーから響鬼専用のカードを引き抜き、装填した。

『アタックライド レッカダン！』

速人は再び撥を両手で持つ。すると撥の先端の鬼石から炎が放たれ、松明のように激しく燃え上がる。

レッドキングはすぐ目の前まで迫っていた。十m程先の頭上に顔があり、今まさに速人を踏み潰そうと、右足を上げる。

「はあっ！」

燃え上がる撥を、太鼓を打つように勢いよく振った。すると先端の炎が火球となり、上方のレッドキングに向かって、打ち上げ花火のように飛んでいく。

「ギャアアッ!？」

二つの火球がレッドキングの腹部に着弾した途端、ミサイルが命中したような大爆発が起きた。そのダメージに、レッドキングは大きくに怯み、数歩後退する。

速人は更にさっきと同じカードを装填した。『レッカダン』の電

子音声が再び鳴り、速人は二回目の火球を放った。

敵が間近な上に、とてつもなく大きなのである。それが外れることなどあるはずがなく、火球はレッドキングの首元に命中。それが元で、レッドキングはひっくり返って、仰向けに倒れた。

相手は身長45メートルの巨体である。倒れたときの衝撃は、足音などとは比べ物にならない。大地が揺れ、大地震が起きたかのような盛大な地響きが鳴り響く。

速人はとどめのカードを装填した。

『ファイナルアタックライド ヒヒヒビキ!』

「はあっ!」

速人は響鬼の強靱な足腰で、思い切り飛び上がった。速人の身体は数十mも舞い上がり、倒れたレッドキングの太い首の腹に着地した。

するとバックルから、三つ巴の紋章がついた小さい円盤状の物体が、吐き出されるように飛び出てきた。速人はそれをレッドキングの首の分厚い皮の表面に、叩きつけるように貼り付ける。

その円盤は張り付いた状態のまま、独楽のように回転しながら、見る見る巨大化していく。あっという間に直径1m以上の大きさになった。

速人は撥を振り上げた。そして太鼓を打つように、その円盤の表面を叩きつける。

「グギヤア!?!」

叩きつけると共にドオン！と和太鼓のような音響が鳴り、レッドキングが呻くような悲鳴を上げた。

強烈な音波が円盤から、波紋が広がるように発生し、周囲に広がっていく。それは円盤から放たれた音波の攻撃“音撃”の余波に過ぎず、レッドキングの体内には、それ以上の音の振動が響いているはずである。

「爆裂強打の型！」

速人は円盤を太鼓として、次々と撥を打ちつけた。

『（わあ、綺麗な音！）』

ドンドン！とリズムミカルな和太鼓の音響が奏でられ、こよみがそれに乗ってクルクルと空中で踊りだした。

速人が一撃打つ度に、太鼓から音撃の波紋が次々と生み出され、レッドキングは蟹のように口から泡を吹きながら呻いている。

レッドキングは速人を振り落とすために、手を動かそうとする。だが苦痛のためか、中々手を速人まで伸ばすことが出来ない。

何十発と打ちつけた後に、一旦打ち込みが止まる。速人は両手の撥を高く持ち上げ、一気に両方を、力強く叩き付けた。最初の一撃と同じぐらいの轟音が鳴り響く。

その途端、レッドキングの身体の上部が、クラッカーを撃ったかのように爆発・破裂した。速人は爆発とともに後方に大きく飛びあがり、無数の巨大な破片が一体に飛び散る。太鼓の残響は、その後もしばらく辺りを、心地よく震わせていた。

レッドキングの身体は、頭・首・胸上部が跡形も無く破壊されて、

巨大な死体が平地に山のように堂々と転がっていた。

「いっちょ上がり、と」

第二十五話：大怪獣と響鬼（後書き）

レッドキングの鳴き声はかなり適当です。ウルトラマンを視聴したのは随分昔で、手元に確認できる資料がなかったのです。

第二十六話：健史と模造品

レッドキングを倒した速人は、響鬼からディケイドの姿に戻り、健史の前に再び歩み出た。かなりの消耗をしたようで、かなり息が荒い。

速人はレッドキングが召喚された時、はっきりと気付いたことがあった。この辺りの時空・空間のバランスが、酷く歪んだのだ。

（この世界・・・マジでやばいかも）

恐らくディアルガが言っていたことであろう。あれだけ質量の物体を召喚すれば、次元への影響力は一際大きくなる。最初は次元の歪みに実感できなかった速人も、この時ばかりは、はっきりと世界の異常に確信を持てた。

まあ、だからといって健史に一々問いただす程のものでもない。今ここで敵を片付けてしまえば良いだけの話だ。速人は真っ直ぐに健史に話を切り出した。

「倒してやったぞ。約束通り、こっちの質問に答えてもらう」

「ああいいぞ。何でも聞いてこい」

健史はシートの上に座ったまま、どこから取り出したのか、チョコドーナッツを齧っていた。

女性の方もさっきと同じ姿勢を保ったまま何も言わない。あんな巨大な物が、すぐ目の前まで迫っていたのに、大した精魂である。

「まず最初に、ディケイドとは一体何なんだ？ お前らはこいつを知っているんだろ？」

チョコドーナッツを食べ終えた健史は、少し困った口調で、食べかすがついた口を動かした。

「お前らのことは、前に伊藤伸恵という女から大体聞いたよ。何か判らんうちに、いつのまにか渡されたんだってな……。正直言くと、俺もこのことは不思議に思ってたんだよ。ああ、そうそう。あの街の奴らは、周辺の住人に保護されてるから安心しろ」

健史は懷に手を入れた。あそこから何かを取り出すのは、これ度三度目であるが、出てきたのは速人も知っている予想外の物品だった。

「それは……。？　ディケイドライバー？」

色が違っていたため一瞬判らなかったが、確かにそれは速人の持っている物と同じ、変身装置のディケイドライバーだった。もう片手にはライドブッカーもあった。形も大きさも全く同じだったが、速人の物にあつた白い部分は、健史の物では全て黒色になっている。健史はそれらを両手で抱えながら、不機嫌そうに喋りだす。

「まず俺の素性から話そう。俺は異世界を廻り歩く旅人だ。自分で言うのも何だが、超一流の技術者なんだぜ。俺自身の時間の流れからすれば、もう何百年もの間、随分たくさんの異世界や時空を見てきた。それぞれの世界には独自の文明・文化と共に、様々な技術が存在している。科学・魔法・錬金術等などな……」

「そうらしいな。お前の部下を見ているとよく判る」

「理解が早くて嬉しいよ。ディケイドのような存在“仮面ライダー

”が英雄になつている世界もあれば、巨大ロボットが宇宙空間で激闘を繰り広げる世界もある。あのレッドキングみたいな化け物が闊歩して、それと同じぐらいの大きさのでかい蛮人が戦っている世界もある。本当に世界は多種多様だ。俺はそういう珍しい力がある世界に入り込んで、その“力”を造り出す技術を学んできたのさ。国家機密レベルの技術データを、非合法に盗み出したこともあったなあ。そうやって全ての世界の力を、自分の物にするのが俺の野望だ”

「とても技術者には見えないが？」

スラスラと大スケールな話をする健史に、速人は思ったとおりの事を口にする。眼前の人物は技術者というより、盆踊りか、ヤクザ気取りの子供だ。最もこの人物は、見た目通りの年齢ではないようだが。

「ははははっ！ 技術者が日頃から作業着で、工具を持ち歩きながら生活していると思うか？」

「まあ・・・、確かにそれは無いわな。それでディケイドというのはお前が造った物なのか？」

話からしてそう考えるのが妥当だろう。健史のすぐ隣に、マシンディケイダーがもう一台あるのも納得できる。

「まあ、そうだ。異世界の様々な戦士の力をコピーする、俺の最高傑作の一つだ。このディケイドライバーはな・・・。だがお前の物は知らん」

「知らん？」

「俺はディケイドライバーもマシンディケイダーも、二つも造った覚えは無いんだよ。だが、どうしてだか同じ物がもう一個出てきやがった。これは俺にも正確なことは全く判らん。どうやらお前も知

らないらしいしな」

納得したと思ったら、すぐに新たな謎が出現してきた。速人が持っている物は、元々の発明者にも出所が判らない代物らしい。

「それじゃあ、俺の持っているこれは、他所で造られた贋作だつてのか？」

「まあ、そういうことになるが……。しかし、それはそれで妙なんだよ。俺のディケイドのデータが盗まれた経緯は無いからな。力を大勢の前で振るつたことは何度かあるが、こいつは見様見真似で模倣できる作品のはずがないんだよな」

「まあ、確かに俺もそう思う。他人の絵画を真似るのは訳が違う」
「おお、そうよ。まあ心当たりが全く無いわけじゃないんだが……。完全に憶測で矛盾が多すぎることでな。そうそう、話すついでに、そこにいるこよみという女の事も教えてやろう」

二人の視線が、少し離れた所で話を聞いていた、こよみの方に向く。こよみも急に自分に話を振られ、戸惑っているようだ。

『あたしですか？』

「そうだ。お前、記憶が無いそうだな？」

こよみは狐の姿のまま、首を縦に振った。すると健史は軽く笑い出した。

「ははっ、お前に記憶なんて、最初からあるはずがないんだよ。こいつがカードを装填した時、お前という存在は初めて、この世界に誕生したんだからな」

こよみは健史の言っていることが理解できなかった。だが速人は

理解したようだ。

「やっぱりカードに宿っているという記憶が大元か？」

「そうだ。ディケイドのライダーカードは、探知した者の全ての情報を読み取り、記録してある。記憶・遺伝子・能力・体質・魔力等の、そのものの存在に関する情報を全てだ。記録方法は、DVD・ビデオをダビングするような要領だな。ある意味、ワームの擬態に似ているとも言える」

「じゃあカードを装填すると、ディケイド以外の戦士の力を使えるようになるのは……」

「ディケイドライダーの次元転換開放装置が、カードの情報を読み取って現実世界に投射しているのさ。それがディケイドの力の本領。ディケイドは“仮面ライダー”と呼ばれる種の超人戦士なら、どのタイプの能力も使うことができる。しかもただのコピーじゃない。どれもオリジナルを超える力を持つ強化コピー版よ！」

最初は不機嫌そうだった健史の口調は、いつのまにか得意げで楽しそうのものになっていた。自分の発明を自慢するのが好きな、自己主張の強い人物のようだ。

速人はその説明に、これまで感じていた疑問に関して、改めて合点した。最初の頃から速人は、ライダーカードに異世界の戦士の記憶が入っているという話は、簡潔ながらも聞いていた。

実際のところ、カードの一枚“クウガ”の記憶を、バーチャルの世界に入ったような感覚で直に見ていたりもしている。

変身してから己の性格・気性がどんどん変わっていく原因も、あ

る程度見当が付いてきた。そしてこよみのことも……。だが確証を得るため、今ここではつきりと聞いてみる。

「それじゃあ“KOYOMI”のカメンライドカードは何なんだ？こよみの顔写真が写ってたが、こよみは仮面ライダーじゃないだろ？」

この質問に健史は、一転して生真面目な表情を向ける。コロコロと表情豊かな男である。

「ああ、もちろんよ。俺はディケイドを完成させた後で、更に再改造を重ねて、戦闘力以上の物凄い機能を追加することに成功した。カードに宿っているデータから造られた力を、変身者が身につけるのではなく、独立した存在として物質化させ、召喚する機能だ」

「・・・物質化か。それはつまりクローンを造り出すってことか？」

その返答に、健史は小さく拍手をした。

「その通り。ライダーではなく、生身の人間の情報をカードに記録する。そしてそいつをディケイドのパワーで、実体を持った一つの個体としてコピーし、この世界に具現化させるのさ。上手くいけばクローン技術より遥かに効率よく、特定の才能を持った人間を大量生産できる。しかも記憶や能力を100%コピーしているから、いちいち育成・訓練をさせる必要が無いわけだな」

ほぼ推察通りだったらしく、速人は悟るように嘆息した。

「成る程、すごいと言えば確かにすごい。まさにマッドサイエンティストだな」

「なんとも言えばいい。ただな、そいつは元の人格を持っている
せいでな、創造者に従ってくれるかは別問題なんだな。困ったこと
に……。紹介が遅れたが、さっきからここにいるこの女は、そ
の機能で造った模造品だ」
イミテーション

速人とこよみは、健史のすぐ隣で、未だに正座している女性に目
を向ける。

自分のことで話を振られたのに、女性の表情は全く変わらない。
ただ無愛想というわけではなく、感情そのものがないように見える。

「こいつのデータ元の人間は“鴛羽舞衣”ときほまい。HIMEという特殊能
力を持った女戦士だ。もちろん、ここにいるこいつは偽者だがな。
コピーに成功したのはいいが、こいつは正義感ぶって、やたらと俺
のすることに突っかかってきやがった。それで洗脳に洗脳を重ねて、
やっとおとなしくできたのさ」

「酷いことをしやがる……。コピーでも一応人間だろうが！」

鴛羽舞衣の生きながらに完全に死んでしまった目を見て、速人は
不快と激怒の声を上げる。だが健史は全く臆さず、涼しい顔だ。

「人間でもコピーなら別にいいじゃないか。こいつがどうなるうが、
悲しむ人間なんて誰もいないわけだしな。ちなみにお前のドライバ
ーにも同じ機能がついてるようだな」

「じゃあ、やつぱりこよみは……」

「ああ、お前が思っている通りだ。まあ一回使っただけでデータが
飛んでしまう辺り、かなりの不良品のようながな」

二人がそんな深い内容の会話をしている間、話題の発端であるこ
よみは、相変わらず空中にプカプカ浮いて、二人の話を困惑しながら
聞き入っていた。

『（えとえと、コピーにクローン？　どゆこと？　あたしって異世界から来たんじゃないの？）』

不意に健史が、空中で悩んでいるこよみに顔を向けた。

「おいこよみ。いや、正確には“森下こよみ”という人間の模造品よ。あまり話しが呑み込めていないようだから、俺が簡単に教えてやる。お前はカードの力で生まれたコピー人間、すなわち人工的に造られた人間だ。お前に記憶が無いのは、コピー生成の際に、必要が無いと診断された情報を入力されなかったからだろうな。だから魔法の使い方は思い出せるが、自分の出自など必要外のことは何も思い出せない。何か思い出したとしても、それはオリジナルの森下こよみの記憶。お前の記憶じゃない」

『ええっ！　それじゃあ・・・』

「ああ、お前に帰る世界などどこにも無い。肉親も最初から存在しない。どこの世界に属さないはぐれ者だ。哀れだなあ。作り物のお前に、人間としての居場所なぞ何処にもないんだよ。はははっ！
・・・！？」

健史が笑い声を上げ始めた瞬間、健史の顔面に音速を超えた速度で何かが飛んできた。健史は超人的な反射神経で、素早く首を曲げて回避する。

健史の頬を僅かに掠めたそれは、一発の銃弾だった。

『速人さん！？』

見ると速人が、いつのまにかディケイドウェポンを抜き、煙草の

ような煙を吐いた銃口を健史に向けていた。

突然の攻撃に一瞬動揺した健史だったが、すぐに平静を取り戻し、咎めるような口調で速人に声をかけた。

「おいおい……。変身前に不意打ちは酷いだろう。ちょっとからかっただけじゃないか」

「俺にとっては“ちょっと”じゃないな。こよみは俺が家に連れて行くと約束したんだ。元が何だろうと関係ない。大体コピーだったら何だって言うんだ？ 誰だって生きていればいくらでも居場所を見つけられる。軽々しく人生の可能性を否定するな！」

『速人さん……。』

二人はお互いの意思を確かめ合うように、顔を見合わせた。その様子に健史は呆れた様子で、両手をひらひらと振り上げる。

「どうやら偽善者共のカードに洗脳されて、とんだ夢想家に育っちゃったみたいだな。可愛そうに……。しかし永沢の時といい、こいつの事になると随分大げさに怒るんだな。もしかしてお前、口リコン趣味か？」

健史の馬鹿にするような言葉を、速人はさっくり無視した。速人はディケイドウェポンを降ろし、最後の質問をした。

「これで最後だ。お前の目的は何だ？ 召喚術を乱用したり、街を閉じ込めたり、おかしい虫をばら撒いたり、随分なことをしているな。前に“実験”と聞いたが、この実験を経て、お前が得る物は一体何なんだ？」

「全ての世界の征服だ」

健史は邪悪な笑みを浮かべ、軽く流れるような口調で、そう言葉

を
発
し
た。
。

第二十七話：ダークディケイドとドラゴンライダー

「お前今、幼稚臭いと思っただろ？　だがこれは古臭いように見えて、かなり難しい事業なんだよ。何処の世界でもそれを試みる奴は多くいる。“世界を一つにして戦争を無くす”とか確固な思想を持つて行くものもいれば、ただ自分の権力欲を満たしたいがために行う者もいる。目的がどうあれ、それが成功した事例はほとんどない。成功しても、すぐ内部分裂が起こって崩壊する。お前がぶっ殺したブラックサタン大首領も、それをしようとして失敗した」

「お前にならそれができると？　しかも一つじゃなく、無数の世界をまとめてか？」

本人が言う通り、単純すぎる野望だと速人は思った。だがどうやら健史は、それをかなり深い部分にまで思考しているようだ。

「ああ、お前も見ただろ、俺の技術力を。あの次元結界を使えば、どの世界の好きな場所にも召喚獣を呼び寄せられる。結界を大きく作れば、あのレッドキングのような巨大怪獣も、何万という大軍勢も、ものの数分で送り込める。その他にも様々な制圧方法を考えているぞ。」

「サタン虫とかか？」

確かにあれは大した物だった。変に武力制圧するよりも、遥かに正確にこの世を支配できる。

「そうそう、サタン虫もその一端に過ぎん。俺はいずれ多くの世界の精鋭を揃え、究極の大組織ウルトラショッカーを設立する。誰にも成せなかったことを見事成功させることで、俺こそが、真の最強

であることを全ての世界に知らしめてやるさ！」

息を切らずに己の野望を、高らかに全て言い切って見せた健史に、速人は思わず軽く拍手をした。

「お前の野望はよく判った。それで全ての世界を征服した後、その世界をどうする気だ」

「さあね。それは終わってから考えるさ」

夢は大きいくせに、肝心な部分を何も考えていない。これには速人も、こよみの件とは全く別方向に腹を立てた。

「ふざけるな！ お前の自己顕示欲のためだけに世界制服だと！

世界はお前のためにあるんじゃないんだぞ！ そんな馬鹿げた事に誰が付き従う！？」

「意外というもんだぞ。リンバウムの召喚師共みたく、ただ富と権威欲しさでお前の言う“馬鹿げた事”に平気でついていく奴もいる。永沢みたく己の独善のために、世界制服をしたがる奴もいる。ただ殺戮と暴力を満たすために、味方になってくれる奴もいる。世界が広ければ、実に色んな奴が見つかるもんだ。お前こそ、世界を己の物差しだけで考えるもんじゃない」

速人は大きく深呼吸して、乱れた平常心を取り戻そうとする。やがて力強く叫んだ。

「馬鹿馬鹿しい。俺はこの世界で色んな世界の住人に会ってきた。どいつも皆違う価値観を持って生きていた。他所の世界の力に、その価値観と人生を押さえつけられることなんて、誰も望んじやない。俺は世界の超えた罪人を裁く男だ！ そのウルトラシヨッカーとかいうの、結成前に俺が潰してやるよ！」

「そうかい……」

健史は黒いディケイドライバーを腰に装着した。すると速人の物と全く同じように、ベルトが巻かれ、サイドハンドルを引いてバックルが開く。

健史は黒いライドブッカーから、自分のディケイドカードを引き抜いた。そしてカードを持った手を、見せ付けるように前に突き出す。

「やれるものならやってみろ。変身！」

バックルにカードを差し込み、サイドハンドルを押して、バックルを収納した。

『カメンライド ディケイド！』

健史の周りに九つの残像が現れる。それらには速人の物とは異なる紋章が浮かんでおり、一気に中心の健史の下に集まる。

瞬く間に速人はディケイドの鎧を身に纏う。どこから現れた板が頭部に装着されてバーコードのような形になった。

その姿は速人の変身するディケイドと、ほとんど同じ姿だった。ただし速人ディケイドの鎧の紅紫色の部分が、健史ディケイドの場合青色になっていた。このカラーリングの違いのおかげで両者の区別は簡単につけることができる。

巨大生物の死骸がゴロンと転がった平地の真ん中で、二人のディケイドが対峙した。

「はあっ！」

両者は無言で同時に踏み込んだ。二人のディケイドのパンチが空中で激突する。威力は両方互角で、攻撃の衝撃・反動で両者が弾け、数歩後退した。

二度目の攻撃を先に仕掛けたのは速人だった。三步下がったと同時に地面を蹴り、一気に健史の間合いに詰め寄る。

（一発行った！）

速人の二度目の右ストレートが、健史の顔面に飛ぶ。

だが健史は足腰を曲げて姿勢を低くし、紙一重の距離で速人の攻撃をかわした。健史の頭上を速人の拳が空を切って飛んでいく。

（しまった！）

速人が気付いたときにはもう遅い。健史は勢いよく立ち上がり、渾身のアッパーカットを速人の顎に突き出す。

それは見事命中。超人的なパワーで殴られた速人は、通常のボクシングではありえない高さまで空中を舞い上がった。

速人はテスラバンドの浮遊能力で空中静止・大回転してから、健史に急降下キックを繰り出す。

健史はそれをバックステップでかわす。速人の蹴りは、健史が立っていた地面に直撃した。それにより大地が割れて、速人の着地した地点が3メートル以上陥没した。地味に見えて、とてつもない威力のキックである。

速人は自分が作ったクレーターを飛び超え、そのまま真っ直ぐ突撃して、健史に拳の乱撃を放った。いくつもの拳が健史に向かって

飛んでいく。健史はそれを踊るように動き、ひょいひょいと軽く避けていく。

やがて速人は、息切れで一瞬の隙を作ってしまった。健史はそれを見逃さず、バレエのように身体を回しながら、大振りの回し蹴りを放った。

（ぐあっ！）

それを受けた速人は勢いよく弾き飛ばされ、クレーターを通過して地面に転がっていく。健史はそれを見て一息ついて、指を振った。

「戦い方がなつてないな。ただ力技で突っ込むだけじゃ、俺には勝てないぜ」

速人は地面に倒れ付したが、すぐに起き上がった。健史が続けて言葉を発する。

「お前元々武道なんてやってなかっただろ？ カードから伝わってくる記憶でも、ある程度戦うことはできるだろうが、俺はお前とは違う。俺の技は、長年に渡って鍛錬を積んできた自前の戦闘技術だ。ディケイドのパワーは同等だが、残念ながらお前とは最初から格が違うんだよ」

「そうか。だが自画自賛が強いと、それが敗因になっちゃうぜ」

健史が喋っている最中に、速人は一枚のカードを装填した。

『アタックライド イリユージョン！』

速人の身体からいくつもの残像が出現し、それらは実体化して、全て速人が変身しているディケイドの姿となる。その場で速人ディ

ケイドが六人になった。

『速人さんが増えた！？ 忍者！？』

六人の速人ディケイドが、一斉に健史に向かって駆け出した。速人達は健史の周りを取り囲み、連携を組んで次々と健史に襲い掛かった。

大したことに健史は、それらの攻撃を全て見切り、風に吹かれた木の葉のように次々とよけていく。

途中で一人の速人の足に、自分の足を引っ掛けて転ばした。倒れた速人に躓きそうになり、他の速人達は一瞬動きを止める。その隙について健史は速人達の包囲網から脱出し、同時に一枚のカードを装填した。

『アタックライド プラスト！』

健史は素早く自分のディケイドウェポンを抜き、拳銃型にして六人の速人に差し向けた。銃口が残像のように分身し、無数の弾丸が発射される。

「うわあああつ！」

六人の速人がその弾幕を一斉に食らい、吹き飛ぶ。地面に倒れ付した際、五人の速人が影となって本物の速人の元に集まり、速人は一人に戻った。

速人もまたディケイドウェポンを抜いた。健史は構わず追撃して発砲する。速人は仰向けに倒れた姿勢のまま、刀型にしたディケイドウェポンで弾丸を弾いていく。

飛び道具の拳銃よりも、刀のほうが攻撃力は高いようで、力負けすることはなかった。だが腰を地面につけたまま、いつまでも弾道を見切り続けるのは、かなり骨が折れる作業だった。

やがてエネルギー切れかオーバーヒートかは不明だが、健史の銃撃に少しだけ間ができた。

速人は大きくバク転し、テスラバンドで飛んで、健史との間合いを大きく広げる。そしてまたカードを装填した。

『カメンライド リユウキ！』

バックルに東洋の龍の顔のような紋章が浮かぶ。すると残像のような影がいくつか出現し、速人の身体と重なる。一瞬にして速人のデイクイドの鎧が別の姿に変身した。

その姿の基本色は赤で、胸当てと仮面の部分が銀色になっている。仮面は格子状に横に線が引かれており、赤く丸い目が、下からそれを盛り上げている。頭頂には龍の顔の紋章が付いていた。左腕の籠手には、赤い龍の頭の装飾が取り付けられている。

鏡の世界を自在に行き来できる契約の戦士：仮面ライダー龍騎の姿である。

「っしやあ！」

速人が気合の掛け声を上げた最中、健史は速攻体制を整えて、拳銃をまた乱射した。速人はそれを何発か避けたが、カードを抜いている最中に一発命中した。

速人はよろけながらもカードを装填する。

『アタックライド アドベント』

突如速人のすぐ側の地面に、鏡のような謎の壁が現れた。その壁の中から、蛇使いの壺のように、何かとても長く大きな物が伸びてくる。

「グオオオオオッ！」

咆哮が響く。現れたのは体長6メートルにもなる、一体の龍型の怪物だった。

全身が赤く、表皮はロボットのように硬質感があり、尻尾の先には柳葉刀のような刀状の突起物が生えている。龍騎の契約モンスター・無双龍ドラグレッダーである。

なお鏡の壁は、ドラグレッダーが全身を現した辺りで、ガラスのように碎けて消滅した。

健史は続けて発砲する。するとドラグレッダーが速人の前に回りこみ、自らを盾として速人を銃弾から守る。

「それならこっちも使わせてもらおう」

健史もまた、カメンライドのカードを装填した。

『カメンライド リユウガ！』

健史の黒いバツクル部に、龍騎のものとは微妙に違うデザインの、龍の顔の紋章が浮き出た。すると真っ黒な残像が出現し、さっきの速人と同じような形で、健史ディケイドの姿が変わる。

その姿は速人が変身した龍騎の姿と、非常に良く似ていた。ただしこちらは全身が悪魔のように真っ黒だった。目の部分に窪みはな

く、黒い格子状の仮面の裏に、吊り上がった赤い目が覗いている。
鏡の世界で人間の虚像から生まれた暗黒のライダー：仮面ライダーリユウガの姿である。

速人は姿を変えた健史ディケイドに特に動揺せず、二枚目の龍騎のカードを抜いた。それと同じく、健史もリユウガのカードを抜く。

『アタックライド ストライクベント！』

『アタックライド ガードベント！』

速人の下にどこからか、ドラグレッダーの頭部を縮小させたような物体が飛んできた。その物体は速人の右手に、手袋人形のように装着される。龍騎の特殊装備：ドラグクローである。

一方の健史の下には、二枚の盾が飛んできた。その盾は縦長で縁は黒、表面は銀色で蛇の腹のような外装になっている。両脇には、爪の生えた三本の指がある動物の手首のようなものが、しゃがむような姿勢で付いている。リユウガの防御装備・ドラグシールドである。

健史はドラグシールドの裏側にある取っ手を掴み、二枚を両腕で持ち上げた。

「はぁああああつ！」

速人は姿勢を低くし、力を溜めるような動作で、ドラグクローを健史に向けて構える。共にドラグレッダーも、速人の隣で大きく息を吸い込むような動作で、力を溜め始める。

するとドラグレッダーとドラグクローの口元から、赤い灼熱の光が放たれた。

「はあっ！」

速人がパンチを繰り出すようにドラグクローを突き出すと、ドラグクローの口元から強烈な火炎熱線が激流のように放たれた。それと共にドラグレッダーは、巨大な火球を吐き出し、健史目掛けて放った。

この双攻撃による余波で熱風が吹き荒れ、周囲に生えていた雑草が一瞬で燃え尽き灰となった。

健史はドラグシールドを構え、迫ってくる熱線と火球の同時攻撃を、一挙に受け止めた。盾と炎が接触した瞬間、原爆でも落ちたかのような大爆発が起きた。

『きゃああああっ！』

爆風が凄まじい勢いで吹き荒れ、こよみがどこぞへと吹き飛ばされそうになる。大量の砂埃が舞い、近くの山の木々が根っこから次々と倒れて行く。転がっているレッドキングの死体が、風に煽られて僅かながらに揺れ動いていた。

速人の目の前は、山火事のような真っ赤な火の海と化した。燃え上がる炎のせいで、健史がどうなったのか全く分からない。

炎の届かない上空には舞衣がいた。両手足の首に、緑の玉がついた車輪のようなものが装着されて回転している。この力で空を飛び、爆発から逃れたらしい。

洗脳で自我が無くなっても、自身の身を守る基本行動はとれるようだ。

『（うん？ 何だろ？）』

爆風を耐え抜き、舞衣とは少し離れた所にある上空で、こよみはその業火を見下ろしていた。

だが不意に自分と呼ぶ声を聞いた気がした。コヨミフォックスの大きな狐耳が、常人には絶対聞こえないはずの距離にあるその呼び声を、正確に聞き分けた。

「（私を呼んでるの？ えっ、何？ バックの中のケータッチ？ 何それ？）」

それは何かを速人に渡すよう促す声だった。しわがれた女性の声だった気がする。

正直気になる発言だったが、目の前で死闘を繰り広げている速人を、一時でも見放してよいものかこよみは迷う。

だがここで黙って見ている、自分は何の役にも立たないと思い直し、こよみは亀バックを置いてある速人用マシンディケイダーの所へと飛んでいった。

第二十八話：甲虫ライダーとライダー王

『アタックライド アドベント』

速人が健史の消息を確認しようと一歩踏み込んだとき、炎の中からデイケイドの電子音声が届いてきた。

そして炎の中からまるで弾丸のように、漆黒の巨体が飛び出してきた。それはドラグレッダーに酷似した黒い龍型の怪物・ドラグブラッカーであった。

ドラグブラッカーは速人ではなく、速人の隣にいるドラグレッダーに激突する。

不意を突かれたドラグレッダーは、長い胴体の前足下部を噛み付かれた。だがドラグレッダーも負けじと相手の腹部に噛み付く。両者は蛇のように絡まりあい、レスリングのように地面に転がって取っ組み合いを始めた。

炎の中から、今度はリュウガの姿の健史が飛び出してきた。速人はドラグクローを構えるが、すでに間合いに入っていた健史の横蹴りによって、ドラグクローはたやすく跳ね飛ばされた。

「くそ！」

武器を失った速人は、やむなく拳で相対した。炎で赤く照らされる平野の中、龍騎とリュウガの殴り合いの肉弾戦が始まる。

戦況は健史が圧倒的に押していた。速人は成す術もなくパンチを十発以上受け、頭を掴まれて顔面に膝蹴りを喰らい、そのまま身体の上下が逆のジャイアントスウィングで投げ飛ばされた。

速人はボールのように地平線を飛んでいき、やがてレッドキングの死体に激突して地面に落ちた。

「くそ！ だつたらこれだ」

速人は倒れた姿勢のまま、カードを装填する。それを見た健史も素早く自分のカードを装填した。

『カメンライド カブト！』

『カメンライド コーカサス！』

バックルから“ZECT”の文字を張った、デフォルメしたカブト虫のシルエットの紋章が浮かぶ。

バックルから薄緑色の波紋のような光が連続して発生し、速人のディケイドの鎧に、網の目のような青く光る表皮が、ベルトから身体中に纏わりついていく。その表皮は虫の複眼のように、細かい正六角形がいくつも組み合わせられて構成されていた。それが身体を覆うたび、先に張った所から徐々に消えていき、跡にはディケイドの物とは違う鎧が露出されていく。

今回速人が変身した姿は、胴や肩当て等の基本色は赤で、手足の部分は黒く、上から銀色のパーツが装着されている。それは全体的にスマートな体型で、目は青くて顔の大部分を埋めるほど広い。額からは二ホンカブト虫の角先に似た形状の、二股に分かれた一本の角が、突き出るように生えていた。

選ばれし者だけが変身できる、対ワーム用の戦闘システムを装備した戦士：仮面ライダーカブトの姿である。

一方の健史もディケイドから別の姿に変わっていた。変身の過程はカブトとよく似ており、金色の光の波紋が発生し、金色の表皮が身体を覆っていく。ベルトに浮かんだ紋章は、カブトと違い、三本角のカブト虫だった。

変じた姿は、胸等のパーツはカブトの物とよく似ており、カブトの赤かった部分が、眩しい金色になっていた。右肩には、槍の様に鋭く尖った突起状の肩当が装着されている。右手の手首には“ZECT”という文字が書かれた、金色の角を持つカブト虫の模型のような物を取り付けられている。

顔はカブトと同じように、青くて大きな目がある。だが角は三本あった。後ろ向きに湾曲した太い角が、口元から額へ沿うように一本。両側の頬の部分からは、上向きに湾曲した角が一本ずつ生えている。そして何故か右手には、青い薔薇の花が一輪握られていた。

カブトを造ったものと同じ組織によって、組織に逆らうものを抹殺するために造られた黄金のライダー：仮面ライダーコーカサスの姿である。

速人は変身中に立ち上がり、健史としばし睨みあう。

取っ組み合いをしていた二匹の龍は、両者の変身と同時にホログラムのように一瞬で掻き消えた。そして両者同時にお互いの次のカードを装填した。

『アタックライド クロックアップ!』

『アタックライド ハイパークロックアップ!』

その瞬間、速人の視点から世界の時間が停まった。

正確には、周りの時間の流れが、急激に遅くなっているのだ。燃え上がる炎も、舞い上がった砂埃も、スローモーション映像のようにゆっくりと動いていく。

以前ワームも使っていたクロックアップ能力は、自分自身の時間の流れを急激に速め、常人を遥かに凌ぐスピードで活動する能力。そのため自分以外の全ての物体の動きが、停まったように遅く見えるのだ。

速人は、コーカサスに変身した健史に向かって突進した。同時に健史も、速人に向かって拳を構えて走り出す。

時間が緩くなった空間の中、二つの超高速攻撃が激突する。勝敗は……健史の圧勝だった。

「ぐあっ!？」

速人が健史の突進パンチで叩き飛ばされる。

力や技で負けた訳ではない。完全なスピード負けだった。コーカサスのクロックアップの速度は、カブトのクロックアップよりも遥かに上だったのだ。

健史は速人に向かって幾度も突進を繰り返し、あらゆる方向から縦横無尽に攻撃を繰り返していく。

条件は同じだと思い込んで、完全に不意を突かれた速人は、健史のクロックアップ攻撃に、手も足も出せずに打ちのめされていく。

ある時健史は、速人は一定の距離をとる。そしてクロックアップ状態のまま、ライドブッカーからカードを引き抜き、装填した。

『ファイナルアタックライド コココーカサス!』

音声の後、誰にも声が届かない空間の中で、健史は小さく呟いた。

「薔薇と共に散りなさい……」

コーカサスの角が発光したかと思うと、右足に大量のエネルギーが流し込まれ溜め込まれる。健史の右足下半部が電光のようなものを発しながら、金色に発光した。

（ライダーキックか！？）

速人はカブトの視覚機能：コンパウンドアイでタキオン粒子を読み取り、健史のその動作を視認した。

健史はチャージした右足で駆けながら、速人に突進する。そして己の必殺キックを放った。

（うおおおおおっ！）

速人は背を曲げて、自分の体感速度よりも遥かに速く飛んでくる蹴りを、紙一重でかわした。本当に間一髪だった。かわされた健史のキックは、空を蹴り、地面に戻った頃には全てのエネルギーを放出してしまっていた。

『クロックオーバー！』

必殺技のエネルギー消費が祟ったのか、健史のクロックアップがその直後に解除された。

（よし！ 今度はこっちの番だ！）

速人は反撃を開始した。健史から一端距離を取り、突進して高速移動攻撃を与えようとする。速人の鉄拳が健史の顔面、コーカサスの仮面に向かって飛ぶ。

（何い！？）

何と健史は通常速度のまま、首を曲げて速人のクロックアップのパンチをかわした！

これに速人は動揺する。健史もまた超視覚機能コンパウンドアイで、速人の攻撃方向を正確に読み取っていたのだ。

しかも動揺した速人に向かって、今度は健史が拳を突き出してきた。

クロックアップの世界では、常人ならばスローモーションのように動きが鈍い。だが常人を超えた身体能力と反射神経を持つ仮面ライダーならば、ある程度の速度の動作を取る事ができる。しかも今速人の身体は、健史の攻撃範囲内のゼロ距離に近い位置にいる。

速人の顔面に、健史の金色の拳が命中した。

通常空間から放たれたパンチはとてつもなく重く、速人は鼻に猛烈な痛みを受けて吹き飛んだ。仮面の裏の顔には鼻血が流れたかもしれない。

『クロックオーバー』

速人のクロックアップの制限時間が切れる。

一気に元通りの時間に引き戻された世界では、無傷のまま余裕で立っている健史と、いくつもの攻撃を受けて痛々しく俯けに倒れ付している速人の姿があった。

「残念でしたね。あなたのクロックアップでは、私のハイパークロックアップには勝てないですよ。最も、それを一撃でもかわして見せたことは、素直に褒めてさしあげましょう」

健史が余裕の口ぶりで笑う。カードの記憶の影響なのか、さつきと雰囲気や口調が大分変化している。

『速人さぁん!』

絶体絶命の状態にある速人に向かって、場違いな可愛らしい声が届けられた。

速人は両腕で上半身を起こし、何とか顔を声の方向に向ける。そこには狐の姿で空を飛んで、こちらに寄ってくるこよみの姿があった。よく見ると口に何かを銜えている。

「感心しませんね、お嬢さん。勝負の最中に割って入ってくるのは……。……!?!?」

健史はこよみの持っているそれを凝視し、声も上げられずに驚き、固まった。

こよみは速人の元に寄り添い、銜えていた物を速人に見せた。

「こよみ……これはあの時の?」

それは以前、ラーメン店でこよみのバックを調べた時に出てきた、奇妙な外装のタッチパネル式携帯電話だった。

『それをディケイドの姿で持てっ! そうすれば使い方が判るって、誰かが言ってた!』

「誰かって、一体誰だ?」

『わかんない。なんかどこから聞こえてきて……。本当に何にもわかんないけど、でもきつと何かの役に立つよ! だから速人さん、負けないで!』

速人はカブトの力を解除して、ディケイドの姿に戻る。そしてこよみからその携帯を受け取った。

（これは！？）

手に持った瞬間、こよみの言う通り、そのアイテムの使用方法が直接頭の中に流れてきた。これまで幾度も経験してきた事象なので、速人はさほど驚かない。

速人は力を振り絞り、かろうじて起き上がって見せた。そしてディケイドの指先を使って、画面上に表示されているライダーの紋章の形のボタンを次々と押し始める。

『クウガ、アギト、リュウキ、ファイズ、ブレイド、ヒビキ、カブト、デンオウ、キバ！』

最後に右端にあるFの文字を入力した。

『ファイナルカメンライド コンプリートフォーム！』

速人の眼前に、巨大なカメンライドカードの絵柄の、半透明な壁が現れる。写っている写真は、ディケイドに似た、見たこともないライダーの顔だ。

それはどんどん収縮して、速人の額部分に吸い込まれる様にして近づいていく。

速人のディケイドの仮面の側頭部には、ライドプレートという角のように長く突き出たバーコード板がある。その中央部分にカードを立て掛ける冠が出現し、カードは実体化してそこに収まった。

頭にカードを張った妙な仮面を付けたディケイドが出来上がった。その顔は収納されたカードに写っている顔そのものだった。

するとディケイドの鎧の、紅紫色だった部分が銀色に、緑色の目が紅紫色に変色した。

同時にディケイドの肩当て前部と胸に、新たな装甲が重ねて装着される。その装甲は全部で九つに区切りに分割されており、そこに九人の仮面ライダーの顔写真がついたカメンライドカードが、スロットの目のように収納されていく。

速人はディケイドライバーのサイドハンドルを引いてバックルを開く。そして回転したバックル部分を掴み、引っ張った。するとバックル部分が、いともたやすくベルトから外れてしまった。

取り外したバックルを、今まで空いていたベルトの右腰部分に装着する。そして空になったベルトの中央部分に、携帯電話型のディケイドアイテムをはめ込んだ。

仮面ライダーディケイドの最強形態にて、全ての世界のライダーの王：ディケイドコンプリートフォームの誕生である。

（すごい！ 何だこの感じは！？）

速人は先程の戦いの痛みはどこかへと吹き飛び、身体の奥底までに、とてつもない力が伝わってくるのを感じた。

それは肉体の強さだけでなく。精神的にも、いくつもの強い魂が自分に宿ったようで、なみならぬ勇気と正義の心が、清清しくも力強く湧いてくる。

第二十九話：舞・HIMEとキングブレイド

「馬鹿な！ コンプリートフォームだと！？ そのケータッチは、私ですらまだ完成に至っていないのですよ！ それを何故貴様が持っている！？」

健史が驚きと疑問の声を高らかに上げる。どうやらこのアイテムは“ケータッチ”というらしい。

これもまた気になることを言っていたが、速人はあえて答えないことにした。そのケータッチが、模造品であるこよみのバックから出てきた、と話しても益々話を混乱させる気がしたからだ。

速人は再び健史の元に歩み寄る。健史は困惑しながらも、自分のカードを装填した。

『アタックライド ハイパークロックアップ！』

二度目のハイパークロックアップ。健史は再び超高速で、速人に向かって突進する。

速人は紙のようにヒラリと身体を揺り動かし、健史の突進をかわした。健史は速人の後方でUターンして、二度目の攻撃を繰り出す。すると速人はそれを読んでいたがごとく、右手の肘を後方に突き出した。

「ぐあっ！」

速人の肘打ちは、後方から迫ってくる健史にクリーンヒット。強化されたディケイドの身体・感覚能力はハイパークロックアップさえも見切ったのだ。さらに追撃して、速人は後ろ回し蹴りを健史に

加えた。

二度目の攻撃命中に、健史は大きく昏倒する。その影響で、健史はハイパークロックアップの世界から叩き出された。

速人はそのまま健史に、拳での激突を挑んだ。両者の攻撃が激しくぶつかり合う。

さつきとは逆で、戦況は速人が圧倒的に優勢だった。健史は自前の戦闘技術で、攻撃を受け流そうとするが、速人のパワーは凄まじく、ガードしても力負けして後ろに追いやられていく。

健史は一瞬の隙について、速人の胸に左拳で一撃を与えた。だが速人はよろけない。ディケイドコンプリートフォームは攻撃力だけでなく、防御力も格段と上昇しており、健史の攻撃はほとんど効いていなかった。

健史の一撃は、逆に健史自身に大きな隙を作ることになってしまった。速人は全力の右ストレートを、健史のコーカサスの仮面にぶち込む。

コーカサスの仮面が僅かに凹み、健史は長々と吹き飛ばされ、地面をバウンドして転がっていく。

「くそ！ ならばこれだ！」

急激な逆転にも健史はあきらめない、すぐに立ち上がって、ディケイドの姿に戻り、新たなカードを装填した。

『カメンライド アーク！』

象徴化した蝙蝠のシルエットのような紋章がバックルに浮かぶ。すると健史の身体が、宇宙遊泳のようにゆっくりと宙に浮き上が

った。そして健史の身体を呑み込む形で、その場に巨大な人型が立体映像のように映し出される。その人型はほとんど実体化していき、健史ディケイドの姿は完全に見えなくなる。やがてそこに、ディケイドとは姿も大きさも全く異なるライダーが、完全に姿を現した。

それは身長3メートル以上ある巨人だった。近くで倒れているレッドキングと比べるとずっと小さいが、それでも見る者を圧倒する威圧感がある。

身体と同時に腰に巻いてあるディケイドドライバーも巨大化していた。全身の鎧は黒く、所々に銀の装甲が張られている。目は大きく黄色で、釣り目のように上向きに尖っている。頭には山羊のような、後ろ向きに湾曲した大きな角が二本生えている。

人間の悲鳴を最高の快樂とする、邪悪な怪物レジエンドルガの王：仮面ライダーアークの姿である。

「ぐうおおおおおおっ！」

巨人と化した健史は獣のような咆哮を上げた。

咆哮の後、後ろ腰に差してある、共に巨大化したディケイドウェポンを抜く。するとそれは、アークの体格に合わせた巨大な黒い三叉槍に変身した。アークの専用武器：アークトライデントである。

健史はアークトライデントを振り回しながら、象のような足音を立てて、速人に向かってきた。そしてアークトライデントの槍先を、速人に向かって突き下ろす。

身体が大きければ当然パワーも上がるが、その分動きが鈍くなる。速人は横に跳ねて、その攻撃を余裕でかわす。速人が立っていた地面に、アークトライデントが深々と突き刺さった。

速人は即座に間合いをつめて、健史の樹木のように太い右足の、

向こう膝に前蹴りを与えた。

「ぐあああああっ！」

俗に弁慶の泣き所、と呼ばれるその部位を、パワーアップしたデイクイドに蹴られた健史は、あまりの痛みに苦悶の悲鳴を上げた。

速人はさらに健史の右足を掴み上げ、思い切り引っ張る。健史の足の裏が地面から離れ、盛大に仰向けに転んだ。

速人は掴んだ足を離さない。身体を回転させて、健史の身体を持ち上げて回し上げる。壮大なジャイアントスウィングだ。

「うおおおっ!？」

速人の何倍もの体重がある健史の身体が、速人を中心軸としてプロペラのように回転していく。やがて速人は急に腕を放し、健史の身体を砲丸投げのように思いっきりぶん投げた。

健史の巨体がボールのように軽々と飛んでいく。そしてさっきの速人と同じように、レッドキングの死体に激突し、地面に転がっていった。

健史が倒れこんでいる隙に、速人はデイクイドウェポンを刀型にして抜き、必殺のカードを装填した。

『ファイナルアタックライド デイデイデイケイド!』

腕で身体を持ち上げて立ち上がろうとする健史と、速人の間に九つのカード型の光の壁が現れる。

これまでは光の壁に描かれていたのは、全てデイクイドの紋章だった。だがコンプリートフォームから生み出されたそれは、一つ一

健史は顔を地面に付けながら、死んだように動かない。速人は少し心配になって、健史に近づいていった。それに伴ってこよみも近づいてきた。

『死んじやったの?』

「さあな……」

健史は変身状態のまま、ピクリとも動かない。試しに刀で突っついてみるが反応は無し。

(どうしよ、これ?)

手当てをしてやるべきか迷い始めたとき、健史の右手が動いた。

『よかった。生きてたよ……あれ?』

健史の手はライドブッカーへと伸びていた。そしてそこから一枚のカードを引き抜く。

「おいおい。そんな身体で今更何をしようってんだ?」

健史は答えない。ゆっくりとした動作でそのカードを装填した。

『ファイナルフォームライド マママイヒメ!』

太線の円の中に一つの点があり、上に一本の引き線が伸びた紋章が、バツクルに浮かんた。

(マイヒメ? マイだと!?)

速人は上空の舞衣を見上げた。上空の舞衣はこよみの時とよく似た変異を起こしていた。

舞衣の背中から、小さな次元の門が開く。そこからファイヤーに似た巨大な炎の翼が生え出て、大きく広がった。

出てきたのは翼だけではない。白い布のようなものが風呂敷のように広がり、彼女の身体を覆っていく。舞衣は空中で鉄棒のように一回転した。するとその姿は人間のものとは程遠い、怪物の姿になっていた。

それは人間より少し大きいくらいの、ワイバーンのような白い竜だった。

燃える翼とは異なり、表皮は白く、各部にカラフルな色の流線や球状の紋章が引かれている。左右の両腰には、タービンのような円形の物体が装着されていた。尻尾は狐のよう形で、白い毛がふさふさと生えている。

目に当たる部分に眼球は無く、緑色の細い模様のようなものが顔の両側についている。そして鰐のように長い両顎には、一本の赤い剣が突き刺さっていた。その剣身は上顎と下顎を貫通しており、何かに処刑されたかのような顔である。

「超絶変形か。まあこよみができるんだから、あいつにも出来ておかしくはないか」

変身した舞衣「マイヒメカグツチは、速人達に向かってハヤブサのように急降下して襲い掛かった。

『速人さん！』

こよみと違って、速人は全く慌てない。冷静に右手の拳に力を溜める。

マイヒメカグツチの爪が、速人に襲い掛かる。それに速人は拳で一撃を加えた。マイヒメカグツチは、難なく弾き飛ばされ上空に飛び戻された。

『ウワアアアアアアッ!』

マイヒメカグツチが、およそ人間が上げるものとは思えない咆哮を上げた。すると両腰の円形の物体が、タイヤのように回転を始めた。エネルギー充填の動作だ。

「くそ!　しょうがないか……」

速人はベルトの中央部に収められた、ケータッチのパネルを二回押した。一つはランプのスピードマークのスイッチ、次に右上のFの文字を押す。

『ブレイド　カメンライド　キング!』

鎧に貼られたカードがスロットのように変化し、一種類のライダーのカードに統一される。

同時にケータッチから、計13枚のカードのような巨大な光の板が、次々と召喚されてきた。その光の板は全て縁が金色で、中央に動物の絵のようなものが描かれていた。

それらは綺麗に一列に並び、速人の周りを竜巻のようにグルグルと回転する。そしてそれが一枚ずつ列から外れ、縮小しながらデイケイドの鎧に張り付いていく。

両肩・上腕部・太腿・膝、とカードが張り付く度に、デイケイドの鎧は変化していき、胸に13枚目が張った所で変身が完了した。

その姿は、全身が金・銀・青の彩色を持つ、非常に重厚な鎧だっ

た。光の板が張り付いた部分には、それぞれの光の板に描かれていた、動物の絵のプレートが装着されている。その中でも胸についたプレートが一番大きく、スピードマークのような形の中に、コーカサスオオカブトムシと思われる昆虫が描かれていた。

目はこれまで変身したライダーと比べると、やや小さくて赤く丸い。頭部には三本の角が、額と側頭部に一本ずつ生えていた。

速人が握っていたディケイドウェポンは、両刃の大剣に変身していた。剣身の刃の部分は金色で、腹は赤色の中に金の模様が細く伸びている。剣身の付け根はより太く、青色になっている。

その姿は、古代生物アンデットを封印する戦士：仮面ライダー剣^{ブレイド}の最強形態、ブレイド・キングフォームであった。

マイヒメカグツチの腹が膨らみ始める。そして剣で固定された両顎を動かし、口を開いた。口内には貫通した剣身がしっかりと見えている。

速人は大剣を構えると、キングブレイドの鎧に張られている一枚のプレート、牛の絵のプレートが青く光りだした。すると速人の持っている大剣：キングラウザーの剣身も同じように青く光りだす。

『カアッ!』

マイヒメカグツチの口から、巨大な火球が吐き出された。それは空中でどんどん大きくなり、地上の速人とこよみに向かって飛んでいく。

「はあっ!」

速人はキングラウザーをその火球に突き出した。火球がキングラウザーの先端に直撃する。

『きゃあ!』

こよみが恐怖で目を瞑るが、その火球が爆発することはなかった。

『ナニイ!?!』

火球が剣先に触れた途端、火球がピンポン玉のように逆方向に弾かれたのだ。マグネットバツファローの斥力によって、跳ね返された火球は、空中にいる発射主に向かって飛んでいく。

マイヒメカグツチは翼で自身の身体を包み、即席の防御耐性を取った。そのまま彼女は自身の放った攻撃に撃たれた。

空中でさっきの龍騎が放った技をも凌ぐ大爆発が起こる。今回は空中爆発だったので、地上の被害は多少緩やかだった。

爆発の後、空に浮かぶ大量の黒煙の中から、両翼が損傷したマイヒメカグツチ、が猟銃に撃たれた鳥のように落下してきた。

そのまま地面に叩きつけられる。だがこれで戦闘不能になったわけではないようで、すぐに起き上がり、狂ったような鳴き声を上げて二度目の火球を放とうとする。

「可愛そうだがしかたがない。来世でいい男に会えることを祈ってるぞ」

速人はとめのカードを抜き出した。カードを右腰のバックルに装填し、バックルの表面を右手の掌で軽く叩く。

『ファイナルアタックライド ブブブブレイド!』

バックルからランプのスピードマークの紋章が浮かぶ。

するとディケイドの必殺技に似た形で、マイヒメカグツチとの間に5枚のカードのような光の壁が現れた。ただしこちらは、キングブレイドのプレートにある動物の絵が描かれている。

速人はその五枚に向かって大きく剣を振る。その一閃で剣から強力な光線が放たれた。その光線は光の壁を通り抜け、マイヒメカグツチの全身を呑み込む。

その光のあまりの眩しさに、戦況を見守っていたこよみは思わず目を閉じる。

光が収まると・・・そこには何も無かった。マイヒメカグツチのいた場所には、ブスブスと白い煙を立ち上らせる、大量の炭と灰が地面に広がっているのみであった。

第三十話：時の列車とハイパーカブト

「これで終わり……、だといいがな」

速人はキングラウザーを地面に刺し、まだ釈然としない口調でそうぼやいた。

「いやあ、ついにやりましたねえ速人さん。これでこの世界は悪の手から解放されました！」

突然その場にしがれた女性の声が、速人に向かって投げかけられた。こよみの声ではない。だが初めて聞く声でもない。

「お前か……」

速人の向けた視線の先には、二足歩行で歩く、腸を飛び出させた動く虎のぬいぐるみが大地に立っていた。速人がこの世界で最初に訪れた街で、巨大蟻の襲撃以降消息不明になっていたハラキリトラだった。

戻ってきたこよみが、不思議そうに速人に尋ねる。

「速人さん、この人がハラキリトラさんですか？」

「お前あの時こいつを見ていなかったのか？ それじゃあ紹介するよ。俺にディケイドドライバーを押し付けて、この世界に放り込んだ張本人のハラキリトラだ」

速人は過去を思い返し、少し怒気の入った口調でこよみに紹介する。

「心外ですねえ。あの時、速人さんの背中を押したのは私じゃありませんよ」

「うるさい！ 大体何でお前がここにいる。街を探してもどこにもいなし。ずっと俺らを探していたのか？」

「そんなわけないじゃないですか。あの街にずっといましたよ。街の方に助けてもらって、ようやくここに追いついたんですよ。私だって結構大変だったんですから。私がいないせいで、途中で行き先が分からなくなって大変だったでしょう？」

「助けてもらった？」

速人は少し疑問に思った。こいつに仲間がいたのだろうか？

「ええ、こちらの方に」

ハラキリトラが指の無い手のある方向に向ける。疲れていたせいか今まで気が付かなかったのだが、すぐ近くに一匹の未確認生物が宙に浮いていた。

『コウモリ？』

「コウモリばいが……。顔でか！」

それは二人が突っ込んだように、蝙蝠のような妙な空飛ぶ生き物だった。それが羽ばたきながら風船のようにプカプカと浮いている。体色は全体青に近い色で、両側に大きな翼が生えている。その翼は腕から飛膜が広がり、長く伸びた指の骨がそれを支えている、完璧な蝙蝠の翼である。

だが蝙蝠に似ているのはそこまで、顔はとても大きく、なんと胴体が無かった。顔の下に取り付けたような小さな足が生えており、翼は人間の耳に当たる部分から耳朶のように生えている。頭天边に本当の耳が角のように生えており、目つきは吊り目だった。

そして一番特徴的なのは口。口はとても大きく、顔の半分以上の面積を覆うのかと思うぐらいの勢いで、あぐりと大口を開いていた。そのせいか顔がやたらと縦長に見える。

身体の大きさは目測から見て、体高1・6メートル、体重50キロぐらいであろう。

「どうもゴルバットです。以後よろしく」

空中でお辞儀をするように体を曲げて、その生物「ゴルバット」は会釈をする。雰囲気からいって、ポケモンの一種と思われる。

「いやあ、私が駆けつけたときには、お二人とももう出発してしまったようですね。空飛ぶバイクの噂を拾いながら、ようやくここまで送ってもらったんですよ」

「どうやらあの街には、まだ送還されていないポケモンがいたらしい。」

「じゃあ、さっきあたしに声をかけたのも、ハラキリトラさんだったんですか？」

「そうですよ。あの時、速人さんの起こした爆風に吹き飛ばされて、林の木に引っかかってしまってたねえ。まあ、なんとか私の声が届いて良かったですよ」

速人はベルトに装着させてあるケータツチを指差して、ハラキリトラに詰問した。

「なあ、何故これはこよみのバックに入ってたんだ？ これもカードでコピーしたものなのか？」

「ははははっ！ そんなわけありませんよ！ さすがにディケイド

のパワーでも、こんな高性能な物はコピーできません。あらかじめ異空間の中に隠しておいて、イミテーションライドカードを使ったら、一緒に速人さんの手に渡る仕組みになっていたんですよ」

ささやかな疑問があつさりと解決する。速人は肝心の、このデイケイドドライバーの出所を聞こうと思ったが、以前のように何も知らないと返される気がした。

『ちよつとよくわかんないけど・・・、あたしたち勝ったんだよね！ これで終わったんだね！』

こよみは嬉しそうに明るい声を上げる。だが速人はそうは行かなかった。

速人はデイケイドの超人的な感覚能力で、近くに現れた動く者の存在を察知していた。

「こよみ・・・悪いがそれはもう少しまだみたいだ」

速人はその気配の先に首を向ける。こよみとハラキリトラも速人の視線の先に目をやった。そこには一人、誰かが立っていた。

あの時、舞姫のカードを使った後、今まで放置されていた健史だった。未だデイケイドに変身した状態のまま、こちらに顔を向けて固まっている。

『あの人・・・！』

「まだ立ち上がる体力があつたのですね。中々しぶとい」

「おい健史！ お前はもう戦える身体じゃないはずだ！ 変身を解いて、デイケイドドライバーをこっちに渡せ！」

健史は無言だった。こちらに顔を向けたまま、石像のように硬直

している。こよみはこの様子に、怪訝に思って首を傾げる。

まさか弁慶のように、立ったまま死んだのではないかと速人は危惧した。それを確かめようと一歩足を踏み込む。

すると今まで黙っていた健史が、常人ではほとんど聞き取れないほどの小さい声で、ボソリと何かをつぶやいた。

「・・・マケナイ」

「はい？」

速人が首をさらに傾ける。突然健史が高笑いを上げながら叫びだした。

「マケナイ！ オレハマケナイ！ コワスコワスコワス！ オレハスベテヲハカイスル！ クハハハハハハハハハハッ！」

まるで壊れた機械のような声で、健史は叫び、笑い続ける。あまりに突然の豹変ぶりに三人は度肝を抜かれた。

「ちよっ！ 健史さん、どうしちゃったの！？」

「ハラキリトラ！ あれは何だ！」

「さあ？ 負けたショックでおかしくなったんじゃないですかね？」

その程度であそこまで変わるわけがない。速人がそう突っ込もうとしたとき、健史が一枚のカードを装填していた。

『カメンライド ガオウ！』

オルガンの演奏のような音響が奏でられ、健史のバックルに、以前速人が変身した電王と同じ紋章が浮かぶ。そしてまた姿がディケ

イドから別の姿へと変わっていった。

その変化もまた、電王のものとよく似ていた。ディケイドから変化したレールのようなラインが引かれた鎧に、いくつもの銅色の装甲が貼り付けられていく。

頭部には鰐のような歯が生えそろった、ハサミ状の物が左右正反對の方向に装着される。それはレールの上を通り、目の部分で止まり、開いていたハサミの口が複雑な変形を繰り返しながら閉口される。その仮面は鰐の口を左右にくつつけたような、妙なデザインだった。

また肩当てや胸当てにも、組み合わせあった鰐の歯のようなラインが引かれている。

時の列車を襲う強盗集団の頭領：仮面ライダー牙王の姿である。

「ウガアアアアアアアッ！」

健史は天を見上げて、野獣のような奇声を上げ、ライドブッカーから二枚目のカードを引き抜いた。興奮しているのか、カードを持った手が震えている。

「おい！ お前本当にどうしたんだよ！ しっかりしろ！」

カードの影響で、性格が若干変化するのとは明らかに様子が違う。速人は敵であることも忘れて、本気で心配して声をかける。だが健史はそれを無視してカードを装填した。

『アタックライド ガオウライナー！』

突然平地のどこから、急アクセルを引いたバイクの排気音が鳴り響いた。今までずっと放置されていた健史のマシンディケイドー

である。

マシンディケイダーは無人行機能を発動させて、健史の元に走り寄ってきた。即座に健史はマシンディケイダーに乗り込む。その時、健史とマシンディケイダーを取り巻く空間に変調が起こった。

『あれは……、電車？ 恐竜？』

それはアークに変身した時と似た変化だった。

健史を包み込むようにして、巨大で蛇のように長い、透明な何かがそこに映し出された。

それは徐々に実体化していき、健史とマシンディケイダーの姿が見えなくなる。そしてそれは完全に実体化した。

それは電車のような大型の乗り物だった。

一台の先頭車両に、後部車両が7両連結されている。車両の下部や側面は黒く、上部には銅色の背ビレが両側に二つ生えている。

先頭車両はとても特徴的で、先頭部が鰐か恐竜を模ったような、動物の顔のデザインになっていた。顔は長く緑色の細い目があり、鋸のようなギザギザの歯が生えている。色は上面が銀色で、側面が銅色だった。

健史跨るマシンディケイダーは、その先頭車両の顔の後部に乗り込んでいる形になった。

全ての時間を支配する力を持った神の列車：ガオウライナーである。

『ガオオオオオオオオオオッ！』

ガオウライナーが車体を生き物のように持ち上げ、口を開き、ライオンのような咆哮を上げた。口の付け根の部分には、長い両側の

口を開閉するためのギミックがしっかりとついている。

「まいりましたねえ。あれはガオウライナーですよ。あの列車は時間そのものを食べちゃうんですよお。このまま暴走すると、この世界そのものの存在が消されちゃうかもしれませんねえ」

全然困っているようには感じない声で、かなり恐ろしいことをハラキリトラは説明した。

ガオウライナーが空へと飛び立った。いや、正確には飛んでいるとは言わないかもしれない。

ガオウライナーの車輪から、電車の線路とおぼしき、金属製の部品を組み合わせたような長い物体が現れた。その線路は、両側に灯火が並べられており、車両の先端から空へと伸びていく。

ガオウライナーはその線路を伝って、空へと走り出した。

空中に、地面から遠く離れたところに設置された線路と、その上を通って空を飛ぶ列車という、何ともファンタジックな光景が出現するこになった。

しかも先頭車両に、とても大きな怪物の顔があるわけだから、奇異さを更に際立たせる。

「何をする気だ？」

線路が螺旋を描くように伸び、ガオウライナーがそれにそって空中を回りながら飛んでいく。ガオウライナーが通り過ぎた線路は、後ろからどんどん畳むように消えていった。

ある程度の高さで止まり、ガオウライナーは再び遠吠えのような鳴き声を上げる。

その途端、世界が変わった。

「何だ!？」

『なにこれ!？ 砂!？』

周りの風景が一瞬にして、砂のような灰色に変色していったのだ。横たわっていたレッドキングの死体も、林の木々も、全てが灰色に染まっていく。そしてそれから、何かが零れ落ちた。否、それは表面が砂と化して崩れ落ちていつているのだ。

速人達を除く全ての物質が、砂の城のようにザラザラと形を失っていく。その変化はガオウライナーを中心に、波紋のように世界へと広がっていく。

もうすでに近隣の町村にも、この変化が訪れているだろう。人々がどうなったのかなど、考えたくも無い。

ガオウライナーは未だに鳴き続けている。

「まずいですよう。このままだとこの世界は、時の狭間と同じ、何も無い砂漠の荒野となってしまうですねえ」

『どとど、どうしよう、速人さん!』

こよみが速人に顔を向けると、速人はキングブレイドから、コンブリートディケイドの姿にいつのまにか戻っていた。

「時間が壊れたなら、時間を巻き戻して修復してやるまでだ」

速人はケータッチのスイッチを押した。最初に押したのは、さっきと違いカブトの紋章だった。

『カブト カメンライド ハイパー!』

またもやディケイドの姿が変わっていく。

その変化の過程はカブトとよく似ており、現れた姿もまたカブトによく似ていた。ただし以前赤かった部分の装甲が銀色になっており、胸と背中に新たな赤い装甲が重ねられている。

仮面の目の色は薄青色になり、二股に分かれた角が以前よりも大きくなっている。

変身の瞬間、背中のパーツが虫の羽のように展開し、美しく輝く光る翅が現れ、あっというまに消滅する。

ハイパーゼクターによる、仮面ライダーカブトの強化形態：カブト・ハイパーフォームの姿である。

「すごいを見せてやる」

速人は一枚のカブト専用カードを装填した。

『アタックライド ハイパークロックアップ!』

ハイパーカブトの背中に、再び光の翅が展開される。するとまた世界に変調が訪れた。

違う、変調した世界が元に戻っていくのだ。波紋のように広がっていく破滅の世界が、テープの巻き戻しのようにどんどん縮小し、砂化した世界が元の色と形を取り戻していく。

一転してそこは、巨大生物の死骸と・いくつものクレーター・倒れた木々と・未だに燃え盛る炎と、戦いの跡がエグく残る元の風景に戻っていた。

世界の修復の終了と共に、光の翅が再度消滅する。

『速人さん、すごい！ みんな元に戻っちゃった！』
「すごい？ 今何かあったんですか？」

こよみは周囲を見渡し、驚きを通り越して感動の声を上げる。だがハラキリトラは時空の変動を知覚できなかったのか、巻き戻した時間の出来事を何も覚えていなかった。

上空からガオウライナーが速人たちを睨みつける。そして速人に向けて、河馬のように大きく口を開いた。

それに対して、速人はカードを抜くと同時に、デイケイドウエポンを手にとった。カードの装填と同時に、デイケイドウエポンは金色の刃を持つ黒塗りの大剣に変身した。

その大剣の各部分、剣先と剣身の付け根には、蜂・蜻蛉・蠍を模った小型ロボットのようなのが装着されている。

ハイパーカブトのワーム殲滅用の究極兵器：パーフェクトゼクターである。

『ファイナルアタックライド カカカカブト！』

速人がパーフェクトゼクターを銃のようにして、ガオウライナーに構える。すると剣先の蜂型ロボットの尻部に、黄色い光の渦を描く形で、膨大なエネルギーがチャージされ始めた。

同じくガオウライナーにも、口内からエネルギーの収束・蓄積の光が放たれ始めた。

「はあっ！」

地上と空中、両者の必殺技が同時に発射された。

第三十一話：大穴と妹

パーフェクトゼクターからは、赤紫色の巨大な竜巻状のエネルギー波が発射された。発射の直前、背中からまた光の翅が現れ、発射の反動から速人の身体を守り、支える。

もう一方のガオウライナーの口からは、炎のような赤い直線状の光線が発射された。

二つの攻撃が、空中で凄まじい勢いを上げて激突する。巨大なエネルギーの波動が、大きな爆風となって辺りに吹き荒れる。

『うわあああああん！』

「ひひひひひひっ！」

その爆風は、威力も長さも先程の龍騎の技とは桁外れだった。こよみは今度こそ吹き飛ばされ、倒れた木々が木の葉のように空を舞い、レッドキングの死骸が寝返りをうつように横に転がった。

ハラキリトラはこよみの身体に掴まって、共に飛ばされていた。ゴルバットは羽ばたいて何とか頑張るが、結局耐えられず、糸の切れた凧のように遙か彼方に消えていった。

両者の攻撃の攻防は、速人が圧倒的に押していた。ガオウライナーの光線は、見る見る赤紫の竜巻に相殺されて押されていき、ガオウライナーの口内間近に迫っていく。

「いけええええええええっ！」

腕がもげそうなほどの凄まじい反動に耐えながら、速人は気合の声を上げる。そしてエネルギー波がついに、ガオウライナーの大き

く開かれた口に直撃する。

直撃の瞬間、ガオウライナーの車体が割れ物のようにバラバラになり、波動化したタキオン粒子により、原子崩壊・消滅していく。線路や後部車両も、ドミノ倒しのように次々と破壊されていき、ガオウライナーは完全消滅した。

「こよみ！」

敵を倒した速人が真っ先に取った行動は、こよみの安否の確認だった。避難をさせないまま、すぐ側あの技を使ったせいで、今どんな状態にあるか判らない。

『速人さあああん！』

心配はすぐに杞憂に終わる。背中にハラキリトラをのせたこよみが、すぐに速人の元に戻ってくる。近くにゴルバットもいる。

「こよみ……良かった」

その姿に速人は安堵の息を吐いた。だがすぐに警戒の態勢を取る。速人は空から何かが落下してくる気配を、超感覚で読み取っていた。それが何なのかは確認するまでもなかった。

こよみが到着したすぐ後に、それは速人から100メートル程離れた地面に墜落した。かなり高所から落下したようで、墜落の衝撃で地面が少し陥没している。

『健史さん！？』

それは先程まで、破壊されたガオウライナーに搭乗していた健史だった。大の字で仰向けに倒れ、姿は牙王からディケイドに戻っている。鎧はもう既に廃車のようにボロボロになっており、あれから元の姿を想像するのは若干難しいかもしれない。

最も、それだけでも大したものだ。先程速人が放ったハイパーカブトの必殺技：マキシマムハイパーサイクロンは、半径100キロメートルを跡形も無く消滅させるほどの威力がある。

そんな世界最大級の核爆弾をも凌ぐ破壊エネルギーを、正面から受けてここまで原型を留められるとは、恐ろしく頑丈な鎧である。健史はさっきと同じように倒れたまま、しばらく動かなかった。

（今度こそ死んだか？）

だがまたもや予想に反して、健史は起き上がった。最も動きは先程以上に覚束なく、まるでゾンビのようにフラフラと起き上がったくる。

何度か転倒しながらも、健史はようやく両足で立ち上がった。立っている最中も酷くよろめいており、もう意識があるのかも定かではない。

速人は暫く様子を伺っていたが、反撃の様子がないと判ると、突然二回目の必殺技のカードを装填した。

『ファイナルアタックライド カカカカブト！』

先程とは違い、タキオン粒子がパーフェクトゼクターの剣身全体に蓄積された。剣身が強烈な電光を迸りながら、赤紫色に発光するやがて光る剣身は、元の何倍もの長さに伸びて巨大化した。

「ちょっと！？ 速人さん！？」

「殺っちゃうんですか？ 鬼畜ですねえ」

「おいおい、やりすぎだろう……」

速人はパーフェクトゼクターを構え、健史目掛けて突撃した。

「駄目だよ、速人さん！ やめてえええええ！」

こよみの訴えを無視して、速人はパーフェクトゼクターを振る。
巨大な剣身が健史目掛けて振り下ろされた。

こよみは反射的に目を瞑る。

ガスッ！と意外と小さな破壊音が響いた。後に残ったのは夜のよう
な静寂だった。

「……？ あれ？」

こよみが目を開けると、健史はまだ健在だった。だが速人のパー
フェクトゼクターの光は既に消えている。

こよみが不思議に思ってよく見ると、健史のベルトのバックル部
が消滅していた。後ろの装着部位も切断されていて、ベルトが支え
を失って革紐のように健史の腰からずれ落ちた。

速人は健史の身体を斬らず、腰にあるディケイドドライバーのみ
を破壊したのだ。健史のディケイドの鎧が、九つの残像に分裂して
消滅し、健史の生身の姿が現れる。

健史は、息はしているものの、目つきはもう死人のようだった。
浴衣は大分破れていて、全身に酷い痣ができています。これまでの戦
いで、身体の内には外見以上のダメージが届いていることだろう。

健史はゆっくりと目を閉じ、再び仰向けに倒れた。そのまま眠る

ようにして完全に気を失う。

「今度こそ本当に終わったな」

速人はようやく勝利を実感し、安心のため息を大きく吐いた。そしてサイドハンドルを引いて、デイケイドの変身を解除する。するとこよみも狐の姿から元の人間の姿に戻った。

「速人さあん！」

こよみの大喜びで駆け出して、速人に抱きついた。速人は優しく笑ってこよみの頭を撫でた。

「ようやく終わったよこよみ。お前にも色々助けられた。本当にありがとう。・・・さて」

速人は目線をこよみから外す。近くには短い足で、赤ん坊のようにちよち歩いてやってくるハラキリトラがいた。

「おめでとうございます。速人さん、今度こそあなたはこの世界を救いました！」

「そりやどうも。それで早速だが、俺はどうすれば元の世界に帰れるんだ？」

「どうすれば帰れるんでしょうねえ？」

速人のこめかみに一筋の線が入った。そしてなるべく冷静に、低い声で質問をし直す。

「冗談で言ってるんだよね？」

「いえいえ冗談じゃありませんよ。私は案内役を任されましたが、

終わった後の帰り道は何も聞かされてないんですよ」

速人は静かにキレた。ハラキリトラの身体を、強い力で鷲掴みにし、そして内臓をゴムのように何度も引っ張り出す。その時の般若のような表情に、ゴルバットはオロオロと慌て、こよみは僅かに身震いした。

「速人さん！ ちょっと落ち着いてくださいよ！」

「ふざけるなよな。最初からそうだったが、肝心なことは何も教えずに色々と押し付けやがつて。いい加減教えろ！ このディケイドドライバーは一体何なんだ！ どうして俺が選ばれたんだ！」

「ごめんなさい！ お願いやめて！ 私、本当に何も知らないんですよお！」

ハラキリトラが悲痛に訴える。だが速人の怒りは収まらない。

「速人さん！ あれ！」

突然割って入ってきたこよみの声に、速人は瞬時に我に返る。そして上空から感じられるおかしな気配に気付いた。

「今度は何だ！？ もういい加減にしてくれ！」

上空を見上げた速人達が見たものは、巨大な穴だった。

空に穴とは一体何なのかと聞かれても、そう答えるより他にない。空間を歪ませるような形で、ブラックホールのような巨大な穴がぽっかり開いて、しかも徐々に拡大している。穴の中の空間は、血のように赤く禍々しい印象を受けた。

穴の位置は、先程破壊したガオウライナーが浮いていた辺りだった。大きさは現在、直径40メートル程になっている。

「おい、今度は何なんだ！？ 新たな敵か！」

「違いますよ。あれは空間の一部が壊れた反動ですね」

ハラキリトラは意気揚々と答える。

「反動？」

「ええ。この世界は健史さんが行った数々の召喚術の実験のせいで、大分空間や時間のバランスが乱れていたんですね。そんな中で空間に大きな刺激を何度も与えたせいで、あんな風になっちゃったんですよ。とても大きな生き物を召喚したり、時間を急に壊したり、時間を巻き戻したり、とかね」

解説している最中、60メートルまでに巨大化した次元の穴が、大規模な吸引を始めた。まるで掃除機のように風を吸い込み、地面の砂を巻き上げて呑み込んで行く。

「こよみ！ ここから逃げるぞ！」

「はい！」

速人とこよみは脱兎のごとく駆け出し、穴から離れていく。吸引はどんどん強くなり、小石を吸い込むまでになっていた。

「きゃっ！」

こよみが逃げる途中、突然転んだ。よく何も無い所で転ぶ癖があったが、よりによってこんな所で発動してしまった。

「こよみ！」

全速力で走っていた速人は、それに気付き自分の足に急ブレーキをかける。その一瞬の間にも吸引は強くなり、こよみの小さな身体が宙に浮いた。

（しまった！）

速人は急停止と共にベルトを巻き、サイドハンドルを引き、カードを装填して再びサイドハンドルを押した。九つの残像が出現して速人の元に集まり、ディケイドへの変身を完了させる。

それらの作業・変身完了までの流れの間に、穴の吸引力が一気に強まり、こよみの身体はどんどん穴に向かって吸い込まれていく。見ると倒れていた健史や、ハラキリトラ・ゴルバット・こよみの亀バグも一緒に吸い込まれている。

亀バグが空中を何度も回転しながら吸い込まれ、その過程で中であつたものが吐き出され、一緒に穴に向かって飛んでいく。

「くそおおおおっ！」

速人はテスラバンドで空中を飛び上がった。

だがもう遅かった。こよみは速人に手を伸ばし、何かを叫びながら穴の中に消えてしまった。健史やハラキリトラ・ゴルバットもある。

「マシンディケイダー！」

その叫びと共に、マシンディケイダーが空を走り、猛スピードで速人の元に駆け寄る。速人は空中で、素早くそれに乗り込んだ。

速人は後悔した。これなら最初から、自分がこよみを抱えて走ればよかったのだ。自身はディケイドの影響で身体強化されているか

ら、そのぐらい何の問題も無いはずだった。

「待つてろよ！ こよみ！」

速人は空中で急アクセルを引く。マシンディケイダーが急発進し、空に浮かぶ穴に突撃していった。

専用マシンに乗ったディケイドの姿が、掃除機に吸われた埃のように、呆気なく穴の中に消えた。

穴は暫く地上の物を吸引し続けたが、それも徐々に収まっていく。穴も次第に小さくなっていき、やがて泡のように消えた。

この世界の災厄は、全て取り払われた。世界を救った英雄と共に・
・・・。

「うおおおおおおおっ！」

速人がマシンディケイダーを爆走させながら、ある空間に飛び出した。

最初は、永遠に次元の狭間をさ迷う可能性を考えていたが、そんなことはなかった。何も無い赤い空間に一瞬入り込んだが、それは本当にほんの一瞬で、気付いたらさっきとは違う、新しい空間に侵入していた。

（あれは！ 俺ん家じゃん！？）

目の前に飛び込んだのは速人の自宅だった。平均的な大きさの二

階建ての家屋で、僅か数日しか離れていないのに、妙に懐かしく感じる。

速人はその家の二階の部分から20メートル先の空間を飛んでいた。爆走するマシンディケイダーが向かう先は、速人の部屋の開け放たれた窓だった。

（やばっ！？）

速人は急ブレーキをかける。だが一度勢いをかけたマシンは、そう簡単には停止できず、そのまま速人の部屋に突っ込んだ。その際、部屋の窓際の壁が一部破壊されてしまった。

速人の部屋内部に、マシンディケイダーの巨大な車体が飛び込む。部屋に置かれていたテレビが、回転するタイヤに轢かれて粉々になり、その先のベッドに車体が突っ込んだ。布団はビリビリに破れて大量の羽毛が舞い、ベッドは衝撃で見事に真っ二つにへし折れる。マシンディケイダーは停止したが、速人の部屋は見るに無残な姿になってしまった。

「いたたたたっ」

「危なかったですねえ。あと一歩遅れていたら、間違はなく轢き殺されていましたよ」

速人の耳に、とても聞き覚えのある声が二つ聞こえてきた。速人は我を忘れて、その声の先を凝視する。

その時、全ての記憶が蘇った。

それは異世界で旅をしている最中、突然失われてしまった妹の記憶である。

元の世界であれほど想っていた妹の顔と名前の記憶が、異世界に入った時に謎の喪失をとげたのだ。

そしてたった今、速人は事故で発生した次元の穴を通り、元の世界に帰還した。

そして部屋の入り口側に、その妹がいたのである。突っ込んだマシンドイケーダーに驚いて、ひっくり返ったようである。その顔を直に見て、速人は全てを思い出したのだ。

本当ならこれは喜ぶべきことである。だが速人の頭には疑問と混乱しか浮かばなかった。記憶が戻った瞬間、自分の記憶に矛盾が生じたのだ。

速人は改めて妹の顔をまじまじと見つめる。その様子に妹は、恥ずかしそうに顔を赤らめた。

そして恥じらいを見せながら、妹は可愛らしい仕草で速人に迎える声をかける。

「お帰りなさい♪ お兄ちゃん♪」

さっきまで異世界で一緒にいた小柄な少女、森下こよみ「十文字こよみの笑顔がそこにあった。

外にはサラサラと雨が軽めに降っている。

第三十二話：1号と2号

しばし時間を取って……。

速人とこよみ、そして一緒に部屋にいたハラキリトラは、一階の食卓テーブルに座り、互いを向かい合っていた。

速人が日付を確認してみると、何と速人が異世界に飛んだ時刻から、ほとんど時間が経っていなかった。当時の時刻がいつごろだったかは判らないが、恐らく速人が旅立ってから、帰ってくるまでの間に、ものの数分も経っていなかったようだ。

時間の流れに困惑しながらも、速人はテーブルの向かい側に座っているこよみと、テーブルの上に乗っかっているハラキリトラに顔を合わせた。

こよみはあの白いセーラー服姿ではなく、長袖の青いTシャツにジーンズという、やや男っぽい私服を着ていた。速人の蘇った記憶に中にも、その服に覚えがあった。

「お前たち、これはどういうことだ？」

速人は己の中に渦巻いている数々の疑問を、実に簡潔に分かりやすく、一まとめにして質問した。

速人の気迫に圧されたのか、こよみは少し戸惑いながらも答えた。

「ええとね。あの大きい穴に吸い込まれちゃったとき、あたしたちお兄さん・速人さんの世界の一年前に来てたの。健史さんとハラキリトラさんも一緒に……」

「一年前？」

ハラキリトラが続けて、速人の問いに答えた。

「タイムスリップですよ、速人さん。時間の変動の弾みで生まれたあの次元の穴は、吸い込んだものを違う時間へと飛ばしてしまうものだったんですよ。私たちと速人さんは、穴に吸い込まれたタイミングが違っていたので、それぞれの飛ばされる時間にズレが起きちゃったんですね。私たちは今から一年前の世界に、速人さんは数分前の世界にですね」

「おいおい、それって！」

「そうですね、速人さん。一年前に飛ばされたこよみさんは、その後、この家にやって来て、そのまま速人さんの義妹として、今まで一年間を過ごしていたんです。面白いタイムパラドックスですね。私たちが過去に飛ばなければ、速人さんに妹がいるという正しい歴史が始まらなかったんですよ。ちなみに速人さんの背中を押して、異世界に飛ばしたのはこよみさんですよ」

速人は驚愕を通り越して放心してしまった。

鶏が先か、卵が先か、自分があの世界に飛ばなければ、あの時の自分は最初から存在しなかったのだ。以前ディアルガが言っていた“ありえない歪んだ歴史”とはこのことだったのだろうか？

「そうそう、私たちが渡ったあの世界は、正確に言うともまだ異世界ではありませんでした。あれは私たちが今いるこの世界の、数年後の未来の世界なんですね。私たちが干渉したせいで、あの世界は分岐した並行世界として、今のこの時空とは分かれていったようですよ」

「そ、そ、そ、そうなのか……。それは驚いたな、ははははっ」

おかしな拳動で返事をする速人に、こよみが申し訳無さそうに俯く。

「ごめんなさい、速人さん！ でもああしないと駄目だって健史さんが……」

「健史だと！？」

意外すぎる名前が出たことで、速人は我に返る。こよみはこの反応に驚くが、すぐに調子を取り戻す。そしてハラキリトラがこのことについて説明を始めた。

「そのことをお話しする前に速人さん。最初に知っておいてもらいたいことがあるんです。健史という方は、本当は悪い人ではないんですよ。ただカードの記憶に洗脳されて、少々壊れちゃっただけなんです」

「カードの記憶？」

「ええ。速人さんも気付いているんじゃないですか？ 異世界の戦士の記憶が写し取られているあのカードは、持っているだけで人の意識や人格に影響を与えるんですよ」

それに速人は静かに首を縦に振った。明確に説明されたのは今が初めてだが、そうでなくても今までの経験で、その事実を完全に理解していた。

ディケイドになってから、いままで自分が感じたことがない、強い正義感と勇気がひしひしと心の底から湧いてくるのだ。それは恐らく、カードに宿っている強い心をもった戦士達の記憶が、自分の脆弱な心を力強く支えてくれたからだろう。

「健史さんは、ただ強い戦士のデータを収集することに熱中して、その戦士の人格をあまり深く考慮していなかったんですね。ディケ

イド1号に組み込まれたカードは、データ元のライダーにかなりの問題があったんです。そのライダー達は、とても凶暴だったり、危険思想を持っていたりする、とてもやばい方々ばかりだったんですよ」

「それで世界制服だの、ウルトラシヨツカーがどうだのと言ったわけか？」

確かにあれは、凡人から見てもかなり危ない思考の持ち主だった。それは全て、カードの悪人達の人格が唆したせいだったということか？

「そうなんです。カードに宿った、とっても邪悪な感情が、健史さんの意識に悪い影響を与えてしまつて、あんな風に自分で自分を制御できなくなつてしまつたんですね。終いにはあんな風に、野獣のように暴走してしまつたんです。速人さんがディケイドドライバーを壊した反動で、奇跡的に正氣に戻る事ができたようです」

「じゃあ、このディケイドドライバーを造つたのは……」

「健史さんですよ。もちろん二階の部屋に置いてあるマシンディケイドーも。時間を飛ばされた後で、あの人が改めて造つたんです。全ては未来における、過去の自分の凶行を止めるためにね。“世界の破壊者”には決してならず“世界の守護者”としての役を持てる、完璧なディケイド2号なわけです。ちなみにこよみさんを速人さんの元に送つたのも、健史さんですよ。ご両親など、一部の方々の記憶を少しばかりいじつてね」

「そうだったか……」

今まで全く推察できなかった様々な謎が、ものすごい勢いで明か

されていく。正直どうコメントすればいいのか判らず、このまま後ろに倒れてしまいそうになる。

だが、ふと新たな疑問が二つほど浮かび、改めてハラキリトラに向かい合う。

「その肝心の健史は、今何処にいるんだ？ 姿が見えないが・・・」

「

その問いには、こよみが少しばかり暗い表情で答える。

「健史さん、あたしにベルトを上げた後で、どこかに行っちゃったの・・・。自分は“世界の破壊者”だって、だからあたし達とは、あまり一緒にいちゃいけないんだって・・・」

「どういうことだ？」

「今までしてきたことの清算をしなきゃいけないんだって・・・」

詳しい説明は、再びハラキリトラが請け負った。

「あの人は、速人さんと会う前までにも、色々な世界で色んな悪いことをしてきたんですね。歴史をおかしくしないためにも、今日までこの世界のどこかでおとなしくしているそうですが、速人さんが帰還したら、すぐに異世界で償いの旅に出るそうです」

速人は何となく納得した。確かにあの様子だと、過去にどんな所業を行っていてもおかしくない。

「それじゃあ、健史は今・・・？」

「もう旅立たれたんじゃないですか？ 速人さんが帰還はすぐに探知できるそうなので」

速人は初めて健史を気の毒に思った。自身の失敗が招いたことから自業自得ではあるが、自分に様々な物を与えてくれた人物が、そういう境遇に立たされているのは心苦しいものがある。

こよみも同じように思ったようで、下を向きながら気を落としている様子だった。

「なんだか神妙な顔をなさってますけど、大丈夫ですよ。あの人なら死人を生き返らせることも、世界全体の時間を巻き戻すことも簡単にできますからね」

「そうなのか？」

同情が一気に冷めた。

速人は改めて、こよみに優しく声をかけた。

「こよみ、ありがとうな。何だかおかしな巡り会わせになっちまったが、俺はお前と会えて本当によかったぞ。前に言った家に連れて行く約束、変な形で叶っちゃったな。お前が今のままでもいいなら、これからも一緒に居て欲しいんだが……、どうかな？」

こよみは僅かに涙を浮かばせながら、速人に感謝の言葉を口にする。

「あたしも速人さんと会えて良かった。あたしを生んでくれて、本当にありがとう。あたし今、とっても幸せだよ」

「“生んだ”なんて、変な言い方だな。何だか俺達が親子みたいだ」「そうだったね。あたしたち兄妹だったね。ありがとう、お兄ちゃん」

こよみはテーブルを回り、速人に抱きついた。お互い照れくさそ

うにお互いを見詰め合う。そして満面の笑顔を向け合った。

「ハッピーエンドですねえ」

その光景を見て、ハラキリトラがころころと笑った。

「あつ、そうだ」

暫く抱擁した後、速人はもう一つの疑問を思い出し、ハラキリトラに再度向き直る。

「今度は何でしょう？」

「俺がこよみを出す前に、ライドブッカーからカードが6枚も出てきたんだが……」

「あつ！　そういえば……」

こよみもその事を思い出し、声を上げる。

そう、あの時速人の手に渡った少女のカメンライドカードは、こよみ1枚ではない。こよみ以外の少女が描かれたカードが、他に5枚も出現していたのだ。

「あれは何なんだ？　俺とこよみを引き合わせるなら、あんなにカードはいらないだろう？」

「そうだよな。もし他の人を出しちゃったら、あたしはもう出てこ

れないよね」

ハラキリトラは少し悩んだような仕草を見せ、答えた。

「そうですね。健史さんが何故カードを6枚も入れていたのかは、はつきりとは判りません。ただ健史さんは“無数に存在する並行世界への分岐の可能性”と仰っていましたよ。案外これも実験だったのかもしれないね」

「可能性？ 実験？」

「ええ世界を渡り歩いた健史さんには、色々と思うことがあったんじゃないですかね？ もし速人さんがあの時、こよみさん以外のカードを装填していたらどうなっていたか……。その場合恐らく、元の世界に帰還した時に出迎えた、速人さんの妹さんの姿も、思い出した記憶も、今とは全然違うものになっていた、ということでしょうね」

「なんじゃそりゃ？」

「ええと、ちよっとよくわかんないや」

速人とこよみは、今ひとつ話が理解できず、二人仲良く揃って首を傾げた。

「はははっ、別に判らないなら判らなくてもいいんじゃないですか？ もう全部終わったことですし。そうそう、あの時のカード、もう一回出してみたらどうですか？ 多分もう復活してる筈ですから」

「なににー！？」

速人は驚いて、ライドブツカーを慌てて開けた。こよみも興味をそそられたのか、その中身をジッと見つめる。

クラインの壺により、カードを無限に収納できるその入れ物から、何枚ものカードが引き抜かれた。

「ほんとだ・・・、あたしのカードもある」

確かに6枚のカードの絵柄が全て戻っていた。しかも何故かカードの枚数が以前よりも増えている。

“KOYOMI” “MISAO” “NATULU” “RUISE”
“ILYA” “YUNO” “NAGISA” “FEENA” “NANOHA”
“INDEX” “HANYU” “SHANA” 全てのカードが最初に見たあの時のまま、美しい少女の顔写真がはつきりと写し出されている。

（つつか何故全員女なんだ？ あいつの趣味か？）

ちなみに“NANOHA”は十歳ぐらいの幼女の顔である。

また名前の後ろについているカードの種類名は“KAMEN RIDE”から“IMITATION RIDE”に変わっていた。

「健史さんは言っていましたよ。全てが終わった後も、デイケイドドライバーもカードも、そのまま全て速人さんに託す、とね。つまりそのカードも好きに使っていいということです。ちなみカードに使用制限はありませんよ。いやあ、きっとこの家も大変賑やかになりますねえ」

「すごい！ お兄ちゃん、使ってみようよ。どんな人たちなのか、あたしも知りたい」

こよみがさらりと、とてつもないことを頼んでくる。会っているのいいが、その先の事をちゃんと考えているのだろうか？

というか、これは命を弄ぶ行為には値しないのだろうか？

速人は12枚のカードを悩ましげに見つめた。

（どうしようか、これ？）

こよみの言うとおり、このカードにあるのがどういった人物なのか、どのような能力があるのかは、とても興味がある。

だがそれを知った後、彼女たちをどう纏め上げればいいというのか？ 全てが終わった後で、速人はかなり微妙な悩みを抱えることになった。

第三十二話：1号と2号（後書き）

この小説に登場するハラキリトラは、こよみと同類の模造品です。
イミテーション

そしてディケイド1号の仮面ライドカードを紹介。

G4・リュウガ・オーガ・グレイブ・歌舞鬼・コーカサス・牙王・
レイ・アーク

レイを入れたのは人数合わせ。ディエンドコンプリートフォーム
の面子と被ってますが、これを考えたのは映画発表の前で、決して
パクリではありません。

最終話：速人とこよみ

仮面ライダーディケイド2号：十文字速人と、たらいの魔法使い：森下こよみが、全ての決着をつけてから数週後。とある異世界にて。

「貴様！ 伝説のポケモンである私に向かって、何をしようという気だ！」

「なーにが伝説よ！ その人の中に入って、好き勝手してるだけじゃない！ 人の力を借りて威張り散らすなんて、本当に情けないよね。さっさと出ていきなさいよ！」

ここはポケモン達が暮らす世界である。ポケモンという特殊生物がいる世界は、他にもいくつがあるが、この世界のポケモンは人間と同じ言語を明細に喋ることができ、人間に近い一つの文明を築いていた。

そんな世界の一角、緑の少ない山岳地帯で、一人のポケモンと二人の人間が睨み合っていた。

ポケモンの名はファイヤー。以前こよみとスピリッツ達と戦い、内に奇械人を入れたまま元の世界に帰された、火炎鳥のポケモンである。

一方の人間は、まだ十代であろう二人の少女だった。二人ともフアンタジーの冒険者のような、奇抜で地味目な服を着ている。

「あんたみたいな奴、あたし達がやってやるんだから！ だからナツル、頑張つて！」

「おい！？ 俺かよ！」

先程ファイヤーを怒鳴りつけたオレンジ色の髪のポニーテールの

少女：水無神みなかみ みさお 操緒の言葉に、もう一人の青髪で短めのポニーテールの少女：瀬能ナツルが素早く突っ込みを入れる。ナツルの声はかすれていて、女性ばくないハスキーボイスだった。

「いや、ついノリで言っちゃったけど、考えてみたらあたし戦う力なんてなかったよ。ごめんね」

「ごめんねって……。お前って奴は……。ああ、速人の奴はどこにいったんだよ!？」

「

そうこうしている間に、ファイヤーが先手を打って来た。空中で翼を羽ばたかせ、強力な炎の嵐を二人に向かって吹きかける。

「うわあ!？」

ナツルは操緒を抱き上げて、ジャンプしてその炎をかわす。嵐が吹き付けられた場所は、一瞬で灼熱地獄と化し、岩石が物凄い速度で溶解していく。

「くそ! こうなったらやけだ!」

ナツルは着地してすぐに反撃に出た。手首に青い腕輪が嵌められた、細い右腕をファイヤーに向かって突き出す。すると掌から、野球ボールぐらいの大きさの、一つの火球が発生した。

「喰らえ!」

その魔法と思われる火球が、勢いよくファイヤーに向かって飛んだ。

ファイヤーはその攻撃を、避けようとも防ごうともしなかった。

空中で浮いたまま、火球を正面から受け、爆発する。

「やったか？　・・・・・・・・ああ、やっぱり無理か」

爆炎の後には、無傷のファイヤーが浮いていた。

「やっぱり火のポケモンに、火は効かないんだね。一つ勉強になったよ」

「随分落ち着いてるようだが・・・・何か策はあるんだろうな？」

これに操緒は冷や汗を流し、頭を掻きながら、首を横に振った。

「あはははははっ・・・・。大丈夫、ナツルには操緒が憑いてるよ」
♪ 天国ではもっと頑張ろうね」

「絶対に嫌だああああ！」

山岳に男のような女の絶叫が木霊した。

「模造品イミテーションごときが、安い命を惜しみおつて！　とつとと消える！」

ファイヤーが二発目の炎の渦を発射しようとする。それにナツルと操緒は、もはや逃げられないと思って、目を瞑った。だが・・・・。

「ぐあっ!？」

悲鳴を上げたのはファイヤーの方だった。どこからともなく飛んできた、水の弾丸がファイヤーの右羽の一部を撃ち抜いた。それとともに炎の渦のエネルギーは、水をかけられた焚き火のように、一瞬で消滅した。

ナツルと操緒は同時に、弾道の元へと振り向いた。そこには胸当て・右肩当て・右上腕部・そしてコウモリの翼を模った大きな目が緑色で、右手には回転翼のついた大型拳銃を持った鎧の人物が、マシンディケイダーに跨って空中に浮いていた。仮面ライダーキバ・バツシャーフォームに変身した速人である。

「速人！ おせえよ！」

「速人さん！ 皆も！」

速人の周りには、空飛ぶポケモンに乗った三人の少女がいた。彼らは即座にナツル達の元に集まる。

「ちよつとあんたたち！ どう迷ったら、こんなところまで行くのよ！？」

「ごめんごめん。可愛いポケモンがいたから、追いかけていたら、つい……」

桃色の長髪の少女：ルイズに、操緒が速やかに謝罪する。

その様子にこよみと紫色の長髪の少女：伊里野^{いりや}かな^{かな} 加奈は、一方は明るく安心した表情で、一方は感情が読み取りにくい無表情で傍観していた。

「でもみんな無事でよかったよ。ほんとに危機一髪だったし」

「……」

「そんなことより、あの鳥逃げ出したぞ」

ファイヤーは速人達が、ナツルと操緒に駆け寄った辺りから、逃走を図っていた。ファイヤーの翼を広げた後姿が、空の彼方へとどんどん小さくなっていく。

「ああつ！ 何してんの！？ 早く撃ちなさいよ！」
「OK」

速人は手早く緑色の拳銃：バツシャーマグナムを、ファイヤー目掛けて発砲した。水の弾丸は三発放たれ、その内の一発がファイヤーの背中に見事命中。ファイヤーは故障した飛行機のように、真逆さまに大地に向かって墜落していった。

「俺の女達に手を出したんだ。この程度では済まさねえよ」
「俺は男だぞ？」
「そうだった？」

ナツルの忠告を軽く流し、速人は一枚のカードを装填した。

『ファイナルフォームライド オールアタック！』

その電子音声と共に五人の少女達が、こよみを先頭にして一斉に
一列に並んだ。そして前から順番に、前に立っている者の背中に手
をつける。

「少しくすぐつたいぞ」
「ちよつとくすぐつたいよ」
「背中を借りるわね」
「・・・くすぐつたい」
「少し痒いぞ」

こよみ・ナツル・操緒・ルイズ・伊里野・速人は、まるでバケツ
リレーのように順番に相手の背中から次元の門を開けていく。そこ
からそれぞれ異なった、変身に必要な部品が飛び出てくる。

こよみは通例通り、コヨミフォックスに変身した。

ナツルの背中からは、着ぐるみのような毛皮が召喚される。それはコヨミフォックスと同じような感じで、ナツルの全身を包む。

やがてナツルは、腹部から腸がぶら下がっている、凶暴そうな外観の一頭の虎に変身した。ナツルのFFR：ナツルハラキリトラである。

操緒の背中からは、機械の部品と思われる物と、黒い装甲版が無数に召喚された。その数と質量に、後ろにいたルイズが吹き飛ばされそうになる。それらは操緒の身体に鎧のように装着された。さらにその上に、大きな人型の部品がプラモデルのように次々と組み上げられていく。

やがて操緒は、身長4mを確実に超える、黒い人型ロボットの姿となった。操緒のFFR：ミサオクロガネである。

ルイズの背中から召喚されたのは、包帯のような茶色い長布だった。それはルイズの身体に巻きつき、一つの物体に固化化した。ルイズは大きな筒の中に閉じ込められる形となった。そしてその大筒の下側から、大きな柄のような棒が伸びる。上側には宝石のような青い球体が出現した。

その姿は超巨大な棍棒にも見えれば、魔法の杖のようでもあり、速人の元へと飛んでいく。速人はその下側の棒を柄として、槍のように持ち上げた。ルイズのFFR：ルイズスタッフである。

伊里野の背中からは、操緒とほぼ同じような感じで、黒い部品が幾つも召喚された。伊里野は足を真っ直ぐにして、両腕を横に広げた。すると伊里野の身体が宙に浮き上がる。空中でミサオクロガネと同じように、プラモデルのように伊里野の身体に黒い部品が装着されていく。

やがて伊里野は、エイのような黒いデルタ翼を持つ、一機の戦闘機の姿となった。人間の身体が素体になっているため、大きさは本物の戦闘機よりは小さく、ラジコン飛行機よりは遥かに大きい。伊里野加奈のFFR：イリヤブラックマンタである。

コヨミフォックス・ナツルハラキリトラ・ミサオクロガネ・イリヤブラックマンタ・ルイズスタッフを持ったディケイドは、一斉にファイヤーの墜落地点へと向かっていった。

「おのれえ……うむ？」

弱点である水の攻撃を受け、地上に落ちたファイヤーは痛みをこらえてようやく起き上がる。

だが起き上がった直後に彼の視界に入ったのは、妙な武器を持つてキバ・バツシャーの姿のままシンディケイダーに乗って向かってくる速人、コヨミフォックス、そして見たこともない三体のモンスターであった。

エクスプロージョン
「爆発！」

速人はファイヤーに向かってルイズスタッフを振り上げる。すると先端から巨大な光が放たれ、ファイヤーを襲う。

ファイヤーは即座に飛び立った。光はファイヤーのいた地面を覆い、そして爆発した。空爆を受けたかのように大地の一部が吹き飛び、その余波で上にいるファイヤーが更に上に吹き上げられた。

空中にいるファイヤーを、イリヤブラックマンタが強襲した。装

備されている機関銃をファイヤーに向かって連射した。ダダダダッ！と机を叩くような地味な発砲音が連呼される。

「ぬあああああつ！」

ファイヤーはその銃弾の嵐を、死に物狂いでよけていく。やがて地面に近いところまで追いやられていった。するとファイヤーの背後から大きな黒い影が出現した。

『今度は逃がさないよ！』

それはミサオクロガネだった。その図体からは考えられない跳躍力で飛び上がった彼女は、ファイヤーの身体をその巨大な右手で驚掴みにして、地面へと戻っていく。

ズン！と大きな音を立てて、ミサオクロガネとファイヤーは大地に降り立つ。彼女はファイヤーの両翼を両手で掴み、拘束する。

「くそつ！ 離せえ！」

ファイヤーは必死にもがいて逃げようとするが、自身の何十倍もある巨人の手から逃れられる筈も無い。

『だーめ！ 絶対に離さない！』

ミサオクロガネの直ぐ横に、操緒の姿が半透明な立体映像となつて現れる。彼女は舌を出して、ファイヤーを挑発する。

そうこうしている間に、ファイヤーに向かって一頭の虎が襲いかかった。飛び掛ったナツルハラキリトラは牙を突きたて、ファイヤーの右翼の付け根に噛み付く。

「ぐあああああああつ！」

激痛にファイヤーが悲鳴を上げる。ナツルハラキリトラがその気になれば、ファイヤーの翼を食い千切ることはたやすいことである。だがそういうわけにもいかない。このファイヤーは奇械人に操られているだけなのだ。

ミサオクロガネとナツルハラキリトラに取り押さえられ、苦悶の声を上げるファイヤーの身体から、やがて白い煙が湧き出てきた。

煙はミサオクロガネの頭上で、雲の様な形を作り、そこからマジックショーのように一人の奇械人が飛び出てきた。真っ白な身体に、右手と頭が鮫の頭となっているサメ奇械人である。

サメ奇械人は、ミサオクロガネの頭を踏み台にして飛び跳ね、逃走を図る。だが走り出した時に、横からコヨミフォックスが突撃してきた。

「ええい！」

光の粒子を撒き散らしながら、コヨミフォックスがサメ奇械人の右上腕部に激突する。その攻撃による物理的ダメージはゼロに等しかったが、そんなことは問題ではなかった。

「きさ……」

サメ奇械人が何かを言おうとした瞬間、彼は一瞬にして、水の入った白色のたらいに姿を変えた。彼は召喚獣ではないので、これはもちろん送還ではない。変身である。

水の入ったたらいと化した敵の姿を見て、少女達は次々と元の姿へと戻る。

「これで終わり？」

「ずいぶんあっさりしてるわね……」

「速人さん、このたらいどうしょ？」

こよみの問いに速人は特に深く考えた風も無く、返答を返した。

「トレジャータウンで売っちゃおう」

仕事を終えた速人と五人の少女達は、探検隊が集うポケモンの町であるトレジャータウンに帰ってきた。

「みんな！ おかえりなさい！」

「なんだよお前ら！ 俺達も誘ってくれればよかったのに」

彼らを出迎えたのは、スピリッツのメンバーのヒトカゲ・ゼニガメ・フシギダネ、そして×マークのような髪留めをつけたショートヘアの小柄な少女：ゆのだった。

「お前らいなかったからな。呼んでる間に逃げられたら元も子もないだろう？」

「そりゃそうだけども……」

ヒトカゲが不満げにしている横で、ゆのが笑顔で全員に呼びかける。

「皆疲れたでしょ？ お昼ごはんの準備するね」

「いや、別に疲れちゃいないよ。ぶっちゃけ大した相手じゃなかったし」

「俺は死に掛けたんだが……」

一人だけ疲れた表情のナツルは全員スルー。

「町のみんなにこの世界のお料理を教えてもらったんだ。楽しみにしてね」

この言葉に全員の思考が一瞬止まった。

「ええと、ゆのさん。それってポケモンが食べる料理のこと？」

「そうだけど？」

皆の反応にゆのが心底不思議そうに首を傾げる。

「いや大したことじゃない。本当に楽しみだ。頼んだぞ」

速人の言葉に、ゆのは喜んで町の宿に戻っていった。皆の視線が速人に集まる。

「おい速人！ この世界の料理って人間にも食えるものなんだろうな！」

「さあ？」

ナツルの問いに、速人はあっけらかんした口調で無知の返答をした。

「まあ食えば判るだろ。何でも試してみるもんだ」

「本当に大丈夫かなあ……」

「この世界に人間用の胃薬なんてなよね？」

少女達はスピリッツ達に視線を移す。

「俺も知らないよ。人間に飯を出したことなんてないし」

不安と好奇心に駆られながら、彼らはゆのの後を追っていった。

この後、しばらくの間この世界では、人間の探検隊の噂が広まっていた。自由に世界を超えられる彼らは、暇があればこの世界にやってきては、様々な活躍をしてみせた。

そうしていく内に“人間は自在に性転換できる”“人間は背中から何でも召喚できる”“人間はたらいの中で寝泊りする”等の各地で様々な噂が飛び交った。

だがやがて彼らの来訪は少なくなっていくた。新しい世界を見つけ、その世界で新しい冒険を始めているのだ。

仮面ライダーディケイドとたらいの魔法使い、いくつもの世界を渡ってその瞳は何を見るのだろうか？

ここは速人の故郷でもポケモンの世界でもない、はるか遠くの異世界。そこは速人の故郷とはほとんど同じ姿をしている平和な世界の日本。

その土地のある女子校、三年生始業式が予定されている新学期始まりの日で、まだ生徒もほとんどいない早朝にて。

その学校の一室、まだ誰もいない軽音楽部の部室にて。

「おはようございまあす！」

部活とはおよそ関係があるとは思えないティーセット等が大量に置かれたその部屋に、一人の少女が元気な声を上げて入ってきた。こここの軽音楽部の部員の平沢唯である。

本来ならば部活の朝練を始めるにも早すぎる時間であるが、目覚まし時計のかけ間違えで、いつもより早く起きてしまった彼女は、こうして早一番で登校してここに来たのである。

「あれ？」

その彼女の部室に置かれているソファの上に、いつもはない変わった物を発見した。それは5枚のカードであった。

ランプではない、少し変わった色彩で、表には何も描かれていない白紙のカードである。ただ表の下部に“IMITATION”という英文字が非常に小さく書かれていた。

それらが5枚とも表を上にして綺麗に一行にソファの上に並べられている。

「何だろこれ？ りつちゃんかな？」

唯は特に警戒せずカードの1枚を手にとった。彼女はカードの表裏を何度も見つめていたが、唐突に変化が起こった。カードの白紙の部分が突然光りだし、色がつき、何かが浮かび上がり始める。

「何これ！？ え？ これって私？」

カードの浮かび上がった物は、今そのカードを手を持っている人物：平沢唯自身の顔写真であつた。そして“IMITATION”の文字の先には“YUI”という文字が大きく表示された。

「な、何なのこれ？ 呪い、とかじゃないよね？」

普段から脳天気な性格をした彼女も、これには気色悪い物を感じた。

だがそれはあっさりと消失した。というかカードそのものが突然消えたのだ。唯の手に握られていたカードが、スーと音もなく幽霊のように色が薄くなり、あっというまに消滅した。

「何なの？ 私って実はまだ寝てるのかな？」

唯は困惑しながら、ソファに置かれた残りの4枚のカードを取ってみる。だが今回はいくら握っていても何の変化も起きなかった。

彼女は訳が分からず、普段余り使わない頭を大きく動かし悩んだ。

（どうしょこれ・・・？ みんなにも見せたほうがいいかな？）

だがそのうち考えるの面倒くさくなったようで、彼女はカードを近くのテーブルに置き、ギターの練習を始めた。唯にとってはこん

な変なカードよりも、新歓ライブの必殺技の考案のほうが遥かに重要だった。

彼女の学校からそう遠く離れていない公園の中、ベンチに一人の浴衣姿の少年が座っていた。その少年は何と、本条健史であった。

「平沢 唯”のデータゲットと」

彼の手には先程、唯の手から消えたあのカードが握られていた。健史はそれを脇のベンチに置いてあつた安物の鞆の中に押し込んだ。鞆の中には“YUI”の他に、何人も人間（主に少女）のデータが入力されたイミテーションライドのカードが、100枚以上も入っていた。

「残る軽音メンバーは4人か。上手く手に取ってくれと良いんだがな」

罪の精算を終えた現在、彼はイミテーションライドの力に以前以上に興味を持ち、様々な世界を渡ってカードのデータ集めをしていた。この行為は彼の研究や実験のための物なのか、彼の個人的趣味なのかは謎である。

「そろそろ速人にもいくつか贈ってやるかな。まだ礼はしたりないしな」

そう言つて彼は残りの4枚のカードが、次の標的が触れるのを黙
つて待ち始めた。

仮面ライダーディケイド1号：本条健史。彼の行き先は2号以上
に予測不可能である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9975j/>

仮面ライダーディケイドとたらいの魔法使い

2010年10月25日08時26分発行